財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第365集

綿貫小林前遺跡

主要地方道前橋長瀞線地方特定道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

群　　馬　　県
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第365集

綿貫小林前遺跡

主要地方道前橋長瀞線地方特定道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

群　　馬　　県
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

遺跡全景 北が上
右端月野川、空撮3回合成

住居跡208 出土遺跡	住居跡224 出土鉄鏃身 と端部

序

『綿貫小林前遺跡』は、高崎市綿貫町に所在し、主要地方道前橋長瀞線地方特定道路整備事業に伴ない発掘された遺跡の発掘調査報告書です。調査は平成11年度から開始され、平成14年度にかけて行ない、整理事業は平成14年度から中断２回をへて平成17年度に行いました。

発掘調査中、綿貫小林前遺跡に立つと、井野川をはさんだ北側に、並行して調査が行われている「下滝天水遺跡」が見え、南側には史跡「綿貫観音山古墳」が、東側に綿貫遺跡寺院跡、北側にも小古墳、旧村社天満宮が眺められます。この場所が古来、地域の中枢となるべく場所であったことが予想されました。発掘調査によって300もの古墳時代から平安時代にかけての住居跡・集落跡、奈良時代の掘立柱建物群域・大溝跡、寺院跡の寺院地と集落跡などが次々に発見され、遺物なども、県下古墳時代前期住居跡では初見の銅鏃の発見など予想どおりの重要な遺構・遺物の発見がありました。これらの貴重な発見が、地域の歴史の解明に役立ち、成果が広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会文化課、高崎市教育委員会、地元関係者の皆様には発掘調査から本報告書の刊行まで終始ご協力を賜り感謝の意を表します。また炎天下や空っ風の吹きぬける中での発掘調査、そして膨大な資料を扱い報告書作成に携わった皆さんの労をねぎらい序とします。

平成18年１月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　高　橋　勇　夫

例言と凡例

1、本書は主要地方道前橋長瀞線地方特定道路整備事業に伴ない調査された『綿貫小林前遺跡』の埋蔵文化財調査報告書である。

2、遺跡は高崎市綿貫町小字小林前・曲師東・曲師前・原北・原に所在する。遺跡名称は大字名と小字名を組合せて付して用いたが、名命は、隣接の昭和58年度市教育委員会調査綿貫遺跡と混用をさけるため、市教育委員会と協議の結果、綿貫小林前遺跡とすることが決まった。

3、発掘調査事業に係わる概要は下記のとおりである。

事業主体　群馬県高崎土木事務所

調査主体　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査期間および担当

平成11年7月～平成12年3月31日

大江正行・茂木剛・飯森康広・小島敦子

平成12年4月1日～平成13年3月31日

大江正行・茂木剛・洞口正史・渡辺弘幸・吉田和夫

平成13年4月1日～平成13年12月

大江正行・今井和久・小林正

平成14年4月1日～平成14年5月31日

大江正行・水田福夫

4、整理体制は以下のとおりである。

整理期間　平成14年4月1日～平成14年9月30日。内容はP東区74～186頁挿図・写真図版・遺物観察。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　大谷徹・赤熊浩一（㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　今井和久・大江正行）

整理期間　平成14年10月1日～平成15年3月31日

整理担当　大江正行　整理補助員　阿部和子・大野容子・掛川智子・高橋裕美・長岡美和子

整理期間　平成15年11月1日～平成16年3月31日

整理担当　大江正行　整理補助員　石関富美代・岩渕節子・高橋とし子・羽鳥望東子・堀米弘美・増田政子

整理期間　平成17年4月1日～平成18年6月30日

整理担当　大江正行　整理補助員　尾田正子・小渕トモ子・関口正広・土井洋子・長岡美和子・堀米弘美　山崎由起子

写真撮影　佐藤元彦　遺物保存処理　関邦一・土橋まり子・小材浩一

5、本書の編集は大江が行い、第1篇・第2篇第3章は飯田陽一によるところが大きい。

6、発掘調査・整理にあたり下記の方々に協力をいただいた。

高崎市教育委員会・㈱高長組

7、本遺跡の出土品・記録保存図・写真類・遺物実測図・各種台帳類は一括して財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に保存されている。

8、校正作業について、当団木津博明と同整理班と当団柿沼弘之の協力があった。

目　次

第１篇　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２篇　調査方法・基本層位・周辺遺跡 …… 2
第１章　調査方法 …… 2
第２章　基本層位 …… 2
第３章　周辺遺跡 …… 3
第３篇　発掘された遺構と遺物 …… 6
第１章　Ｎ西区調査の構造と遺物 …… 6
１、住居跡 …… 26
住居跡１ …… 26
住居跡２ …… 28
２、溝跡 …… 32
３、井戸跡 …… 32
４、土坑 …… 35
５、ピット …… 35
第２章　Ｏ東区調査の遺構と遺物 …… 36
１、住居跡 …… 36
住居跡１ …… 36
２、溝跡 …… 38
溝跡１ …… 38
溝跡３ …… 40
溝跡13とその付近 …… 43
溝跡８・９・10・12 …… 51
３、井戸跡 …… 54
４、土坑 …… 54
第３章　Ｏ西区調査と遺構と遺物 …… 56
１、住居跡 …… 56
住居跡２ …… 56
住居跡３ …… 58
住居跡４ …… 59
２、溝跡 …… 59
溝跡32 …… 60
溝跡33 …… 61
３、井戸跡 …… 64
井戸跡２ …… 64
４、土坑 …… 64
５、ピット …… 64
第４章　Ｐ西区調査の遺構と遺物 …… 64
１、住居跡 …… 64
住居跡67 …… 64
住居跡68 …… 66
住居跡69 …… 66
２、柵列とピット …… 67
柵列とピット …… 67
柵列８・11 …… 67
３、溝跡 …… 68
溝跡74・75・76・78 …… 68
４、神社遺構 …… 68
前身建物跡 …… 68
神社前身建物の前代 …… 71
神社初源期頃 …… 72
第５章　Ｐ東区調査の遺構と遺物 …… 73
１、住居跡 …… 75
住居跡５ …… 75
住居跡６ …… 75
住居跡７ …… 75
住居跡８ …… 75
住居跡９ …… 76
住居跡10 …… 78
住居跡11 …… 79
住居跡12 …… 79
住居跡13 …… 79
住居跡14 …… 79
住居跡15 …… 83
住居跡16 …… 83
住居跡17 …… 83
住居跡18 …… 83
住居跡19 …… 83
住居跡20 …… 85
住居跡22 …… 92
住居跡23 …… 93
住居跡24 …… 94
住居跡26 …… 98
住居跡27 …… 98
住居跡28 …… 99
住居跡30 …… 104
住居跡31 …… 104
住居跡32 …… 106
住居跡33 …… 106
住居跡34 …… 106
住居跡35 …… 106
住居跡36 …… 107
住居跡37 …… 107
住居跡38 …… 110
住居跡39 …… 111
住居跡40 …… 114
住居跡41 …… 114
住居跡42 …… 115
住居跡43 …… 115
住居跡44 …… 115
住居跡45 …… 115
住居跡46 …… 116
住居跡47 …… 125
住居跡48 …… 125
住居跡49 …… 126
住居跡50 …… 126
住居跡51 …… 128
住居跡52 …… 128
２、掘立柱建物跡 …… 135
掘立柱建物跡１ …… 136
掘立柱建物跡２ …… 137
掘立柱建物跡３ …… 139
掘立柱建物跡４ …… 139
掘立柱建物跡５ …… 140
掘立柱建物跡７ …… 140
掘立柱建物跡７ …… 141
掘立柱建物跡８ …… 141
掘立柱建物跡９ …… 142
掘立柱建物跡10 …… 142
掘立柱建物跡11 …… 142
掘立柱建物跡12 …… 144
掘立柱建物跡13 …… 144
掘立柱建物跡14 …… 147
掘立柱建物跡15 …… 147
３、柵列跡 …… 148
４、溝跡 …… 151
溝跡36・37・38・41・42・45・46・59 …… 154
溝跡35・43・47・48・50・53・58 …… 156
溝跡39・40・49 …… 159
溝跡51・52・54 …… 162
溝跡55・56・60・61・62・63・65 …… 162
５、井戸跡 …… 170
６、集石遺構・火葬跡 …… 173
７、土坑・ピット …… 176
第６章　Ｑ区調査の遺構・遺物 …… 187
１、住居跡 …… 191
住居跡73 …… 191
住居跡75 …… 192
住居跡76 …… 194
住居跡77 …… 194
住居跡78 …… 195
住居跡79 …… 195
住居跡80 …… 196
住居跡81 …… 196
住居跡82 …… 197
住居跡83 …… 198
住居跡84 …… 198
住居跡85 …… 200
住居跡86 …… 202
住居跡87 …… 206
住居跡88－１ …… 208
住居跡88－２ …… 208
住居跡89 …… 212
住居跡90 …… 212
住居跡91 …… 212
住居跡92 …… 216
住居跡93 …… 218
住居跡94 …… 219
住居跡95 …… 220
住居跡96 …… 226
住居跡97 …… 229
住居跡99・113 …… 229
住居跡100－１ …… 231
住居跡100－２ …… 233
住居跡101－１ …… 234
住居跡101－２ …… 235
住居跡102 …… 237
住居跡103 …… 238
住居跡104 …… 242
住居跡105－１ …… 244
住居跡106 …… 244
住居跡108 …… 246
住居跡109 …… 247

住居跡110……247
住居跡111……248
住居跡112……250
住居跡114……250
住居跡115……251
住居跡116……257
住居跡117－1……259
住居跡117－2……263
住居跡118……264
住居跡119……266
住居跡120……266
住居跡121……266
住居跡122……270
住居跡123……272
住居跡124……272
住居跡125……274
住居跡126……274
住居跡127……277
住居跡128……277
住居跡129……287
住居跡130……280
住居跡131……280
住居跡132……281
住居跡133……283
住居跡135……288
住居跡136……289
住居跡137……289
住居跡138……290
住居跡139……291
住居跡140……291
住居跡141……292
住居跡142……294
住居跡143……296
住居跡144－1……299
住居跡144－2……300
住居跡145……305
住居跡146……306
住居跡147－1……307
住居跡147－2……307
住居跡147囲A・B……309
住居跡148……311
住居跡149……313
住居跡150……314
住居跡151……318
住居跡152－1……324
住居跡152－2……324
住居跡153……324
住居跡154－1……327
住居跡154－2……330
住居跡155……331
住居跡156……334
住居跡157……335
住居跡158……335
住居跡159……335
住居跡160……335
住居跡161……336
住居跡162……338
住居跡163……339
住居跡164……339
住居跡165……339
住居跡166……341
住居跡167……341
住居跡168……341
住居跡169……342
住居跡171……347
住居跡172……348
住居跡173……351
住居跡175……355
住居跡212……358
住居跡215……359
住居跡216……363
住居跡217・同218・同219・同223……363
住居跡219・220……364
住居跡221……365
住居跡222……365
住居跡223……366
住居跡251……366
2、掘立柱建物跡……366
掘立柱建物跡16・17……368
掘立柱建物跡18……370
3、溝跡……370
4、井戸跡……374
井戸跡9……382
井戸跡11……382
井戸跡12……382
井戸跡13……386
井戸跡14……386
井戸跡15……387
井戸跡16……388
井戸跡17……388
井戸跡18……389
井戸跡19……389
井戸跡20……389
井戸跡21……392
井戸跡22……392
井戸跡24……394
5、土坑……395
6、ピット……403
7、土器集積とそのほかの遺構……404
土器集積1……405
土器集積2……405
土器集積3……407
集石4……409
第7章　Q東区調査の遺構と遺物……409
1、住居跡……410
住居跡53……420
住居跡54……411
住居跡55……414
2、溝跡・土坑……416
第8章　Q区東道西調査区の遺構と遺物……417
1、住居跡……418
住居跡3……418
2、溝・土坑・ピット……419
第9章　R区西市道調査区の遺構と遺物……419
1、住居跡……419
住居跡248……419
住居跡250……420
第10章　R・S区調査の遺構と遺物……421
1、住居跡……425
住居跡57……425
住居跡58・205……426
住居跡59……433
住居跡60……433
住居跡61……433
住居跡62……435
住居跡63……435
住居跡64……436
住居跡65……438
住居跡70……438
住居跡71……440
住居跡72……440
住居跡174……448
住居跡176……448
住居跡177……448
住居跡178……448
住居跡179……449
住居跡180－1・同－2……449
住居跡181……453
住居跡182－1・同－2……453
住居跡183……453
住居跡184……456
住居跡186……456
住居跡187……459
住居跡188－1・同－2……459
住居跡189……459
住居跡190……465
住居跡191……471
住居跡192……471
住居跡193……473
住居跡194－1……473
住居跡195……473
住居跡196・197……477
住居跡198……475
住居跡199……479
住居跡200……488
住居跡201……483
住居跡202……483
住居跡203……483
住居跡204……484
住居跡206……484
住居跡208……487
住居跡209……488
住居跡194－2……487
住居跡210－1……473
住居跡210－2……496
住居跡211……496
住居跡213……498
住居跡214……499
住居跡224－1……501
住居跡224－2……502
住居跡225－1……503
住居跡225－2……504
住居跡227……504
住居跡228……505
住居跡229……505
住居跡230……506
住居跡231……507
住居跡232……509
住居跡233－1……510
住居跡233－2……510
住居跡234……510

住居跡235……512
住居跡236……513
住居跡237……513
住居跡238……520
住居跡239……523
住居跡240……525
住居跡241……528
住居跡242……536
住居跡243……536
住居跡244……536
住居跡245……538
2、溝跡 ……540
溝跡113・114・115・116・118・190……545
溝跡121・122・123・124・125・126・127・128・129……557
溝跡135・136……571
溝跡139……575
溝跡142・144・145・146・147……575
3、井戸跡 ……577
4、土坑 ……585
5、1間柱穴跡・杭列 ……592
6、ピット ……593
7、道路 ……593
8、方形周溝墓(溝跡86) ……614
9、そのほかの遺物 ……615
第11章 S西区調査の遺構と遺物 ……615
1、S西区の調査 ……615
第12章 S区下段調査の遺構と遺物……615
1、道路 ……616
道路4・As-A混水田跡 ……616
道路6・水田跡……616
2、溝跡 ……616
溝跡68 ……618
溝跡70 ……617
溝跡71と水田跡 ……618
3、畑跡 ……618
畑跡1 ……618
畑跡2 ……619
4、土坑 ……619
土坑108……619
土坑113……620
第4篇 遺物について ……621
第1章 観察にあたり ……621
第2章 観察表 ……622
N西区 ……622
O東区 ……623
瓦 ……625
O西区 ……626
P西区 ……627
P東区 ……627
瓦 ……649
Q区 ……650
瓦 ……677
Q東区 ……678
Q区県道西 ……678
R区市道西 ……679
R区 ……679
瓦 ……701
S区 ……703
第5篇 関連調査と鑑定 ……705
第1章 縄貫小林前遺跡のコアボーリング調査 ……705
第2章 縄貫小林前遺跡出土人骨 ……712
第3章 縄貫小林前遺跡出土獣骨 ……715
第6篇 まとめ ……716

写真図版

遺構
N西区……1
O東区……4
O西区……9
P西区……12
P東区……15
Q区……46
Q東区……95
Q区県道西……98
R区西市道……99
R・S区 ……100
S区下段 ……136
S区西 ……137
遺物
N西区 ……138
O東区 ……139
O西区 ……143
P西区 ……144
P東区 ……145
Q区 ……170
Q東区 ……207
Q区県道西 ……208
R区西市道 ……208
R・S区 ……208
S区下段 ……239

挿入図

第1図 周辺遺跡と位置図……3
第2図 遺跡地と小字界……4
第3図 既調査遺物……5
第4図 N～O区全体図……7・8
第5図 P東区全体図……9・10
第6図 P東区全体図、井戸・土坑・火葬墓・集石・道跡、掘立柱遺物跡・柵列ピット……11・12
第7図 Q区全体図、Q区・Q区県道西・Q区東・R区西……13・14
第8図 Q区住居跡位置図……15・16
第9図 Q区溝跡位置図……17・18
第10図 Q区井戸跡・土坑・ピット位置図……19・20
第11図 R・S区全体図、R区、S区下段、S区西……21・22
第12図 R・S区住居跡・土坑・ピット……23・24
N西区
第13～28図 住居跡1遺構図～……25
ピット遺構図……35
O東区
第29～51図 住居跡1遺構図～……37
試掘トレンチの遺物……56
O西区
第52～64図 住居跡2遺構図～……57
ピット遺構図……64
P西区
第65～75図 住居跡67遺構図～……65
神社遺構の遺物図……72
P東区
第76～169図 住居跡5遺構図～ …74
住居跡52遺物図 ……132
第170～243図 掘立柱建物跡1遺…133
構図～調査区遺物図 ……186
Q区
第244～489図 住居跡73遺構図 …188
～住居跡251遺構図……367
第490～551図 掘立柱建物跡16 …368
・17遺構図～Q区の遺物図…409
Q東区
第552～561図 住居跡53遺構図 …410
～土坑遺構図 ……416
Q区県道西
第562～564図 住居跡3遺構図 …417
～ピット遺構図 ……419
R区西市道
第565～567図 住居跡248遺……420
構図～住居跡250遺構図……421
R・S区
第568～728図 住居跡57遺構図 …422
～住居跡245遺物図……539
第729～806図 溝跡113・114・115・116・118・119遺構図～……541
R区の遺物図 ……615
S区下段
第807～811図 溝跡70遺構図 ……616
～畑跡2遺構図 ……620
第812図……717

第１篇　調査に至る経緯と経過

県道前橋長瀞線は前橋市石倉町から埼玉県秩父郡長瀞町に至る延長42.5㎞幹線道路である。このうち高崎市綿貫町以北について利根川右岸側の旧道を付け替え、前橋市街地南部の六供町までのバイパス建設が計画された。すなわち利根川左岸の前橋市六供町・櫛島町境を起点とし前橋市公田（くでん）町・横手町を経て利根川を渡り、高崎市西横手町・宿横手町・上滝町で北関東自動車道の西脇を並走し、下滝町を経て井野川を渡り、既存の県道前橋長瀞線に合流する6.05㎞の区間である。

平成元年12月、群馬県土木部・群馬県教育委員会文化課埋蔵文化財調査事業団との間で行われた協議を受け、平成２年３月に前橋市公田池尻遺跡の調査から着手された。県道高崎・伊勢崎線から県道高崎・伊勢崎線から県道前橋・長瀞線までの区間には井野川をはさんで下滝天水遺跡と綿貫小林前遺跡の２遺跡があった。群馬県教育委員会の試掘により、下滝天水遺跡は、北半に水田跡が南半の低台地上に濃い密度の集落の存在が確認され、一方綿貫小林前遺跡は、昭和58年度に高崎市教育委員会が実施した周辺地区を含む圃場整備事業の結果を踏まえた遺構密度が考えられていた。

下滝天水遺跡と綿貫小林前遺跡は平成11年度に県道高崎線以北の調査班２組が、そのまま調査遺跡に移る形で調査が開始された。綿貫小林前遺跡の開始は平成11年７月14日（水）からを始めたが、以前の段階で前任地であった上滝榎町北Ⅲ遺跡調査終了際で、次任地の綿貫小林前遺跡の現場事務所ほかの設営に着手していた。調査期間は、11年度末日までが当初計画であったが正確な遺構推定によるものではなかったため、北側のＳ区からＯ東区までの間に20ｍ毎の東西と南北に試掘調査を実施した。その結果、住居跡200～250棟の推定量と溝跡などを含む極めて密度の高い複合遺跡であることが７月26日には判明した。本格的な面拡張は、全体の約8,000㎡のうち585㎡を占める南端のＯ東区から調査を始め、10月には同区を終了し、Ｏ西区320㎡とＰ東区1,917㎡を開始した。10月１日より担当不足のため飯森康広担当が加わる。11月11日には、調査見直しのため、試掘結果とＰ東区での調査上の問題点を高崎土木事務所・県教育委員文化課の３者会議が行われ、次年度まで調査継続の必要性を打出した。12月にはＯ西区調査済となるがＯ東区は難渋のため小島敦子担当が１カ月間加わる。平成12年２月にＰ西区・Ｏ東区着手。平成12年４月旧飯森担当と吉田和夫担当と交代し、調査は12年度末まで確保された。５月８日に高崎土木事務所・県文化課との３者会議が行われ、下滝天水遺跡側から工事発注を行うこと、綿貫小林前遺跡Ｓ区下段の本年度工事着手を、事業の終了を平成15年３月の予定などを話し合われた。Ｓ区については４月から調査に入っていた。Ｑ東区・Ｐ東区は６月に調査終了。７月から洞口正史担当加わり、Ｓ区下段では中世畑跡が発見され、Ｑ区2,660㎡の本格的拡張始まる。10月にはＱ区の井戸跡調査を外注へ。11月27日より工事が急がれる下滝天水遺跡支援のため洞口担当と作業員の移動あり、同時に稼動力不足に対する分析案提出。11･12月にＳ区段丘上での工事場所において早急調査あり。13年１月より渡辺弘幸担当加わるが転出作業員不足のため作業効率減少と難渋。２月には茂木剛担当と作業員下滝天水遺跡支援へ、３月12日から茂木担当と作業員29名復帰。下滝天水遺跡支援等稼動力不足の対策案に基づき、平成13年４月には調査を11月までとすることとなるが、市道下調査を含め、後日12月までの調査となる。４月より渡辺・茂木担当に代り、今井和久担当・小林正担当加わる。７月にＱ区終了。９月にＲ区市道下で銅鏡出土。10月７日遺跡見学会、約350名の見学者あり、同月高崎市立高南中学生５名体験学習で来。12月11日調査は終了し、以降撤去作業。平成14年度は４・５月の間水田福夫・大江正行担当がＮ西区・Ｑ区県道西の調査を行う。

第２篇　調査方法・基本層位・周辺遺跡

第１章　調査方法

調査地域は南北500mの長さがあり、その間高崎市道・国道354線などが、調査区を分断していたため各々名称を、100m毎に付したアルファベット大区名称をもって付した。座標名は、路線上、アルファベットと数字もしくは国土座標のＸＹ軸下三桁を５ｍ毎に、100m毎に大区を設ける２種のどちらかを用いることに決していたので、100m毎の南北の大区を南よりＮ・Ｏ・Ｐ・Ｑ・Ｒ・Ｓ大区までを設け、５ｍ毎の小区を、南北に南より北に向い小文字ａ・ｂ・ｃで、東西を利根川右岸の東端にある（西横手遺跡群遺跡一第１図３）０点から出発した５ｍ毎の160～190までの数字を用いた。呼称点は南東隅である。国土座標との関係は、Ｎ大区ａは第Ⅸ系34.100、180ラインがＹ－67.995であり160ラインが－67.895に相当する。水準は標高を行いた。調査面の考え方であるが、綿貫小林前遺跡は、遺構上面を失なっていたため、土層断面の薄い層も平面輪郭も信頼度が薄く、本来であれば、平面を主に土層断面を従とすべきであるが、その関係については、その場面によってことなる。記録保存として写真記録は、中判をペンタックス６㎝判、35㎜の白黒、カラー・リバーサルをイオスを用いた。６㎝判白黒623本、35㎜白黒438本、35㎜カラー・リバーサル426本を撮影した。整理時にカラー・リバーサルは、色彩保存用にＤＶＤ、ハードデスク入力を行っている。調査期間中２回に分け空中写真撮影を行った（口絵）。

記録保存図は、現場図面班の平面図４・５班をもっても不足し、測量業者委託により補ないを計った。図面類は基礎整理を行いつつ、平面と断面図とを１枚図に合成し最少の図面枚数になるよう仕立てた。その結果、1,762枚となった。基礎整理では、遺構写真カード（当団ネガ検索台帳）、遺物台帳、各写真台帳、図面台帳を作成し、今回の報告書作成では大活躍であった。整理時には遺物台帳は設けず、遺物実測図カード、カラースライドのＤＶＤ入力した際の台帳が存在する。なお本書を作成するについて作図した浄書（トレース図）は、５年間保存し、以降は処分することになっている。

第２章　基本層位

基本層位は、標式地点を定めて標準層位するのが一般的と考えられるが、当遺跡では、全調査区長500ｍにわたり、しかもその中で全層を表現できるカ所は存在しなかったので以下に概略記述したい。

耕作土は、昭和58年度に行われた圃場整備により客土、削土がなされ、Ｑ区東半とＰ区中央付近を除き客土され、Ｐ西区は神社が存在したためかある程度、上層から、As-Ｂ混り層まで存在していた。

As-A層は、浅間山Ａ軽石を指すが、降下時の旧態をとどめたカ所はなく、Ｒ区道跡９（新）、Ｐ西区の北半で軽石を多く含む状態であった。耕作土や耕作土直下層に混り土の状態にあった。As-Aは天明３年(1783)降下軽石を指している。

As-B層は、浅間山Ｂ軽石層を指すが、順堆積のカ所はなく、Ｏ東区ｋ173付近、同区溝７の埋没土下層に、Ｒ区溝113の東側のｇ167付近に混り状態であったが部分的に下面のアッシュをまじえ、Ｐ西区神社直下で混り土ではあったが、耕作土の入った茶味の少ない状態にあった。同軽石の降下は、文献上は天仁元年(1108)、考古学上は12世紀初頭とされている。

Hr（榛名山）軽石は混入しているが順堆積層もなく、混入顕著な例も認められなかった。

As-C層は４世紀頃の浅間山起源の軽石で、混入顕著な例はなかった。

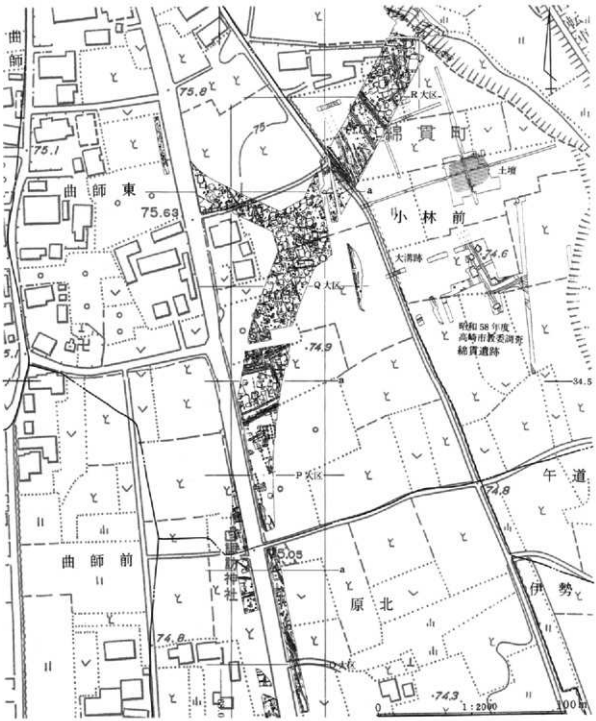
第3章　周辺遺跡

新設前橋長瀞線は、第1図6の高崎市、上滝榎町Ⅲ遺跡以北で北関東自動車道と並行し、2本の道路地は当団が調査を実施し、同図3～5がある。前橋―長瀞線は以南、現道同線の取り付きまで延び、井野川挟んだ北側に下滝天水遺跡が、南側に綿貫小林前遺跡がある。下滝天水遺跡以北は、井野川沿いに続く低台地(707頁附図4中の前橋高崎台地Ⅱ面沿いに発達した自然提防か)際で中世～古墳時代前期水田が広域に調査され、各時代を通じて生産域として展開した様子を知ることができる。隣接の下滝天水遺跡では古墳時代前期～平安時代住居跡の集落や、灌漑用の可能性のある巨大水路が台地上で調査され、同図3・4の低台地上でもある程度、古代の土器の出土はあるので生活域は水田地帯の周側ばかりでなく、北方の低台地にもあったようである。古墳の分布は、同図10に古墳時代前期95m級前方後方墳の元島名将軍塚古墳をはじめとして慈眼寺境内や同図12にかけ後期までの古墳が濃密ではないものの群単位を成して存在している。また下滝天水遺跡では5世紀に推定された居館の堀跡の一端が調査され、剣形石製品の出土がある。

その対岸に位置する綿貫小林前遺跡の周辺は、台地と低台地帯とを道路建設に関わるような連続面の長大な既調査が行われていないため当遺跡以南の実態像を描くには弱い側面がある。古墳群としては707頁附図4中の前橋高崎台地Ⅱ面の井野川開析に伴なっての可能性のある井野川の自然提防状の低台地上を南から第1図15～13および以南にかけ100cm前後の前方後円墳2基、中規模前方後円墳3基以上を含む5～7世紀の古墳群が、当遺跡以北にも小規模な構成がある。その中で96mの墳丘規模を持った史跡綿貫観音山古墳については既発掘成果があり、金属製品の貫・鞘と埴輪類の出土遺物がある。発掘調査の至近の例に、昭和58年度に当遺跡地を含む地域に圃場整備のための発掘調査を高崎市教育委員会が実施し、古墳時代前期集落の一部・溝跡(第3図1～4など出土)、方形周溝墓、古墳時代後期の住居跡、平安時代9世紀頃の瓦葺建築物跡の基壇(第3図～5～18、第812図)について寺院跡が推定された。中世では現在の大堀用水の先行の大溝から第3図20の宝篋印塔材の出土があり、中世灌漑水路の一端が明らかにされた。しかし、井野川以南の前橋高崎台地Ⅱ面中の水田跡は調査例を欠き明らかでない。今回、710頁の第4地点で、12世紀初頭の浅間山Bテフラ下の推定水田は、さらに前代の水田域を西方に考えるうえで貴重な成果であった。

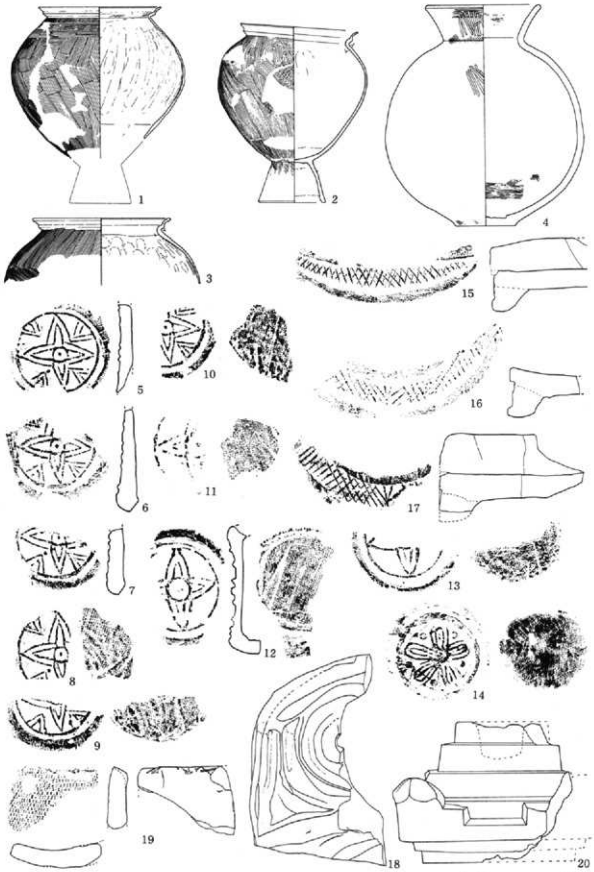
1　綿貫遺跡
2　下滝天水遺跡
3　西横手遺跡群
4　宿横手三波川遺跡
5　上滝榎町北遺跡
6　上滝榎町北Ⅱ遺跡
7　元島名B遺跡
8　上滝遺跡
9　滝川B遺跡
10　元島名将軍塚古墳
11　南山古墳
12　お伊勢山古墳
13　綿貫観音山古墳
14　普賢寺裏古墳
15　不動山古墳
16　柴崎蟹沢古墳
17　矢中村東遺跡
18　高崎情報団地遺跡
19　鈴ノ宮遺跡
20　中大堀金井分遺跡
21　下大堀遺跡
22　西横手遺跡群
23　慈眼寺

第1図　遺跡位置と周辺遺跡



上図は、昭和54年測量高崎市『33-34-40-41』１：2500を地図に、戦前の旧岩鼻村綿地図１：3000中の綿貫地区を仲図し、判読作成した。小字名称は綿地図による。綿貫地区は曲師(まげし)・小林(こばやし)・原北(はらきた)などア ｍ村から成るが、村社は図中央外北方約70mに位置する天神社で小林に存在する。曲師には集落の北西端に稲荷社が、原北には小社が存在するものの曲師東に存在する諏訪社が主神であったらしい。図中は、この３集落の一部が接する場所でもあり、北方に井野川が北西から南東に向け流下し、図中右上の段丘面が大きな地界となっている。曲師・小林間には小字原北・午道・伊勢間に長大な水田が存在しているが、その痕身は８世紀代の大溝(溝跡121)であることが判明しており、現時低地が旧地界であったようである。曲師・小林と原北とは、低台地の畑地帯に西方に広がる水田地帯の一部が曲師前で湾入し、それが諏訪神社のあたりに達しており、区界を成していたようである。この一角の東方に広がる領地について昭和58年度に綿貫地区の埋蔵整備に先行の発掘調査が行われ、古墳時代前期集落、同中～後期集落、平安時代寺院跡・集落などが明らかにされた。今回の綿貫小林前遺跡でも調査地に重複があり、調査地外、特に溝跡の延長や寺院跡で参考とすべき内容大である。

第２図　調査地と小字界



第3図　既調査遺物

第３篇　発掘された遺構と遺物

本書の作成にあたり、遺構図は、住居跡の場合、平面図は、床面もしくは発見面状態を上段に、下段に掘方状態を図示した。柱穴は本来であれば、床面図側に柱痕を記入すべきであるが、現場で柱痕の発見はできず掘方時点で柱穴を捉えた。貯蔵穴も多くの場合に、床面状態では埋まり込み、掘方状態で本来の形状が分かることが多かった。各々は１：60図である。炉跡は、新・古に分かれ、掘方で古い段階の炉跡が見い出されることもあり、その場合は、掘方図側に古出を、床面側に新出を記入した。竈図は、発見状態ではなく廃棄に近い状態と掘方との２種を、炉跡図も２平面の場合、床面図と掘方図に分けて各々１：30で仕上げた。横断面は、土層断面と成り断面を併用し実線の場合は現場作図であることを示し、破線は整理時に作成した成断面を示めす。時おり、注記番号のない実線２本以上の断面図が存在するが、それは、同じポイントを用いて数度にわたる成断面を合成した図である。断面図の不足は、最下部に標高値の記入もしくは、文中に数値を記した。土層注記やポイント位置は変更・改変しないことに努め、その誤差が調査精度を示している。遺物番号は現場取上げの遺物番号を遺物図傍に示し、複雑な接合関係を捉えるには最短の手順と方法と考えて行った。中には重複過多の住居跡遺物が複数の住居跡遺物と接合関係が成立する場合もあり、その際は、各々の住居名称も併せて遺物図傍に示し、遺構図にも各々取上げ番号を記入してある。

住居跡の調査は、発見の当初に十字トレンチを20cm幅で設定し、地山層まで喰い込むよう掘り下げ、床層の確認を行った。その際、住居跡埋土層の遺物の多くは原位点をおさえず、十字トレンチを分岐ラインとした分割の、南東側をA、南西をB、北西をC、北東をDにより取上げた。床面遺物は基本的に捉えた。

実測図の線の用法は、実線が外形・外郭などの主要線に、細線は下端遺構の輪郭など補助線として、破線は推定線とかくれ線、土器に用いた１点鎖線は回転軸で回転実測を示し、２点鎖線は調査区外線やトレンチ輪郭、トレンチ底面などに用い遺構線と土層線との混用を避けた。傾斜を示めすケバマークは45°以上の急斜に、以下はダラダラとしたマークを、トレンチとベルトは、底側に向け短かいケバを入れ高低を示した。

トーンについて、遺構の場合は、焼土と灰の２種を基本に、硬化面も部分的に同いた。

遺物の表現方法は、現場において７cmを境に以上を形式りの表現に、以下を×とし、本書では黒丸点とした。

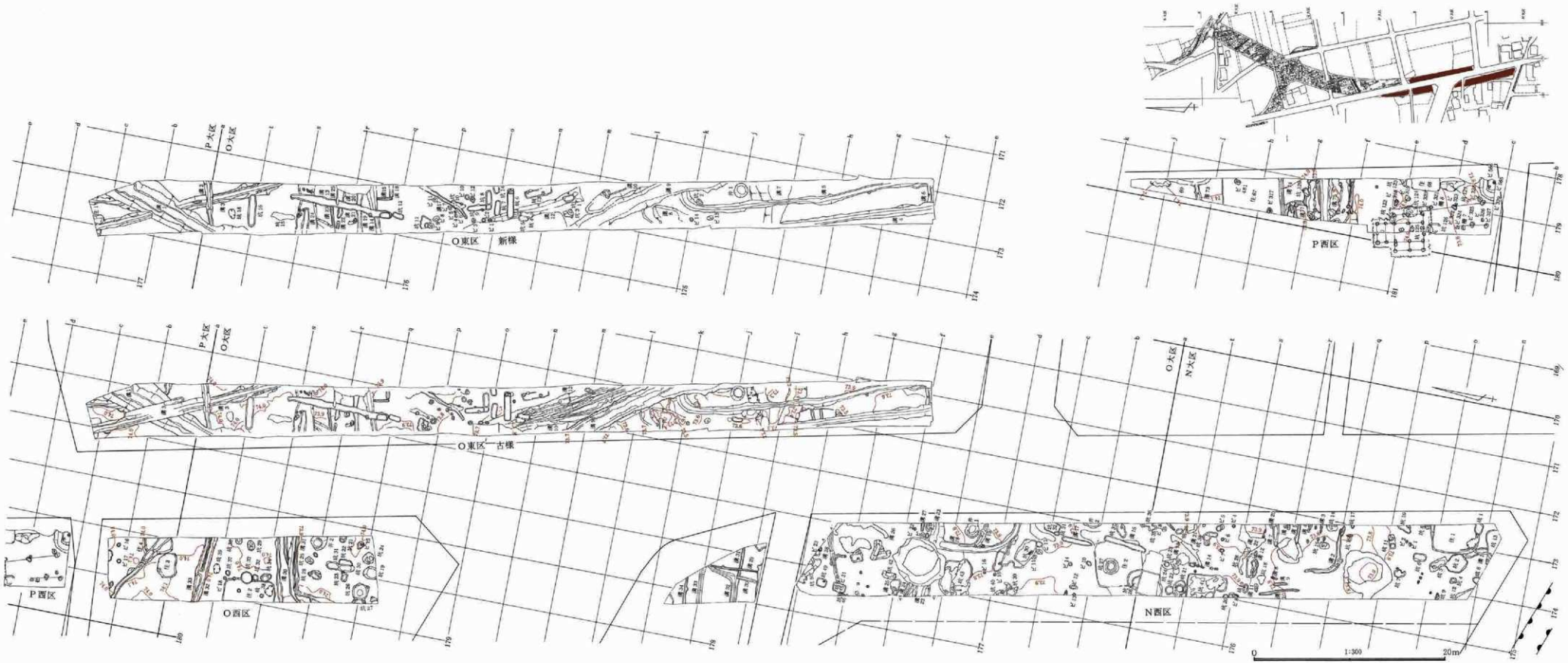
座標は図中に５m交点を１カ所以上記入し、その際、アルファベットの大区名称はほとんど省略し、アルファベット小文字は北向きに、数字は東向きに記入した。方位記号の無い場は、座標名の方向により、どちらが北であるのか分るようにしたつもりである。方位マークは国土座標北方向である。

水準は、標高値であるが、土層断面などは50cm単位でまとめ、共通の水準位置となるよう示した。

以上住居跡図について触れたが、各遺構種別に作図したつもりである。遺物の表現方法は、第４篇、622頁に詳しい。

第１章　N西区調査の遺構と遺物

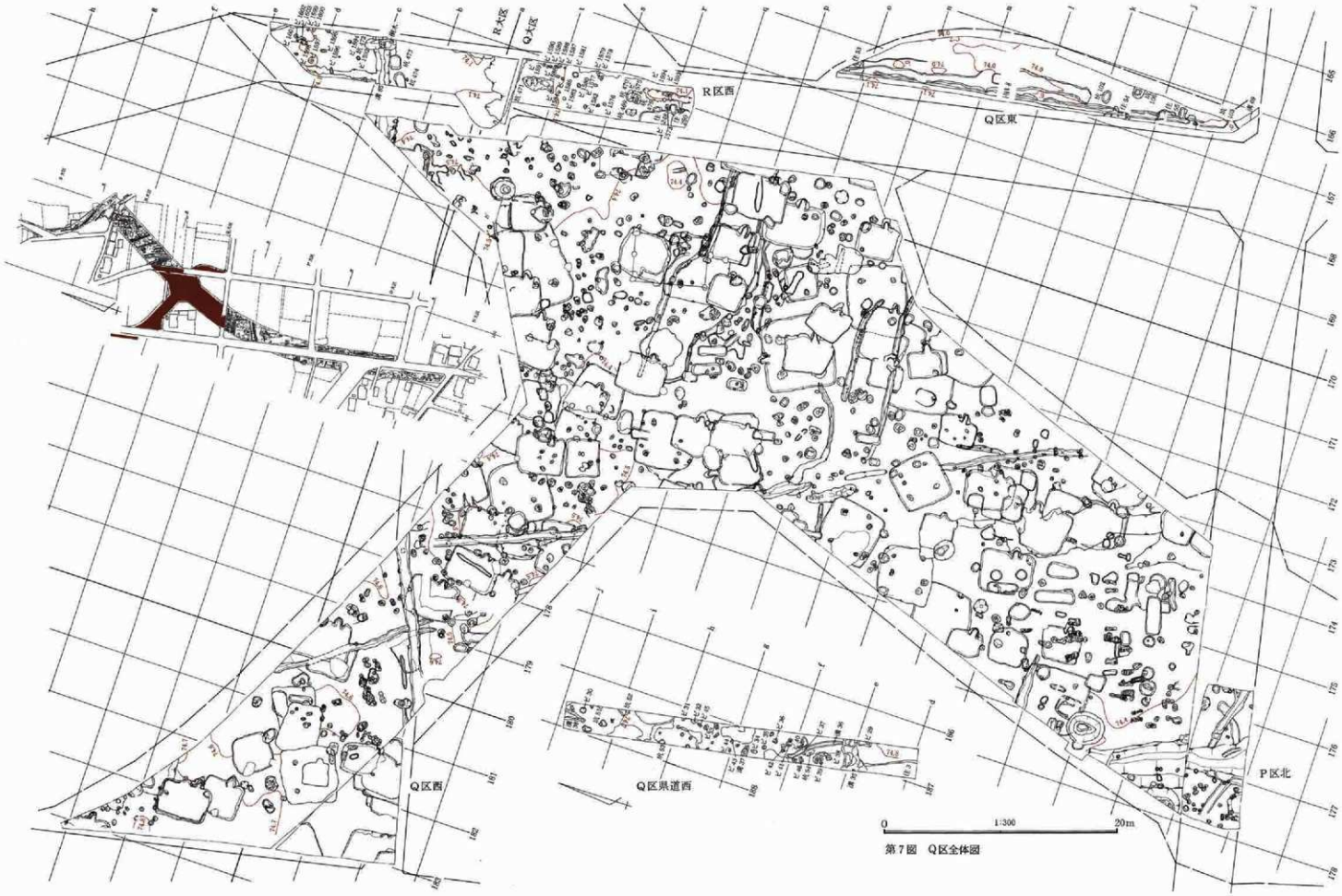
N西区では、住居跡２、井戸跡２、溝跡34、土坑50、ピット23を、うち溝跡９条は、２群の畑遺構であった。調査地は標高約74.5m、調査面積950㎡、調査面73.8～73.9mである。遺構名称は、単独区扱いである。



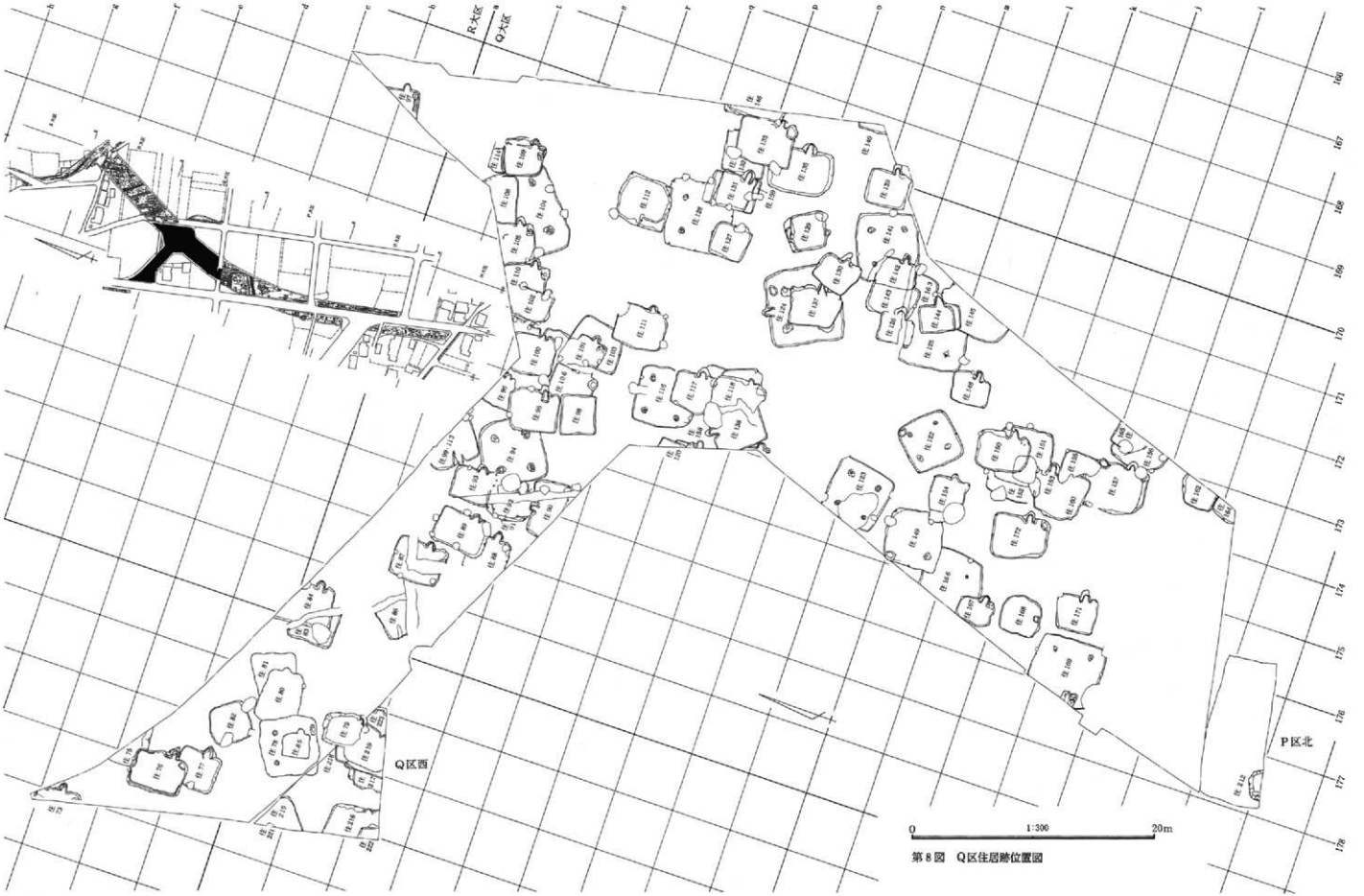
第4図　N～O区全体図

第5図　P東区全体図

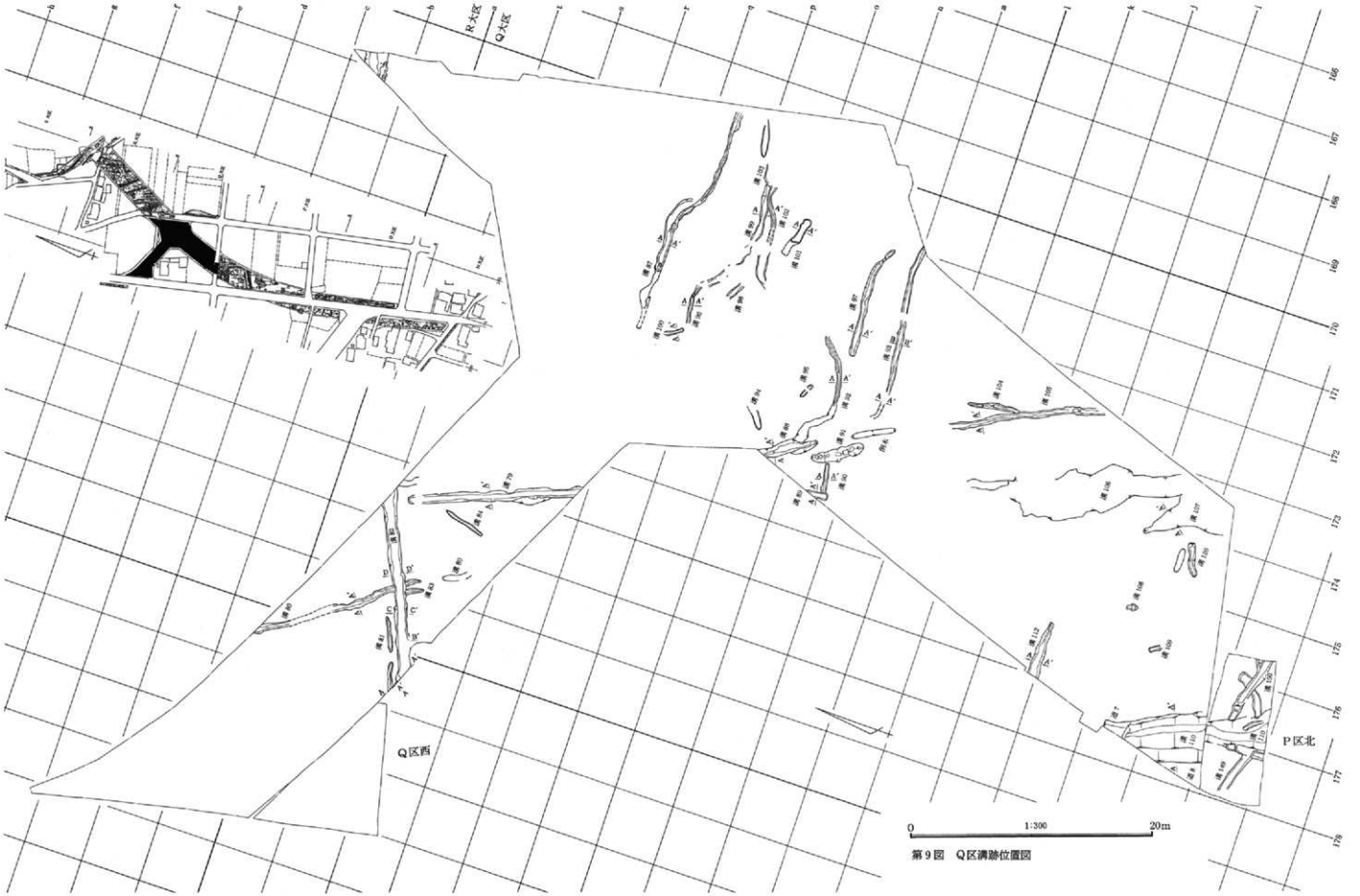
第6図　P東区全体図



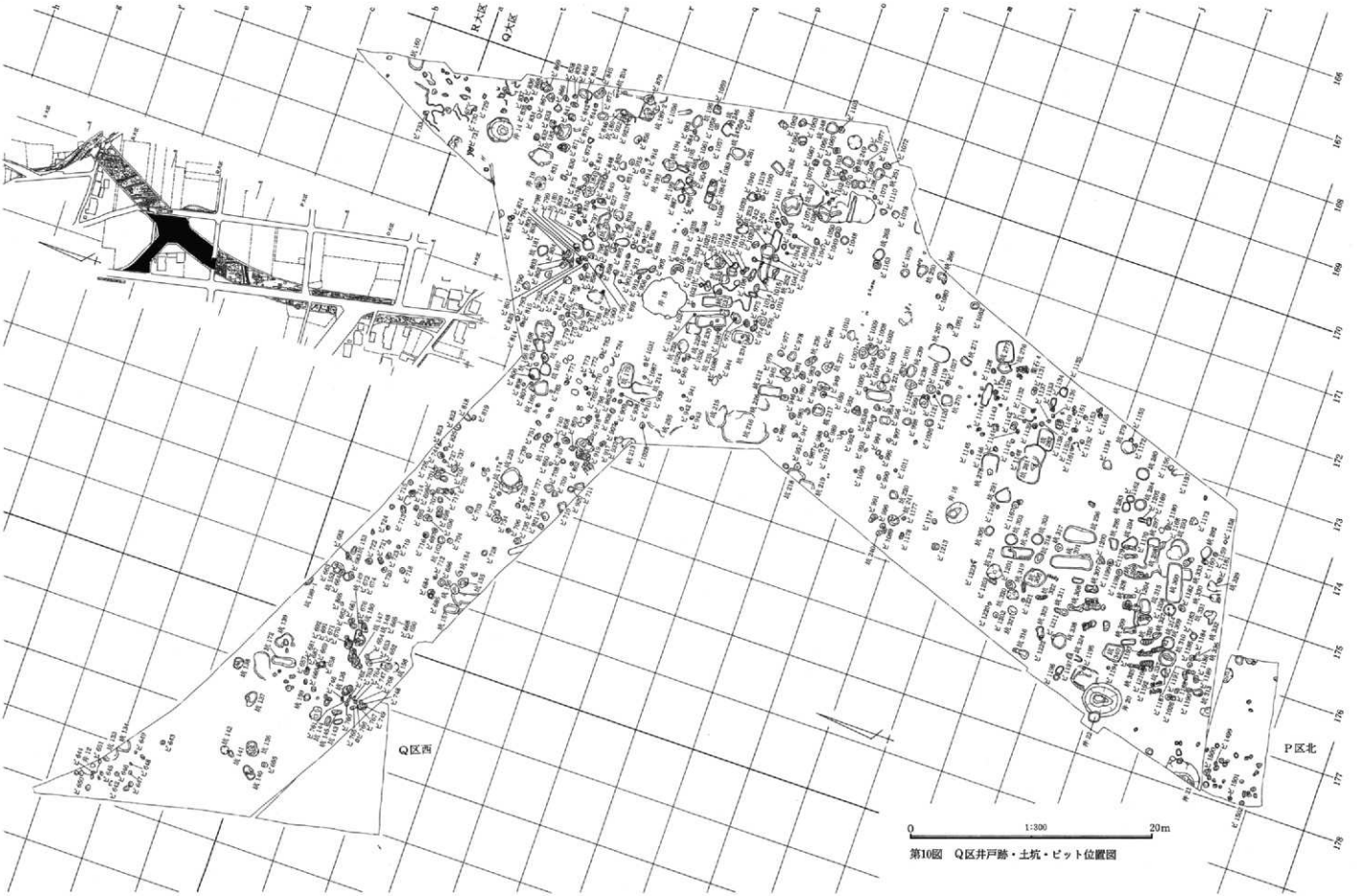
第7図　Q区全体図



第8図　Q区住居跡位置図



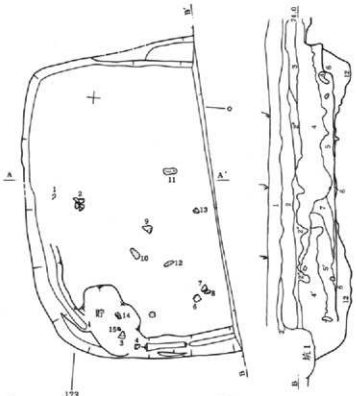
第9図　Q区溝跡位置図



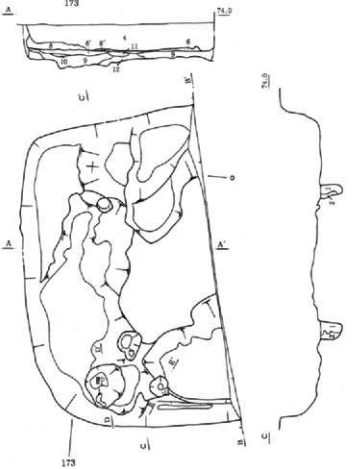
第10図　Q区井戸跡・土坑・ピット位置図

第11図　R・S区全体図

第12図　R・S区住居跡・井戸跡・土坑・ピット位置図



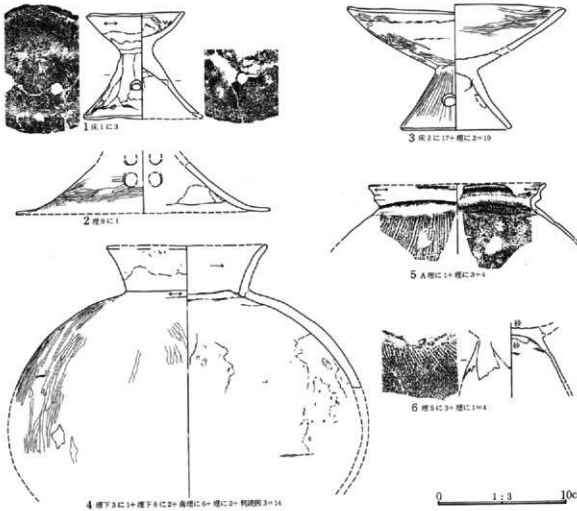
1、黒褐（10YR3/1）As－A入る。現耕土。
2、黒褐（10YR3/1）As－A入る。旧耕土。2′は締る(道か)。2″はAs－A多い。各相。
3、黒褐（10YR3/1）As－B入る。
4、黒褐（10YR3/1）軽石入る。4′は少し茶がかる。
5、黒褐（10YR3/2）ロームブロック入る。5′差なし。
6、黒褐（10YR3/2）ロームブロック入る。木炭多く含む床層。締る。床面。6′はロームブロック含み、木炭やや少。
7、黒褐（10YR3/2）ロームブロックわずか入る。
8、黒褐（10YR3/2）ローム小ブロック含む。8′は少し締る。
9、黒褐（10YR3/1）ロームブロック・小粒・土壌化。
10、黒褐（10YR3/2）ローム土壌化。
11、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多い。11′は上方にローム點床あり。
12、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。



1、黒褐（10YR3/1）ロームブロック微。軟。1′はロームブロックわずか含む。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。少し締る。
3、黒褐（10YR3/1）2層よりロームブロック多く、締る。

0　1:60　2m

第13図　住居跡1遺構図



第14図　住居跡１遺物図

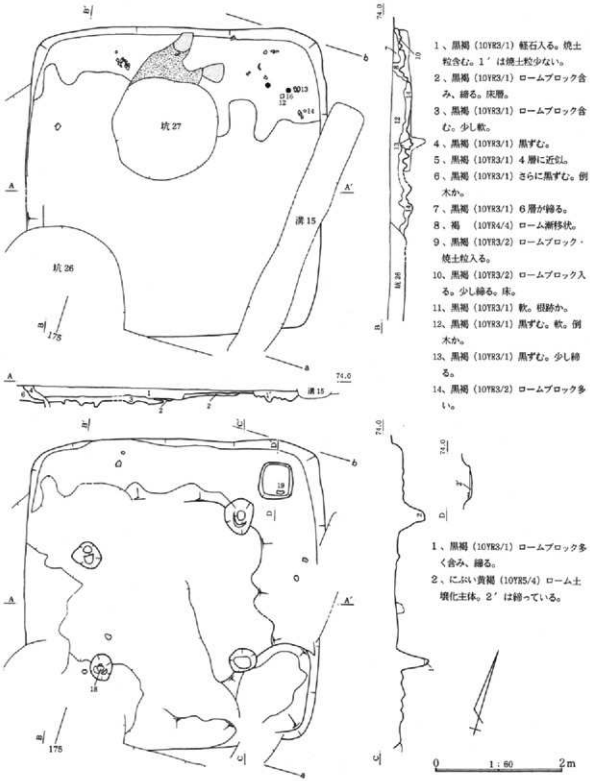
１、住居跡

住居跡１　（第13・14図、図版1・138）

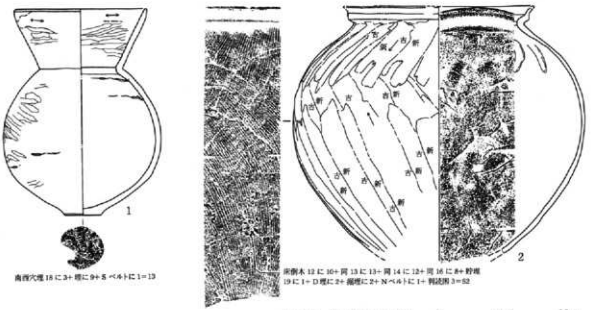
調査区南東端ｎ・ｏ172・173にあり東半は調査地外にある。南北5.1＋２、東西3.05＋２ｍを調査した。調査は、表層を重機除去しての調査面で、住居跡など遺構重複量の少ないはずの場所であったが、第24図のとおり、同図に５基の土坑と西接に溝１条、南半に前代の倒木痕らしき黒色土域がかかり、住居跡平面の明確な確認は困難であった。そのため、やや不明瞭な住居跡平面に対し、土層観察用トレンチを設けて、周壁立ち上りと同時に住居跡平面の確認を行なった。その結果、形態は隅丸方形を呈し、方向Ｎ９°Ｗを測る北壁は確認当初から２段気味であること、西・南壁下でも最終住居域より、内側に周溝が存在することが知れた。土層断面は、調査区東壁が住居跡東壁でもあったため、全体の堆積状態が知れた。鍵層となる火山灰を含む関連は、天明三年の浅間山Ａ軽石（A_3－Ａ）が第13図注記1・2に入り、12世紀後半の浅間山Ｂ軽石（A_5－Ｂ）が３に入ってはいたものの住居跡埋没土域には、およんでいなかった。しかし６世紀の榛名山起源の二ッ岳軽石・４世紀の浅間山A_3－Ｃ軽石らしき軽石は、散見できる状態で含まれていた。

床面は、水性二次堆積のローム層上面から約0.4ｍ下方に設けられていたが、南関東地方で見られるような顕著な硬化面ではなく、やや締る程度であった。床面は貼り床をくり返して行なったためか平らであり、近完存の第14図1・2の遺存があったため、その形状から古墳時代前期と考えられた。柱穴は床層が黒色土を中

心としたため床面では発見できず、掘方で明らかとなった。貯蔵穴は、南西隅部で床面から見い出されたものの、南壁付込は前代の倒木に伴なう黒色土存在のため、形状に不明瞭さを伴なう。掘方とのかね合いで、北西柱穴は径25cm、深さ48cm、南西柱穴は二重気味になるものの主体側で48cm、深さ48cm、貯蔵穴は、床面長辺で120cm、深33cmを測る。掘り方形状は、中央部掘り残しのようで北・西・南壁下で溝状に巡り、隅部に



第15図　住居跡2遺構図



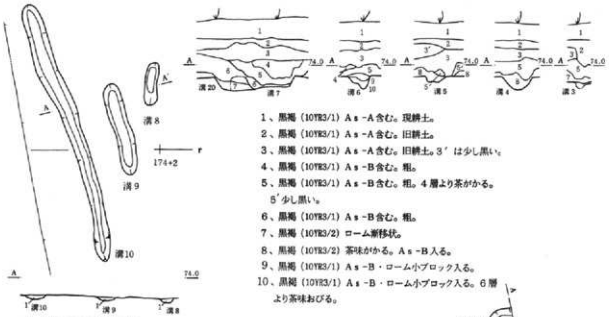
第16図　住居跡２遺物図　0　1：3　10cm

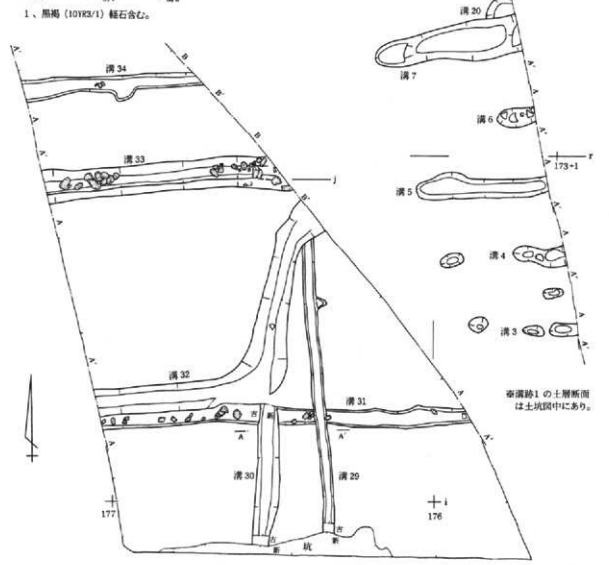
柱穴を設ける。柱穴は不明瞭ながら、貯蔵穴について南東側に中段があり、北壁下の段差など合せ改修を思わせる。炉跡は発見できなかったが、床付近の木炭粒は東につれ多い。補足点とすれば、Ｎ西区住居跡１は、当遺跡にとって最南端に位置しており、埋没土堆積は近50cm、覆土層も60cmほどあり、住居周堤帯も残存も第24図のように土坑の溝跡が周堤を思わせる位置にあったりしたが、住居跡１と土坑13との間の高まりも倒木によると判明したため、周堤帯の残存は認められなかった。

住居跡２　（第15・・16図、1・138）

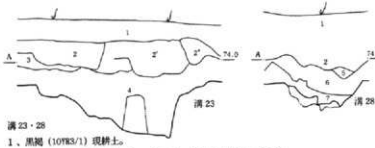
位置は、Ｎ西区のほぼ中央、Ｎ・Ｏ大区ｔ・ａ174・175にある。形状は隅丸方形気味で、南北5.0m・東西4.92m、方位N15°Wを測る。重複は、近世の坑27・同以降の坑26・同以降の溝15があり、住居跡２の以降、古代の倒木痕が西壁中央から住居跡中央付近まで達していた。さらに全体的には、発見面付近まで近世以降の民家敷地内を思わせる掘り返し、耕作などによって床面大半は失なわれていた。第15図上方の床面図の北半½付近の東西の細線は、床残存範囲を示し、以北に残存していた。その残存部に炉跡とその周囲に木炭を含む灰層が存在していた。なお床面の残存も、後出の倒木の押し上げ・下げによる残存である。したがって床面の硬さも少なく、甘い状態であった。

床面での柱穴や貯蔵穴の発見は困難であったが、掘り方において柱穴・貯蔵穴が発見された。柱穴形状は、４穴で方形を成す形ではなく、北西隅が片寄っていた。その片寄りについては、倒木域内のため、根跡等の誤認もありうる点をことわっておきたい。単一形状は中段を有する３穴について建替えもありうると考えたい。柱穴規模は、北東で長径56cm、深さ59cm、南東で43cm、深さ60cm、南西で径45cm、深62cm、北西で径42cm、深56cmであった。貯蔵穴は隅丸長方形を呈し、長軸57cm、短軸54cm、深さ18cmであった。住居跡床下としての掘方形状は、中央部を残し、壁下を溝状に掘り凹める形状であったようであるが、中央から西壁中央付近まで以降の倒木が重なり形状を不明確にしている。第15図西半の細線は、そのためである。出土遺物は、床面残存の範囲に第16図１と南西柱穴中に廃棄直後に埋納したかもしれないが完存ではい同図１坩が存在している。両例ともに古墳時代前期であり、本住居跡との共伴を認めてよい個体である。

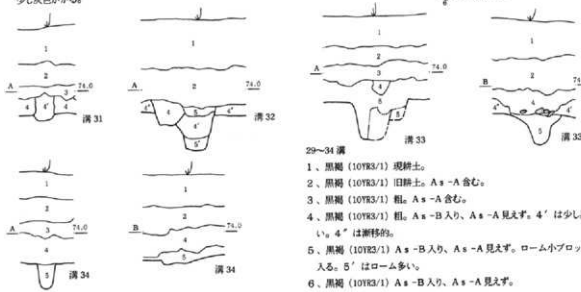

溝8
溝9
溝10
174+2
74.0
溝20
溝7
溝6
溝5
溝4
溝3
1、黒褐（10YR3/1）As－A含む。現耕土。
2、黒褐（10YR3/1）As－A含む。旧耕土。
3、黒褐（10YR3/1）As－A含む。旧耕土。3′は少し黒い。
4、黒褐（10YR3/1）As－B含む。粗。
5、黒褐（10YR3/1）As－B含む。粗。4層より茶がかる。
5′少し黒い。
6、黒褐（10YR3/1）As－B含む。粗。
7、黒褐（10YR3/2）ローム新移坑。
8、黒褐（10YR3/2）茶味がかる。As－B入る。
9、黒褐（10YR3/1）As－B・ローム小ブロック入る。
10、黒褐（10YR3/1）As－B・ローム小ブロック入る。6層より茶味おびる。
1、黒褐（10YR3/1）軽石含む。


溝34
溝33
溝32
溝31
溝30
溝29
溝20
溝7
溝6
溝5
溝4
溝3
173+1
177
176
坑
亜溝跡1の土層断面は土坑図中にあり。
0
1:60
2m

第17図　溝跡遺構図



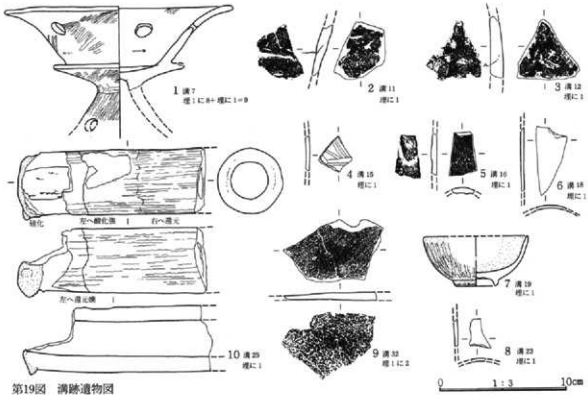
溝 23・28
1、黒褐（10YR3/1）現耕土。
2、黒褐（10YR3/1）旧耕土。Ａｓ－Ａ入る。2′も2と同じ。2″は少し灰色がかる。
3、黒褐（10YR3/1）旧耕土。Ａｓ－Ａ入る。
4、黒褐（10YR3/1）溝埋土。少し泥土質。
5、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。
6、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。5層より黒い。
7、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。5層より黒い。ロームブロック入る。



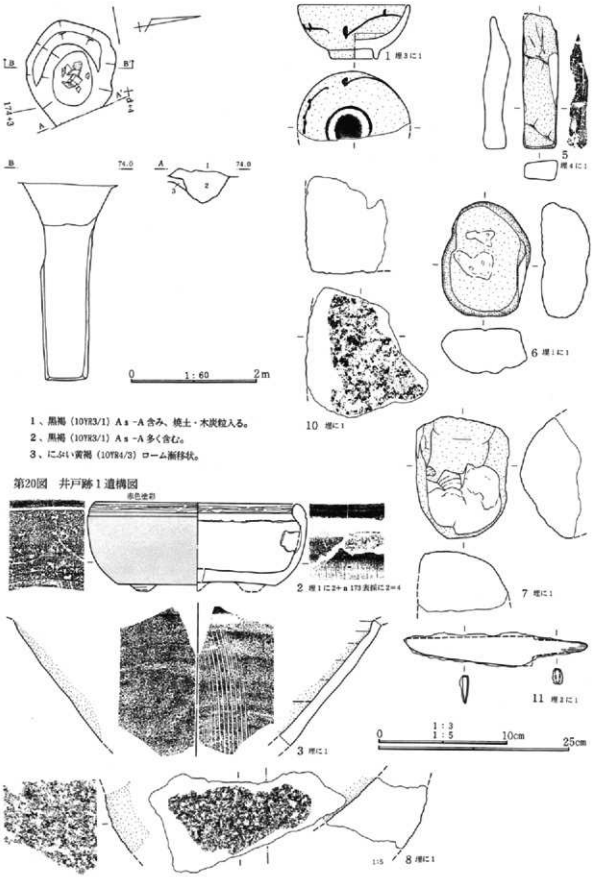
29～34 溝
1、黒褐（10YR3/1）現耕土。
2、黒褐（10YR3/1）旧耕土。Ａｓ－Ａ含む。
3、黒褐（10YR3/1）粗。Ａｓ－Ａ含む。
4、黒褐（10YR3/1）粗。Ａｓ－Ｂ入り、Ａｓ－Ａ見えず。4′は少し黒い。4″は漸移的。
5、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入り、Ａｓ－Ａ見えず。ローム小ブロック入る。5′はローム多い。
6、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入り、Ａｓ－Ａ見えず。

0　1：40　2m

第18図　溝跡遺構図



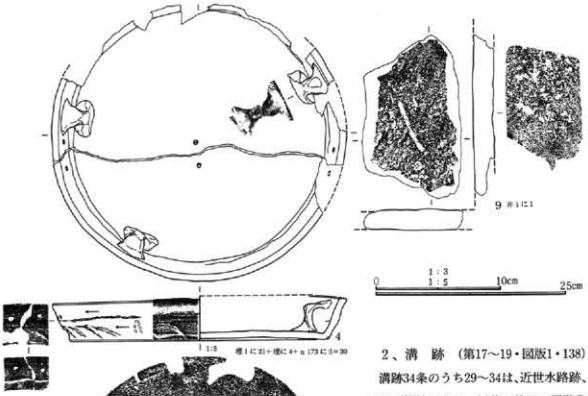
第19図　溝跡遺物図



1、黒褐（10YR3/1）A s -A 含み、焼土・木炭粒入る。
2、黒褐（10YR3/1）A s -A 多く含む。
3、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム漸移状。

第20図　井戸跡1遺構図

第21図　井戸跡1遺物図



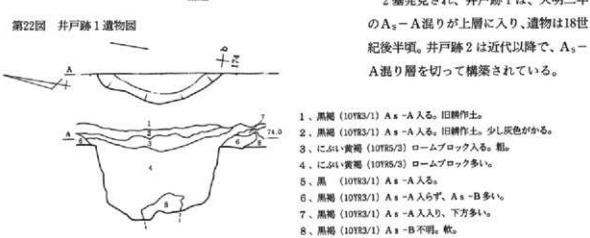
第22図　井戸跡１遺物図

２、溝　跡　（第17～19・図版1・138）

溝跡34条のうち29～34は、近世水路跡、28も可能性があり、以北に乾田の弱酸化層が上面に存在している。28以南は近世以降畑地・宅地らしく高まり、24・27・23は区界を思わせる。溝跡3・4・5・6・7と8・9・10はA_s－A降下に先行の畑耕作溝と考えられた。溝12・15は短く、芋穴のようである。

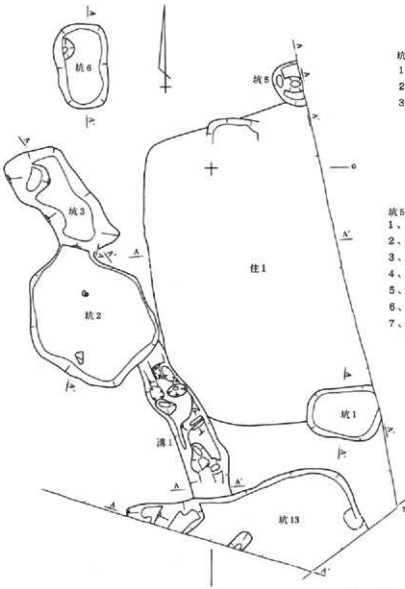
３、井戸跡　（第20～23・図版2・138）

２基発見され、井戸跡１は、天明三年のA_s－A混りが上層に入り、遺物は18世紀後半頃。井戸跡２は近代以降で、A_s－A混り層を切って構築されている。



１、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入る。旧耕作土。
２、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入る。旧耕作土。少し灰色がかる。
３、にぶい黄褐（10YR5/3）ロームブロック入る。粗。
４、にぶい黄褐（10YR5/3）ロームブロック多い。
５、黒　（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入る。
６、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入らず、Ａｓ－Ｂ多い。
７、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入入り、下方多い。
８、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ不明。軟。

第23図　井戸跡２遺構図

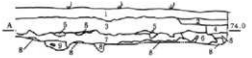


坑6
1、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。軽石見えず。
2、黒褐（10YR3/1）1層より締る。
3、黒褐（10YR3/2）少しローム色、漸移かかる。

坑6
1、黒褐（10YR3/1）As-A入る。粘土。
2、黒褐（10YR3/1）As-A入る。粗。
3、黒褐（10YR3/1）As-A入る。粗。
4、黒褐（10YR3/1）わずか焼土粒入る。古代。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入る。少し締る。
6、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック入る。
7、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移。軟らか。

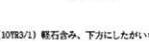
坑1
1、黒褐（10YR3/1）As-B含み、粗。

溝1
1、黒褐（10YR3/1）軽石含む。
2、黒褐（10YR3/2）少し漸移かかる。



坑13
1、黒褐（10YR3/1）As-A含む。粘土。
2、黒褐（10YR3/1）As-A含む。旧粘土。
3、黒褐（10YR3/1）As-A含む。道跡か。締る。木炭粒含む。
4、黒褐（10YR3/1）As-A含む。粗。木炭粒含む。
5、黒褐（10YR3/1）As-Aが少なく、As-B多い。締る。
6、黒褐（10YR3/1）古代。焼土粒含む。
7、黒褐（10YR3/2）古代。軟。わずか焼土粒含む。
8、灰黄褐（10YR4/2）漸移状。軟。
9、黒褐（10YR3/1）黒ずみ、締り、小礫入る。

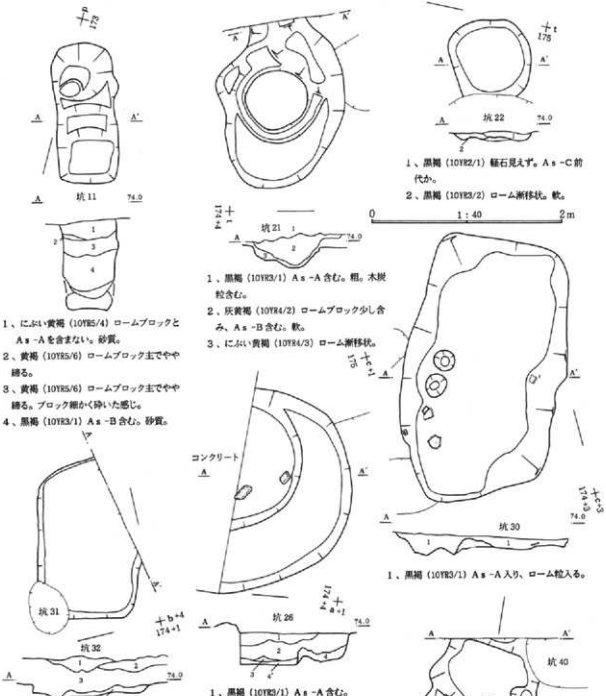
坑3
1、黒褐（10YR3/1）黒ずむ。軽石見えず。
2、黒褐（10YR3/1）1層より締る。2′はさらに締る。
3、黒褐（10YR3/2）少しローム色、漸移かかる。3′はさらに黄ばむ。



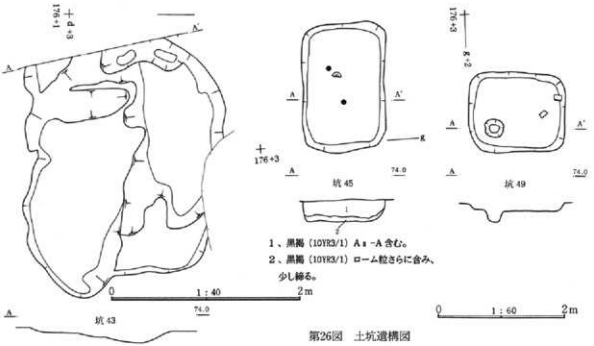
坑2
1、黒褐（10YR3/1）軽石含み、下方にしたがいロームとにじみ合う。

0　1:60　2m

第24図　土坑遺構図


坑11
74.0
1、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックとＡｓ－Ａを含まない。砂質。
2、黄褐（10YR5/6）ロームブロック主でやや締る。
3、黄褐（10YR5/6）ロームブロック主でやや締る。ブロック細かく砕いた感じ。
4、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。砂質。
坑21
74.0
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ含む。粗。木炭粒含む。
2、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック少し含み、Ａｓ－Ｂ含む。軟。
3、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム漸移状。
坑22
74.0
1、黒褐（10YR2/1）軽石見えず。Ａｓ－Ｃ前代か。
2、黒褐（10YR3/2）ローム漸移状。軟。
0　1：40　2m
坑30
74.0
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入り、ローム粒入る。
コンクリート
坑26
74.0
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ含む。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ含む。
3、暗褐（10YR3/1）砂。（橋底堆積か）
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締る。
4′は締りなし。
坑31
坑32
74.0
1、暗褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ入る。旧耕作土。
2、黒褐（10YR3/1）粗。Ａｓ－Ａ入る。
3、黒褐（10YR3/1）粗。Ａｓ－Ａ入る。
4、にぶい黄褐（10YR4/3）ロームブロック入る。
坑40
坑39
74.0
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ含み、焼土・木炭粒入る。
2、黒褐（10YR3/1）ローム粒わずか入り、Ａｓ－Ｂ含む。砂質。
3、黒褐（10YR3/1）ローム粒見えず、Ａｓ－Ｂ含む。砂質。
4、にぶい黄褐（10YR5/3）ロームブロック多い。
5、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロックわずか含み、木炭粒入る。
6、黄褐（10YR5/6）ロームブロック主。根か。
7、褐　（10YR4/4）ロームブロック・木炭多い。

第25図　土坑遺構図

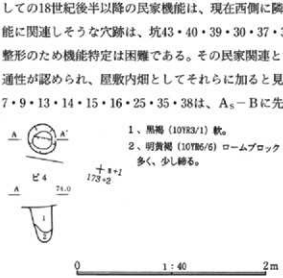


第26図　土坑遺構図

第27図　土坑遺物図

4、土　坑　（第24～27図、図版2・3、139）

N西区で名称をあたえた土坑数は50である。長さの短かい溝跡12・15などは、機能として芋穴が推定されるので土坑に加えた方がよいかもしれない。第4図全体図中、e165に位置するドーナッ状穴跡は立木の抜き取り穴、南側R173こドーナッ状穴跡はN西区最大の倒木痕で4世紀のA_s－Cに先行する。土坑のうち芋穴と推定される隅丸長方形で、埋土下方にやや縮りのある水平土層の堆積を特色とする土坑は、北側より坑49・25・30・32・11・6・3があり、坑45・30・32はA_s－A混りのため天明三年以降であり、6・3は、それ以前の土層であった。平面近以の42は、重機穴である。機能を特定できそうな穴跡は、坑27・28・21で桶据えの穴跡で、近接に民家の存在が推測される。各々A_s－A混りの土層を埋土とする。これらは、井戸跡を含め近接して18世紀後半以降の民家機能は、現在西側に隣接する松本家の前代に関連しそうである。民家の生活機能に関連しそうな穴跡は、坑43・40・39・30・37・36・30・41があり各々A_s－A混りの埋土であるが形状不整形のため機能特定は困難である。その民家関連とすれば、溝跡8～10、3～7の畑耕作跡も相互が方向性も共通性が認められ、屋敷内畑としてそれらに加ると見てよいであろう。このほかの土坑について、坑2・3・4・7・9・13・14・15・16・25・35・38は、A_s－Bに先行の古代と考えられ穴跡であるが、不整形であったり最低部が片寄っていたり、掘込み線が不明瞭であったり、自然的要素が強い。A_s－Bを含む同様の土坑に36・37がある。



第28図　ピット遺構図

5、ピット　（第38図、図版3）

ピットのうち5・6・7は、埋土中にコンクリートの入る現代で、その外柱穴示唆は、ピ4のみであった。近世民家は礎石らしく、柱穴は見えない。

第２章　Ｏ東区調査の遺構と遺物

Ｏ東区は、最南端調査地であるＮ西区に続く南辺調査地でＯ大区ｆ～ｔ171～176・Ｐ大区ａ・ｃ174～176にあり、現前橋・長瀞線に西接、長さ89m・幅5.4mの調査区を設けて実施した。当区は、西方の諏訪神社前付近から西方の低地形の一部が内湾しておよぶ、いく分低い地区となっている。そのため南西方のＮ西区北端のローム層上面73.8mより0.2～0.4m低い、北に高く、中程で低い、南でやや高い、東下りの地勢にある。やや低い自然地勢のため存在する黒色土の堆積もやや厚く存在していた。さらに他所ではほとんど見受けられなかった浅間山Ｂ軽石（A_s－Ｂ）の２次的でやや不純ではあったが、同層の２次的な堆積を溝７埋土底と１174付近でも認め、A_s－Ｂ堆積の頃においても、周囲より低い土地であった。

調査では、住居跡１、溝跡28、土坑18、ピット14、井戸跡１、道跡１を調査した。遺構番号は全体通番である。

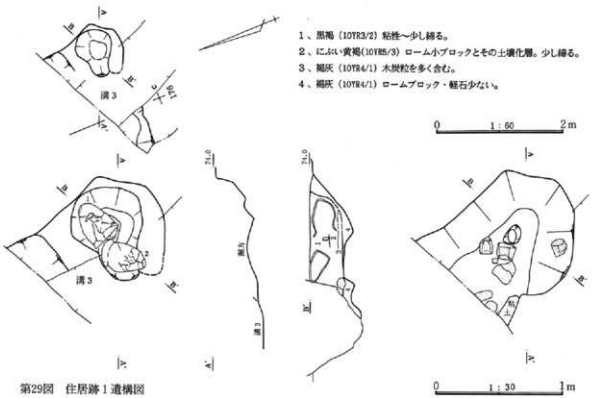
特記すべき内容は次のとおりである。Ｐ大区ｃ175に位置する住居跡１は、９世紀前半の機能時期で、８・９世紀代の住居跡では最南端にある。しかし同期住居跡の連続性は認められず、同時期も含む、溝１と溝９・10・12の土地区界を成すやや規模の大きな溝間に挟まれた長さ46mの間においても、以南においても認められなかった。そのため以東に低地は続くとみられ、居住域とならなかったことも考えられる。平安時代末期の12世紀初頭頃に溝７が存在しているが、人為・自然溝か判然としなかった。中世においては、15世紀初頭頃の遺物を出土した井戸跡１は、出土遺物のほとんどない隅丸長方形土坑群、基坑と考えられる坑１などとともに中世生活域に近接した場所とも考えられた。近世以降は、近世末～明治頃に機能した溝５、陶・磁器をほとんど含まない溝４・６など18世紀前半以前を思わせる溝があり、溝４・５の間は硬化面を有する道跡１が存在していた。溝５は、火事に伴なう残材と考えられる木炭を多くまじえた遺物の一括に近い廃棄がなされており、民家の屋敷回りの溝か近接の溝と考えられた。

１、住居跡

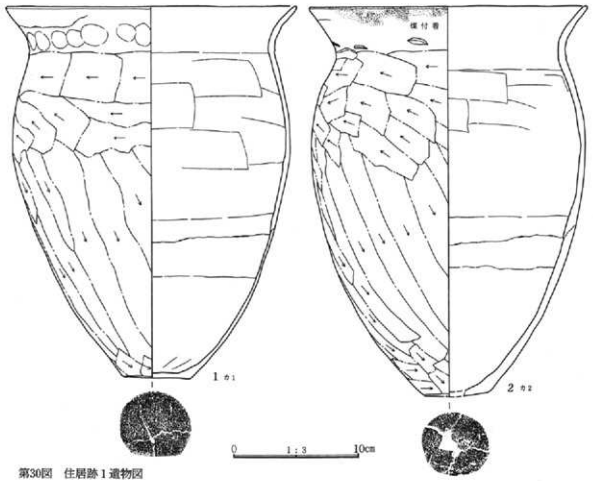
住居跡１　（第29・30図、図版4・139）

第29図上方が住居跡１使内面遺構図、下方左が竈廃棄状態、下方右が竈掘方図である。調査区北辺のｃ－175・176にある。住居跡は、中世溝と考えられる溝３に竈跡前面を切られていたため、貯蔵穴を欠く。規模は、東西2.06＋αm、南北0.81＋αm、主軸Ｎ100°Ｅ内外、竈長1.23＋２m、幅1.02m、主軸Ｎ101°Ｅを測る。調査では発見面位置が高かったため、当初は土坑中の埋納土器と考えていたが、長軸に沿う確認トレンチを掘り下げた結果、土層注４に黒色の木炭床主とする灰を厚く認め、住居跡であることが判明した。竈に伴なう土器取り上げ番１・２は架構材としては底と口合せに組み合せるので、口相互が近接するのは、竈の土器置きの口が２穴であったことも考える必要がある。部分的に竈貼付粘土として白灰色粘土が右手前に残存していたが、大半はロームブロックをまじえた土で構築されていた。掘り方間で軟質凝灰岩製の竈材を認めた。しかし、発見時に土坑として調査していたため掘り過ぎか所も生じ、竈構造で不明確さを残してしまった。

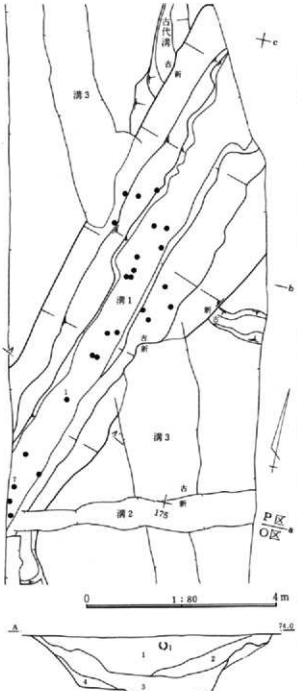
床面は、締りに欠け、甘かった。床面からの出土遺物は少ない。遺物は第30図に示した甕があり、９世紀前半頃の製作であり、２は煤を口縁部に認める。特記すべきは、同時期に住居跡中、最南端に位置し、近接地区でも同期住居跡の存在は粗である。南接の溝１とは、出土土器に併存してよい個体があるため、この溝跡１と住居跡１とは関連しての存在かもしれない。

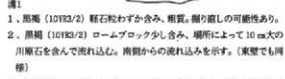


第29図　住居跡１遺構図



第30図　住居跡１遺物図





溝1
1、黒褐（10YR3/2）軽石粒わずか含み、粗質。掘り直しの可能性あり。
2、黒褐（10YR3/2）ローム ブロック少し含み、場所によって10cm大の川原石を含んで流れ込む。南側からの流れ込みを示す。（東壁でも同様）
3、黒褐（10YR3/2）ローム ブロックを含む割合高い。図右版側がより多い。
4、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム ブロックを多く含み、混じり合いも高い。

第31図　溝跡１遺構図

２、溝　跡

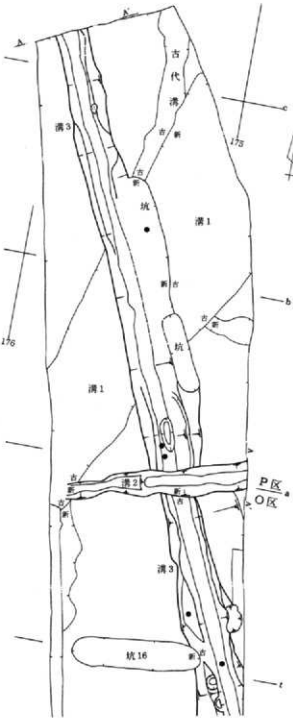
各調査区中、Ｏ東区の溝の多さは、やや低地気味のためか、溝の存在密度は高い。規模の大きな、遺物量の多い例は個別で説明を加える。

溝跡１　（第31・38図、図版5・139）

溝跡１は、Ｏ東区の北側、Ｑ大区ｔ175～Ｐ大区ａ～ｃ174～175にあり、発見面標高73.9mである。規模は幅1.8m、深さ0.65m、最低面での主軸方向N16°Ｅを測る。重複は、後出の溝3・2が切り、北端の小溝は溝跡１が切り、小溝が先行している。

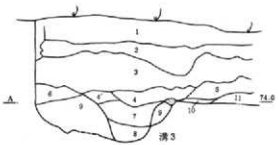
横断面形状と埋没土について断形面は掘り上りでは逆台形を呈しているが、数度の掘り直しの結果である。しかし、後出時期の形状は、土層注記１のごとく、逆台形状を呈するので機能時点で、逆台形状の意識はあったと考えられる。埋没土は、数度の掘り直しが示唆されるほか、土層注記２はローム層ブロックをまじえ、東壁断面でも同様の状態が見えたので、南東側に溝跡１の掘り上げ土を主とする小規模な土墨状の客土がなされていたと推測しうる。埋没土の最下部、土層注３に砂質土が認められ、ある程度、流れがあったようである。底面走行は、写真図版５のように北東側に下り規模も幅広となるため、南西から北東に向け通水させたようである。西方の延長部は、Ｏ西区、Ｎ西区にあっても共通時期・同規模の溝跡の存在はないが、関連する可能性のある小溝が、９世紀中頃のＯ西区住居跡４を切る溝跡32が、溝跡１に向って流下しており、併存の時間帯があると考えられる。同規模延長をさらに追えば、25m南方に溝跡9・10・12が横断面形状の共通性、出土遺物の時間的共通性があるものの流下方向も南南東で、溝跡と異なっている。その流下方向と溝跡１との、さらなる関連性は、溝跡９と、Ｏ西区56頁で触れたい。

遺物は、細片が多く、稀品的な個体も第30図７の原始灰釉を思わせる酸化気味器面に自然釉のかかる東海地方製小形の台付瓶、同図１の酸化気味の小形鉢ほかは少なかった。主体時期は同図2・4・5・6など９世紀前半頃の製品と考えられる。



溝13

1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ａ入る。粗質。

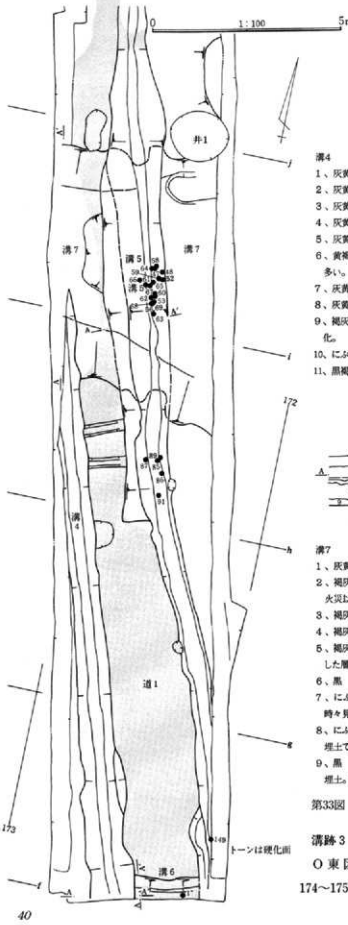


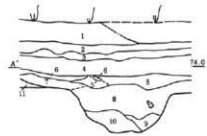
溝3

1、褐灰（10YR4/1）表土。粗質。Ａｓ－Ａ含む。畑畦の場所。
2、灰黄褐（10YR4/2）粗質。Ａｓ－Ａ含む。少し灰色がかる。
3、灰黄褐（10YR4/2）粗質。Ａｓ－Ａ含む。少し黒味がかる。。
4、灰黄褐（10YR5/2）粗質。Ａｓ－Ａ含む。4′はより黒味がかる。
5、黒褐（2.5Y3/1）粗質。Ａｓ－Ｂ含む。
6、黒褐（2.5Y3/1）粗質。Ａｓ－Ｂ含む。
7、黒褐（10YR3/1）粗質。Ａｓ－Ｂ含む。
8、黒褐（10YR3/1）粗質。Ａｓ－Ｂ含む。7層より黒い。
9、灰黄褐（10YR4/2）やや締る。ロームブロック含む。
10、灰黄褐（10YR4/2）やや締る。Ａｓ－Ｂ含むかは不明。ロームブロック入らず。
11、黒褐（10YR3/1）粗質。Ａｓ－Ｂ含むかは不明。

0　1:40　2m

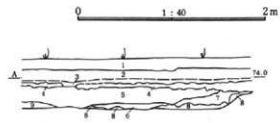
第32図　溝跡遺構図





溝4

1、灰黄褐（10YR5/2）耕土。Ａｓ－Ａ含む。客土。
2、灰黄褐（10YR5/2）耕土。Ａｓ－Ａ含む。客土。
3、灰黄褐（10YR5/2）客土。ビニール含む。
4、灰黄褐（10YR5/2）Ａｓ－Ａ多く含む。粗質。
5、灰黄褐（10YR5/2）Ａｓ－Ａ多く含む。粗質。5′は少し締る。
6、黄褐（10YR5/6）Ａｓ－Ａ多く含む。締り、遺跡。ローム小ブロック多い。
7、灰黄褐（10YR5/2）Ａｓ－Ａ含み、締る。遺跡。ロームブロックなし。
8、灰黄褐（10YR5/2）Ａｓ－Ａ見えず。Ａｓ－Ｂ入る。粗質。
9、褐灰（10YR4/1）Ａｓ－Ａ見えず。Ａｓ－Ｂ入る。粘性。ローム土壌化。
10、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム小ブロック多く含む。粘性。
11、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ主体。軽石混じり。



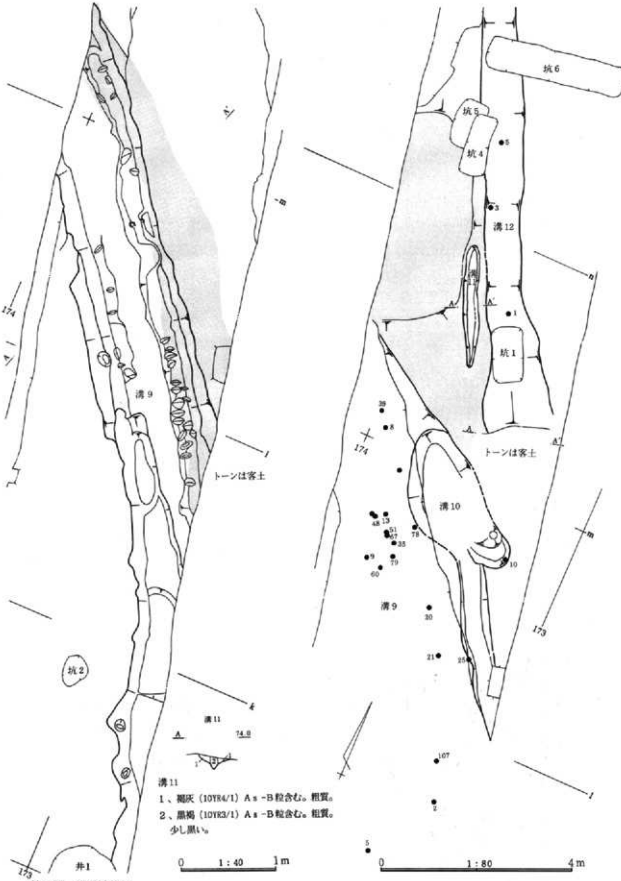
溝7

1、灰黄褐（10YR4/2）客土。圃場整備時か。
2、褐灰（10YR4/1）陶・磁を多く含み、Ａｓ－Ａ入る。大正末(関取り)火災以降の層。締る。民家庭か。
3、褐灰（10YR4/1）木炭を多く含む。前出火災時の層。締る。
4、褐灰（10YR4/1）Ａｓ－Ａを含む江戸時代の層。
5、褐灰（10YR4/1）Ａｓ－Ａ含まず、Ａｓ－Ｂを主とし、同層が土壌化した層。溝7上層。
6、黒　（10YR2/1）Ａｓ－Ｂを主とするが、純層ではない。溝7埋土。
7、にぶい黄褐（10YR5/3）やや粘性あり。上方は黒味(Ａｓ－Ｂ下に時々見かける)あり。
8、にぶい黄褐（10YR5/4）小礫を多く含み、ローム層の土壌化層。溝埋土で溝7の先行か。
9、黒　（10YR2/1）ローム小ブロック多く含み、Ａｓ－Ｂ入る。中世溝埋土。溝4埋土。

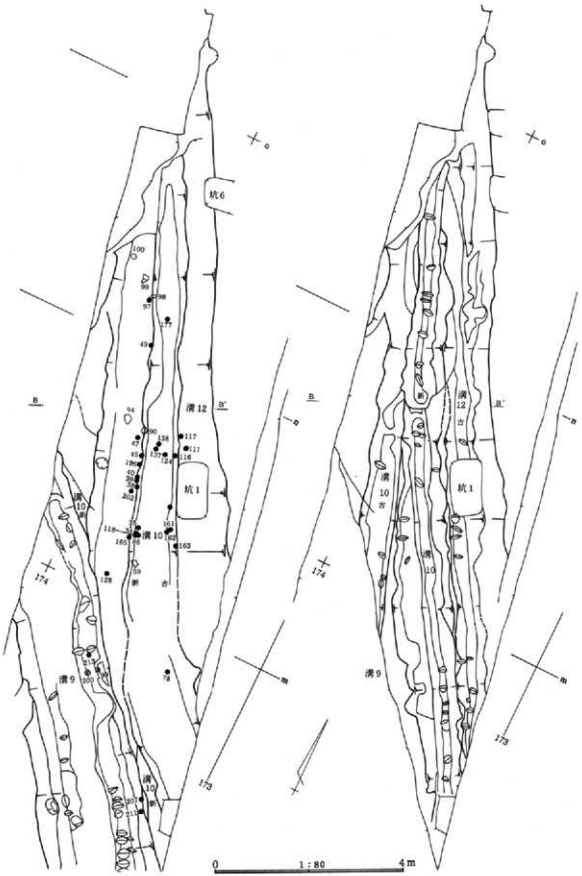
第33図　溝跡遺構図

溝跡３　（第32図、写真図版５）

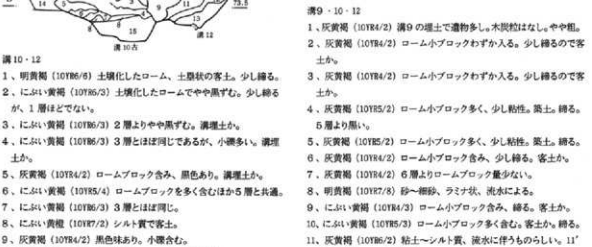
Ｏ東区の北辺にＯ大区&174～Ｐ大区ａ～ｃ174～175に位置する。発見面標高は約74.0mである。


溝 9
トーンは客土
坑 2
溝 11
74.8
井1
174
173
溝11
1、褐灰（10YR4/1）Ａｓ－Ｂ粒含む。粗質。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ粒含む。粗質。
少し黒い。
0　1：40　1m
坑 6
坑 5
坑 4
溝 12
坑 1
トーンは客土
溝 10
溝 9
174
173
0　1：80　4m

第34図　溝跡遺構図



第35図　溝跡遺構図



溝10・12

１、明黄褐（10YR6/8）土壌化したローム、土塁状の客土。少し締る。
２、にぶい黄褐（10YR5/3）土壌化したロームでやや黒ずむ。少し締るが、１層ほどでない。
３、にぶい黄褐（10YR6/3）２層よりやや黒ずむ。溝埋土か。
４、にぶい黄褐（10YR6/3）３層とほぼ同じであるが、小礫多い。溝埋土か。
５、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック含み、黒色あり。溝埋土か。
６、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックを多く含むほか５層と共通。
７、にぶい黄褐（10YR6/3）３層とほぼ同じ。
８、にぶい黄褐（10YR7/2）シルト質で客土。
９、灰黄褐（10YR4/2）黒色味あり。小礫含む。
10、明黄褐（10YR6/6）土壌化したローム で、少し黒ずむ。
11、明黄褐（10YR5/6）土壌化したローム で、少し黒ずむ。さらに小礫含む。
12、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多く、土壌化主体。
13、にぶい黄褐（10YR4/3）ロームブロック少なく、溝埋土か。
14、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック含み、ローム土壌化主。ローム漸移か。人為層か不明。
15、褐灰（10YR5/1）４cm以下の河原礫を主とする流水痕。

溝9・10・12

１、灰黄褐（10YR4/2）溝９の埋土で遺物多し。木炭粒はなし。やや粗。
２、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロックわずか入る。少し締るので客土か。
３、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロックわずか入る。少し締るので客土か。
４、灰黄褐（10YR5/2）ローム小ブロック多く、少し粘性。築土。締る。５層より黒い。
５、灰黄褐（10YR5/2）ローム小ブロック多く、少し粘性。築土。締る。
６、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック含み、少し締る。客土か。
７、灰黄褐（10YR4/2）６層よりロームブロック量少ない。
８、明黄褐（10YR7/8）砂～細砂、ラミナ状、流水による。
９、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム小ブロック含み、締る。客土か。
10、にぶい黄褐（10YR5/3）ローム小ブロック多く含む。客土か。締る。
11、灰黄褐（10YR6/2）粘土～シルト質、流水に伴うものらしい。11′は粘性弱く、ローム粒含む。
12、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム小ブロックを多く含む。締る。客土。
13、灰黄褐（10YR5/2）砂と小礫がラミナ状を呈し、流水による。
14、灰黄褐（10YR4/2）砂・小礫をまじえ、上方はローム小ブロックを含む褐鉄土。
15、にぶい黄褐（10YR4/3）ロームブロック多く含む構築関連土。

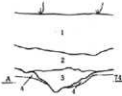
0　1：60　2m

第36図　溝跡遺構図

規模は、幅0.7m、深さ0.55m、底面での走行方位はN23°30Wを測る。埋没土は、黒褐色土中にA$_s$－Bをまじえ、粗質。第32図土層断面注８、最下層で、さらに黒づみ、当遺跡のA$_s$－Bを含む土層の中では遡ぼりそうに思える質感にあった。重複は、９世紀代の溝跡１を切り、溝２により切られる。また、溝３q175付近の東立上りで、隅丸長方形土坑が重きなり、南側の土坑は明らかに溝跡３より後出していた。この隅丸長方形土坑は、溝３の埋没土と類以の埋土で、底面、西立上を含め、掘り上げることはできなかった。出土遺物は、埋土にA$_s$－Bを混え、12世紀初頭以降であることは明らかであったが、中世遺物の出土は無かった、おそらく、中世前半の所産であろう。機能を推測すると、底成りは、南に高く北に低い地勢に対し、南下りに設けられ、埋土中砂質土は明瞭でなかった点を考慮すれば地界区分・除湿などとも考えられる。

溝跡13とその付近　（第32・44図、図版７）

Ｏ東区の北寄、Ｏ大区q174・175付近に南北走行に溝跡13と東西方向に溝跡14・20・22・23・24・25など小規模な溝の潰い一角がある。各々流水を示唆する砂質土の堆積は窺えない。重複について溝跡14は、溝跡13より古く、溝跡15より新しい。溝跡920・22・23・24・25は、いずれも溝13に先行する。埋没土中の軽石は、溝跡14はA$_s$－B混り、溝跡15はA$_s$－B混り、溝跡20はA$_s$－A混り、溝跡22はA$_s$－B混り、溝跡23はA$_s$－B混り、溝跡24はA$_s$－A混り、溝跡25はA$_s$－B混りであった。集密状態を同一目的・機能を果すために認けられたとすれば、各々、天明３年頃を前後しての構築とも考えられ、西方延長に当るＯ西区の溝とも関連するであろう。遺物は18世紀染付磁器小碗片、第44図63の出土がある。



溝2
1、褐灰（10YR4/1）耕作土。Ａｓ－Ａ粒多いゝ。
2、灰黄褐（10YR4/2）粗質。Ａｓ－Ａ・Ａｓ－Ｂ含む。
3、灰黄褐（10YR4/2）粗質。Ａｓ－Ａ含むか不明。Ａｓ－Ｂ含む。
4、灰黄褐（10YR4/2）粗質。Ａｓ－Ａ含まず、Ａｓ－Ｂ含む。

溝5
1、褐灰（10YR4/1）Ａｓ－Ａ含み、粗質。底面大正時代末年(関取り)。
2、褐灰（10YR4/1）Ａｓ－Ａ・Ａｓ－Ｂ含み、粗。大正以前か。
3、褐灰（10YR4/1）Ａｓ－Ａ含まず、Ａｓ－Ｂ含む。天明以前。
4、褐灰（10YR5/1）Ａｓ－Ｂ近純層。

溝6
1、褐灰（10YR4/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗質。
2、褐灰（10YR4/1）ローム土塊化。粗質。
3、明黄褐（10YR6/6）ローム土塊化。同ブロック入る。

溝14
1、黒褐（10YR2/3）砂質。締りあり。Ａｓ－Ｂ粒含む。

溝16
1、黒褐（10YR2/2）Ａｓ－Ｂ入る。粗。

溝18
1、黒褐（10YR2/2）Ａｓ－Ｂ入る。粗質。
2、黒褐（10YR3/2）ローム土塊化。粗質。

溝19
1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ｂ入る。粗質。
2、黄褐（10YR3/2）ローム土塊化。

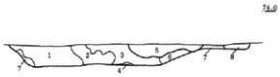
溝20
1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ａ入る。粗質。

溝21
1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ａ入る。粗。

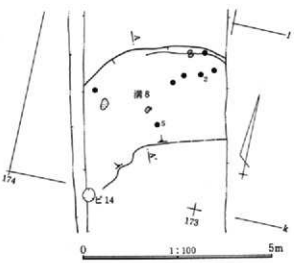
溝22・23
1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ｂ入る。粗。近世的。

溝24
1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ａ入る。粗質。
2、明黄褐（10YR6/4）Ａｓ－Ａ・Ｂ入らず。ロームブロックと土壌化あり。
3、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ・Ｂ入らず。粘性。
4、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ａ・Ｂ入らず。３層より粘性。

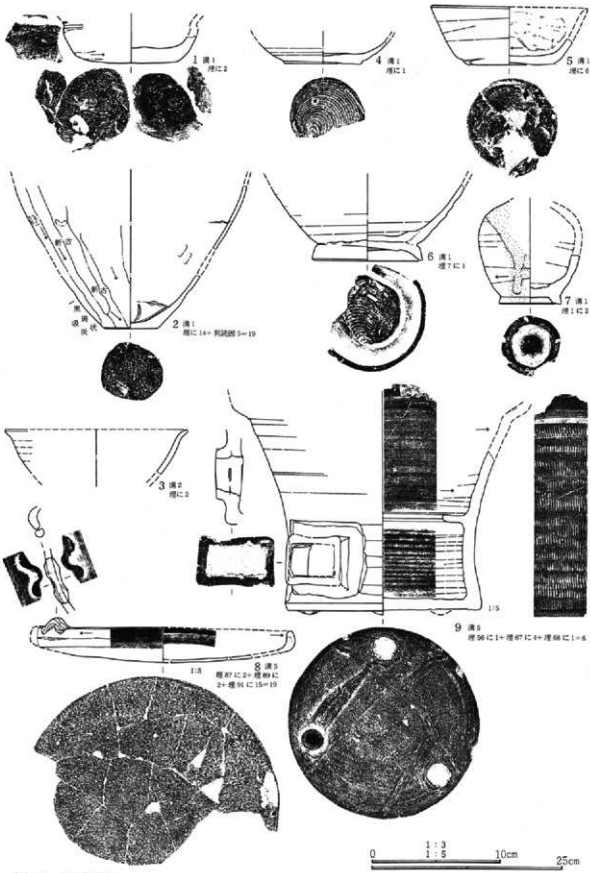
溝25
1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ａ入り、粗。
2、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ａ入らず、Ａｓ－Ｂ入り、粗。
3、灰黄褐（10YR4/2）ローム漸移的。人為か自然。



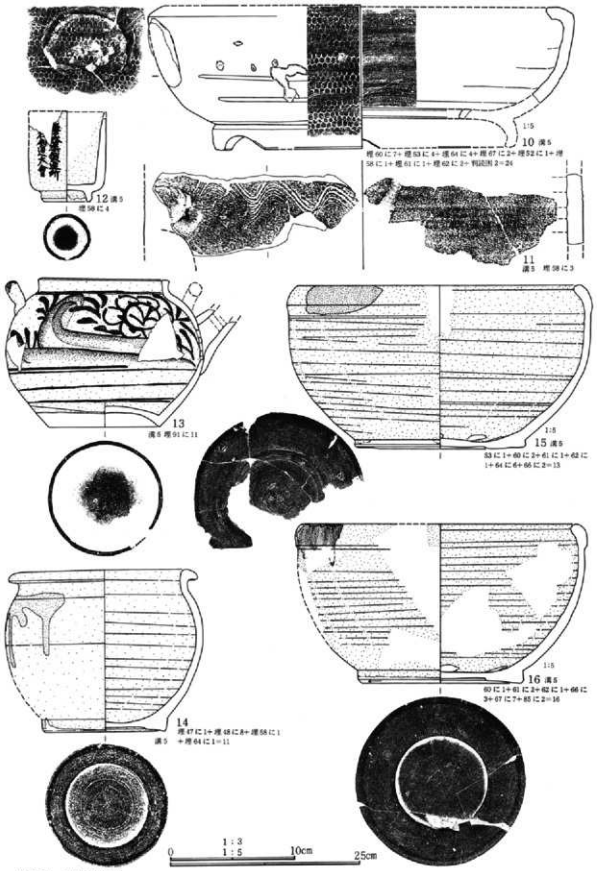
溝8
1、黒　(2.5Y2/1) 粘性あり。軽石様の白色粒子(1 ㎜大)全体に混入も密度低いゝ。
2、黒褐（2.5Y3/1）粘性あり。白色粒子は1 層より少ない。
3、暗オリーブ褐（2.5Y3/3）粘性あり。白色粒子は2 層と同じも明黄褐色土(10YR6/8)微粒子わずかに混入。
4、6 層に同じ。
5、3 層に同じ。明黄褐色土粒子が全体に混入。Ａｓ－Ｂ入る。
6、褐　(7.5YR4/4) 砂質。やや粘性あり。
7、明褐(7.5YR5/6)と8 層の混ざり。(9：1) 砂質。
8、黒褐（2.5YR3/1）砂質。明黄褐色(10YR6/8)ブロック微量見られる。



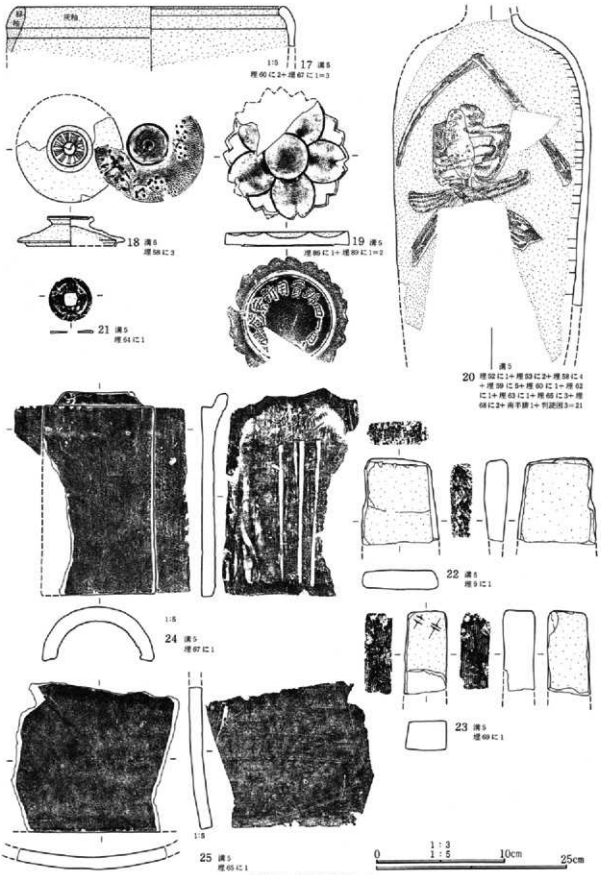
第37図　溝跡遺構図


1 溝1
埋に2
4 溝1
埋に1
5 溝1
埋に6
2 溝1
埋に14+判読困5=19
6 溝1
埋7に1
7 溝1
埋1に2
3 溝2
埋に3
9 溝5
埋96に1+埋67に4+埋68に1=6
8 溝5
埋87に3+埋89に
2+埋91に15=19
1:5
1:3
1:5
0
10cm
25cm

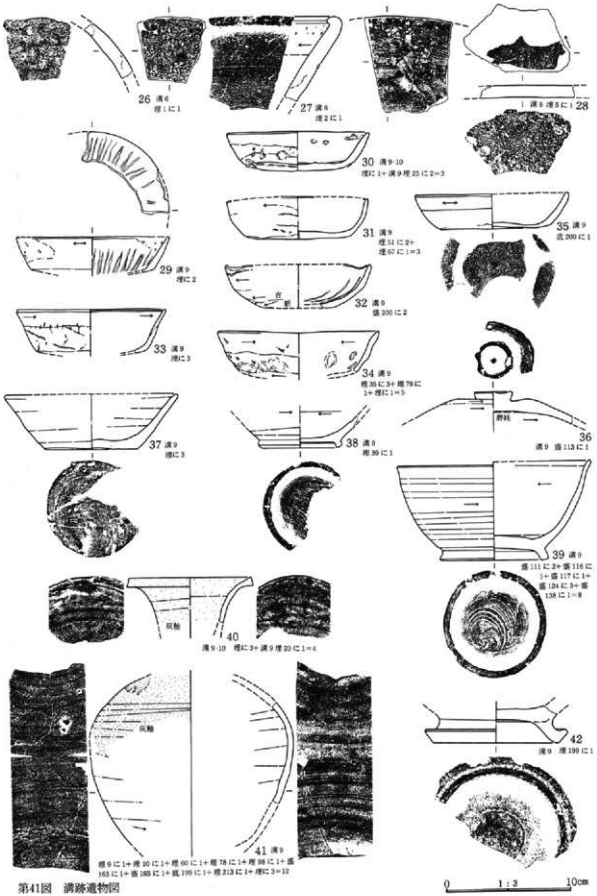
第38図　溝跡遺物図



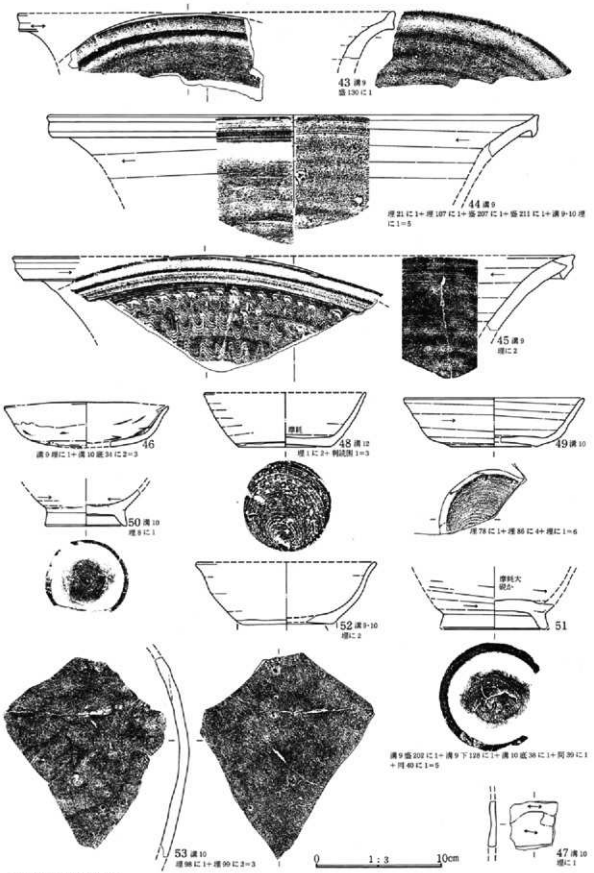
第39図　溝跡遺物図



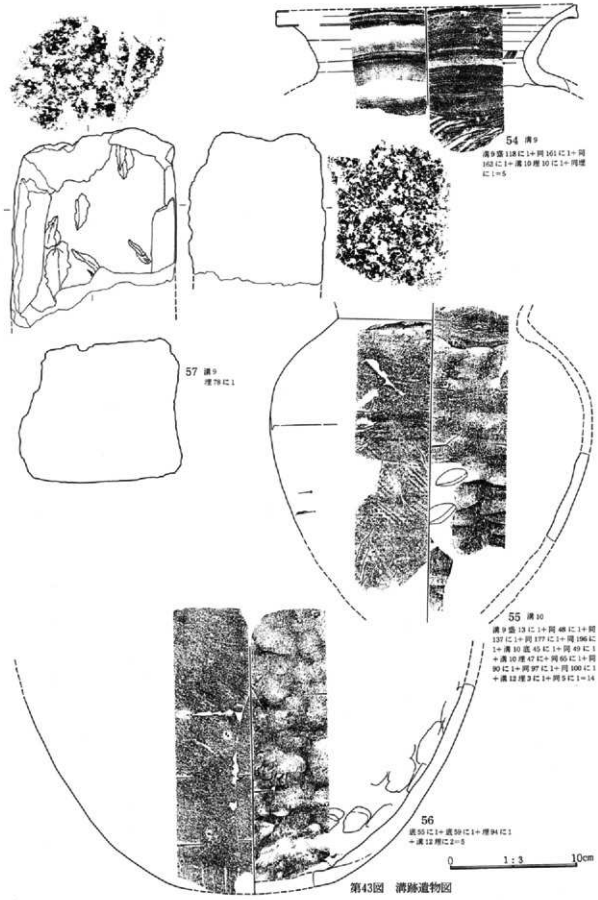
第40図　溝跡遺物図


26 溝6
埋1に1
27 溝6
埋2に1
溝5 埋5に1 28
30 溝9-10
埋に1+溝9埋25に2=3
31 溝9
埋51に2+
埋67に1=3
35 溝9
底200に1
29 溝9
埋に2
32 溝9
盛200に2
33 溝9
埋に3
34 溝9
埋35に3+埋79に
1+埋に1=5
37 溝9
埋に3
38 溝9
埋39に1
36
溝9 盛113に1
39 溝9
盛111に2+盛116に
1+盛117に1+
盛124に3+盛
138に1=8
40
溝9-10 埋に3+溝9埋20に1=4
41 溝9
埋9に1+埋10に1+埋60に1+埋78に1+埋98に1+盛
163に1+盛185に1+底199に1+埋313に1+埋に3=12
42
溝9 埋199に1
0
1:3
10cm

第41図　溝跡遺物図


43 溝9
盛130に1
44 溝9
埋21に1+埋107に1+盛207に1+盛211に1+溝9-10埋に1=5
45 溝9
埋に2
46
溝9埋に1+溝10盛34に2=3
48 溝12
埋1に2+刊底閉1=3
49 溝10
50 溝10
埋8に1
埋78に1+埋86に4+埋に1=6
52 溝9-10
埋に2
51
53 溝10
埋98に1+埋99に3=3
溝9盛202に1+溝9下128に1+溝10底38に1+同39に1+同40に1=5
47 溝10
埋に1
0
1:3
10cm

第42図　溝跡遺物図


54 溝9
溝9盛138に1+同161に1+同162に1+盛10埋10に1+同埋に1=5
57 溝9
埋78に1
55 溝10
溝9盛13に1+同48に1+同137に1+同177に1+同196に1+溝10盛45に1+同49に1+溝10埋47に1+同60に1+同80に1+同97に1+同100に1+溝12埋3に1+同5に1=14
56
盛55に1+盛59に1+埋94に1+溝12埋に2=5
0　1:3　10cm

第43図　溝跡遺物図

第44図　溝跡遺物図

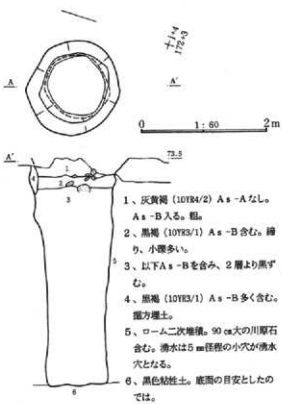
溝跡4・5・6・7、道跡１　（第33・37・38・39・40・41図、図版5・6・139・140・141）

Ｏ東区の南端、Ｏ大区ｆ～ｊ171～173に位置する。発見面標高は、およそ73.8mである。溝跡４は規模120cm、深さ48cm、方向はN13°30W、北下りの走行である。重複は、上面に道跡１の硬化面が乗り、溝６を切る。埋土はA_s－Ａ前代であったが、近世陶磁器の出土は無い。溝跡５は、幅170cm、深さ28cm、方向はN21°W、北下りの走行である。重複は、各溝を切り、周辺で最も新しい。遺物は、第38図８から第40図25までを掲げたが、江戸時代後期から大正頃までの個体があり、火災を思わせる木炭片をまじえる一括廃棄遺物を主とする。溝跡６は幅22＋αcm、深さ33cm、方向はN77°Ｅである。底勾配は調査面積少なく、傾き不明である。埋土はA_s－Ｂ混り土で、第41図１の中世焼締陶器片が直結すれば、中世の構築となる。重複は、溝跡4・5に先行する。溝跡７は、幅750cm、深さ31cm、N89°Wを測る。埋土は第33図注６のとおり、A_s－Ｂの近純層が底面に堆積し、構築時は12世紀に近い、以降と考えられた。方向性のN89°Wは、A_s－Ｂ下発見される県下の平安時代後期の水田区画が真北方向の傾きであることと関連するかもしれない。道跡１は溝跡4・5に挟まれた幅約２m、長24.5mの硬化面で、古い段階は溝５に先行しているので江戸時代の道跡である。

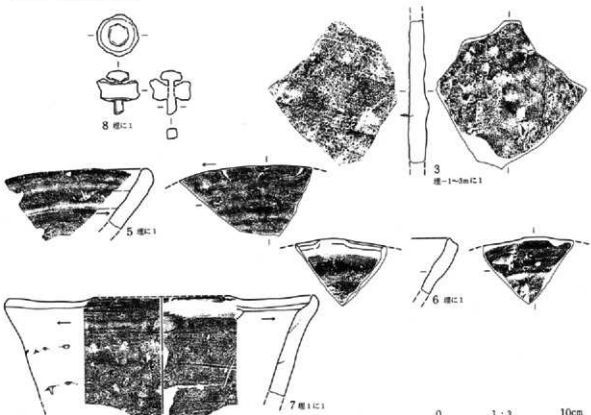
溝跡8・9・10・12　（第34・35・36・37・41・42・43図、図版6・141・142）

Ｏ東区中程に位置する。溝９の規模は、幅230cm、深さ66cm、N56°Wを測る。重複は、溝9・10・12うち最も新しい。その東側立上り外には第34図左の掘上り状態、右の古様状態の東側にはトーンの客土層が存在していた。客土のあり方、横断面の逆台形などの共通性を持つことから、溝跡１の延長上と考えられる。溝跡10・12は同一場所での新・古で名称をあたえた。溝跡10が新しく溝跡12が古い。さらに各々の溝での新・古の改修がなされている。溝跡10の規模は、幅128cm前後、深さ90cm、方向N28°Wを測る。溝跡12は幅112cm前後、深さ60cm、方向はN28°30°Wである。溝底の傾きは南下りに設けられて、最下層に各々、砂質土の堆積があり、流水の段階がある。遺物は、溝10で第42図49の８世紀後半の坏・溝12で第42図48の９世紀初頭頃の坏がある。溝９の遺物時期の主体は、９世紀前後から中頃で、これらの溝跡は、その頃に機能していたのであろう。

溝８は、前述３条の溝の南側に位置し、埋土の一部にA_s－Ｂ混層が入るため、古代溝と様相異なる。規模は幅250cm、深さ20cm、方向は屈曲部のため不明瞭。遺物は微弱であった。



第45図　井戸跡１遺構図



第46図　井戸跡１遺物図

1、黒褐（10YR2/1）やや砂質。サクサクした感じ。
2、丙い黄褐（10YR7/8）ブロック。砂質土。（ローム層）
3、１層と２層の混ざり。５：５

1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ-Ｂ粒・ローム小ブロック含む。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ-Ｂ粒含み、ローム粒少。

1、褐灰（10YR4/1）粘性。軽石はとんど見えない。古代
2、褐灰（10YR4/1）粘性。ローム小ブロック含む。
3、灰黄褐（10YR4/2）粘性。少し漸移的。

1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ-Ｂ入り、少し締る。

1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ-Ｂ入り、少し締る。

1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ-Ｂ・ローム小ブロック入る。
2、黒褐（10YR3/2）ローム小ブロック入り、１層より多い。
3、黄褐（10YR5/6）ロームブロック。

1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ-Ｂ粒・ローム小ブロック含む。やや粗。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ-Ｂ粒・ローム小ブロック含む。少し締る。

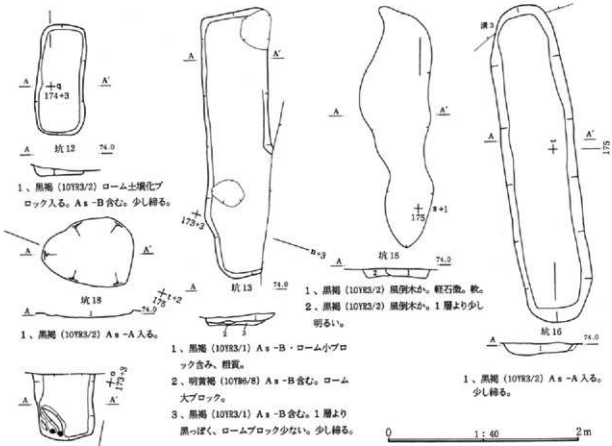
1、黒褐（10YR3/2）ローム小ブロック含まず。Ａｓ-Ｂ粒含む。粗。
2、黒褐（10YR3/2）ローム小ブロック・Ａｓ-Ｂ粒含む。少し締る。

1、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・Ａｓ-Ｂ粒含む。少し締る。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・Ａｓ-Ｂ粒含む。少し締る。

1、にぶい黄褐（10YR4/3）Ａｓ-Ｂ含まず。粗質。漸移層的。
2、灰黄褐（10YR4/2）木炭粒を主とし、ローム層の土壌化。

0　1：40　2m

第47図　土坑遺構図



第48図　土坑遺構図

第49図　土坑遺物図

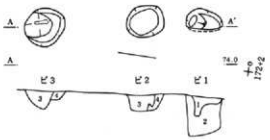
3、井戸跡

井戸跡　（第45・46図、図版7・12）

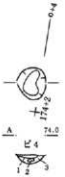
Ｏ東区で発見された井戸跡は、本例のみであった。重複は溝跡７を切って設けられ、ｊ172に位置する。規模は径160cm、深さ360cmを測る。形態は、円形直井筒形である。湧水は、二次堆積ローム層基盤中の小孔から吹出す（写真図版７）地下水と最底部の湧水からと推測された。遺物は、第16図5・7が15世紀初頭頃の軟質陶器であるので、その頃の構築であろう。

4、土　坑　（第47・48・49図、図版8・142）

Ｏ東区の土坑は土坑１の墓坑、芋穴を思わせる隅丸長方形の穴跡、不整形のその他の穴跡に分けられる。坑１は、溝跡12の埋没凹地中に設けられたと考えられ、銭２枚の出土があるため、六道のための銭を考えた時、墓坑の可能性もあり、中世遺構であろう。第47・48図は円形土坑が少ないため、必然的に隅丸長方形の穴跡主体となった。それらは、平面形懸上と、最下面に少し締る理土が存在した時に芋穴を推定したい。坑4・5・6・7・8・9・12・13・16がそうである。構築時期は、浅間山A_s－Ａの流入のある坑16を除き、他はそれ以前であるが、A_s－Ｂ混りのため、中世以降の所産であろう。



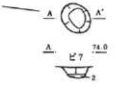
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。Ａｓ－Ａ入らず。木炭粒多い。粗。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。Ａｓ－Ａ入らず。ローム小ブロック含む。少し粗。
3、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ入る。Ａｓ－Ａ入らず。粗。
4、にぶい黄褐（10YR5/3）ロームブロック含む。やや締る。



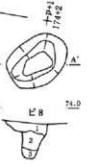
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。
2、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック。
3、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壊化。少し締る。

1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含み、粗。

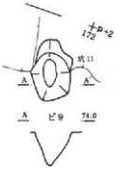
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。やや締る。

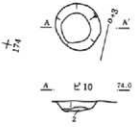


1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。
2、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック・Ａｓ－Ｂ含む。やや締る。

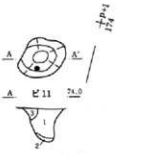


1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。
3、灰黄褐（10YR4/2）ローム土壊化と小ブロック入り、少し締る。

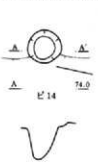


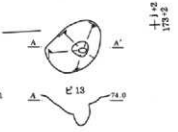


1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。
2、灰黄褐（10YR4/2）Ａｓ－Ｂ含む。ローム小ブロック含み、漸移的。やや締る。



1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。
2、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック土壊化。やや締る。
3、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック土壊化。やや締る。





ピット12
1、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ含む。粗。
2、明黄褐（10YR6/8）１層ブロック含む。

0　1：40　2m

第50図　ピット遺構図

第51図　試掘トレンチの遺物

５、ピット（第50図・図版８）

Ｏ東区で、柱穴・柵跡に直結しそうなピットは、ピット1・2・3について柵列の可能性もあるほか、を除くとまとまりは少なく、第50図は、深さ、整う形態を示した。

第３章　Ｏ西区調査の遺構と遺物

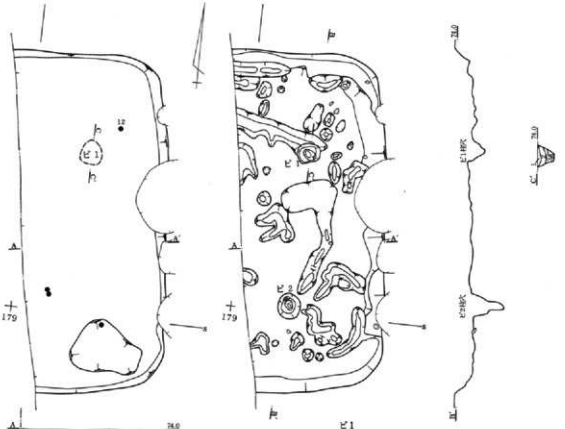
Ｏ西区は、綿貫小林前遺跡中、南寄りＯ大区Ｐ～ｔ177・178、Ｐａ・ｂ177～179にあり、調査前の状況は畑地面上に70cmほど砕石を敷き詰めた盛土がなされていた。畑地面下より約50cm下方を重機で掘り下げたローム層上面を調査面とした。標高74.00m付近である。Ｎ西区北辺の73.9m、より少し高く、Ｏ東区北辺の74.0mと近以の調査高である。調査の結果、住居跡３、溝跡３、井戸跡１、土坑20、ピット４を調査した。当区は、諏訪神社前に位置し、調査前から、関連遺構の存在が想起されていた。層順は、第56図のように、層厚25mの耕作土中にはＡs－Ａが混って入り、同２にＡs－Ｂ混り層となり、約20～25mの層厚で黒～黒褐色が存在していた。ローム層上面を平面確認のため削り込んだ様子では、中・近世遺構は確認し易かったが、古代遺構の平面は当地でも確認困難であった。つまり古代遺構は、古くから上層堆積層全体を失ない、その後、中世を含む以前の段階に耕作等や倒木により古代遺構平面輪郭が不明瞭になったと推測したことは、ここでも共通していた。

遺構の分布と占地性について、住居跡は、古墳時代前期の住居跡2・3、9世紀中頃の住居跡４があり、住居跡４は、Ｏ東区住居１より10m南にあり、最南端にある。前期の２棟は、散在的、粗な状態の２棟である。溝跡は、溝跡32が、く字状に曲ると推測されるＯ東区溝跡1・9・10・12に時期的併存期もあり、溝32の底面の砂質土の存在（第56図土層注５）は、流水時には、前出４溝中に流入したと推測される。溝跡29・30・31は、Ｏ東区の数条からなる溝跡24に平面形状、巾広の底下端となる横断面形状に、埋没土にＡs－Ａを含まない共通性から、延長を考えたい。延長を考える場合、Ｏ東区溝跡１と同区溝跡9・10・12の連続性は、溝底部走行が前溝が東へ、後溝が南へ向う問題が残されるが、おそらく屈曲するＯ大区Ｒ176付近を分水点として各々に流水させるように構築したのではないだろうか、同点は、溝跡32のおよその到達点でもある。Ｏ西の同３溝のうち溝跡30・31は調査区西端で南に向け曲り、小溝ながら区画溝の状況を呈していた。以南の地と、溝跡33と前出３溝の間に、桶埋設の土坑が２群設けられ、南側の一群は土坑19・24・26・27、９m隔てた北側の一群に坑32・33・34がある。南側のそれは溝31で区画されているように見受けられ、井戸跡２も、その一角にある。神社との関連では、北辺の坑36・ピ16・17があり、神社地に続くピット群の南端と考えられた。出土遺物は、溝33にひさげ状土瓶片、坑26埋土に磁器染付小瓶、坑33に磁器染付小瓶、仕上砥石の出土があり、土瓶は、酒・水注に、小瓶は神前花瓶としての意味を、仕上砥石は掘剥・紙切など精仕事の道具として、神社近しの感もしくは、社家など神社に関連した人の生活がこの周辺においてあったと考えられる。その場合、溝33、北壁際の土坑埋土中にはＡs－Ａ混入が認められるので、それらの機能時期は、江戸時代後期であろう。

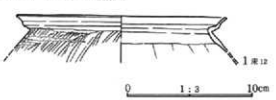
１、住居跡

住居跡２　（第52・53図、図版9・143）

住居跡２は、Ｏ大区ｒ・ｓ178にあり、発見面標高74.0mである。既に上方の大半を削られ、最上面は床至

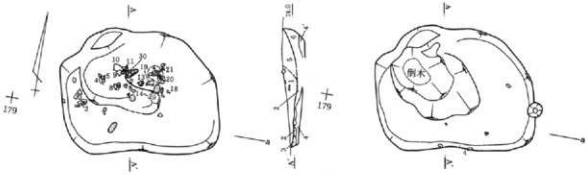


第52図　住居跡２遺構図



第53図　住居跡２遺物図

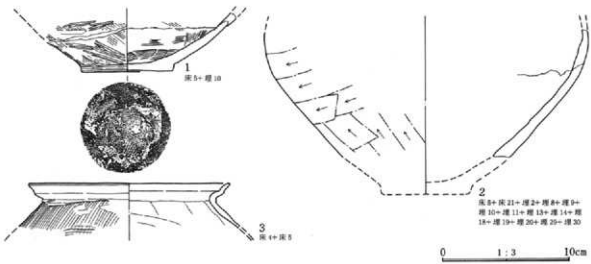
近の状態であった。西半は、調査地外である。発見時に南端に不整な坑38が、さらに東壁に接して北から坑33・32・34が後出して存在していた。床面は部分的には、削平されていたらしく、北半では柱穴であるピ１を調査当初から確認している。形状は隅丸で、規模は南北546cm、東西240＋αcm、Ｎ７°Ｗを測る。埋没土は、第52図横断面Ａ土層注記２が床層で、締りを有していた。掘方面では、さらにピ２も発見され、さらに住居の拡張か前代住居の壁下周溝の一部と、北・東壁下の一部で２段に立ち上るカ所を見い出し、最少限の場合でも拡張がなされている。掘方全体の形状は、当遺跡の古墳時代前期住居跡の場合、壁下を溝状に掘り凹める発達傾向があるが、その傾向は弱く、全体に凹凸観が強かった。施設として柱穴でピ１は長径36cm、深さ35cm、ピ２は長径39cm、深さ66cmを測るが、相互の位置関係は少し歪んでいる。そのほか炉跡・貯蔵穴は確認されず、本炭粒の分布も少ないため、炉は西半の未調査地内に存在の可能性が持たれる。遺物は、第53図１を掲げたほか少ない。同個体は横刷毛目が形骸化ながら見え、古墳時代前期の住居構築と考えてよいであろう。



1、褐灰（10YR4/1）軽石含むが、Ａs-Ｃか。Ｈr-ＦＰらしき大粒少。少し粗。木炭粒なし。焼土粒微。
2、褐灰（10YR4/1）少し還元気味。粘性の床面。硬い。
3、にぶい黄褐（10YR4/3）壁下層か。少し軟。
4、褐　（10YR4/4）遺物出土なし。掘方埋土か。4′は掘方埋土に近似。
5、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム土壙化ブロック入る風倒木か。木炭粒なし。焼土粒微。
6、明黄褐（10YR6/6）ローム土壙化。黒倒木押し上げローム。

0　1：60　2m

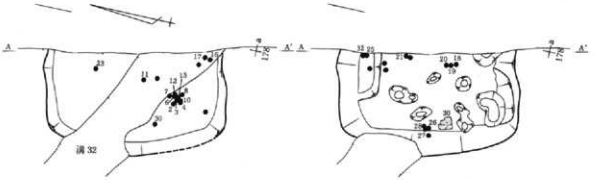
第54図　住居跡３遺構図

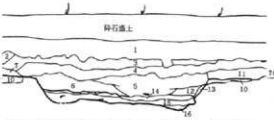


第55図　住居跡３遺物図

住居跡３　（第54・55図、図版9・143）

住居跡３は、Ｏ西区の中央より北寄りに、Ｏ大区Ｒ178～Ｐ大区ａ178、調査面標高74.0mにある。平面形状は住居跡と言い難い規模と形状にあるが、西方に中心を持つ倒木痕が住居跡中央から西方にかけて存在し、しかも住居跡後の倒れのため不明な点多い。その一方で床面として考えうる堅さが第54図注記２のように存在していたため、大半を削平された住居跡痕と考えた。しかし住居に関連の柱穴その他も周囲でも東壁にかかるピット１つを除いて見い出すことはできなかった。図中倒木と記入したカ所は、倒木痕中央ではなく、東端しである。規模は、長径246cm、短径186cm、およその方向性は長軸でＮ81°Ｅを測る。住居跡３について生活関連とすれば出土土器を除くと、埋没土中の土層断面注５のようにわずかながら焼土粒が入る点である。重複は、前述のとおり西接倒木痕が後出してあり、住居跡４が発見面の東端を切って存在していた。出土遺物は、第55図に掲げた３点で、倒木の根痕らしき凹み付近が低かったために片寄って土器の出土がある。同図３は、わずかであるが横刷毛目が入り、古墳時代前期の土器類であり、住居跡も同期である。





1、にぶい黄褐（10YR5/4）As-A含む。粗。砂質。上面表土面。
2、にぶい黄褐（10YR5/4）As-A含まず。粗。砂質。As-B粒含む。
3、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム粒・黒色粒含む。
4、黄褐（10YR5/6）ローム粒含み、ローム層の土壌化を主とする。軽石含む。
5、黄褐（10YR5/6）ローム粒少ない。溝32埋土で下方砂質。
6、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック含み、小礫含む。
7、灰黄褐（10YR4/2）軽石含み、粗。軟。
10、明黄褐（10YR6/8）ローム層。
11、黄褐（10YR5/6）ローム漸移層。
12、黒褐（10YR3/1）やや粗。
13、黄褐（10YR5/6）ローム漸移層に似る。
14、黒褐（10YR3/1）とロームブロック（10YR6/8）全体に少し還元し、粘性。強く締る。床面。
15、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、締る。部分的に床あり。一部掘方埋土。
16、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、締る。掘方埋土。

0　1：60　2m

第56図　住居跡4遺構図

住居跡4　（第56・57図、図版10・143）

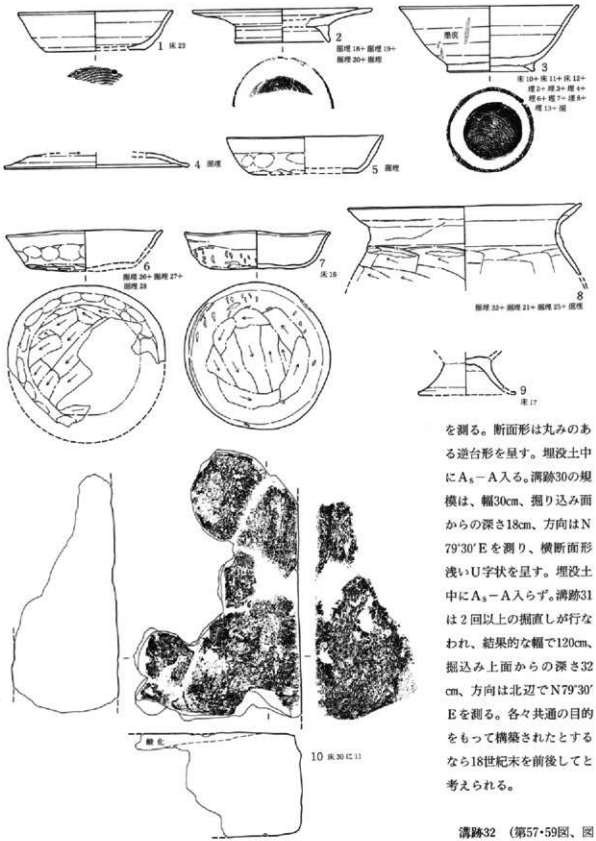
住居跡4は、O西区北側の東壁際にあり、P大区ⅱ178に位置する。調査面高は標高74.0mである。住居跡形状は隅丸で、南北288cm、東西159＋αcmで、方向はおよそN80°Eを測る。重複は、溝跡32が斜めに横切る。埋設土は、調査区東壁面と合せて見ると、覆土にはA_s－Aを含む土層注記1が、注3はA_s－B混りで注11と注7の上面が土層上の発見面となり、調査面とは約20cmの差がある。床層は注14で強く締る。締りの強い床は数少ない。床下層には、注15のとおり前代の床層が部分的に存在する。掘方埋土は、ローム小ブロックを含む。住居跡施設に関し、横断面Aでは壁下に浅い凹みが見られるが、それは掘り方第56図右のとおり、掘り方に設けられた浅い凹みで壁下周溝ではなかった。掘方調査では、浅い小穴が見られたものの施設的な円形の土坑など見い出すことはできなかった。遺物は第57図に示したように、中に軟質凝灰岩による竈石材が存在しているため、未調査地に竈・貯蔵穴が存在すると考えられる。床面に伴なう1は取り上げ番号床面で№23、須恵器坏で9世紀初頭の形状を、7は床№16で土師器坏、9世紀中頃の形状にあり、床出土の後出で完器の7の製作年代を捉えれば9世紀中頃の住居構築となろう。遺物類の中には第57図4のように8世紀代の須恵蓋や1のようにやや遡ぼる土器が含まれるので周辺に同期の生活、ひいては住居跡が周囲の未掘地にあるのかもしれない。

2、溝　跡

溝跡の概要を56頁で触れたが、全体の地勢は西に高く東に低い勾配にあり、基本的に該走行に一致する。

溝跡29・30・31　（第58図、図版10・143）

溝跡3条は第4図のとおり接近してある。溝跡29の規模は幅56cm、掘込上面からの深さ32cm、方向N76°E

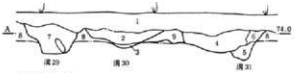


を測る。断面形は丸みのある逆台形を呈す。埋没土中にA_s－A入る。溝跡30の規模は、幅30cm、掘り込み面からの深さ18cm、方向はN79°30′Eを測り、横断面形浅いU字状を呈す。埋没土中にA_s－A入らず。溝跡31は2回以上の掘直しが行なわれ、結果的な幅で120cm、掘込み上面からの深さ32cm、方向は北辺でN79°30′Eを測る。各々共通の目的をもって構築されたとするなら18世紀末を前後してと考えられる。

溝跡32　(第57・59図、図版10・143)

規模は、幅44cm、深さ(第

第57図　住居跡4遺物図



溝29・30・31

1、黒褐（10YR3/2）As-A含み、土圧のためか締る。

2、黒褐（10YR3/2）As-A入らず、やや黒みがかる。粗。

3、黒褐（10YR3/2）As-A入らず、やや黒みがかる。粗。

4、黒褐（10YR3/2）As-A入らず、粗。

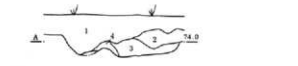
5、黒褐（10YR3/2）As-A入らず、粗。

6、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック入り、ローム土壌化。

7、黒褐（10YR3/2）As-A入る。粗。

8、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム漸移層。軟。

9、黒褐（10YR3/2）As-A入らず、粗。



溝33

1、黒褐（10YR3/2）As-A含み、土圧のためか締る。

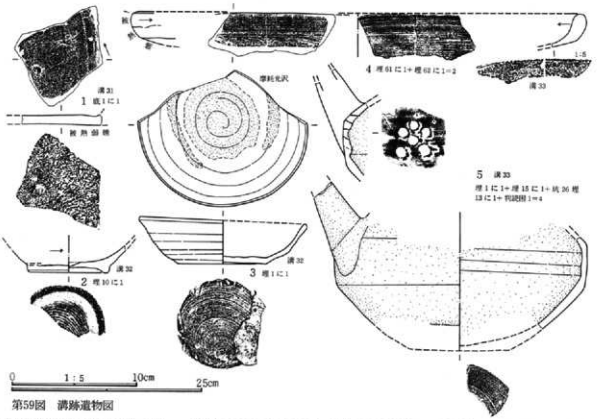
2、黒褐（10YR3/2）As-A入らず、やや黒みがかる。粗。

3、黒褐（10YR3/2）As-A入らず、やや黒みがかる。粗。

4、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム漸移層。軟。

0　1：40　2m

第58図　溝跡遺構図



第59図　溝跡遺物図

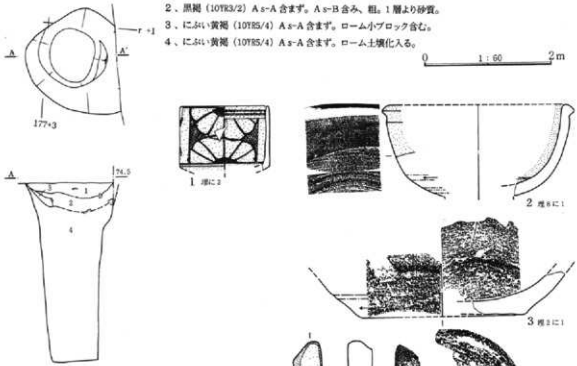
56図Ａ断面）は掘込み面から36cm、方向はN59°30′Wを測る。埋土は同断面注５に砂質土の記入があり、場合によって流水の痕跡が見られる。溝底には鋤込み刃跡を残しながら東南下りに、幅広となりながら向う。重複は、住居跡４を切って存在する。出土遺物に第59図2・3があり、うち２が後出し、10世紀前半頃の機能時期を考えることができる。

溝跡33　（第58・59図、図版143）

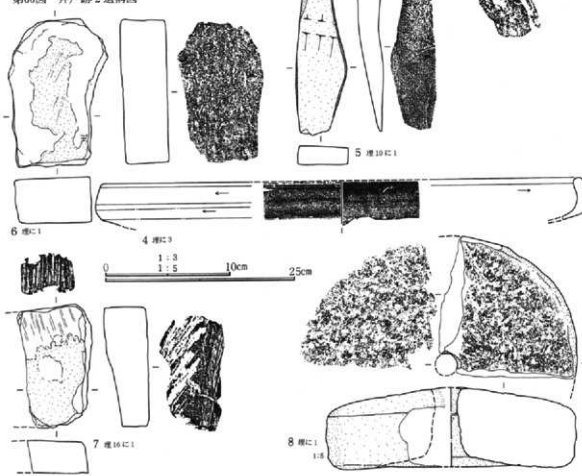
溝跡33の規模は、２回以上の掘直し結果で捉え、幅124cm、掘込面からの深さ26cm、方向はN88°30′Wを測る。埋土は、第58図注記３の旧溝側にA_s－Ａの混入はなく、新溝側の注記１で混入を認めるため、機能時期は、天明三年を前後してと考えられる。出土遺物は、第59図５のひさげ状土瓶の出土がある。同個体は上等な黒釉で、量産された益子焼土瓶などと趣きを異にする。

1、黒褐（10YR3/2）As-A含まず。As-B含み、粗。
2、黒褐（10YR3/2）As-A含まず。As-B含み、粗。1層より砂質。
3、にぶい黄褐（10YR5/4）As-A含まず。ローム小ブロック含む。
4、にぶい黄褐（10YR5/4）As-A含まず。ローム土壌化入る。

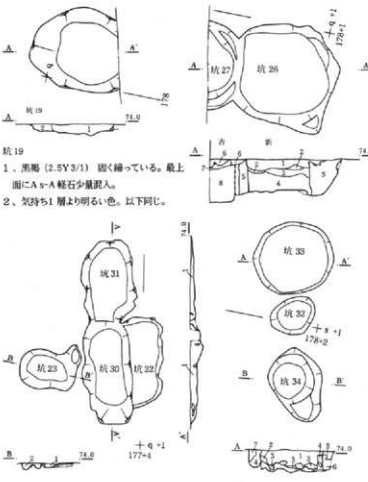
0　1:60　2m



第60図　井戸跡2遺構図



第61図　井戸跡2遺物図



坑 19

1、黒褐（2.5Y 3/1）固く締っている。最上面にＡs-Ａ軽石少量混入。

2、気持ち1層より明るい色。以下同じ。

坑 23

1、暗オリーブ褐（2.5Y 3/3）Ａs-Ａ軽石微量混入。やや締っている。

2、ローム層と1層のブレンド。

坑 30・31

1、暗褐（10YR3/3）固く締っている。Ａs-Ａ軽石全体に多量混入。

坑 26・27

1、灰黄褐（10YR4/2）Ａs-Ａ含む。砂質。やや締る。

2、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックを主とする。

3、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック含まず。粗質。

4、明黄褐（10YR4/2）ロームブロックわずかに含み、砂質。自然堆積か。水平に土が埋没。

5、黄橙（10YR7/6）ロームブロックを主とする築土。締る。

6、灰黄褐（10YR4/2）Ａs-Ａ含む。砂質。やや締る。

7、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多い。

8、灰黄褐（10YR4/2）砂質。自然堆積か。水平に土が埋没。

坑 33

1、灰黄褐（10YR4/2）Ａs-Ａ含む。粗質。

2、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック多い。

3、灰黄褐（10YR4/2）砂質。自然堆積か。

4、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックを主とする築土。

5、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移。ソフト。

6、明黄褐（10YR6/8）ローム層。

7、灰黄褐（10YR4/2）住居埋土。Ａs-Ａ入らず。

坑 34

1、灰黄褐（10YR4/2）Ａs-Ａ含む。粗質。

4、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックを主とする築土。

5、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移。ソフト。

6、明黄褐（10YR6/8）ローム層。

8、褐灰（10YR5/8）ローム小ブロック含む。住居埋土。

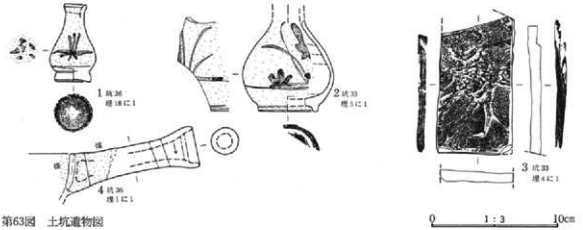
坑 37

1、黒褐（10YR3/2）Ａs-Ａ含む。砂質。

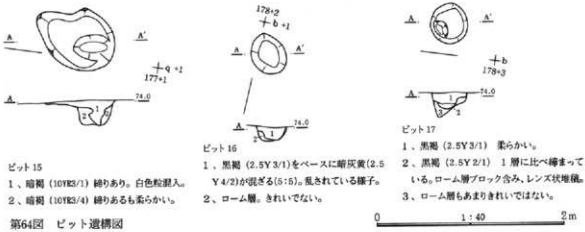
2、暗褐（10YR3/3）Ａs-Ａ含む。少し酸化気味。

3、黒（10YR2/2）Ａs-Ａ含まず。

第62図　土坑遺構図



第63図　土坑遺物図



ピット15
1、暗褐（10YR3/1）締りあり。白色粒混入。
2、暗褐（10YR3/4）締りあるも柔らかい。

ピット16
1、黒褐（2.5Y 3/1）をベースに暗灰黄（2.5Y 4/2）が混ざる（5:5）。乱されている様子。
2、ローム層。きれいでない。

ピット17
1、黒褐（2.5Y 3/1）柔らかい。
2、黒褐（2.5Y 2/1）1層に比べ締まっている。ローム層ブロック含み、レンズ状堆積。
3、ローム層もあまりきれいではない。

第64図　ピット遺構図

3、井戸跡

井戸跡2　（第60・61図、図版10・143）

位置は、O大区r177にあり、規模は、径163cm、深さは調査面から284cmを測る、埋没土は、A_s－Aを含まず、A_s－Bを混える粗質土であった。形態は、円形の直井筒形であった。湧水は、調査時の10・11月頃で第60図矢印位置で、自然湧水と下方にある小孔からの吹出しによる。出土遺物は、第61図のとおり、18世紀後半の磁器小碗1、焙烙4を伴なう。さらに精仕上げを行なう仕上砥6・7。中砥の刃付砥5などの外、鍛白下白8の出土もあった。A_s－A前代の遺物群である。

4、土　坑（第62・63図、写真図版11・144）

土坑の存在概要は56頁で触れた。桶埋設の土坑は、第62図のうち明確な例は坑26・27・28・33・34であり、ともに桶跡の埋土と、裏込め貼土の存在に共通性がある。隅丸長方形土坑は、坑22・30・31に見られるが芋穴と考えた場合、壁面が急でない点は異なるため、別機能かもしれない。

5、ピット（第64図、図版11）

ピットは、柱穴・棚列柱穴と認められそうな穴跡は、ピ16・17と可能性のありそうなピ15のみであった。全体的に存在が薄い調査区であった。

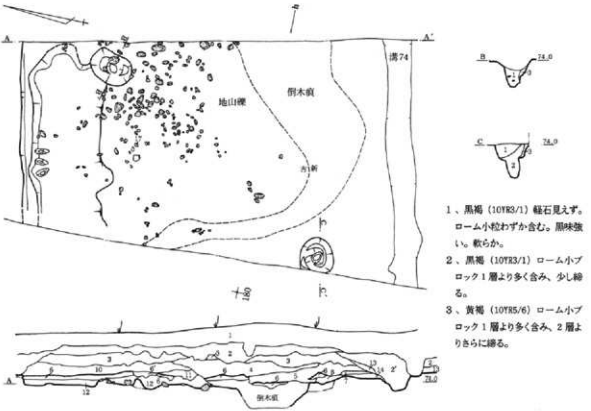
第4章　P西区調査の遺構と遺物

P西区は、P大区c～j178・179に位置し、調査面標面は、73.8～74.0cmである。調査前は、gライン以北に畑地が、以南に諏訪神社社殿と社地が存在していた。社地は盛土がなされているのか周囲より30～40m高所にあった。調査の結果、同区では、住居跡3、溝跡5、土坑7、ピット16（うち棚列2条）、神社最終建物跡（コンクリート土台）、最終礎石建物跡、礎石建物下面、A_s－B混上面・A_s－B混下面と地業下面を調査した。

1、住居跡

住居跡67　（第65・66図、図版12・144）

住居跡67は、P大区g・h179に位置する。第65図は、掘方図である。発見面は、A_s－B混りの土層を除去

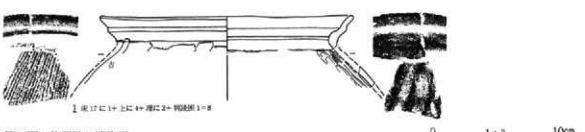


１、黒褐（10YR3/1）軽石見えず。ローム小粒わずか含む。黒味強い。軟らか。
２、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック１層より多く含み、少し締る。
３、黄褐（10YR5/6）ローム小ブロック１層より多く含み、２層よりきらに締る。

１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ含む。粗。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ含む。粗。２′は差なし。
３、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含む。粗。
４、黒褐（10YR3/1）わずか焼土粒含む。
５、黒褐（10YR3/1）４層より少し黒ずむ。
６、黒褐（10YR3/1）床状に少し締る。少し灰色還元がかる。６′は少し軟らか。
７、黒褐（10YR2/1）床状に少し締る。少し灰色還元がかる。
８、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移。軟らか。
10、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含む。粗。
11、黒褐（10YR3/1）ローム粒わずか含み、軟らか。
12、褐　（10YR4/4）ローム漸移的。軟らか。
13、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含む。粗。
14、灰黄褐（10YR4/2）Ａs-Ｂ含む。粗。地山ローム小粒入る。

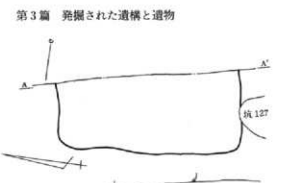
0　1：60　2m

第65図　住居跡67遺構図



第66図　住居跡67遺物図

して の面であったか、その面での床層は痕跡で同壁の大半は失なわれていた。しかも前代には倒木があり、二次堆積ローム中の礫を浮上らせ、掘方底面確認も困難を伴なった。結果的に調査できたのは北側周溝の一部と、北東・南西柱穴で、南壁は、後世の小溝により削られていた。規模は東西で378＋αcm、南北で600＋αcmを、北東柱穴は径72cm、深さ48cm、南面柱穴は径60cm、深54cm、北壁の方向は東から北側へ23°30′を測る。施設、その他は不明であった。遺物は第66図に見る古墳時代前期の台付甕が口縁部¼以上の個体として、接合可能状態で出土しているので、住居の生活時期直結と考えてよいであろう。



１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａ含む。近・現代土。粗。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含み、Ａs-Ａ含まず。
４、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含まず、軟らか。
５、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含まず、少し締り、還元気味。残存床か。
６、褐　（10YR4/6）ロームブロック多く含む圧力埋土。
７、灰黒褐（10YR4/2）ローム漸移状。軟らか。

0　1：60　2m

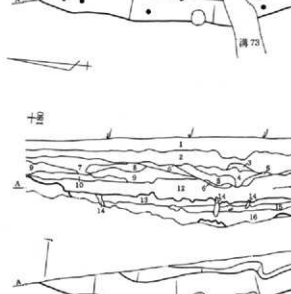
第67図　住居跡68遺構図

住居跡68　（第67図、図版68）

位置はＰ大区ｄ178に位置し、発見面は、床層中と考えられる状態であった。平面隅丸で住居跡級の大きさであったので住居跡とした。しかし明確な根拠がある訳ではない。規模は南北288＋αcm、東西126＋αcm、方向は西壁でＮ６°Ｗを測る。出土遺物は極めて少なかったが、掘込みがシャープなので、人為により、A_s－Ｂ前代に設けられた遺構であろう。

住居跡68　（第68図、図版12）

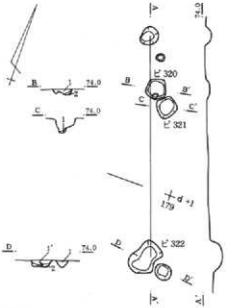
位置はＰ大区ｈｉ179にあり、発見面標高は74.1m。埋土は、現道長瀞線際のかつて地境があったらしいことから層順複雑である。さらに図Ａ断面注13に流水の痕跡があり、16を床層と考えたが、硬化せず軟らかであり、住居跡として不明確であった。結果的に最低部は調査地際で困難も伴ない結論を出せないままとなってしまった。遺物は上層である。



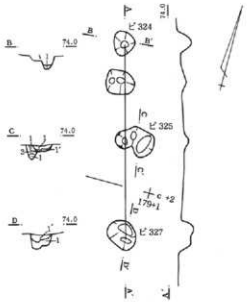
１、黒褐（10YR3/1）現耕土。
２、黒褐（10YR3/1）現耕土下。Ａs-Ａ含む。粗。
３、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａを多く含む。
４、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａを主体とする。しかしＡs-Ａは塊状に分布。灰掻きか。
５、黒褐（10YR3/1）土壙中に多くＡs-Ａ含み、粗。
６、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ａを主とする。降下時に開連か。６′は層下面にＡs-Ａ主体層がわずか堆積。
７、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂを含み、粗。
８、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂを含み、やや黒ずむ。粗。
９、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂを含み、少し茶がかる。軟。
10、黒褐（10YR3/1）Ａs-Ｂ含まない。わずか焼土粒入る。軟。
11、黒褐（10YR3/1）10層と同質。
12、黒褐（10YR3/1）焼土粒含み、下層には水性堆積（13層）シルト質の二次堆積がうすい縞をなし、部分的に水平堆積。
13、にぶい黄褐（10YR7/4）水性堆積のシルト～粗砂質。
14、黒褐（10YR3/1）根瘤か。軟らか。
15、黒褐（10YR3/1）還元気味。粘性。住居の床にしては軟らか。
16、灰黄褐（10YR5/2）地山のロームブロック多く入る。粘性。上面は床らしいが、硬化せず。
17、褐　（10YR4/4）ローム漸移。軟らか。

0　1：60　2m

第68図　住居跡69遺構図



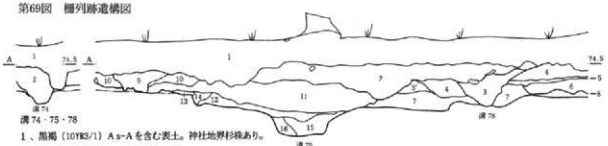
８号柵列ピット320・322
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-B含むらしい。ローム小ブロック。1′は軟らか。締り強い。
２、黄褐（10YR5/6）ロームブロックを主とする。



11号柵列ピット324・325・327
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-B含むらしい。ローム小ブロック。1′は軟らかぶ。締り強いぶ。
２、黄褐（10YR5/6）ロームブロックを主とする。

0　1：60　2m

第69図　柵列跡遺構図



溝74・75・78
１、黒褐（10YR3/1）Ａs-Aを含む表土。神社地界杉株あり。
２、黒褐（10YR3/1）Ａs-A見えず。粗。
３、黒褐（10YR3/1）Ａs-A見えず。粗。2～3層境の石は神社基壇用材か。
４、黒褐（10YR3/1）Ａs-A見えず。粗。Ａs-B粒含み、黒ずむ。
５、黒褐（10YR3/1）Ａs-A見えず。密。締る硬化面。黒ずむ。4層と同じ。5′は下層軟らか。
６、黒褐（10YR3/1）Ａs-A見えず。粗。Ａs-B粒含み、黒ずむ。4層と同じ。
７、黒褐（10YR3/1）Ａs-Bを含み、黄味がかる。7′はローム小ブロック多い。
８、褐　（10YR4/6）ローム漸移。軟らかぶ。
９、黒褐（10YR3/1）粗。Ａs-A入らず。
10、黒褐（10YR3/1）Ａs-B粒含み、粗。
11、黒褐（10YR3/1）Ａs-B粒含み、粗。
12、黒褐（10YR3/1）Ａs-B粒含み、粗。11層より少し黒ずむ。
13、黄褐（10YR5/8）ロームブロックを主とする。
14、黒褐（10YR3/1）Ａs-B含み、黒ずむ。粗。
15、黒褐（10YR3/1）Ａs-B含み、黒ずむ。粗。
16、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含む。少し密。

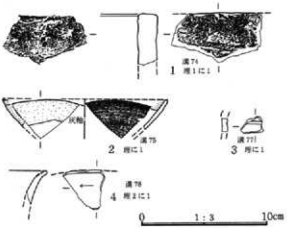
0　1：60　2m

第70図　溝跡遺構図

２、柵列とピット

柵列8・11　（第69図・図版14）

Ｐ西区の協端で発見された。柵列８は、北より無番＋ピ320＋ピ322（＋ピ329が加わる可能性もある）と変則柱間で並び全長350（660）cm、方向N20°Wを測る。柵列11はピ324＋ピ325＋ピ327（＋未調査地）と並び全長500cm＋α、方向N16°Wを測る。両列ともＡs－Ａは混入せず、以前の構築となる。周辺にはピットが小群をなし、神社地前面に相当し、Ａs－Ｂを含むように見えたので神社関連の遺構かもしれない。



第71図　溝跡遺物図

３、溝　跡

溝跡は、最終的な神社地界の前後に位置する溝跡74、江戸時代中期頃の地界に相当していると考えられる溝跡76・78と両溝付近の掘返し溝、社殿基壇回りに用いたとみられる粗粒安山岩用材を含む溝75などが存在していた。このうち最も規模の大きな溝跡76は、東隣接のＰ東区で類以形状の溝として、その延長上に溝63（第５図）が存在している。なお第４図ｃ178の半円状の溝は、大柊の抜取り穴溝である。

溝跡74・75・76・78　（第4・70・71図、図版13）

溝跡74の規模は、幅48cm、深さ10cm、方向Ｎ70°Ｅを、埋没上下方に、A_s－Ａ混入はないが第71図の近世軟質陶器片の出土がある。溝跡75は、幅41cm、深さ10cm、方向Ｎ78°31′Ｅを、埋没土にA_s－Ａは見えないが第71図１の灰釉皿が遺物として新しいが、埋没土はA_s－Ｂを含んでいるため古代灰釉皿以降で、状況的には、神社関連で、江戸時代の構築であろう。溝跡78の規模は、掘込み面上で幅126cm、深さ60cm、Ｎ78°Ｅを測る。A_s－Ａは見えないが、土層断面Ａの注記2・3境にある粗粒安山岩は、基壇化粧材に見えた。溝跡76の規模は幅142cm、掘込み面からの深さ110cm、方向Ｎ76°30′Ｅを測る。

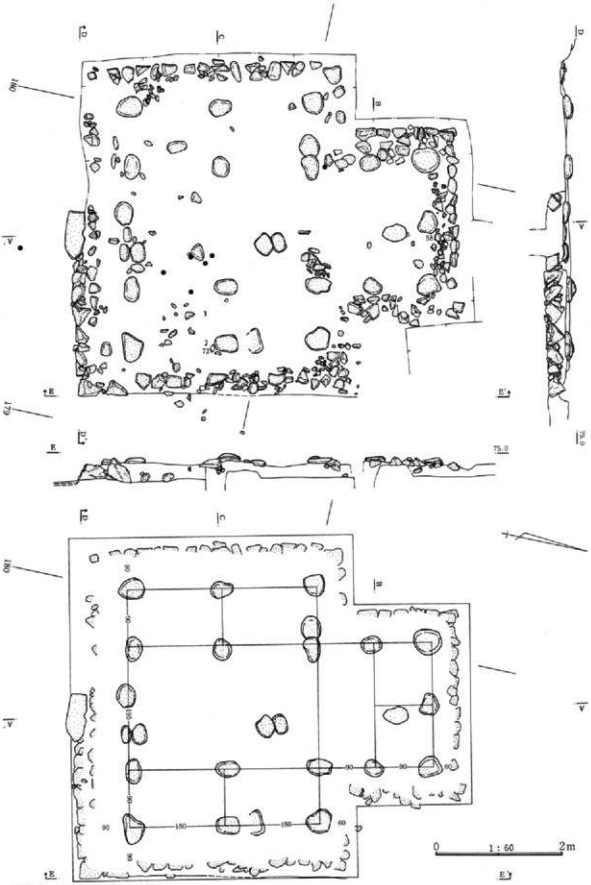
４、神社遺構

神社遺構は、調査直前までＰ西区南半に３分２程社殿を調査区内に入った諏訪神社社殿が存在していた。社殿は本殿と拝殿に分かれ（図版13）、南向であった。拝殿正面の柱材には、江戸時代後期頃の彫物を有する古材が生されて残り、屋根は寄棟であった。数度の改修をへて今日に至っているらしく、基礎は土台コンクリートであり補助的に20cm大河原石数個が礎石として用いられていた（図版13－３段右）。発掘前に社殿は解体廃棄されたが、その時点での印象は、旧材について相当に古い材が骨組をなす主材の多くに使用され、内部の柱にも彫物がなされていた。社地南側には石鳥居、その東側に100年以上に思える老葉となったヒイラギの老木が、北側にはムクの大木が存在していた。新神社殿は、同じ神社地内西側に新築された。大ヒイラギは、引取られ高崎市上滝町の樹木愛護の篤志家により移植された。なお社地には桟瓦が散乱していたので瓦葺社殿の時期があったのかもしれない。

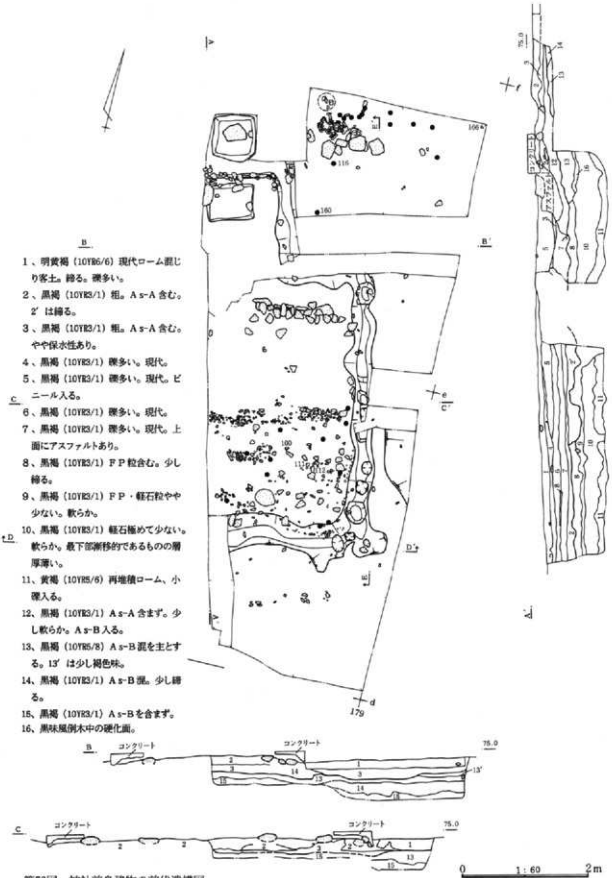
社地は周囲より30～40cm高所にあり、調査では厚い黒色土であったが、下方のA_s－Ｂの位置から見ると盛土であったらしい。

前身建物跡　（第72図、図版13）

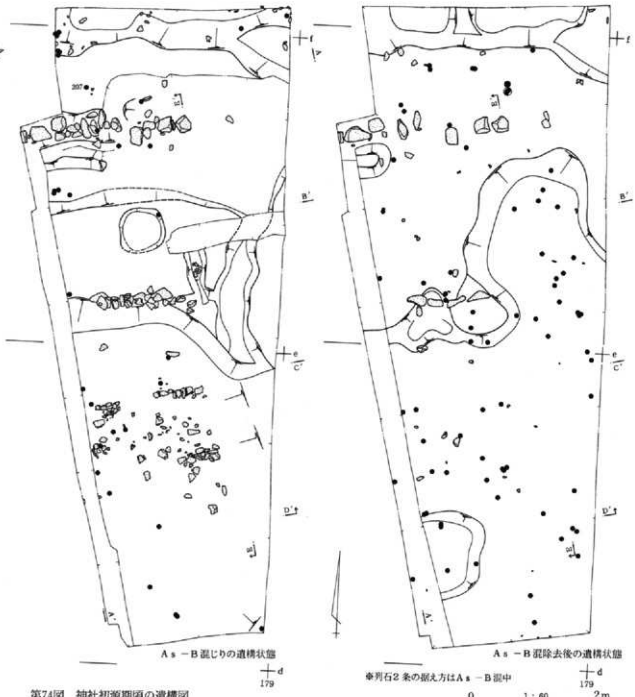
現存の建物を解体して現われた状況が図版13－３段右の状態であった。安山岩切石土台には鉄筋が埋込まで社殿補強となっていた。写真左側コンクリート上に拝殿、向拝時の台石が、中央上下に20cm大の礎石が３個見え、右が本殿側である。続いてコンクリートの除去が行なわれ、現れたのが図版13－４左右、第72図の状態であった。当初見えていた３個の礎石は最終建物の礎石らしく、数cmの砂質土敷らしい土壌を写真清掃のため除去したところ下方から前身建物礎石が、旧状に近い形で発見された。側柱外と基壇上縁との間には、90・60cmの平坦面が取付き、基壇外面は、粗粒安山岩を主材とした捻り積（ねじ）であった。捻り積みの普及は明治



第72図　神社前身建物跡遺構図



第73図　神社前身建物の前代遺構図

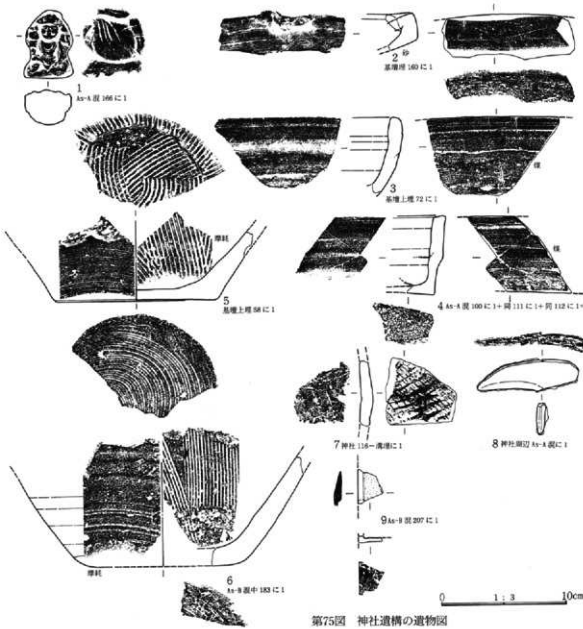


第74図　神社初源期頃の遺構図

時代以降である。この建物が旧材の元となっていた建物らしい。

神社前身建物の前代　（第73・75図、図版74）

前身建物跡の上面から礎石下までA_s－Ａを含む黒色土であった（図版142段左）、A_s－Ａを含む土壌を取除いた状態つまりA_s－Ｂ混りの上面であり、第73図がその図化である。この面には、残存基壇の最終状態、その内部には東西方向に並ぶ石組２条を認め、基壇外北北東に集石が存在していた。２条の集石が前代建物の土台受けであるのか否について、北列の石組上面が平らに揃えられていた訳ではなく、明瞭にできなかった。なお第73図中の基壇回りの囲繞溝（溝跡66）は石積み化粧の据え方の溝で、A_s－Ａ混りであるので前身の段



第75図　神社遺構の遺物図

階に直結しそうにない。後の拝殿直下には、小鞴が多く、建築物内と考えるより、開放的な状態を思わせる。その際、床板張でない建築物内としての可能性はあっても良いが床状の硬化面は認め難かった。この面に関連しての遺物は、第75図４があり、18世紀中頃の小泉焼を思わせる軟質陶器製焙烙である。

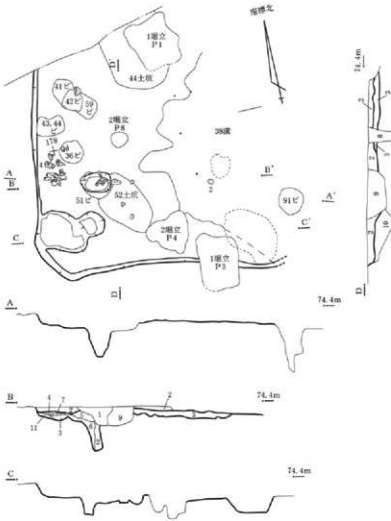
神社初源期頃　（第74・75図、図版14）

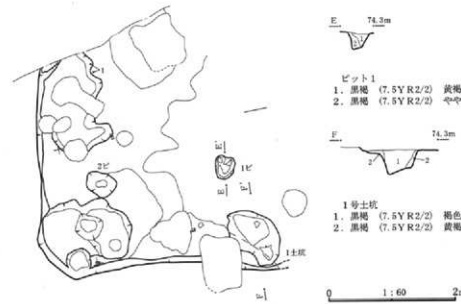
第74図は、A_s－Ｂ混り土中の状態（左）、A_s－Ｂ混り土を除去した状態（右）である。A_s－Ｂ混上面（A_s－Ａ泥下面）は石組の上面が顔を出していたのであり、実際には、A_s－Ｂ混り最下面に据え方基部が存在していた場合が多いことがこの調査で明らかとなった。つまり本殿北東隅の集石は、東西に並ぶ石組の上面であり、本殿側前面の石組も掘え方は、A_s－Ｂ混下面にあった。A_s－Ｂ混中の調査段階としてＥ179の中途を東西に幅78cmの溝がｅ＋１ｍ以南の神社の前庭様広がりが南北で530cm＋α、東西で270cm＋αで見ることができ、A_s－Ｂ混り下面では、溝入状の掘り込みが最終状態として認められた。この面の遺物は古代遺物である。

第５章　Ｐ東区調査の遺構と遺物

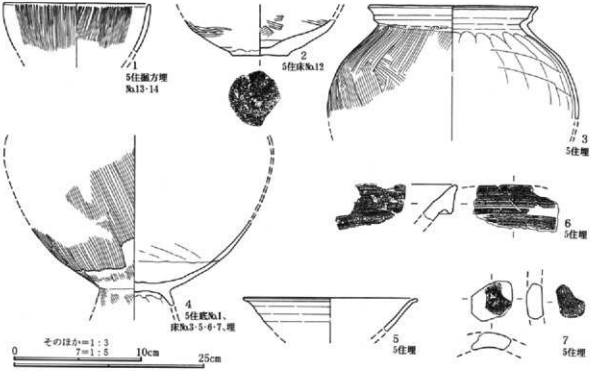
Ｐ東区は、当道跡こ南半北寄に存在する。以南が道路拡幅を兼ねる狭いトレンチ様の調査であったがＰ東区から以北は取付きから新設本線部に相当するため調査地幅が急に広がる。Ｐ東区は、Ｐ大区ｅ～ｔ174～1790からＱ大区ａ～ｅ173～178に位置する。調査面標高は、74.0～74.4ｍで、調査地長約95ｍに対し40㎝差である。調査前の土地利用は、畑地で、昭和54年測量の第２図の状況と格子目状に改良整備された農業用道路位置を除くと地境の大幅な変更はＰ東区については少なかった。地勢は南東下で、表土・耕作土・耕作土下の黒色土の厚さは第196・198のように、北壁付近で耕作土は20㎝前後、直下のＡs－Ｂを含む黒色土も20㎝前後で、二次堆積のローム層上面まで達する。南壁付近で両層合せて70㎝余りに達し、南側につれ黒色土は層厚となる。調査は当初20ｍ毎に１ｍ幅のトレンチを設けて試掘を行なった。その結果、Ｐ・Ｑ区では住居跡の集密度は顕著なもののＰ東区での密度は薄いこと、層厚は南に下るにしたがい深くなることなどがある程度予測できた。それを踏まえ表土層と、直下のＡs－Ｂを含む黒色土を重機で除去した。

調査の結果、遺構数は住居跡46、溝跡32、土坑57、ピット508、井戸跡６、火葬跡土坑２、掘立柱建物跡16、集石遺構３、柵列６を調査した。住居跡は古墳時代前期住居跡がＰ大区ｋ175から以北にかけ散在分布し、古墳時代中期・後期の住居跡は皆無か薄く、奈良時代住居跡が散在的に４カ所、平安時代住居跡はＱ大区ｎライン以南は粗な数であったが以北につれ序々に実数を増し、濃い状態となる。掘立柱建物跡は、大形柱穴で構成された大形建物の一群と小形柱穴で構成された小形建物の一群、中世建物跡に分けられ、前例は、奈良時代の掘立柱建物８棟と柵列１条である。後者は埋土に火山軽石を含む場合、見えない場合とがあり、見えない柱穴の場合は、古墳時代前期まで遡ることになるかもしれない掘立柱建物跡・柵列も含まれる。前者の大形柱穴からなる掘立柱建物跡は、西壁以西に延びる掘立柱建物跡10・9・15のうち２棟が棟筋を揃え、掘立15はそれに準じ、３棟１列並びとなっていっている。その東側には、梁行規模の異なる掘立柱建物跡13・14の西側柱筋が揃い、列を成している。さらにその東側には、掘立柱建物11・12が、柵列９と合せ以東に延びそうな形で、合計３列目の配置構成となっている。掘立柱建物15・9・10と同13・14との間には、6.9ｍの幅で通路的空間が生じている。この掘立柱建物群の北方37.5ｍの位置には、桁行１間の掘立柱建物跡１が存在し、桁行１間であることは隣接地調査で延長上に柱穴は存在しなかったので、桁行１間が四脚門であることを確認している。門と南側建物群の間は37.5ｍ間の空白が生じているが柵列９が柱穴形態の類以性から共存が考えられ、Ｑ大区ｃ174に位置する住居跡42ほか３棟の８世紀の住居跡が供存の時期もあったと考えられる。そうした小数の供存遺構が存在していたとしてもＰ東区掘立柱建物群の北側に広場的空間が存在したことに変りない。ピット群のうち同建物群付近に存在したピットは、まとめることができなかったものの大形柱穴が含まれ、同期・関連遺構であった可能性が持たれる。中世に関しては、Ｑ大区ｂライン以北を東西に、中途で折れを持つ大溝が、かつての曲師（まがし）と小林に広がる中世屋敷の集合体、外郭として可能性が持たれ、その郭内に掘立柱建物跡２などＱ区にも広がる中世遺構が存在したとここでは考えておきたい。仮想定の理由は、現在の曲師には、中世屋敷の外周溝を思わせる狭長な耕地や、屋敷溝が池として存在しているが環濠とするには未発達であり、今回の調査地区はいずれも屋敷と外郭大溝との間に狭まれた屋敷外空間と推定されるためである。この空間外、Ｐ東区ではＱ大区ｃライン以南には短少ながら芋穴を推測させる隅丸長方形土坑が９以上発見され、備蓄的畑地帯のようである。





第76図　住居跡5遺構図



第77図　住居跡５遺物図

１、住居跡

住居跡５　（第76・77、図版17・145）

位置はＱ大区ｃ・ｄ177・178にあり、調査面標高は74.3m付近である。重復は掘立建柱建物跡1・2の柱穴他、後出主体の柱穴群が重なる。規模は、南北330＋αcm、東西360＋αcm、南壁方向Ｎ12°Ｅである。柱穴にピ1・2もあり、坑１に貯蔵穴の可能性もある。遺物は古墳時代前期の土器が多く、住居に直接関連か。

住居跡６　（第78・79図、図版17・145）

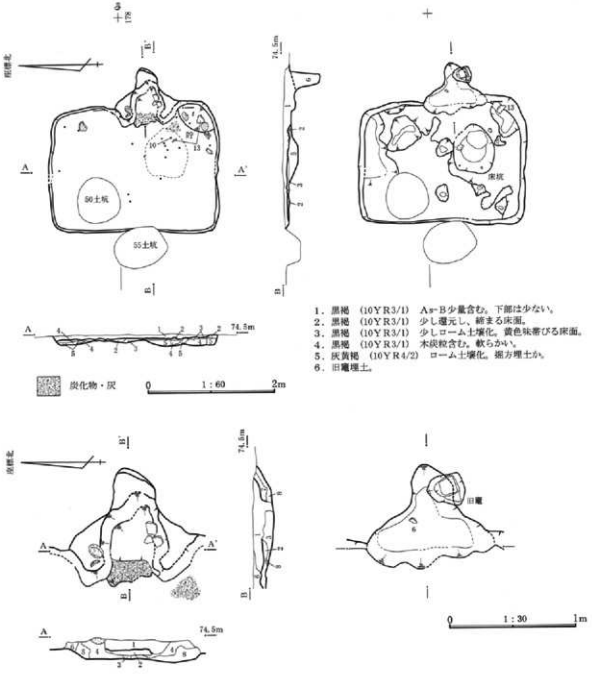
位置はＰ・Ｑ大区境ｔ・ａ177・178にあり、調査面標高74.5m付近。重複に後出土坑50がある。規模は、長軸270cm、短軸201cm、方向は長軸でＮ2°30′Ｗ。施設は東壁に竈・貯蔵穴・床下土坑がある。床層までA₅－B混り層は及ぶ。遺物は、第79図のとおり、10世紀前半頃の土器類を中心に瓦もある。住居跡も同期である。

住居跡７　（第80・81図、図版18・146）

位置はＰ・Ｑ大区境ｔ・ａ176・177にある。調査面は標高74.5m付近。重複は、北壁側を溝跡36が北寄りを小土坑が切る。規模は長軸305＋αcm、短軸268cm、方向は長軸でＮ2°30′Ｗである。施設は東壁に竈・貯蔵穴がある。遺物は第81図のとおり8・9を除き９世紀終末の土器が多い。住居跡も同期である。

住居跡８　（第82・83図、図版18・146）

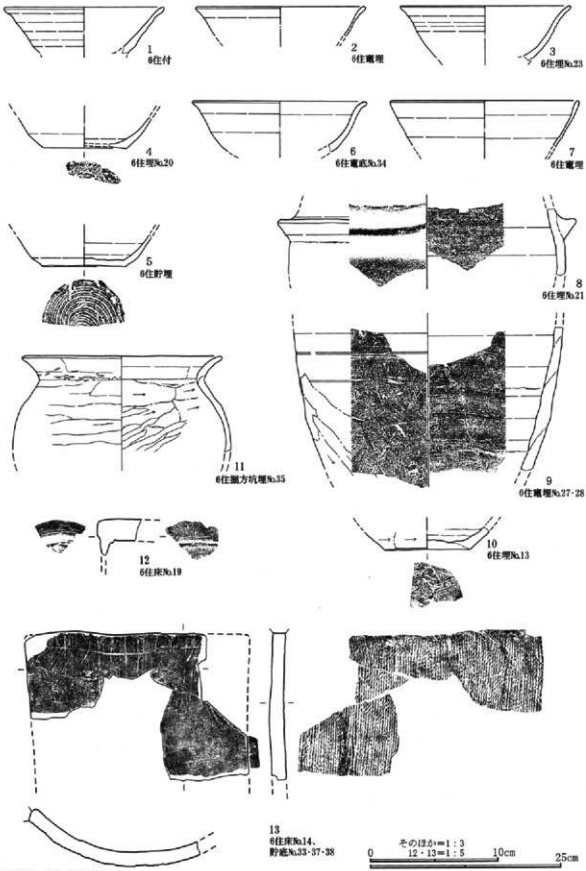
位置はＰ大区ｓ177にある。調査面は標高74.45m付近。重複は後出の坑56がある。規模は長軸387cm、短軸321cm方向は長軸でＮ°Ｏ′である。施設は東壁に竈、掘方で貯蔵穴・床下坑が見つかっている。遺物は第83図のとおり、10世紀前半の土器を主とし、住居跡も同期である。



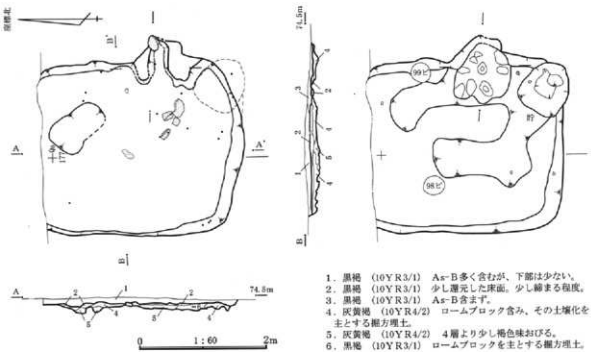
第78図　住居跡6遺構図

住居跡9　(第84・85・86図、図版19・147)

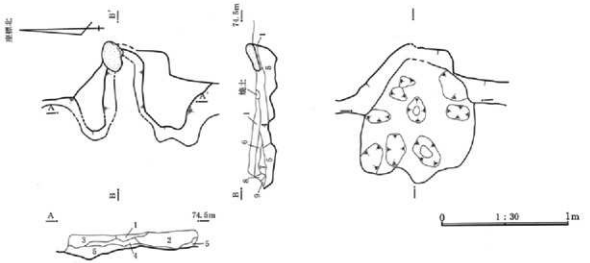
位置はP大区s・t178・179に、調査面は74.45m。重複は後出の住居跡10、坑73がある。規模は、南北長620＋α、東西467＋α、方向は東壁下でN26°30′Wを測る。施設としては柱穴ピ1・2を調査した。遺物は第86図のとおり古墳時代前期の土器類があり、住居跡も同期である。



第79図　住居跡6遺物図



1．黒褐　(10YR3/1)　As-B多く含むが、下部は少ない。
2．黒褐　(10YR3/1)　少し還元した床面。少し締まる程度。
3．黒褐　(10YR3/1)　As-B含まず。
4．灰黄褐　(10YR4/2)　ロームブロック含み、その土壌化を主とする掘方埋土。
5．灰黄褐　(10YR4/2)　4層より少し褐色味おびる。
6．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロックを主とする掘方埋土。

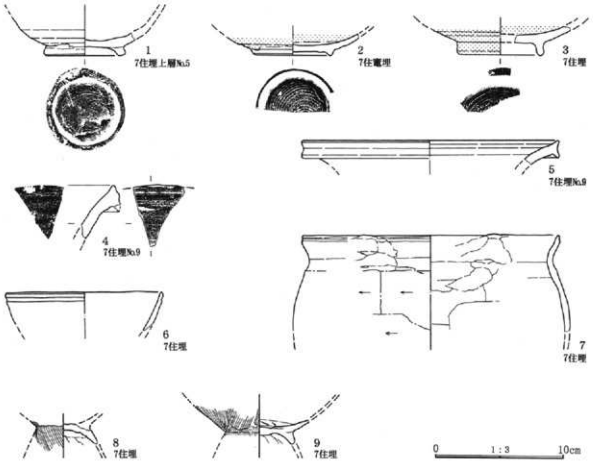


竈
1．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒僅か含み、As-B含む。
　　耕作関連か。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒僅か含む。As-B含まず。
　　遺構か。
3．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒僅か含む。As-B含まず。
　　やや緩まり、粘好か。
4．黒褐　(10YR3/1)　ほんの僅か焼土粒含む。粘性あり。
5．黒褐　(10YR3/1)　ほんの僅か焼土粒含む。粘性あり。掘方埋土か。
6．黒褐　(10YR3/1)　やや締まる。床にしては位置が高い。
7．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含まず。やや緩まる。
8．褐　(10YR4/4)　ロームブロック含む。
9．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含まず。住居埋土か、締まりに欠ける。

第80図　住居跡７遺構図

住居跡10　(第87・88・89、図版19・148・149)

位置はＰ大区ｓ178・179に、調査面は、標高74.5m。重複はピ92が後出して重なり、西半は調査外である。規模は、南北289cm、東西208＋αm、方向は東西軸でＮ90°ＥＷを測る。施設として東壁に竈跡が、床面で埋まり込んだ状態で貯蔵穴上面で、掘方できさらに規模を広め、竈前に床下坑が存在していた。遺物として、床面から10世紀中頃から後半の須恵器類が出土し、住居跡も同期である。



第81図　住居跡７遺物図

住居跡11　（第90・91図、図版20・150）

位置はＱ大区ａ175・176にあり、調査面標高74.4m。重複は掘立柱建物跡５のピ2・6とピ150・溝51・54が後出して重なり、掘方調査時にピ134・141が発見された。規模は長軸で294cm、短軸で266cm、方向N8°Eを測る。施設は東壁に竈・床より29cm深い貯蔵穴・床下坑がある。直結遺物は10世紀前半である。

住居跡12　（第92・93図、図版20・150）

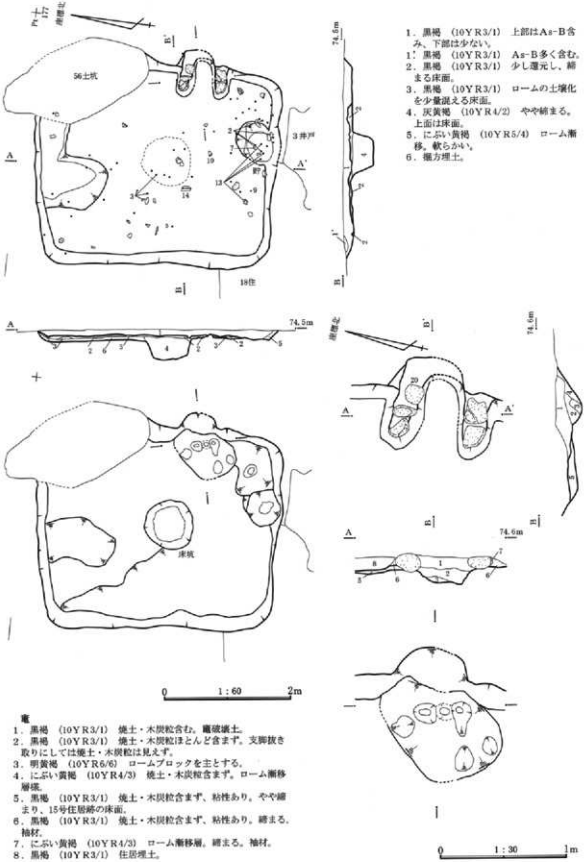
位置はＰ大区ｔ175にあり、調査面標高74.5m。重複は住居跡22・23に後出し、同13に切られる。規模は長軸で335cm、短軸で219cm、方向8°30′Wを測る。施設は東壁に竈、床より28cm深い貯蔵穴、床下坑がある。直結遺物は第93図13・14の床出土からすれば10世紀前半である。

住居跡13　（第94・95図、図版20・150）

位置はＰ大区ｓｔ175・176にあり、調査面標高74.3m。重複は住居跡23を切って存在する。規模は長軸で358cm、短軸で266cm、方向N4°Wを測る。施設は竈跡見えず、床面より27cm深い貯蔵穴らしき小凹みを南東隅で見い出した。遺物は掘方中から９世紀後半頃の第95図4・5があり、関連性はある。

住居跡14　（第96・97図、図版21・150）

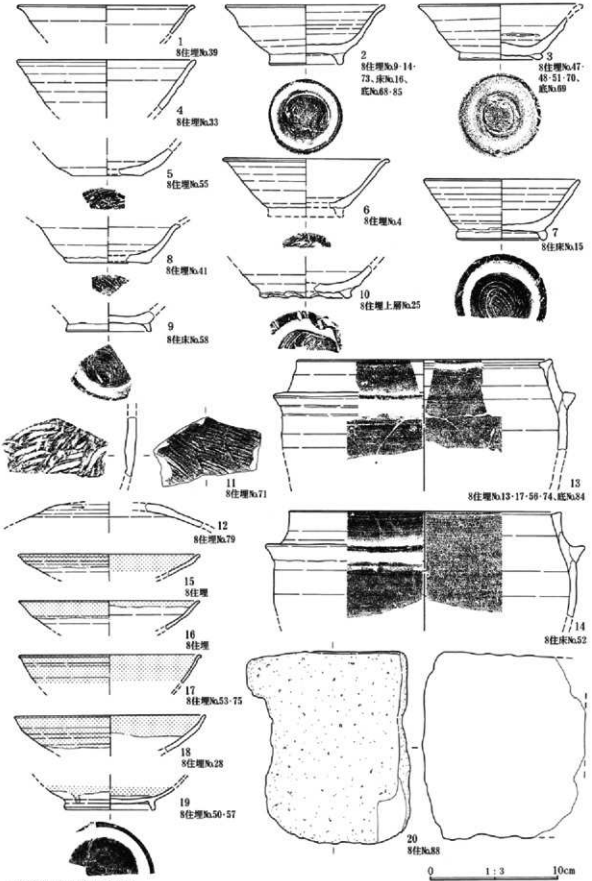
位置はＰ大区ｒｓ176にある。倒木中の硬化面を住居跡床と考えたが、後日倒木と判明。



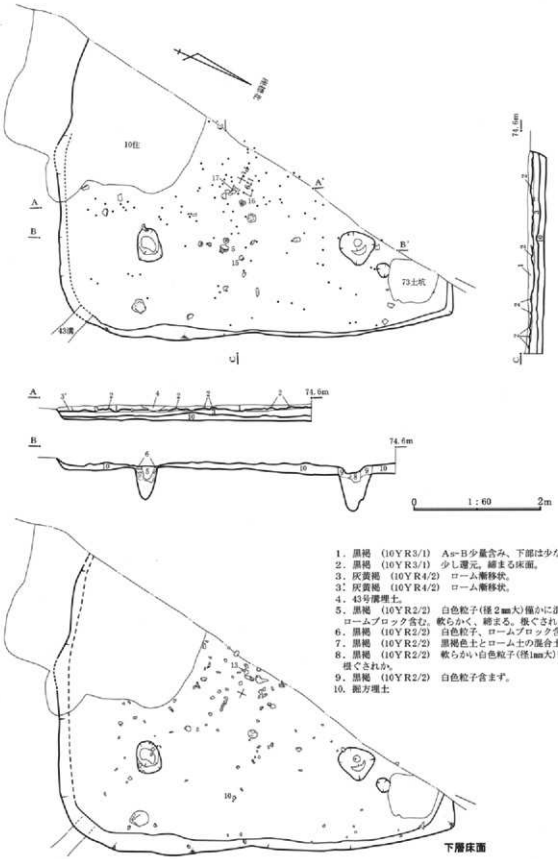
1．黒褐　(10YR3/1)　上部はAs-B含み、下部は少ない。
1'．黒褐　(10YR3/1)　As-B多く含む。
2．黒褐　(10YR3/1)　少し還元し、締まる床面。
3．黒褐　(10YR3/1)　ロームの土壌化を少量混える床面。
4．灰黄褐　(10YR4/2)　やや硬まる。上面は床面。
5．にぶい黄褐　(10YR5/4)　ローム漸移、軟らかい。
6．褐方埋土。

竈
1．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。竈破壊土。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒ほとんど含まず。支脚抜き取りにしては焼土・木炭粒は見えず。
3．明黄褐　(10YR6/6)　ロームブロックを主とする。
4．にぶい黄褐　(10YR4/3)　焼土・木炭粒含まず。ローム漸移層様。
5．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含まず、粘性あり。やや締まり、15号住居跡の床面。
6．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含まず、粘性あり。締まる。袖材。
7．にぶい黄褐　(10YR4/3)　ローム漸移層。締まる。袖材。
8．黒褐　(10YR3/1)　住居埋土。

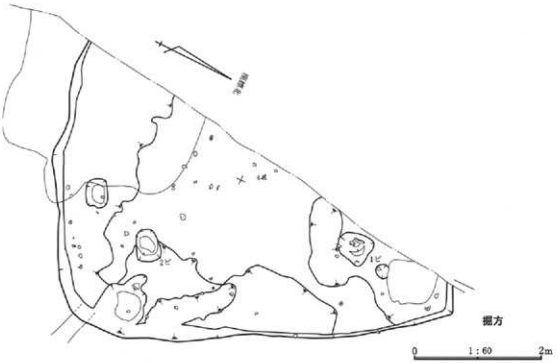
第82図　住居跡8遺構図



第83図　住居跡８遺物図



第84図　住居跡９遺構図



第85図　住居跡９遺構図

住居跡15　（第98・99図、図版21・150）

Ｐ大区ｒ・ｓ176・177にある。大半にＡｓ－Ｂ混り、土坑の可能性あり。長辺284cm、東壁でＮ28°Ｗを測る。

住居跡16　（第100・101図、図版21・151）

位置は、Ｐ大区ｒ178・179、調査面は74.5m。重複は住居跡52を切り、溝跡48と住居跡28の竈に切られる。規模は南北302＋αcm、東西120＋αcm、Ｎ11°Ｗを測る。施設として東壁に竈が設けられ、掘方には、竈前の掘り込みが見られる。遺物は第101図のとおり10世紀前半の土器が直接的である。瓦は８世紀代の11があり、10は９世紀前半の瓦で、廃瓦の利用らしい。

住居跡17　（第102・103図、図版21・151）

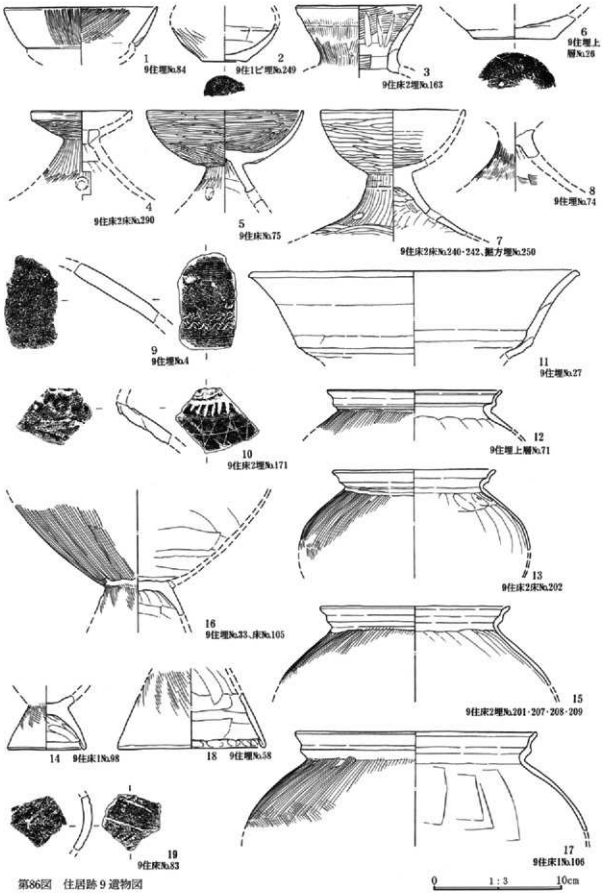
Ｐ大区ｒ177・178にあり、調査面は74.5m。重複は溝43が切るほか上面までＡｓ－Ｂ混りである。施設はなく住居跡として明確でない。規模は長軸で302cm、短軸で208m、方向短軸でＮ7°Ｗ。遺物は9・10世紀である。

住居跡18　（第104図、図版22）

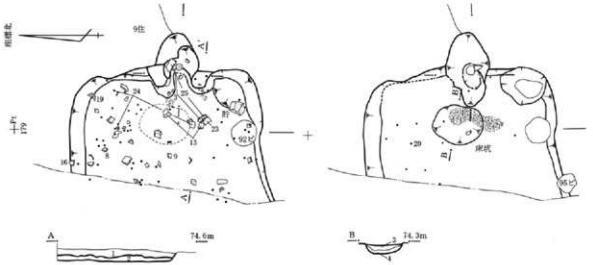
Ｐ大区ｒ8・ｓ177にあり、調査面は、74.45m。重複は住居跡８と井戸跡３によって切られる。痕跡のみで施設はない。規模は東西で243＋αcm、南北で223cm、方向西壁でＮ11°Ｗを測る。

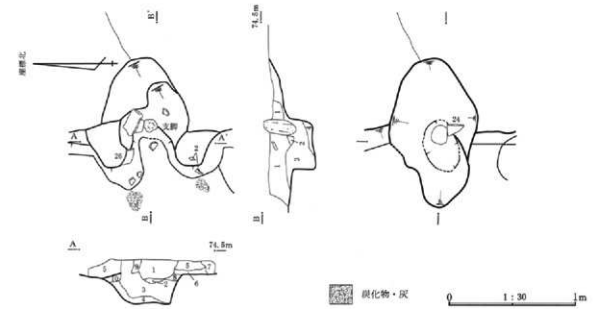
住居跡19　（第105図、図版22）

Ｐ大区ｓ176にあり、調査面は74.45m。重複は住居跡15が切り、上面までＡｓ－Ｂ混り土が及ぶ。施設はなく、住居跡として明確でない。規模は北壁下で258cm、短軸で210cm、方向は短軸でＮ20°Ｗを測る。遺物の出土は微弱であった。



第86図　住居跡9遺物図

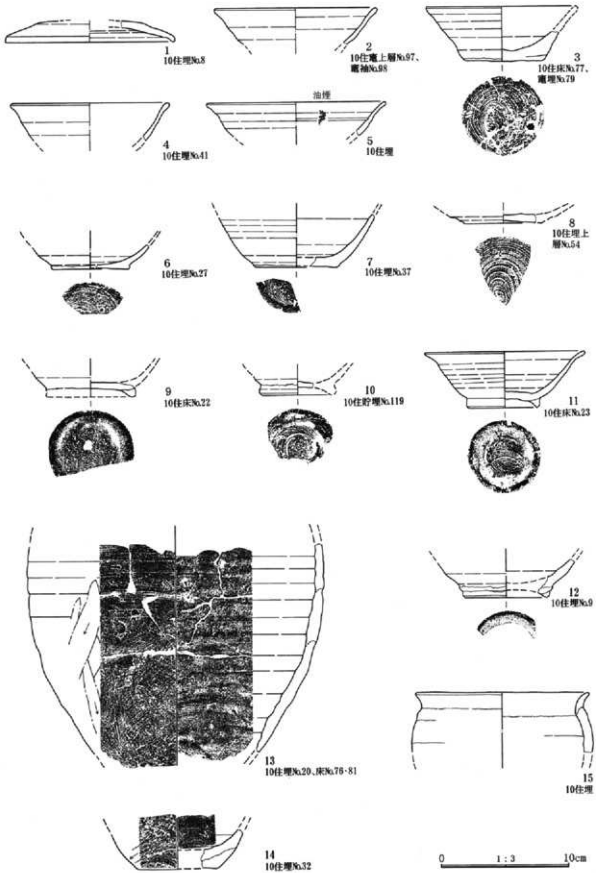




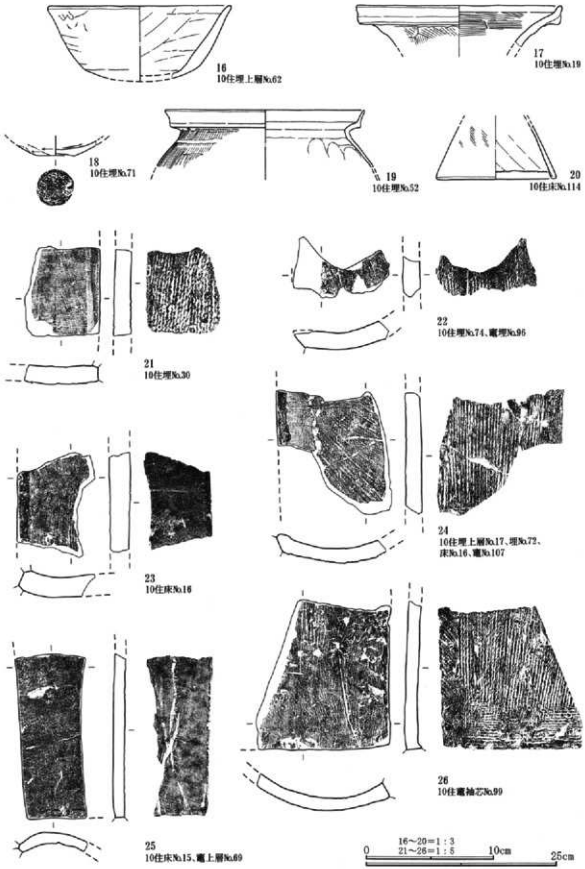
第87図　住居跡10遺構図

住居跡20　(第106・107・108図、図版22・151)

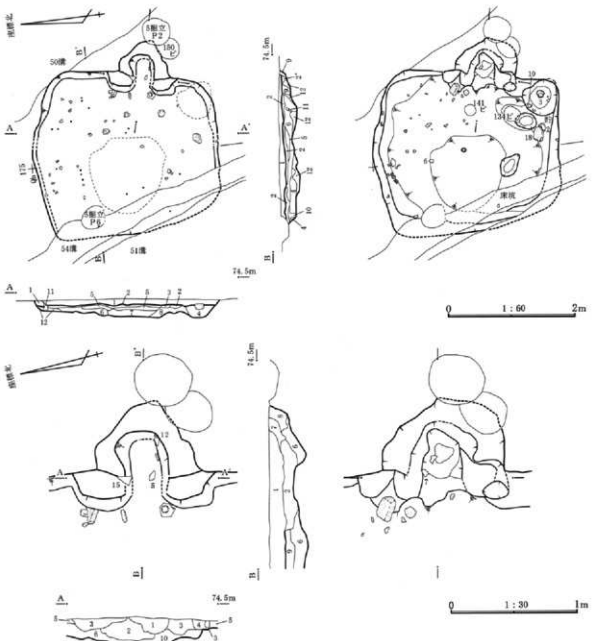
位置はＰ大区ｓ・ｔ174・175に、調査面は74.3m。重複は住居跡12・36、溝跡51・52・54に切られる。施設は、北西隅に床面より深さ54cmの貯蔵穴、柱穴ピ1・2・3を見い出した。床面際までAｓ－Ｂ混りはおよび床層も南西隅の倒木凹内数面にも存在し、調査困難であった。規模は、東西420＋αcm、南北433＋αcm、方向は西壁でN14°Wを測る。遺物は第108図があり、床下・床出土遺物は古墳時代前期で、住居跡も同期。



第88図　住居跡10遺物図



第89図　住居跡10遺物図

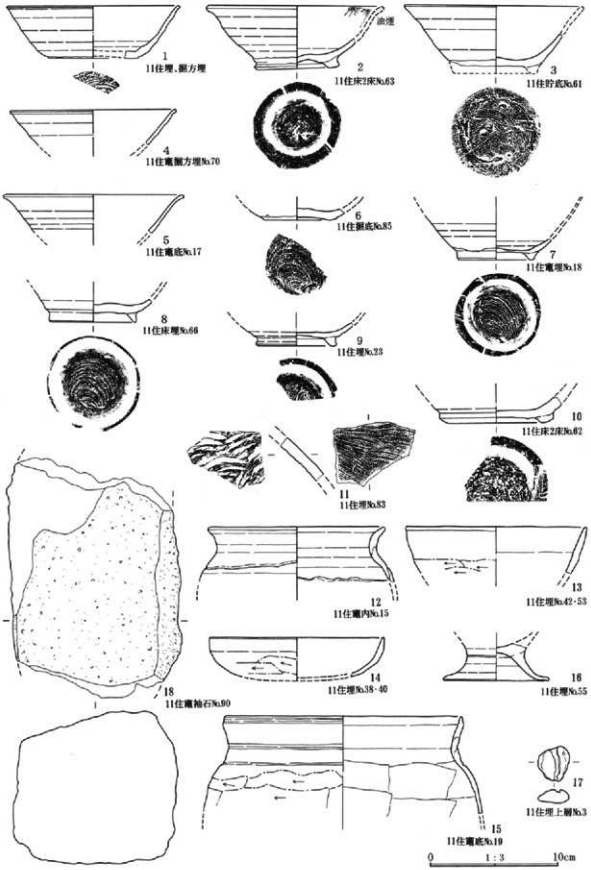


1．黒褐　(10YR3/1)　左側は上面A s-B少量含む，全体にやや粗質。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒僅か含む。やや締まり、灰色気味の床。
2'．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒僅か含む。やや粗質。
3．黄褐　(10YR5/6)　ロームブロック多く含み、締まる。床の一部。
4．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒少量含み、全体に粗質。貯蔵穴埋土か。
5．黒褐　(10YR3/1)　粗粒焼土僅か含む。やや締まり、床面様。
6．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒含まず。粗質で、軟らかい。
7．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック(2mm大)多く含み、やや締まる。
8．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック，焼土粒含まず。やや締まる。
9．にぶい黄褐　(10YR5/4)　ローム漸移層様。軟らかい。
10．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒含まず。粗質で、軟らかい。
11．ロームブロック、根跡様。
12．脆方埋土。

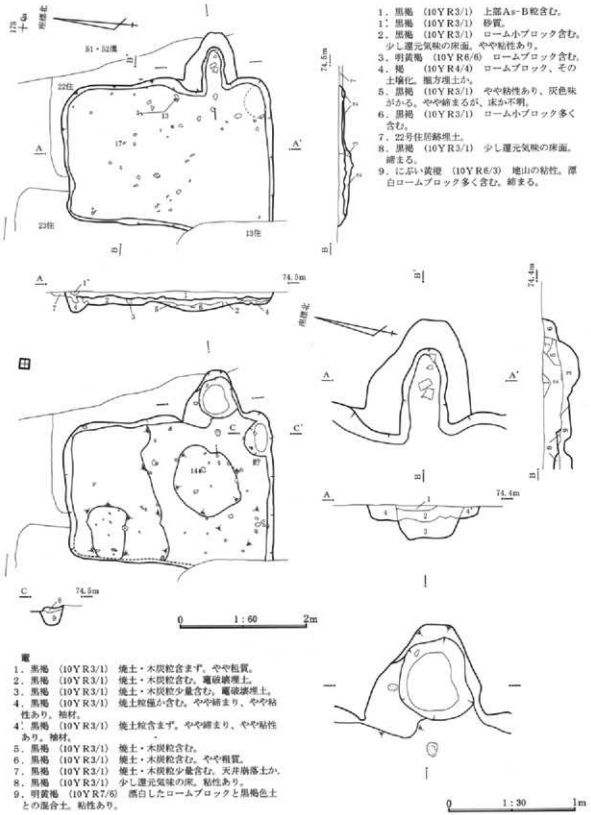
竈

1．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。竈破壊土。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。竈破壊土。やや締まる。
3．黒褐　(10YR3/1)　少し灰色がかり、やや締まる。やや粘性あり。袖材。
4．黒褐　(10YR3/2)　焼土・木炭粒含む。やや締まる。袖材。
5．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含まず。住居埋土。
6．にぶい黄褐　(10YR4/3)　焼土・木炭粒含まず。住居脆方埋土かローム漸移か不明。
7．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。竈破壊土。
8．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。構築間詰材か。
9．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒僅か含む。やや締まり、灰色気味の床。
10．脆方埋土。

第90図　住居跡11遺構図



第91図　住居跡11遺物図

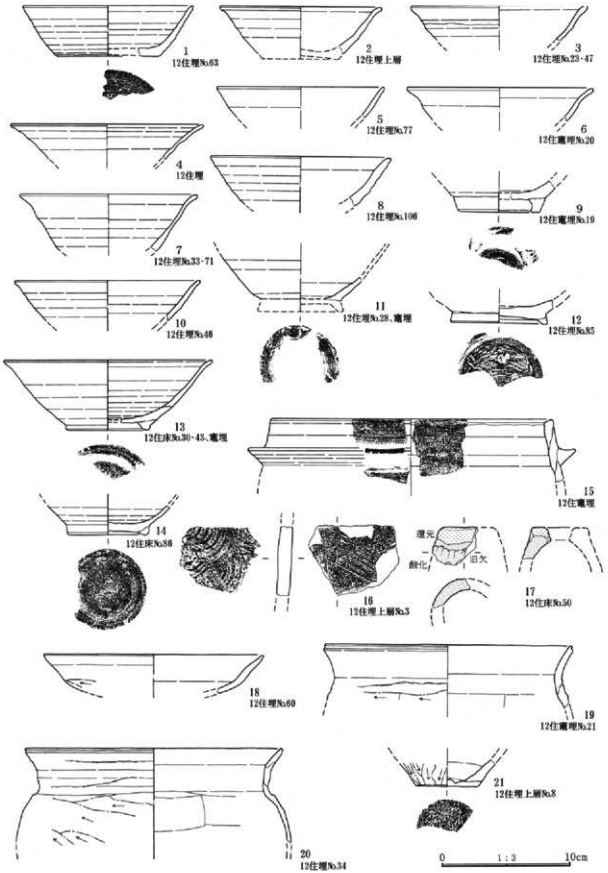


1．黒褐　(10Y R3/1)　上部As-B粒含む。
1'．黒褐　(10Y R3/1)　砂質。
2．黒褐　(10Y R3/1)　ローム小ブロック含む。少し還元気味の床面。やや粘性あり。
3．明黄褐　(10Y R6/6)　ロームブロック含む。
4．褐　(10Y R4/4)　ロームブロック、その土壌化。掘方埋土か。
5．黒褐　(10Y R3/1)　やや粘性あり、灰色味がかる。やや締まるが、床ふ不明。
6．黒褐　(10Y R3/1)　ローム小ブロック多く含む。
7．22号住居跡埋土。
8．黒褐　(10Y R3/1)　少し還元気味の床面。締まる。
9．にぶい黄褐　(10Y R6/3)　地山の粘性。漂白ロームブロック多く含む。締まる。

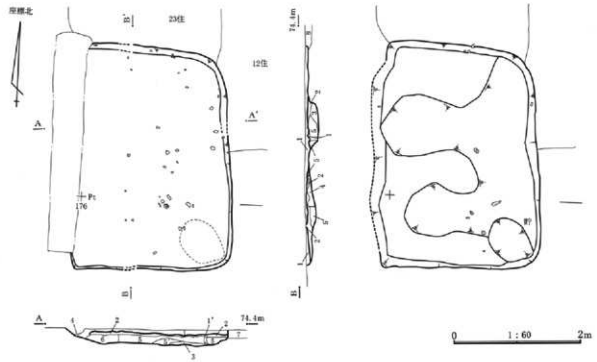
竈

1．黒褐　(10Y R3/1)　焼土・木炭粒含まず。やや粗質。
2．黒褐　(10Y R3/1)　焼土・木炭粒含む。竈破壊埋土。
3．黒褐　(10Y R3/1)　焼土・木炭粒少量含む。竈破壊埋土。
4．黒褐　(10Y R3/1)　焼土粒極小含む。やや締まり、やや粘性あり。袖材。
4'．黒褐　(10Y R3/1)　焼土粒含まず。やや締まり、やや粘性あり。袖材。
5．黒褐　(10Y R3/1)　焼土・木炭粒含む。
6．黒褐　(10Y R3/1)　焼土・木炭粒含む。やや粗質。
7．黒褐　(10Y R3/1)　焼土・木炭粒少量含む。天井崩落土か。
8．黒褐　(10Y R3/1)　少し還元気味の床。粘性あり。
9．明黄褐　(10Y R7/6)　漂白したロームブロックと黒褐色土との混合土。粘性あり。

第92図　住居跡12遺構図

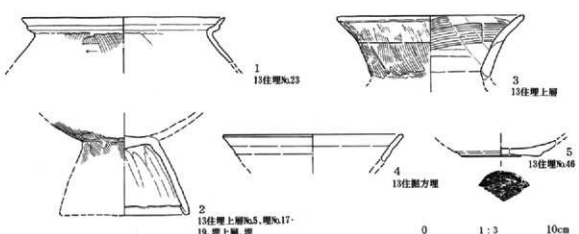


第93図　住居跡12遺物図



1．黒褐　(10YR3/1)　As−B混じえる。土層断面交点部分を除き焼土・木炭粒含まず。軟らかい。
1'．黒褐　(10YR3/1)　As−B混じえる。土層断面交点部分を除き焼土・木炭粒含まず。軟らかい。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含まず。少し湿元気味。やや硬まる。
3．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒含み、下部は暗石ふ。やや硬まり、床面疑似。
4．褐　(10YR4/4)　ローム漸移。軟らかい。
5．黒褐　(10YR3/1)　土層断面交点部分に、焼土・木炭粒含む。少し軟らかい。
5'．黒褐　(10YR3/1)　軟らかい。
6．黒褐　(10YR3/1)　黒褐がかり、軟らかい。倒木の黒色土ふ。
7．12号住居跡埋土。
8．23号住居跡埋土。

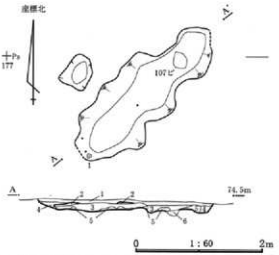
第94図　住居跡13遺構図



第95図　住居跡13遺物図

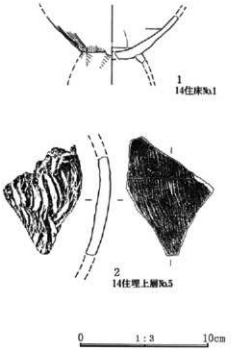
住居跡22　(第109・110、図版22・151)

位置は、P大区ｓｔ175・176、調査面標高74.3m。重複は溝跡54・51・52、住居跡12・倒木によって切られる。施設は東壁に竈が設けられる。規模は北壁下で248cm、南北残存床232＋αcm、方向は北壁で88°45'Eを測る。施設は東壁に竈が取り付く。掘方図トレス漏、径138cm、深17cmの床下坑、貯蔵穴あり。遺物は第110図のとおり、貯蔵穴出土ほか10世紀前半頃の須恵器で、住居に直結する。

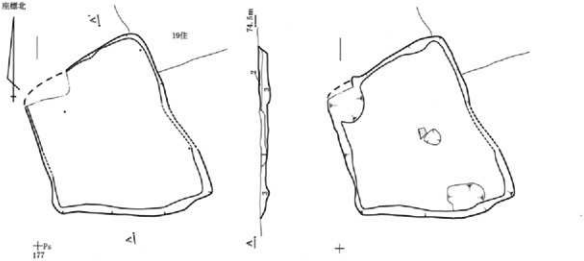


1．黒褐　(10Y R3/2)　As-B含み、部分的に床ブロックを含む。
2．黒褐　(10Y R3/2)　床面。締まる。
3．灰黄褐(10Y R4/2)　1層のブロック、ローム土壁化を含む。
4．灰黄褐(10Y R4/2)　ローム漸移層状。
5．ロームであるが、幅方埋土か不明確。
6．107号ピット埋土。
※調査時では114号住居跡として取り扱ったが、後に倒木痕と判断した。

第96図　住居跡14遺構図



第97図　住居跡14遺物図



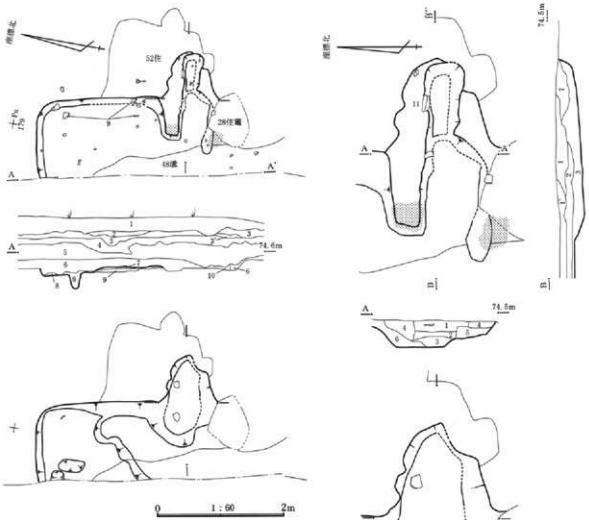
1．黒褐　(10Y R3/1)　As-B粒上部に多く含み、床面ブロック含む。
2．黒褐　(10Y R3/1)　少し還元気味の床。上部As-B含む。
3．にぶい黒褐　(10Y R5/4)　床面ブロック含み、上部As-B含む。土壁化したローム少量入る。

第98図　住居跡15遺構図

第99図　住居跡15遺物図

住居跡23　(第111・112図、図版23・152)

位置は、Ｐ大区ｔ175・176に、調査面74.4mである。重複は住居跡12・13に切られる。規模は南北245＋α cm、東西285cm、方向は中軸でN1°Wを測る。掘り方は浅く凹み、南西隅部あらわれる。遺物は第112図のとおり、10・11・13など床・掘方埋土遺物は10世紀初頭にあり、住居に直結すると考えられる。



1．黒褐　(10YR3/1)　耕作土。粗質。
2．黒褐　(10YR3/1)　旧耕作の地境か。As-A含む。粗質。
3．黒褐　(10YR3/1)　旧耕作の地境と耕作土・濃中少し酸化縞あり。
3'．黒褐　(10YR3/1)　少し酸化。
4．黒褐　(10YR3/1)　波状の白色ブロック含む。ビニール入る。
5．黒褐　(10YR3/1)　As-A・B含む。粗質。
6．黒褐　(10YR3/1)　As-B含む。
7．黒褐　(10YR3/1)　As-B含まず、やや締まる。28号住居跡床。
8．黒褐　(10YR3/1)　As-B含まず、やや締まる。
9．にぶい黄褐　(10YR4/3)　ローム無移的な褐方堆土。
10．黒褐　(10YR3/1)　As-B含む。粗質。

竈

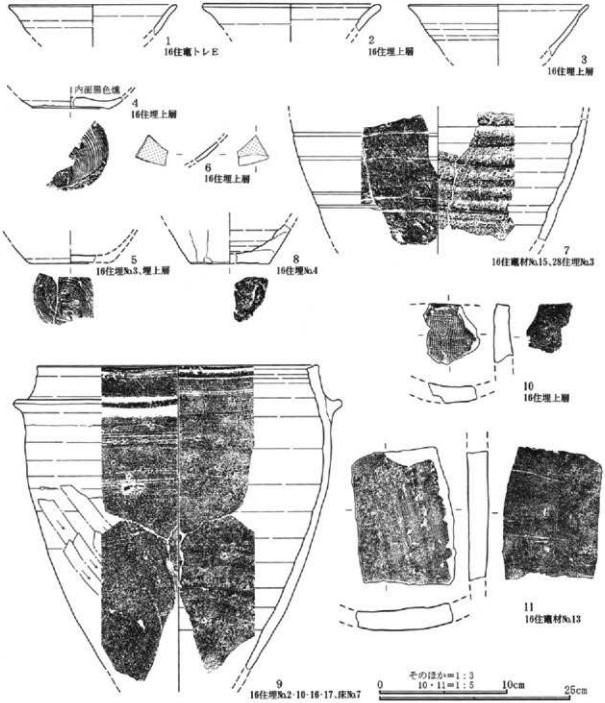
1．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒、ロームブロック含む。
1'．黒褐　(10YR3/1)　住居堆土。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。
3．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒極か含む。
4．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒極か含み、やや締まる。袖材。
5．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒見えず、やや粗質。
6．黒褐　(10YR3/1)　やや粗質。5層より茶味がかる。
7．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒少量含む。

粘土　0　1：30　m

第100図　住居跡16遺構図

住居跡24　(第113図、図版23)

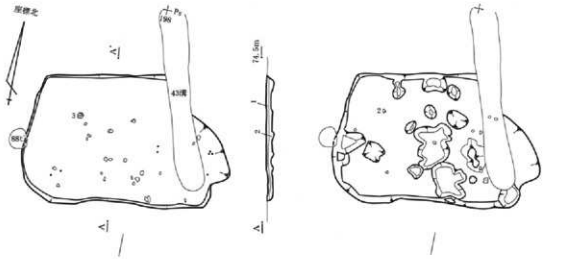
位置はP大区r176・177にあり、調査面は74.4m。重複は溝39が切る。規模は、南北217＋αcm、東西265cmを測る。施設なく、第113図の掘方では、浅い凹みあり。遺物は極めて少なく。住居跡として疑問。



第101図　住居跡16遺物図

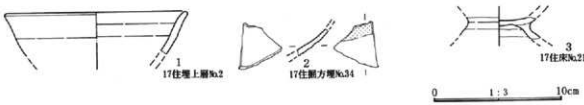
住居跡26　（第114・115図、図版23・152）

位置はＱ大区ｂ175・176、調査面74.25m。重複は住居跡45を切り、住居跡27・溝跡36に切られる。住居跡としては、中世の溝跡36に立上りも削られ痕跡であった。規模は東西で推定336cm、南北推定247cm、方向は中軸でN88°Wを測る。施設としては貯蔵穴があり、床面存在時は埋没していた。竈は東壁に設けられ竈石材の抜取りらしき小穴が浅く残される。遺物は第115図のとおり、床出土の３、竈掘方出土の４など９世紀終末の土器がこの住居に直結する土器類と考えられる。同図５は鍛で竈掘方埋土中、右壁中から出土しており作為的に納置されたかもしれない。

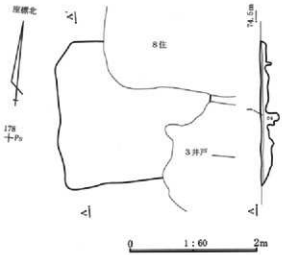


1．黒褐　(10ＹＲ3/1)　上面にＡs−Ｂ粒含み、還元気味の床ブロック多く混じえる。
2．掘方埋土。

第102図　住居跡17遺構図

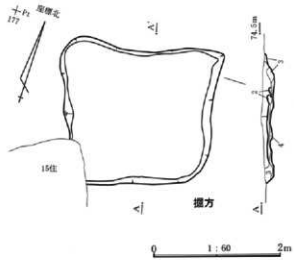


第103図　住居跡17遺物図



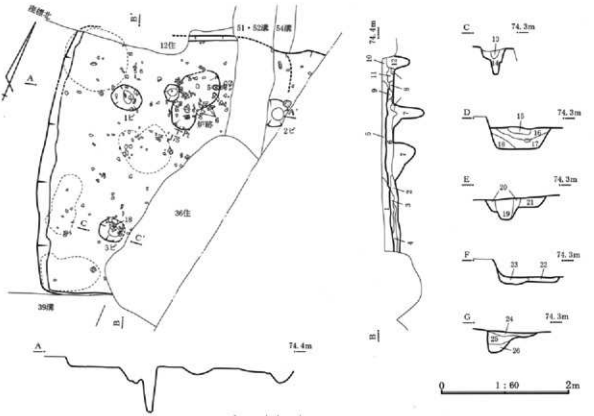
1．黒褐　(10ＹＲ3/1)　上面にＡs−Ｂ粒含み、還元気味の床ブロック多く混じえる。
2．掘方埋土。

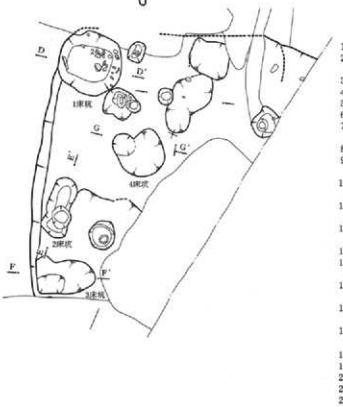
第104図　住居跡18遺構図



1．黒褐　(10ＹＲ3/1)　上面にＡs−Ｂ粒含み、還元気味の床。
　ブロック多く混じえる。
2．にぶい黄褐(10ＹＲ5/4)　やや黒い、土壌化したローム。
　掘方埋土か不明。
3．住居ｶﾏﾄﾞ。
4．掘方埋土。

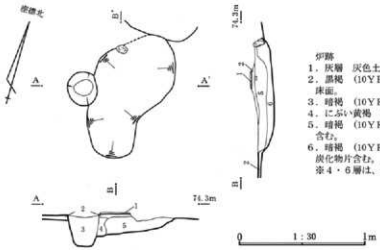
第105図　住居跡19遺構図



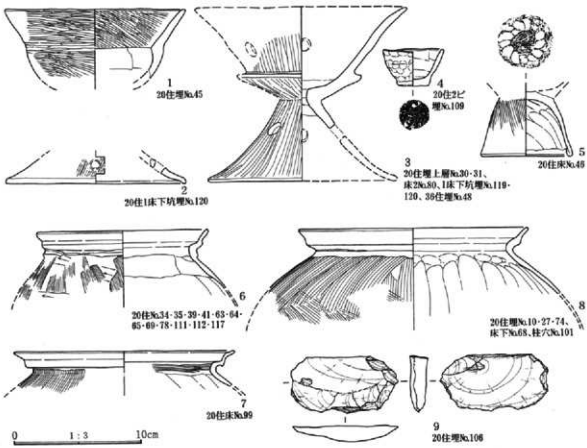


1．黒褐　(10Ｙ R3/1)　軽石含む(As−C、Hr−ＦＰか)。
2．明黄褐　(10Ｙ R6/8)　地山ロームブロック、軽石ほとんど含まず、黒褐色土ブロックとの混合土。
3．黒褐　(10Ｙ R3/1)　軽石含む。締まり強い床面。
4．明黄褐　(10Ｙ R6/8)　締まり強い床面。
5．黒褐　(10Ｙ R3/1)　軽石含む(As−C、Hr−ＦＰか)。
6．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ローム粒含み、少し硬い床面。
7．黒褐　(10Ｙ R3/1)　6層より黒色味あり、中央に15cm前後の軟らかい箇所あり。柱穴と柱痕か。
8．土壌化したローム。
9．黒褐　(10Ｙ R3/1)　6層より締まり弱く、木炭粒含む。周溝か。
10．明黄褐　(10Ｙ R6/8)　ロームブロック、土壌化を主とする。
11．黒褐　(10Ｙ R3/1)　砂質気味で、ロームブロック少量含む。
12．黒褐　(10Ｙ R3/1)　砂質気味で、ロームブロック少量含む。12層より軟らかい。
13．黒褐　(10Ｙ R2/2)　細粒白色軽石、ローム粒含む。
14．黒褐　(10Ｙ R2/2)　ロームブロック(径１～２cm)少量含む。
15．灰黄褐　(10Ｙ R4/2)　ロームブロック(径１～３cm)、白色軽石多く含み、少量の焼土・木炭粒含む。
16．黒褐　(10Ｙ R3/2)　ローム粒、白色軽石、焼土・木炭粒含む。
17．黒褐　(10Ｙ R3/2)　ロームブロック(径２～５cm)、白色軽石含む。
18．黒褐　(10Ｙ R3/2)　ローム粒少量含む。
19．黒褐　(10Ｙ R2/2)　ローム粒少量含む。
20．黒褐　(10Ｙ R2/2)　ローム粒多量含む。
21．黒褐　(10Ｙ R2/2)　ロームブロック(径3～5cm)含む。
22．黒褐　(10Ｙ R2/2)　ロームブロック(径3～5cm)含む。
23．黒褐　(10Ｙ R3/2)　白色軽石少量含む。
24．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ローム粒、焼土・木炭粒含む。
25．暗褐　(10Ｙ R3/3)　白色軽石少量含む。
26．黒褐　(10Ｙ R3/2)　少量のロームブロック含む。

第106図　住居跡20遺構図



第107図　住居跡20炉跡遺構図

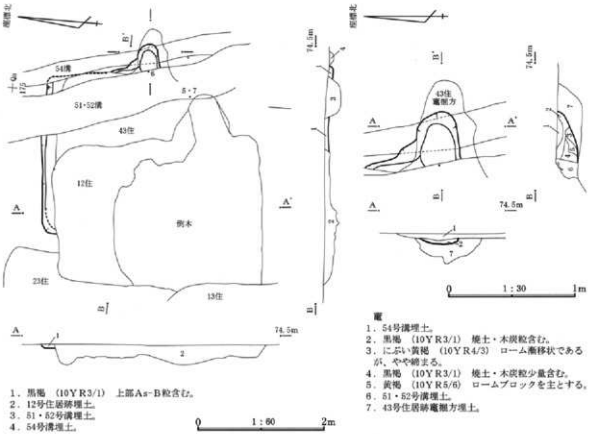


第108図　住居跡20遺物図

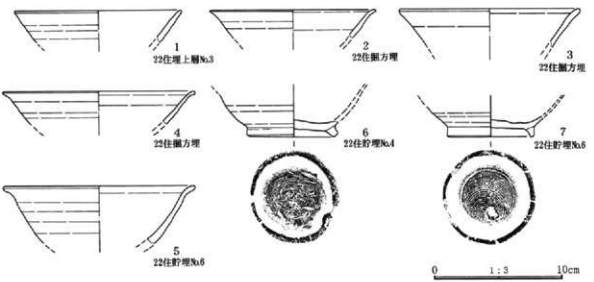
住居跡27　(第116・117図、図版23・152)

位置は、Q大区b175・176にあり、調査面74.0m。重複は、住居跡26を切り、溝跡36によって大半が削り取られる。規模は南北は推定185＋αcm、東西110＋αcmを測る。施設として東壁に竈跡が南東隅部に貯蔵穴がある。遺物は、第117図のとおり、貯蔵穴掘方埋土出土の1・3・4からすると10世紀初頭頃の土器が住居跡に直接関連したと考えられる。

なお以西に別住居跡がもう１棟存在したかもしれない可能性が、第116図南立上り西方細線にある。



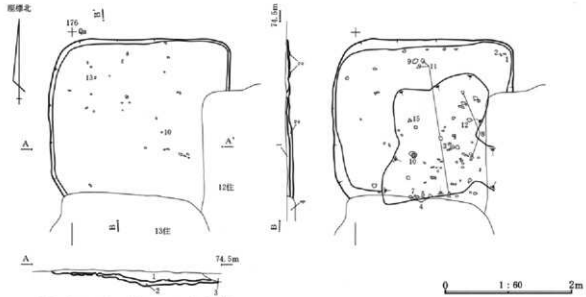
第109図　住居跡22遺構図



第110図　住居跡22遺物図

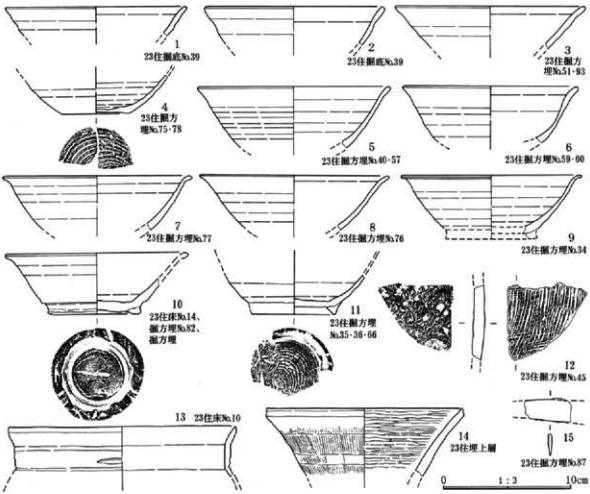
住居跡28　(第118図、図版24)

位置はＰ大区ｒ178･179に、調査面は74.35m。重複は住居跡16が先行し、溝跡48に切られる。下方の一部は、住居跡16の貯蔵穴の可能性があると考えられるが分別困難であった。住居跡16と分離を可能としたのは、住居跡の右袖の粘土材が切られていたためである。土器は少量出土している。住居跡16が10世紀前半頃の遺物の出土があるので、それ以降の住居跡と云うことになる。

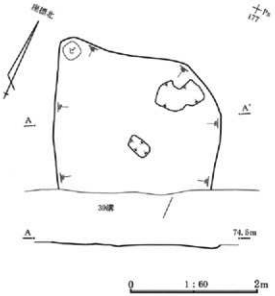


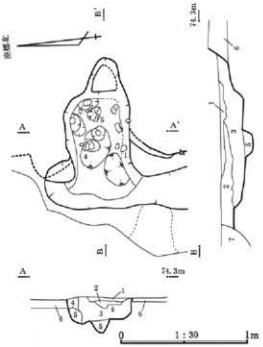
1．黒褐　(10YR3/1)　上部にA₂-B、焼土粒含む。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒塊が含み、部分的にロームブロック混じえる。灰色がかり、少し湿元し、締まる床面。
3．12号住居跡埋土。
4．13号住居跡埋土。

第111図　住居跡23遺構図



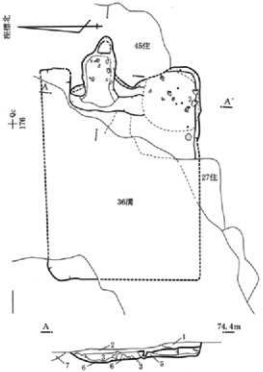
第112図　住居跡23遺物図

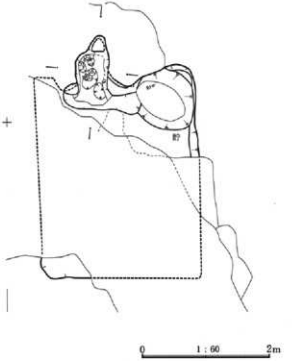




※調査時には既に削平されており、床面に被化したブロックが広がっていた。

第113図　住居跡24遺構図



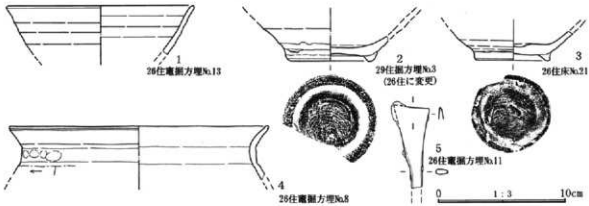


1．黒褐　(10ＹＲ2/3)　白色粒子(径１～1.5mm)全体に混入。
2．黒褐　(10ＹＲ2/3)　白色粒子(径１～３mm)、明黄褐色土小ブロック全体に混入。
3．黒褐　(10ＹＲ2/3)　白色粒子(径１～２mm)、明黄褐色土ブロック(径～１cm)全体に混入。２層よりも密度低い。
4．黒褐　(10ＹＲ2/3)　白色粒子(径１～２mm)、明黄褐色土ブロック(径～3cm)全体に40%混入。
5．黒褐　(10ＹＲ2/3)　褐灰粘質土(10YR4/1)、白色粒子(径～1mm)、明黄褐色土ブロック少量含む。粘質土が土坑の周囲と底面に溜る。
6．黄　(2.5Y7/8)　乱されている。白色粒子、小石混入。
7．36号溝埋土。

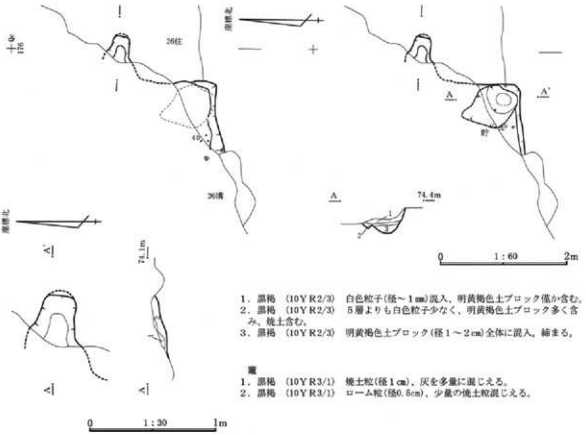
第114図　住居跡26遺構図

竈

1．黒褐　(10ＹＲ3/1)　焼土・木炭粒含み、ロームブロック多く含む。破壊埋土。
2．褐灰　(10ＹＲ4/1)　焼土・木炭粒僅か含む。少し還元気味の、締まる床状。粘性あり。
3．黒褐　(10ＹＲ3/1)　焼土・木炭粒見えず、棚方埋土か。
4．黒褐　(10ＹＲ3/1)　３層に似て少し軟らかい。
5．棚方埋土。
6．45号住居跡埋土。
7．36号溝埋土。



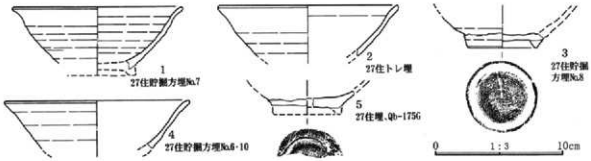
第115図　住居跡26遺物図



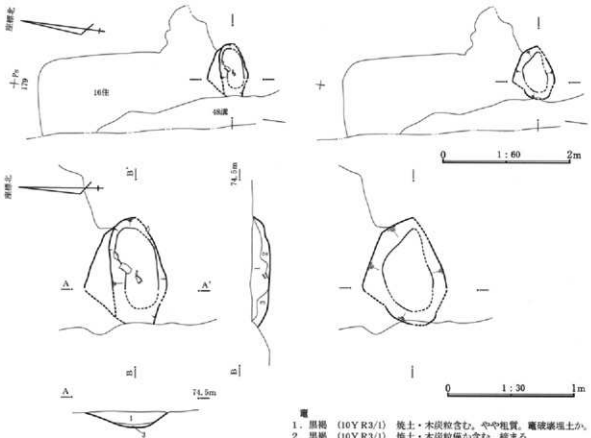
1．黒褐　(10YR2/3)　白色粒子(径～1cm)混入、明黄褐色土ブロック僅か含む。
2．黒褐　(10YR2/3)　5層よりも白色粒子少なく、明黄褐色土ブロック多く含み、焼土含む。
3．黒褐　(10YR2/3)　明黄褐色土ブロック(径1～2cm)全体に混入。締まる。

竈
1．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒(径1cm)、灰を多量に混じえる。
2．黒褐　(10YR3/1)　ローム粒(径0.5cm)、少量の焼土粒混じえる。

第116図　住居跡27遺構図

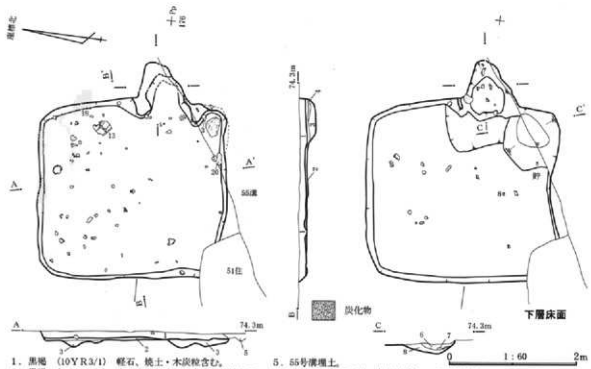


第117図　住居跡27遺物図



第118図　住居跡28遺構図

竈
1．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。やや粗質。竈破壊埋土か。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒僅か含む。締まる。
3．褐方埋土。



1．黒褐　(10YR3/1)　軽石、焼土・木炭粒含む。
2．黒褐　(10YR3/1)　少し還元気味の、床面。粘性あり。
3．黒褐　(10YR3/1)　ローム小ブロック含み、褐方埋土。
4．にぶい黄褐　(10YR5/4)　ローム土壌化の貼床。
5．55号溝埋土。
6．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒含む。やや締まる。
7．にぶい黄褐　(10YR6/4)　ローム漂白化。粘性あり。
8．黒褐　(10YR3/1)　ローム小ブロック含み、やや締まる。

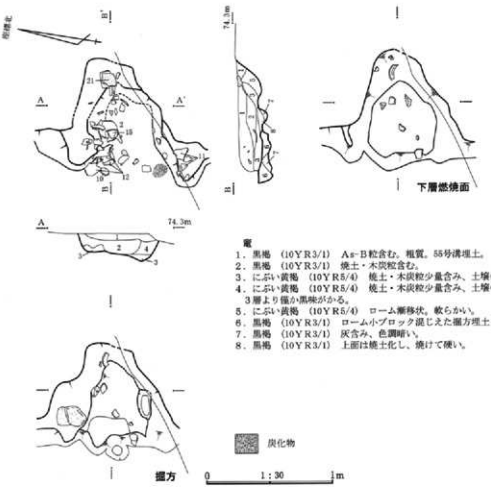
第119図　住居跡30遺構図

住居跡30　（第119・120・122図、図版24・153）

位置はＰ大区ｒ・ｑ176に、調査面は標高74.3m。重複は、住居跡51・溝跡55に切られる。規模は南北302cm、東西276cm、方向は長軸の南北でN8°30′Wを測る。施設として東壁に竈、南東隅に床面より深さ20cmの貯蔵穴が、同穴は、床面ではほとんど埋没している。遺物は第121図4・5など前代遺物の除き床面出土を捉えれば、９世紀前半頃に特定される。

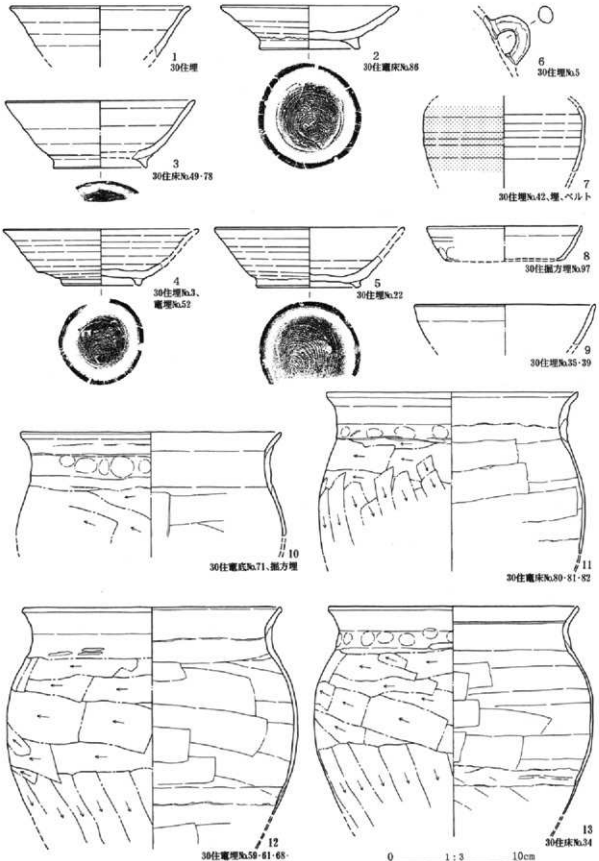
住居跡31　（第123・124図、図版24・153）

位置はＰ大区ｏ・ｒ177・178に、調査面は標高74.3m。重複は、溝跡56と現代穴跡が切っている。規模は南北285＋αcm、東西250＋αcm、方向は東壁付近でN12°15′Wを測る。施設は東壁に竈痕跡、床下坑が存在した。

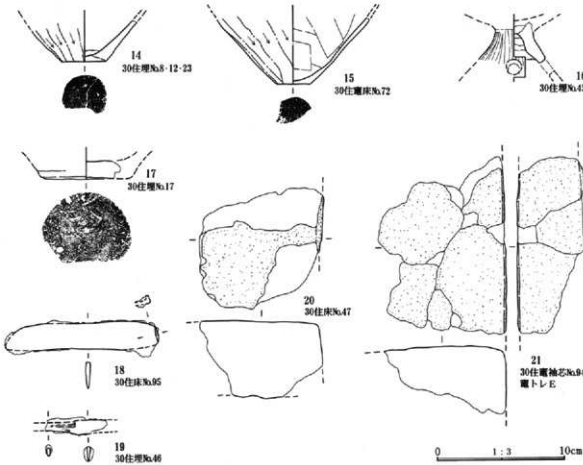


第120図　住居跡30遺構図

遺物は第124図のように同図４の墨書土器を含む10世紀末の一群であり、住居の機能時でもある。当遺跡の平安時代集落では最末期の存在で、この期の存在数は少ない。



第121図　住居跡30遺物図



第122図　住居跡30遺物図

住居跡32　（第125図、図版25）

位置はＰ大区ｏ・ｒ174・175、調査面標高74.45m。重複は溝跡39が切る。住居跡としては、痕跡状態で、施設などは見い出せない。東壁下長243＋αcm、西壁方向N19°45′W。遺物は微弱であった。

住居跡33　（第126・127図、図版25・153）

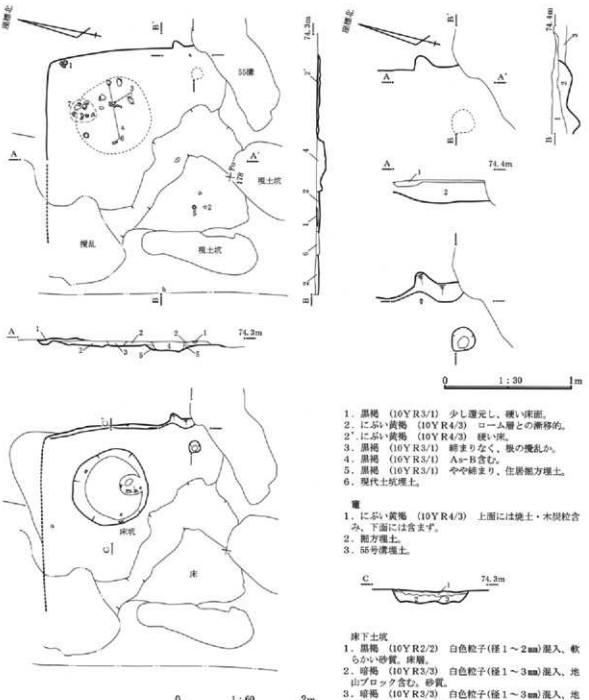
位置はＰ大区ｑｒ174・175、調査面標高74.3m。重複は溝跡40が切る。住居としては、痕跡状態で、施設は見い出せない。南北196＋αcm、南北269＋αcm、方向は南壁でN64°15′Eを測る。遺物は第127図のとおり床面出土に古墳時代前期の同図2・5があり、住居に直結すると考えられる。

住居跡34　（第128図、図版25）

位置はｆ175、調査面標高74.3m、重複は現代穴が切る。規模は、南北で245cm、東西85＋αcm、方向は西壁でN3°30′Eを測る。遺物は微弱であった。

住居跡35　（第129・130図、図版25・154）

位置はｎ175、調査面標高74.3m。重複はないが、東半が調査地外に出る。規模は、南北262cm、東西で72＋αcm、方向N1°Wを測る。施設としての注意点は、床層から掘方までが深いことにあり、第129図は掘り方状態を示すがその中で中央が擂鉢状態となる。遺物は、第130図１が９世紀前半頃である。

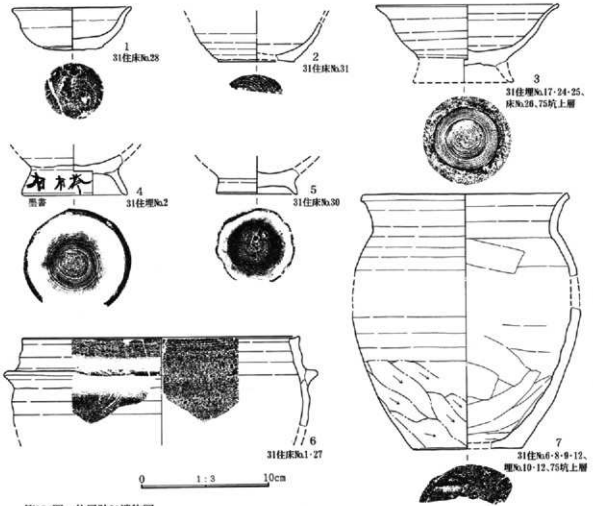


第123図　住居跡31遺構図

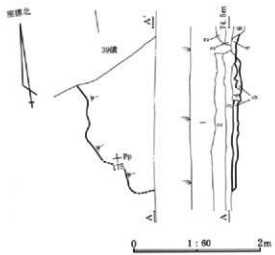
住居跡36　(第131・132図、図版25・154)

位置はＰ大区ｓｔ174・175、調査面は74.25m。重複は溝跡39が埋土上層を切る。規模は、南北で305cm、東西で115＋αcm、方向は西壁でＮ17°30′Ｗを測る。掘り方は、溝状の凹みが壁も整合性弱い形で設けられている。遺物は第132図中床面出土の同図3・4・7に拠れば８世紀中頃の生活が考えられる。

住居跡37　(第133・134図、図版25・26・154)

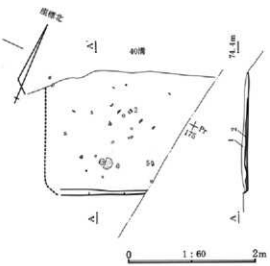


第124図　住居跡31遺物図



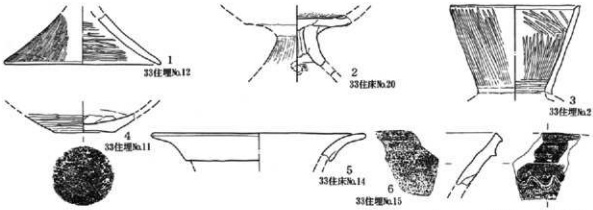
1．黒褐　(10ＹＲ3/1)　As-A含む。現耕作土。
2．黒褐　(10ＹＲ3/1)　As-A含み、下部As-B多く含む。
3．黒褐　(10ＹＲ3/1)　As-B含み、下部は少ない。砂質。
4．黒褐　(10ＹＲ3/1)　As-B含まず、粗質。
5．黒褐　(10ＹＲ3/1)　As-B含まず。少し還元気味の極かに締まる床状。
6．39号溝埋土。

第125図　住居跡32遺構図

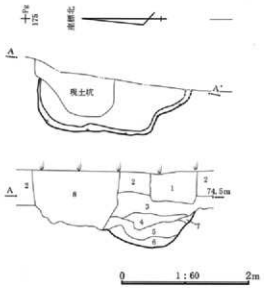


1．黒褐　(10ＹＲ3/1)　軽石含む。やや粗質。
2．黒褐　(10ＹＲ3/1)　灰色気味の床面。

第126図　住居跡33遺構図

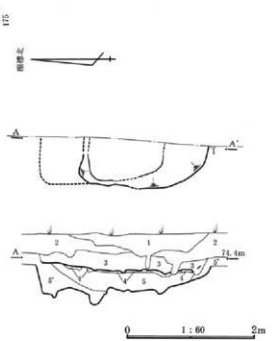


第127図　住居跡33遺物図



1．黒褐　(10YR3/1)　As-A，耕作土のブロック含む。植木抜き取り関連か。
2．耕作土。
3．黒褐　(10YR3/1)　As-A含む。植木抜き取りか。根多。
4．灰黄褐　(10YR4/2)　軽石粒少量含み、軟らかい。
5．灰黄褐　(10YR4/2)　As-Cより前代か。軽石粒少量含み、軟らかい。
6．黒褐　(10YR3/1)　軽石粒少量含み、軟らかい。
7．明黄褐　(10YR6/6)　軽石粒含み、軟らかい。ローム層との漸移層。
8．現代土坑埋土。

第128図　住居跡34遺構図

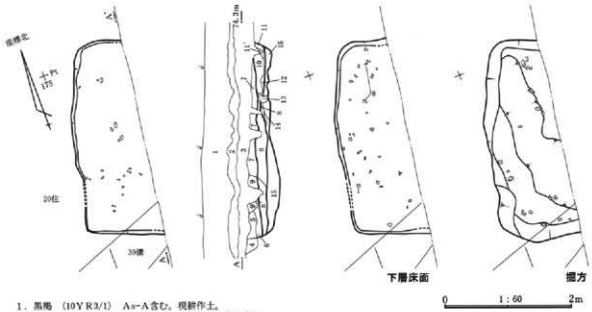


1．攪乱。植木抜き取り。
2．黒褐　(10YR3/1)　As-A含む。耕作土。
3．黒褐　(10YR3/1)　上層にAs-B含む。やや軟らかい。
4．黒褐　(10YR3/1)　還元灰色気味の、ローム土壌化を少し混じえる床面。
5．にぶい黄褐　(10YR5/3)　ローム漸移様。
5'．にぶい黄褐　(10YR5/3)　さらにロームに近い。軟らかい。

第129図　住居跡35遺構図

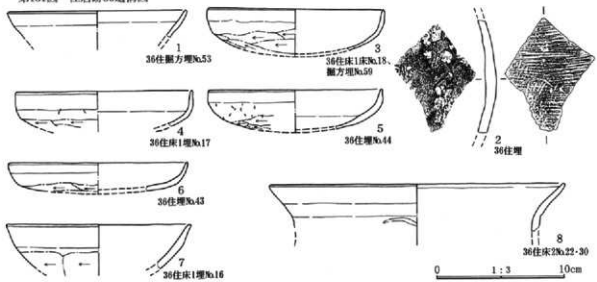
第130図　住居跡35遺物図

位置はＰ大区Ｑ175･176、調査面は74.3である。重複は溝跡40が北半を削る。規模は東西342cm･南北150＋αcm、方向は南壁の直交値でＮ14°Ｗを測る。施設は東壁に竈が、南東隅で床上－４cmの貯蔵穴が見い出された。床より竈掘方が高いのは平安時代Ｐ東区住居跡傾向でもある。断面土層注３に掘方中に別住居がかかる可能性あり。遺物は第134図のとおり、同図2・3・5を捉えれば、９世紀中頃の住居存在が考えられる。



1．黒褐　(10YR3/1)　As-A含む。現耕作土。
2．黒褐　(10YR3/1)　As-A含み、下部As-B多く含む。
3．黒褐　(10YR3/1)　As-B含み、下部は少ない。砂質。
4．黒褐　(10YR3/1)　As-B含まず、粗質。39号溝埋土。
5．灰黄褐　(10YR4/2)　ローム粒含み。やや粘性あり。
6．黒褐　(10YR3/1)　締まり弱い。
7．黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。締まり弱い。
8．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック少量含み、焼土・木炭粒含む。
8'．黒褐　(10YR3/1)　特にロームブロック多く含む。
9．灰黄褐　(10YR4/2)　ロームブロック多く含む。
10．黒褐　(10YR3/1)　ローム粒少量、木炭粒やや多く含む。
11．灰黄褐　(10YR4/2)　ロームブロック多く含む。やや締まる。
11'．灰黄褐　(10YR4/2)　ロームブロック少量含む。やや締まる。
12．赤　(10R5/8)　焼土。
13．にぶい黄橙　(10YR7/4)　漂白化した、粘性ローム ブロック。上面焼土化。
14．褐灰　(10YR4/1)　還元灰色化。床面、締まる。
15．にぶい黄橙　(10YR6/4)　ロームブロック多く含む。上面締まり、下面堅方。

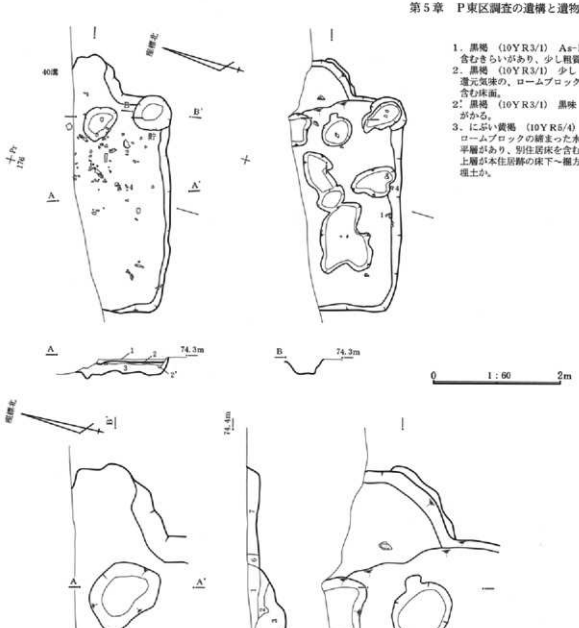
第131図　住居跡36遺構図



第132図　住居跡36遺物図

住居跡38　(第135・136、図版26・154)

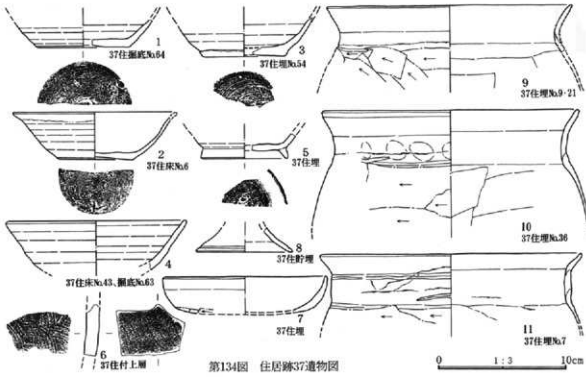
位置はP大区P178にあり、調査面標高72.5m。重複は溝跡40に大半切られる。規模は東西推定248＋αcm、南北176＋αcm、方向N1°15′Eを測る。施設は掘方で浅い凹みあり。遺物は第136図1・3が掘方よりあり、およそ10世紀前半頃の遺物であるので、住居の存在もその頃と考えられる。



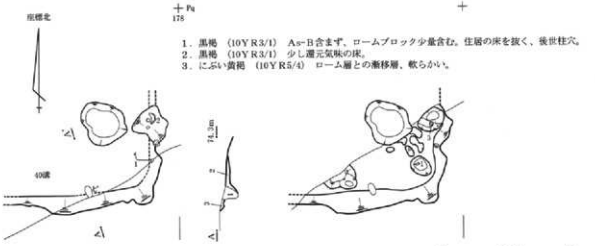
第133図　住居跡37遺構図

住居跡39　(第137・138・139、図版26・155)

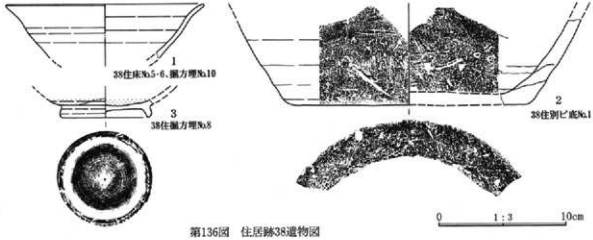
位置はＰ大区m～o 176・177にあり、調査面標高74.2m。重複は、前代に倒木、住居跡50・溝58・坑67・78他ピットが後出、住居跡床も大半失なう。施設は坑78（第235図）に貯蔵穴の可能性が、柱穴にピ１～４がある。掘方は壁下を溝状に掘下げる。規模は、東西530cm、南北502cm、方向はN21°Wを測る。遺物は第139図



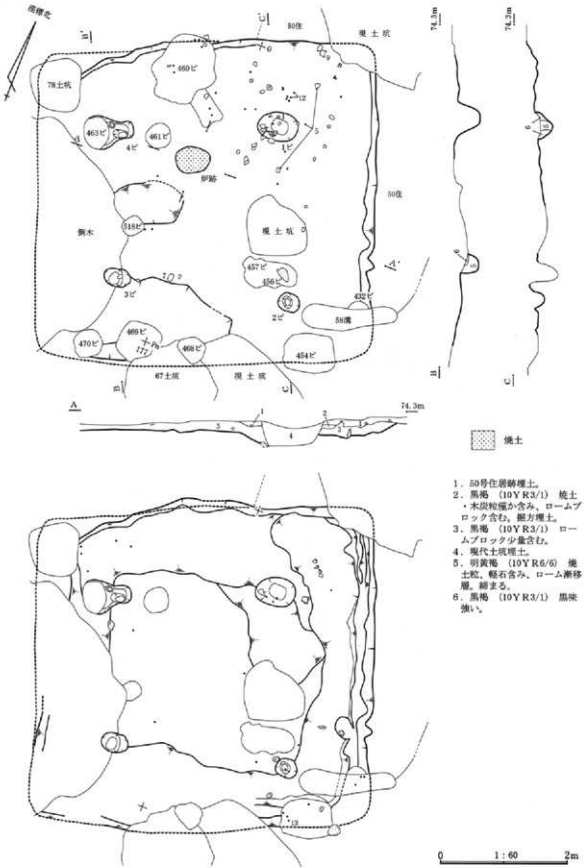
第134図　住居跡37遺物図



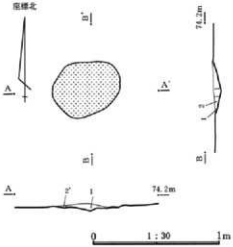
第135図　住居跡38遺構図



第136図　住居跡38遺物図



第137図　住居跡39遺構図



炉跡
1．赤　(10R5/8)　ローム、地山焼土化。
2．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック含む。
2'．黒褐　(10YR3/1)　地山焼土化。

第138図　住居跡39炉跡遺構図

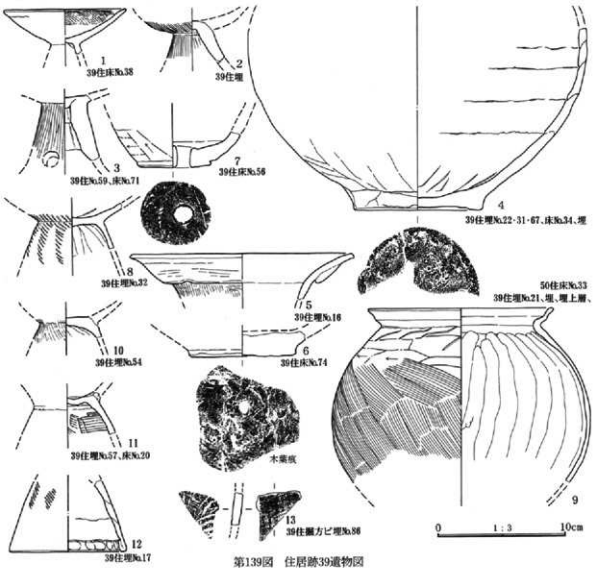
1・3・11に拠れば住居の存在は古墳時代前期。

住居跡40　(第140図、図版26)

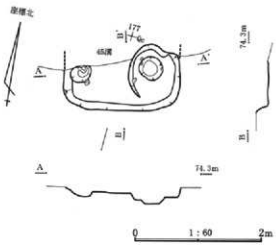
位置はQ大区ｂ176・177にあり、調査面は74.1m。重複は溝跡45に切られる。規模は東西182cm、南北75＋αcm、方向N14°30'Wを測る。遺物は微弱であったが、住居形態からは、平安時代であろう。

住居跡41　(第141・142図、図版26)

位置はQ大区ｂｃ176にあり、調査面は74.2m。重複は溝跡36・住居跡26・坑80に切られる。規模は東西195＋αcm、南北169＋αcmを測る。施設は大半を失なうが、掘方に凹みあり。遺物は少ないが埋土中から第142図があり１を捉えれば９世紀末～10世紀初である。



第139図　住居跡39遺物図



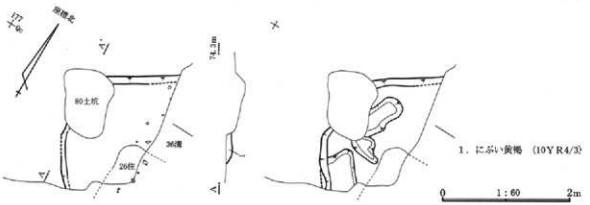
第140図　住居跡40遺構図

住居跡42　（第143・144～147図、図版27・155～157）

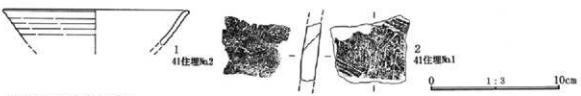
位置はＱ大区ａ・ｂ173・174、調査面73.5m。重複は火葬跡２、北側小ピット４穴が後出、倒木は前代。施設は東壁に竈、南東隅に貯蔵穴。規模は南北515cm・東西367cm、方向は長軸でＮ10°45′Ｗ。遺物は竈内出土の第146図8・9・10他８世紀中頃を主に、生活も同期。

住居跡43　（第148・149図、図版27・157）

位置はＰ大区でｔ174・175、調査面74.35m。重複は住居跡12・22を切り、溝跡52・54に切られる。施設に床下坑。規模は東西264cm、南北295cm、方向は長軸でＮ2°15′Ｗ。遺物は10世紀前半を主とし、生活も同期。



第141図　住居跡41遺構図



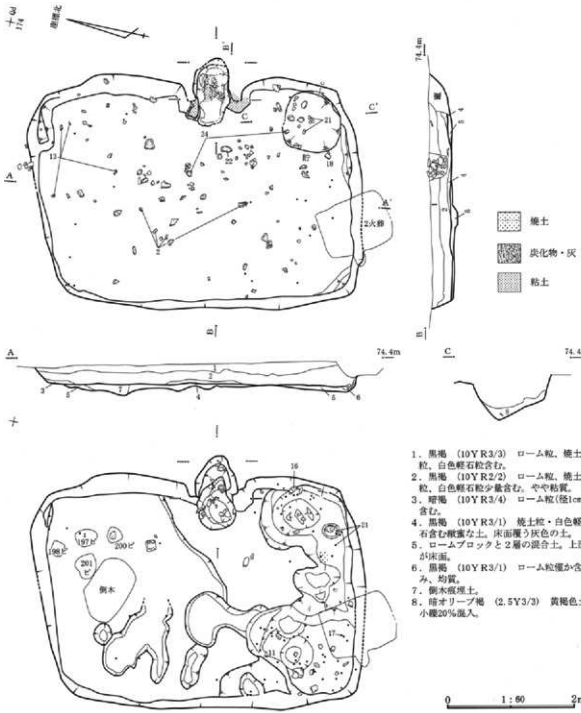
第142図　住居跡41遺物図

住居跡44　（第150・151図、図版27・157）

位置はＱ大区ａ174・175にあり、調査面は74.25mである。重複は溝跡36により北半を失なう。規模は南北で236＋αcm、東西で307cm、方向は主軸でＮ3°Ｗである。施設は東壁で竈、南東隅で貯蔵穴、床下坑がある。遺物は、第151のとおり、床・掘方の個体を中心に捉えると10世紀後半の時期が得られ、住居の生活期も同期である。

住居跡45　（第152・153図、図版28・158）

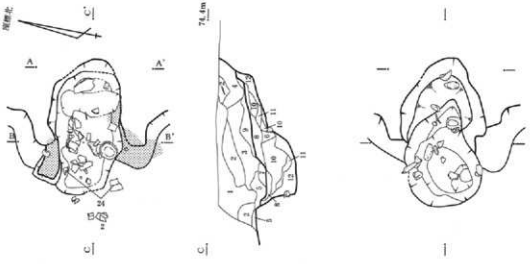
位置はＱ大区ｂ・ｃ175にあり、調査面は74.2mである。重複は住居跡26・27・溝跡36・52・51・54に切られ痕跡の状態であった。規模は、南北330＋αcm、東西120＋αcm、方向は南東隅部から求めると、およそＮ5°Ｗが求められる。施設として掘方で南壁にわずかな段が生じていた。遺物は、微弱なので第153図１に拠れば９世紀前半頃を考えうる。



第143図　住居跡42遺構図

住居跡46　(第154・155図、図版28・158)

位置はＰ大区ｋ１176にあり、調査面は標高74.2mである。重複は坑98・倒木・ピ196・197が後出してある。規模は、南北572cm、東西235cm、方向は西壁でN4°45′Eを測る。施設として南壁で２段差が設けられ、床面でその段差は少しであったが掘方では10cmの落差あり。柱穴ピ1・2は掘方調査時に発見された。掘方は４周壁に沿い中央を高く溝状に掘下げた西半状態を確認した。遺物は第155図２のピ１埋に拠れば、古墳時代前期を住居の機能時と考えることができる。

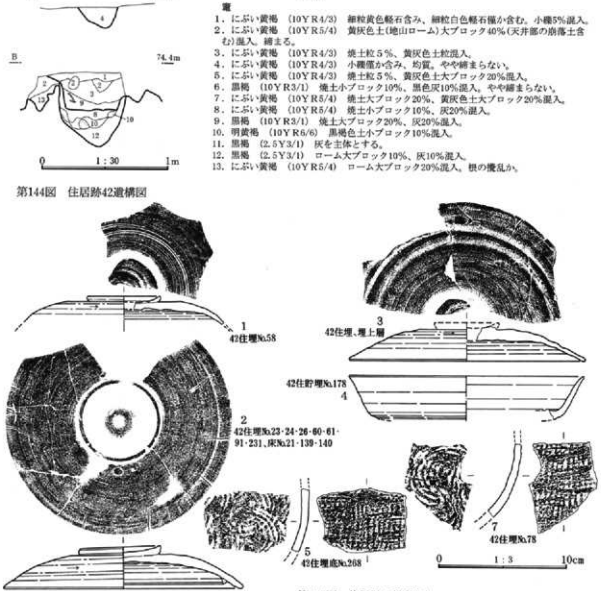


粘土

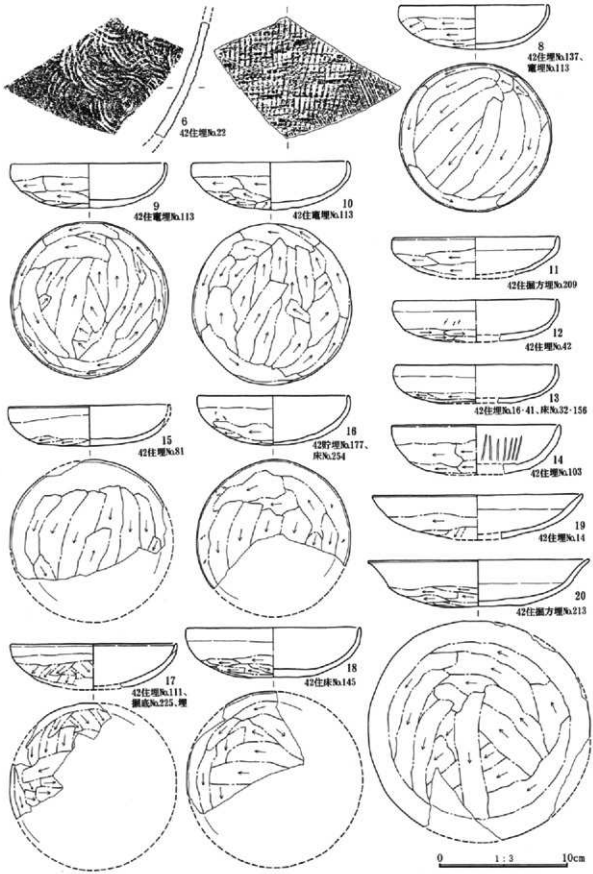
壁

1．にぶい黄褐　(10YR4/3)　細粒黄色軽石含み、細粒白色軽石微か含む。小礫5%混入。
2．にぶい黄褐　(10YR5/4)　黄灰色土(地山ローム)大ブロック40%(天井部の崩落土含む)混入。締まる。
3．にぶい黄褐　(10YR4/3)　焼土粒５%、黄灰色土粒混入。
4．にぶい黄褐　(10YR4/3)　小礫微か含み、均質。やや締まらない。
5．にぶい黄褐　(10YR4/3)　焼土粒５%、黄灰色土大ブロック20%混入。
6．黒褐　(10YR3/1)　焼土小ブロック10%、黒色灰10%混入。やや締まらない。
7．にぶい黄褐　(10YR5/4)　焼土大ブロック20%、黄灰色土大ブロック20%混入。
8．にぶい黄褐　(10YR5/4)　焼土小ブロック10%、灰20%混入。
9．黒褐　(10YR3/1)　焼土大ブロック20%、灰20%混入。
10．明黄褐　(10YR6/6)　黒褐色土小ブロック10%混入。
11．黒褐　(2.5Y3/1)　灰を主体とする。
12．黒褐　(2.5Y3/1)　ローム大ブロック10%、灰10%混入。
13．にぶい黄褐　(10YR5/4)　ローム大ブロック20%混入。炭の攪乱か。

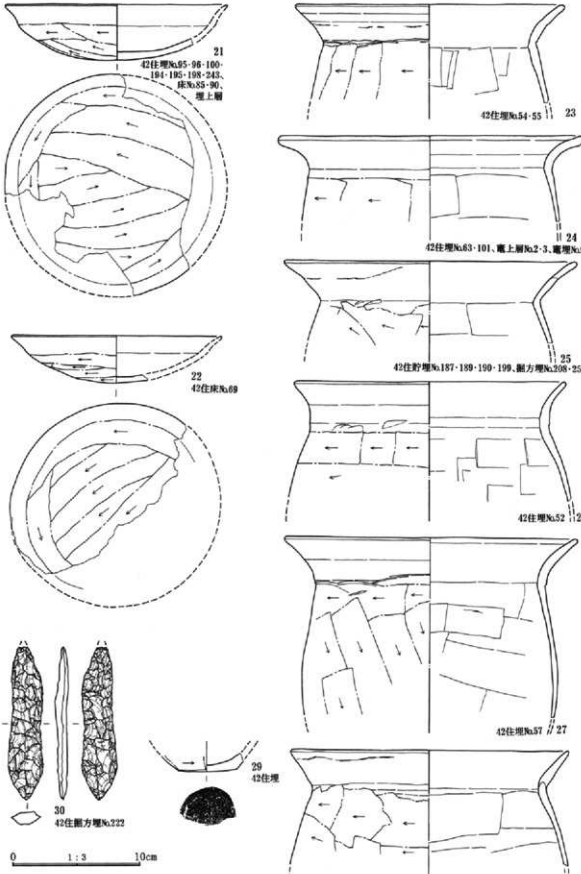
第144図　住居跡42遺構図



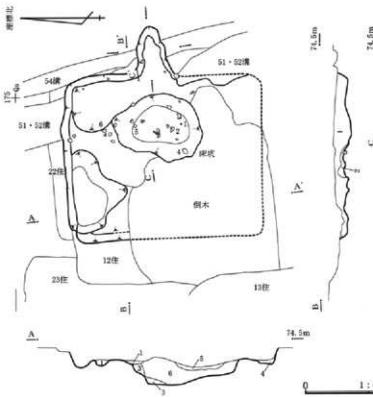
第145図　住居跡42遺物図



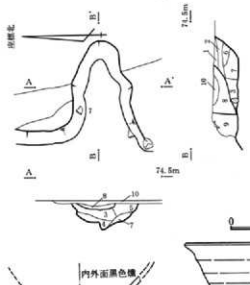
第146図　住居跡42遺物図



第147図　住居跡42遺物図



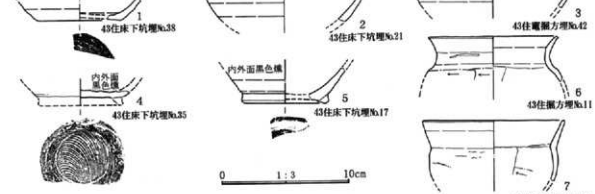
1. 黒褐　(10YR3/1)　ローム小ブロックを含む。22号住居跡竈方埋土。
2. 黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒混じえる。
3. 褐　(10YR4/4)　ローム漸移状。軟らかい。
4. 褐　(10YR4/4)　土壌化した、ロームブロック。竈方埋土か。
5. 黒褐　(10YR3/1)　やや締まる。床面様で灰色がかるが、少し無機質でもある。床か不明。
6. 黒褐　(10YR3/1)　粗質で、軟らかい。倒木の黒色土か。
7. 黒褐　(10YR3/2)　炭化物粒(径1～2cm)、少量の焼化物ブロック、焼土粒含む。
8. 黒褐　(10YR3/2)　黄色土ブロック(径1～2cm)多く含む。
9. 黒褐　(10YR3/2)　黄色土ブロック(径3～5cm)多く含む。



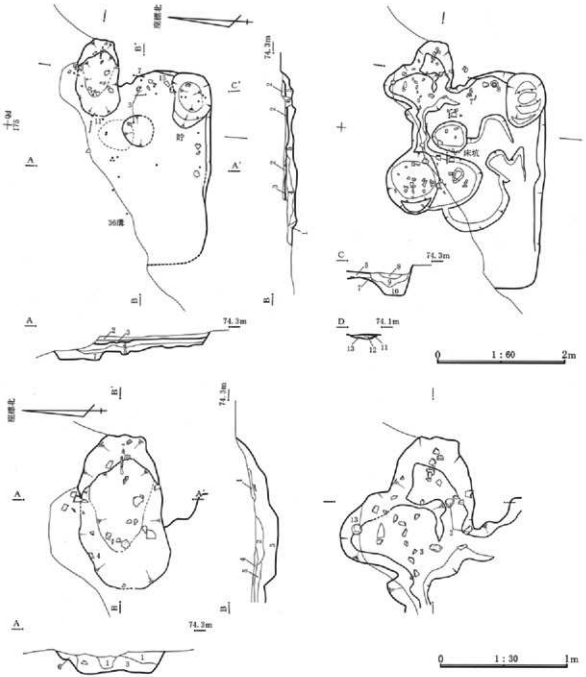
竈

1. 黒褐　(10YR3/1)　ローム小ブロック、焼土・木炭粒含む。
2. 黒褐　(10YR3/1)　焼土・木炭粒含む。
3. にぶい黄褐　(10YR4/3)　ローム漸移状であるが、やや締まる。
4. 黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック含み、やや締まる。
5. 黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック、焼土・木炭粒含まず、やや締まる。
6. 黄褐　(10YR5/6)　ローム様。焼土・木炭粒見えず。
7. 黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック含まず、焼土・木炭粒見えず。
8. 22号住居跡竈埋土。
9. 黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック少量含み、焼土・木炭粒見えず。
10. 54号溝埋土。

第148図　住居跡43遺構図



第149図　住居跡43遺物図

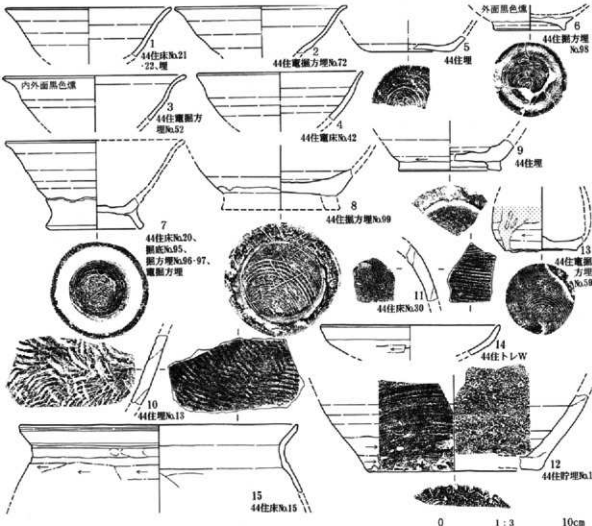


1．黒褐　(10ＹＲ3/2)　ロームブロック(径３～５cm)、ローム粒、焼土粒、白色軽石粒含む。
2．黒褐　(10ＹＲ3/2)　ローム粒、焼土粒、炭化物片(径１～２cm)多く含む。
3．褐灰　(10ＹＲ4/1)　焼土粒、炭化物片多く含む。
4．黒褐　(10ＹＲ3/2)　ローム粒、焼土粒、炭化物片多く含む。
5．黒褐　(10ＹＲ3/2)　ローム粒、焼土粒多く含む。
6．黒褐　(10ＹＲ3/2)　焼土ブロック(径２～３cm)、炭化物片多く含む。
7．黒褐　(10ＹＲ3/2)　ロームブロック、ローム粒含む。
8．黒褐　(10ＹＲ3/2)　焼土粒、炭化物粒含む。
9．黒褐　(10ＹＲ3/2)　ローム粒、焼土粒、炭化物粒含む。
10．黒褐　(10ＹＲ3/2)　ローム粒多く含む。
11．黒褐　(10ＹＲ2/2)　黄褐色土小ブロック10%、焼土粒僅か含む。
12．灰　(10ＹＲ2/2)　黒色灰を主体とし、焼土粒５%混入。
13．灰　(10ＹＲ2/2)　黒色灰、焼土小ブロック５%混入。
※床下土坑は、竈の前面に位置し、灰が多く混入する。

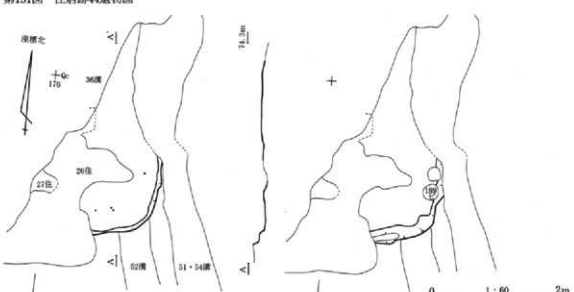
竈

1．黒褐　(10ＹＲ3/1)　焼土・木炭粒多く含む。竈崩壊土か。
2．黒褐　(10ＹＲ3/1)　焼土・木炭粒多く含む。竈崩壊土か。
3．黒褐　(10ＹＲ3/1)　焼土・木炭粒少量含む。
4．黒褐　(10ＹＲ3/1)　焼土・木炭粒少量含む。
5．黒褐　(10ＹＲ3/1)　焼土・木炭粒少量含む。特に上面は焼土・木炭粒多く、火を受けた住居跡か。
6．にぶい黄褐　(10ＹＲ4/3)　焼土・木炭粒僅か含む。竈掘方埋土。

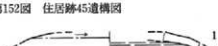
第150図　住居跡44遺構図



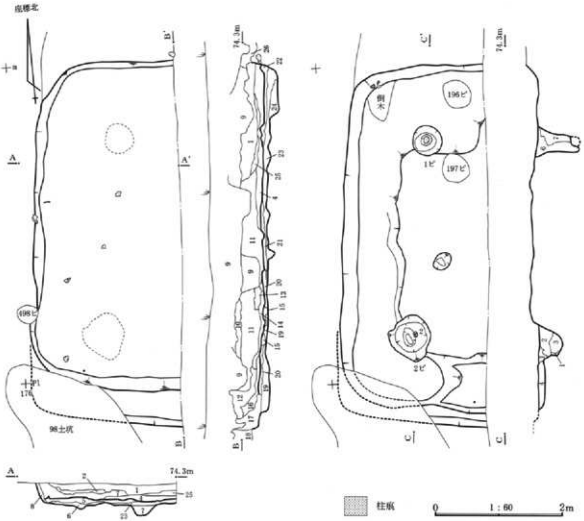
第151図　住居跡44遺物図



第152図　住居跡45遺構図



第153図　住居跡45遺物図

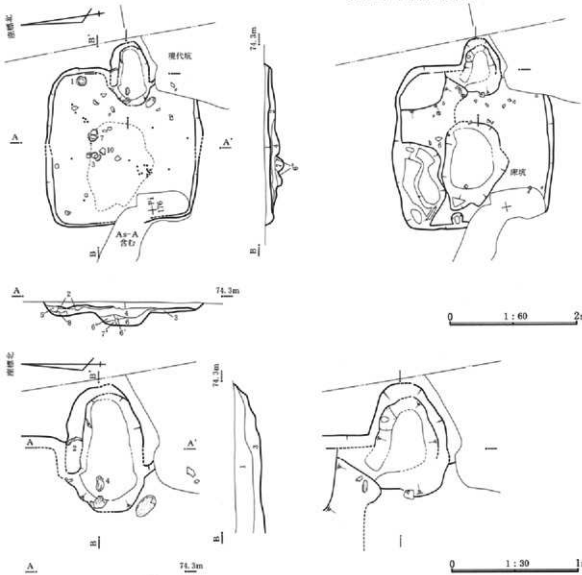


1．黒褐　(10Ｙ R3/1)　Hr−ＦＰ、ローム小ブロック含む。
2．黒褐　(10Ｙ R3/1)　焼土・木炭粒見えず。軽石、多量のローム小ブロック含む。
3．黒褐　(10Ｙ R3/1)　焼土・木炭粒見えず。軽石、少量のローム小ブロック含む。
4．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ロームブロックが貼床状に平らとなる床面。締まり弱い。
5．にぶい黄褐　(10Ｙ R5/4)　ロームブロック含むローム搬移層。
6．黒褐　(10Ｙ R3/1)　住居掘方埋土。
7．黒褐　(10Ｙ R3/1)　柱穴か。
8．にぶい黄褐　(10Ｙ R5/4)
9．黒褐　(10Ｙ R3/1)　耕作土。植木抜き取りの現代土坑。
10．黒褐　(10Ｙ R3/1)　As−B含む。
11．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ローム小ブロック含む。
12．黒褐　(10Ｙ R3/1)　軽石、微量のロームブロック含む。
13．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ロームブロック含む。
14．黒褐　(10Ｙ R3/1)　部分的にロームブロックが縞状をなす。少し還元気味の最終床面。締まりあり。
15．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ロームブロック含み、締まりあり。床の一部。
16．にぶい黄褐　(10Ｙ R5/4)　縞状をなす。ローム小ブロック多く含み、やや締まる。
17．にぶい黄褐　(10Ｙ R4/3)　16層に近い下面は、床面か。
18．にぶい黄褐　(10Ｙ R4/3)　ローム搬移状。
19．黒褐　(10Ｙ R3/1)　柳粒白色軽石含む。掘方埋土か。
20．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ロームブロック少量含む。やや締まる。床面。
21．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ロームブック含む。やや締まる。床面。
22．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ロームブック含む。やや締まる。床面。
23．黒褐　(10Ｙ R3/1)　白色軽石含み、ロームブロック少量含む。軟らかい。掘方埋土。
24．黒褐　(10Ｙ R3/1)　23層より黒味がかり、軟らかい。
25．黒褐　(10Ｙ R3/1)　少し還元気味。床状の色調であるが軟らかい。
26．黒褐　(10Ｙ R3/1)　Hr−ＦＰ粒、ローム小ブロック含む。

ピット１・２
1．明黄褐　(10Ｙ R7/6)　漂白化、粘性のロームブロックを主とする。
2．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ローム小ブロック含む。
3．灰黄褐　(10Ｙ R4/2)　漂白化、粘性のロームブロック多く含む。
4．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ロームブロック含む。掘方埋土。
5．黒褐　(10Ｙ R3/1)　As−C粒少量含む。
6．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ローム小ブロック含む。少し軟らかい。柱痕か。
7．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ロームブロック多く含み、やや締まる。

第154図　住居跡46遺構図

第155図　住居跡46遺物図

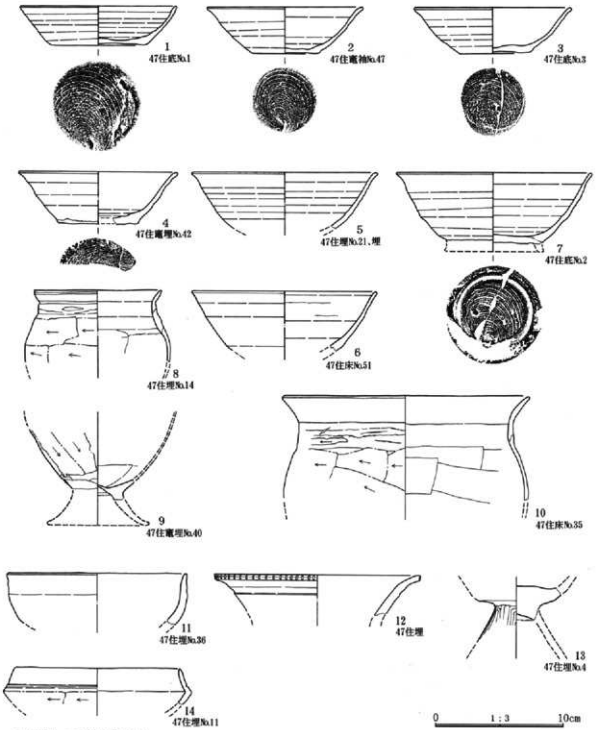


1．黒褐　(10Y R3/1)　軽石、焼土・木炭粒微か含む。
2．黒褐　(10Y R3/1)　軽石、焼土・木炭粒微か含む。少し還元し、僅かに締まる床面。
3．黒褐　(10Y R3/1)　軽石、焼土・木炭粒微か含む。少し還元し、僅かに締まる床面。2層より黒ずみ軟らかい。
4．黒褐　(10Y R3/1)　軽石、焼土・木炭粒少量含み、やや軟らかい。一部は掘方埋土。
5．灰黄褐　(10Y R4/2)　軟らかい。ローム漸移的。
6．褐灰　(10Y R4/1)　粘性土、床下土灰混土。粘土粘かん。
6'．褐灰　(10Y R4/1)　6層より還元気味。粘土粘かん。
6"．褐灰　(10Y R4/1)　6・6'層より少しシルト質。粘土粘かん。
7．黒褐　(10Y R3/1)　ローム小ブロック僅か含む。掘方埋土か。
7'．黒褐　(10Y R3/1)　掘方か不明。
8．ローム土。

竈

1．黒褐　(10Y R3/1)　焼土・木炭粒含む。
2．褐灰　(10Y R4/2)　ローム漸移的。
3．黒褐　(10Y R3/1)　ロームブロック含む。
4．黒褐　(10Y R3/1)　軽石、焼土・木炭粒僅か含む。
5．黒褐　(10Y R3/1)　軽石、焼土・木炭粒僅か含む。少し還元し、僅かに締まる床面。

第156図　住居跡47遺構図

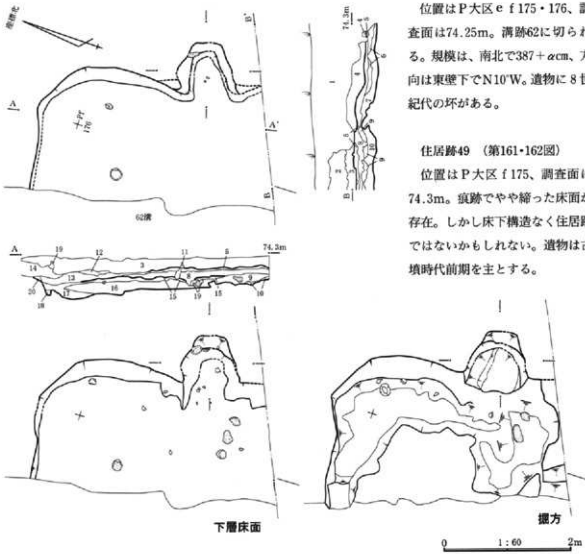


第157図　住居跡47遺物図

住居跡47　(第156・157図、図版28・158)

位置はP大区ｈｉ175・176、調査面標高74.2m。重複は、現代溝と近世以降の小溝が切る。規模は東西250cm、南北243cm、方向は南北軸でN10°Wを測る。施設は、東壁に竈が、掘方に床下坑がある。遺物は、竈・床の個体に拠れば9世紀前半が得られ、住居の生活時期もその頃である。

住居跡48　(第158・159・160図、図版29・158)



位置はＰ大区ｅｆ175・176、調査面は74.25m。溝跡62に切られる。規模は、南北で387＋αcm、方向は東壁下でN10°W。遺物に８世紀代の坏がある。

住居跡49　（第161・162図）

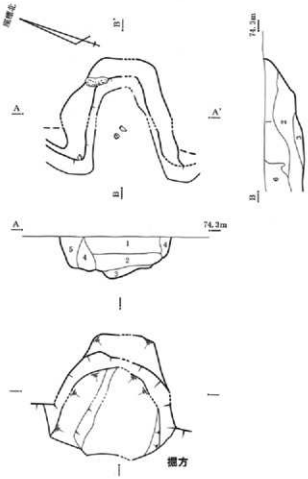
位置はＰ大区ｆ175、調査面は74.3m。痕跡でやや締った床面が存在。しかし床下構造なく住居跡ではないかもしれない。遺物は古墳時代前期を主とする。

1．黒褐　(10YR3/1)　横乱と62・63号溝埋土。
2．黒褐　(10YR3/1)　As−A含む。粗質。
3．黒褐　(10YR3/1)　As−B含む。粗質。
4．黒褐　(10YR3/1)　As−B含む。やや締まる。
5．黒褐　(10YR3/1)　As−A・B含むが床面状に締まる。道跡か。
6．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック少量含む。締まる。住居床面状の硬さあり。
7．にぶい黄褐　(10YR5/4)　ローム漸移的、ロームブロック含み、部分的に黒褐色土含む。埋没埋土。
8．黒褐　(10YR3/1)　軽石(Hr−FPか)含む。焼土粒少量含む。
9．黒褐　(10YR3/1)　軽石(Hr−FPか)含む。締まり、還元気味。倒木の一部か。
10．黒褐　(10YR3/1)　軽石(Hr−FPか)含む。締まり弱い。
11．黒褐　(10YR3/1)　粗質、根か。
12．黒褐　(10YR3/1)　軽石多く、焼土粒僅か含む。軟らかい。
13．黒褐　(10YR3/1)　軽石多く、焼土粒僅か含む。軟らかい。
14．にぶい黄褐　(10YR5/4)　ローム漸移状、軟らかい、倒木か。
15．黒褐　(10YR3/1)　やや締まり、上面、下面床。下面ロームブロック縞をなし床となる。
16．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック多く含む。
17．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック含まず。
18．にぶい黄褐　(10YR7/4)　粘性あり。倒木に伴うか。
19．ロームブロック。
20．にぶい黄褐　(10YR4/3)　ローム漸移。

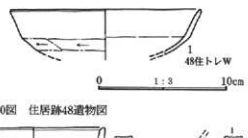
第158図　住居跡48遺構図

住居跡50　（第163・164図、図版29・159）

位置は、Ｐ大区ｎ・ｏ176・177にあり、調査面は74.25m。重複は後世土坑と溝58に切られる。規模は南北長418＋αcm、東西推定355cm、方向は東壁でN6°30′を測る。施設に竈至近を思わせる木炭・焼土柱の分布が東壁至近に、掘方に床下坑が存在していた。遺物は、平安時代・古墳時代半ばであるが、住居形態からすると平安時代、第164図1・2に見る９世紀中頃がその時期かもしれない。２点とも床ではない。

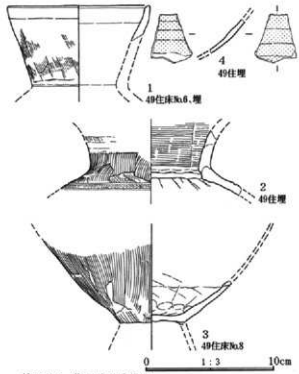


第159図　住居跡48遺構図



第160図　住居跡48遺物図

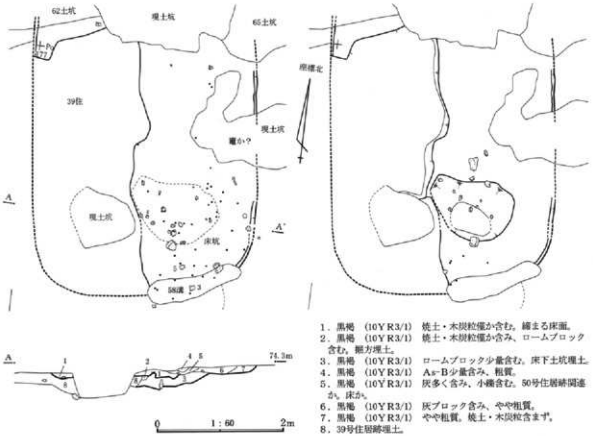
第161図　住居跡49遺構図



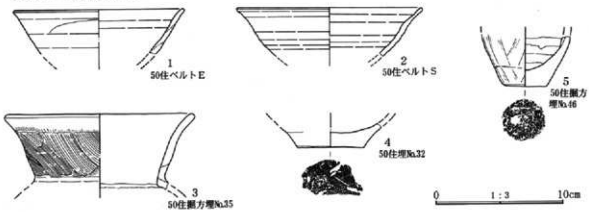
第162図　住居跡49遺物図

竈

1．黒褐　(10Y R3/1)　焼土粒多く、木炭少量含む。粗質。
2．黒褐　(10Y R3/1)　焼土粒少量含み、粗質。
3．褐灰　(10Y R4/2)　ロームブロックを主とし、焼土粒含む。撹乱埋土か。
4．黒褐　(10Y R3/1)　焼土粒微量含み、締まる。
5．黒褐　(10Y R3/1)　焼土粒僅か含む。住居埋土か。
6．黒褐　(10Y R3/1)　軽石含み、別遺構埋土か。



第163図　住居跡50遺構図



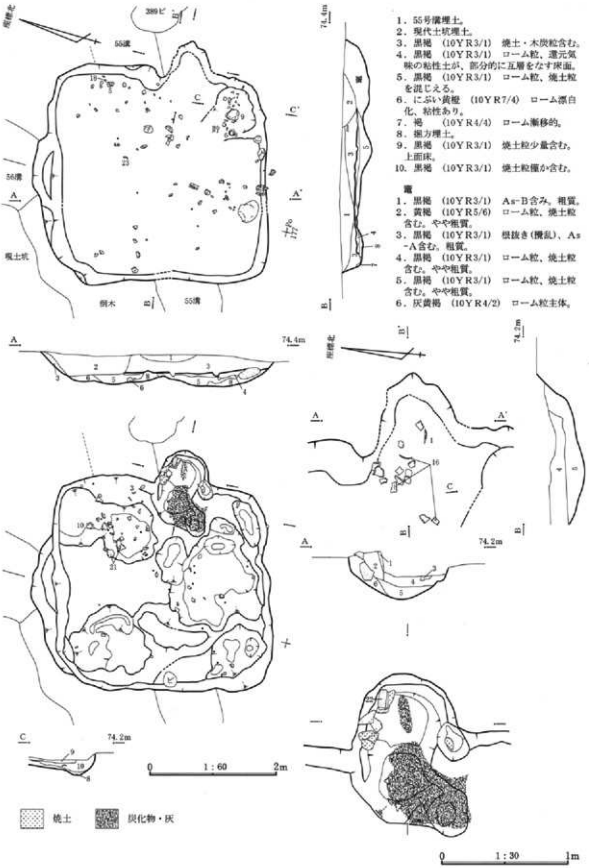
第164図　住居跡50遺物図

住居跡51　(第165・166・167図、図版30・159・160)

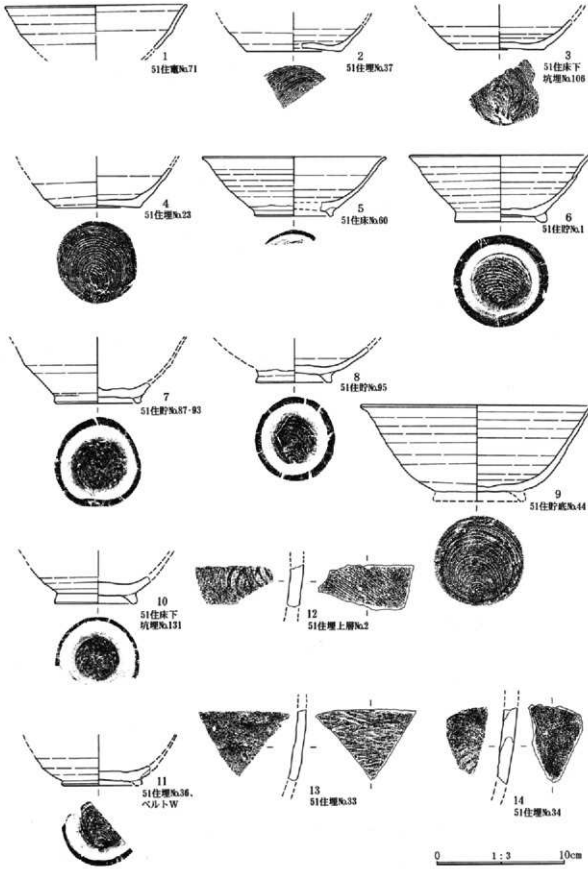
位置はＰ大区ｏ176･177、調査面標高74.3m。重複は、倒木・溝55・現代穴など後出する。規模東西358cm・南北338cm、南北中軸でN11°Wを測る。施設は東壁に竈・貯蔵穴・床下坑がある。遺物は９世紀中頃を中心とし、生活機能もその頃である。

住居跡52　(第168・169図、図版30・160)

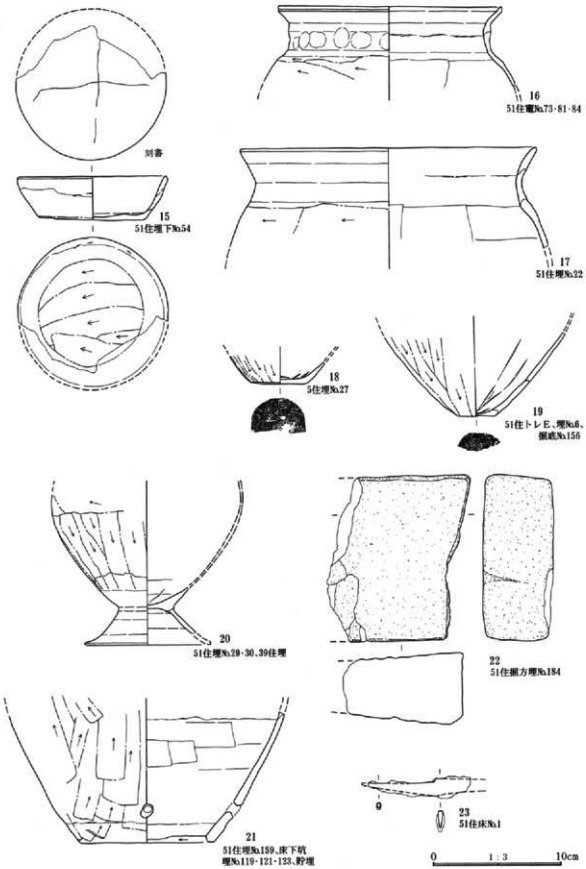
位置はＰ大区ｒ178。重複は住居跡16に切られる。規模は東西196cm、方向は中軸直交でN2°30'Wである。東壁に竈、床下掘込みがある。遺物は第169図１床面を捉えれば８世紀後半で、生活もその頃であろう。



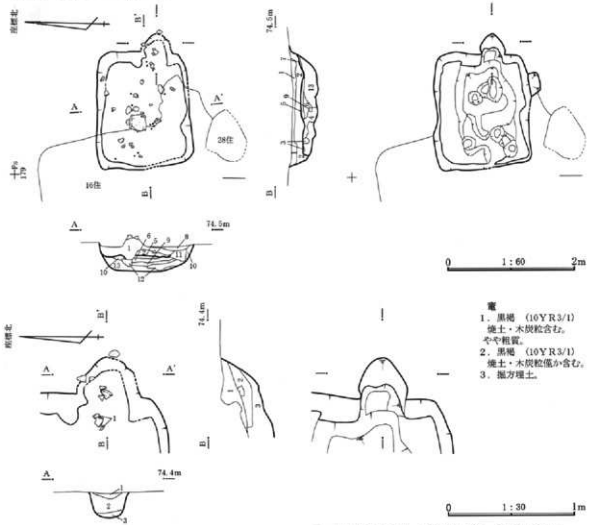
第165図　住居跡51遺構図



第166図　住居跡51遺物図



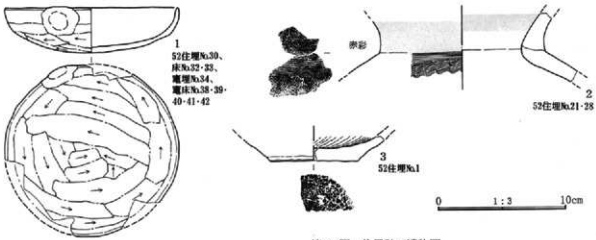
第167図　住居跡51遺物図



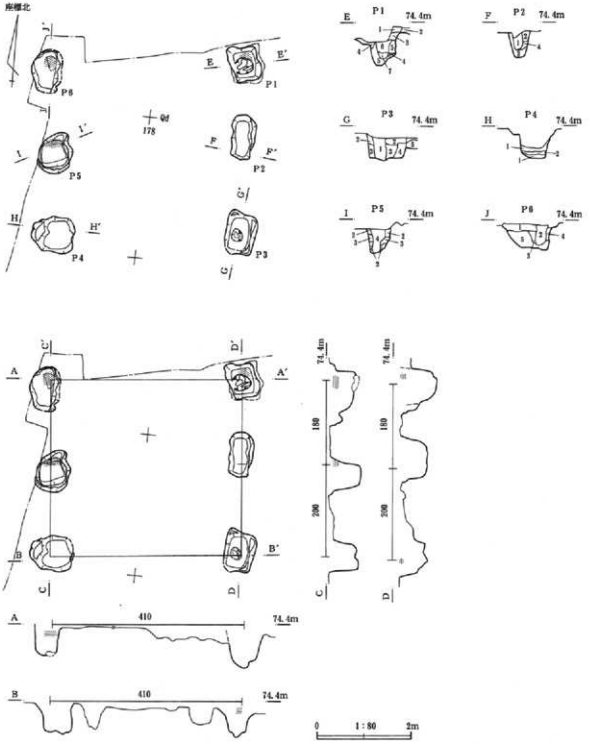
竈
1．黒褐　(10YR3/1)
焼土・木炭粒含む。
やや粗質。
2．黒褐　(10YR3/1)
焼土・木炭粒僅か含む。
3．褐灰色粘土。

1．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒僅か含む。
2．黒褐　(10YR3/1)　焼土粒・木炭粒含む。
3．灰黄褐　(10YR4/2)　ローム部白化、粘性ブロック多い床下。
4．灰黄褐　(10YR4/2)　3層よりさらに粘性ブロック多い床下。
5．黒褐　(10YR3/1)　黒灰色味あり、少し還元気味の粘性土。締まる床。
6．にぶい黄褐　(10YR5/4)　ロームブロック含むが、黒味の方が強い。
7．黒褐　(10YR3/1)　木炭粒少量含む。竈に近いためか。
8．黒褐　(10YR3/1)　1層に近い。
9．黒褐　(10YR3/1)　1層に近い。焼土粒少量含む。床下。
10．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック含み、やや締まる。
11．黒褐　(10YR3/1)　ローム小ブロック少量含む。
12．明黄褐　(10YR6/6)　ロームブロックを主とし、黒色土がブロック状に入る床下。
13．褐方埋土。

第168図　住居跡52遺構図

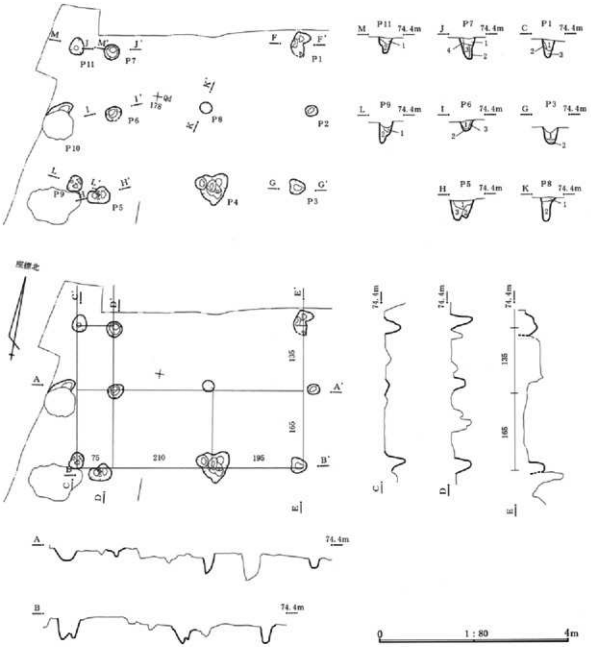


第169図　住居跡52遺物図



Ｐ１
1．暗褐（10YR3/3）　黄褐色土粒５％混入。
2．黒褐（2.5Y3/1）　炭化物含み色調暗い。
3．オリーブ褐（2.5Y4/4）　やや締まる。
4．黄褐（10YR５/６）　黒褐色土大ブロック（2.5YR3/1）混合土。
5．暗褐（10YR3/3）　黄褐色土小ブロック５％、黒褐色土小ブロック５％混入。
6．暗褐（10YR３/３）　黄褐色土大ブロック10％、黒褐色土大ブロック10％混入。
7．暗褐（10YR3/3）　黄褐色土小ブロック５％混入。

第170図　掘立柱建物跡１遺構図



P１
1．暗褐色砂質土　(7.5YR3/3)　As-B含む。黄色粒僅か含む。
2．暗褐色砂質土(7.5YR3/3)と黄褐色土(10YR5/6)との混合土。
3．暗褐色砂質土　(7.5YR3/3)　黄褐色土大ブロック20%混入。

P３
1．暗褐　(10YR3/4)　黄色土ブロック５%混入。
2．暗褐　(10YR3/4)　灰黄色土大ブロック20%混入。

P５
1．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%混入。
2．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック20%混入。
3．黒褐　(7.5YR2/2)　黄褐色土小ブロック５%混入。

P６
1．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%、炭化物粒含む。
2．黄褐色土(10YR5/6)と暗褐色土(7.5YR2/2)の混合土。
3．ローム土。

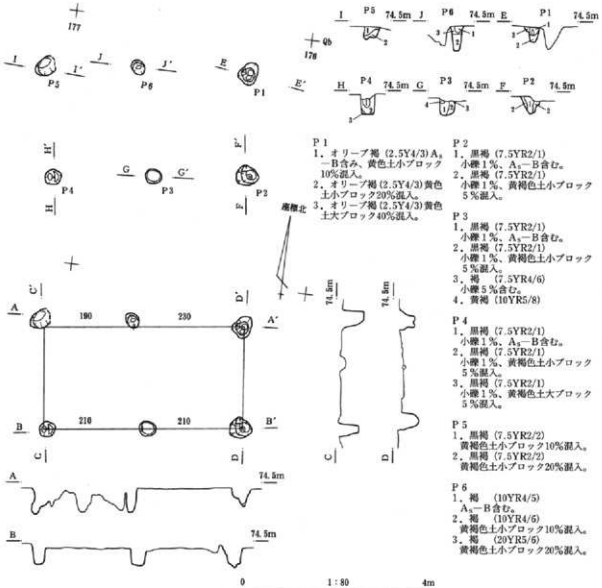
P７
1．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%混入。
2．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%、黒褐色土小ブロック10%混入。
3．暗褐　(7.5YR2/2)　黄褐色土小ブロック10%混入。
4．ローム土。

P８
1．暗褐　(7.5YR3/3)　As-B含む。
2．暗褐　(7.5YR3/3)

P９
1．にぶい黄褐　(10YR4/3)　黒色土小ブロック10%、炭化物粒含む。
2．黒褐　(7.5YR2/2)

P11
1．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック５%混入。
2．黒褐　(7.5YR2/2)　黄褐色土小ブロック５%混入。

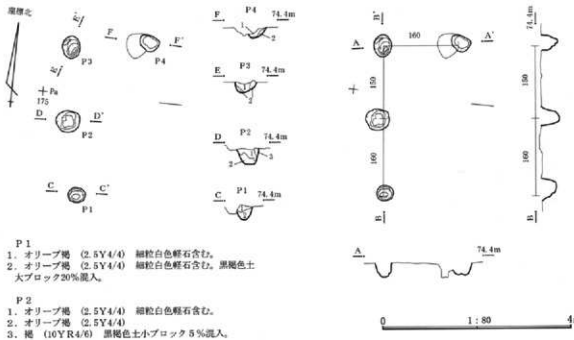
第171図　掘立柱建物跡２遺構図



第172図　掘立柱建物跡３遺構図

２、掘立柱建物跡

Ｐ東区では、15棟の掘立柱建物跡をまとめることができた。調査に当り、初段階で柱穴や小穴の多い区域であることが明らかであったので、ある程度の予測を立てながら遺構輪郭・建物抽出に努めた。したがって本書で扱う建物跡は、調査後に抽出した例は無く、調査中にまとめた。また柱間算出も測図直後の割出しである。一棟単位の同時性は、柱穴相互の規模・形態・埋土もしくは築土に共通性があることを前提とする。調査時の500を超えるピット・柱穴数は、土層断面注穴の省力化と全体を時期別や埋土傾別で通観する必要性から埋土を分別した。１類は、浅間山Ｃ軽石（A_s－Ｃ・４世紀）らしき軽石を含む時。２類は、軽石をほとんど含まない時。３類は、築土層を伴なう場合、それは８世紀代の構築を主とする大形柱穴に見られる。４類は微細な白色・軽石を含む時。５類は、浅間山Ｂ軽石（A_s－Ｂ・12世紀初期頃）混りを含む時。６類は、浅間山Ａ軽石（A_s－Ａ・天明三年）を含む時に各々用いた。概要については73頁で触れた。



P 1
1．オリーブ褐　(2.5Y4/4)　細粒白色軽石含む。
2．オリーブ褐　(2.5Y4/4)　細粒白色軽石含む。黒褐色土大ブロック20%混入。

P 2
1．オリーブ褐　(2.5Y4/4)　細粒白色軽石含む。
2．オリーブ褐　(2.5Y4/4)
3．褐　(10YR4/6)　黒褐色土小ブロック5%混入。

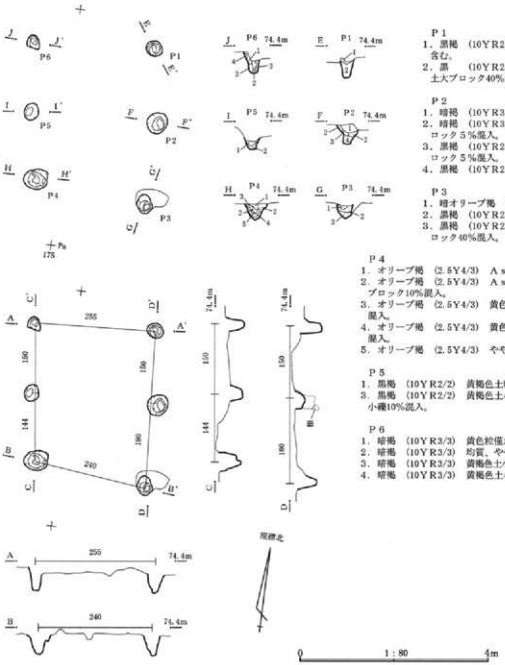
P 3
1．オリーブ褐　(2.5Y4/3)　細粒白色軽石含む。
2．オリーブ褐　(2.5Y4/3)　黄褐色土小ブロック5%混入。

P 4
1．黒褐　(10YR2/2)　細粒白色軽石含む。
2．黒褐　(10YR2/2)　黄褐色土大ブロック40%混入。

第173図　掘立柱建物跡4遺構図

掘立柱建物跡1　(第170、図版32)

位置はQ大区c・d177・178に位置する。調査面は標高73.5mである。発見された6柱穴は、整理上ピ1～6まで付したが、調査時に6穴のまとまりを同時穴で確認できた訳ではなく、ピ1は旧ピ52、ピ2は旧ピ69、ピ3は旧ピ29、ピ4は旧坑42、ピ5は旧坑51、ピ6は旧ピ83であった。重複は掘立柱建物跡が後出して重なる。規模は、柱芯南北375cm、柱芯東西410cm、方向はN5°Wを測る。各柱穴は、隅丸方形～長隅丸方形気味となり、ピ2・6は長隅丸方形気味で、建替えによる結果なのかは不明であった。また土層断面・平面上の柱痕から考えられる柱の掘え方からすると、柱穴掘方の部分的に生じた中段は、関係付かない場合の方が多く、建替なしとする考え方を全面肯定することはできない。さらにピ4の場合、土層断面Hは唯一柱痕位置から外れた土層断面であるが、土層は水平堆積気味に築土され、他の柱穴は10cmを超える層厚半位があること柱痕の左右で築土状態が異なると云った特徴点とも共通性が薄いことからすればピ4の土層は、最終柱穴前代の状況をとどめているとも考えられる。そのため掘立柱建物跡1は、ある程度、建替えの可能性ありとしておきたい。建物規模は、平面柱痕と土層断面柱痕の2者を用いて考えた結果、柱痕は抜取りのため実数を割引いて考える必要性もあることを先にことわっておきたい。数値はピ1で25cm前後、ピ2で18cm、ピ3で24cm、ピ5で25cm前後、ピ6で22cmを、ピ2・3・6は現場での測定である。その柱痕位置（第170図上）を用いて、建物観を求めたのが同下図である。他の大形柱穴を伴なう建物跡と柱穴の掘り方形態、規模、埋土の10cmを超える築土単位が柱痕左右で異なる特徴を持つ一群の時期か第186図に示した7世紀末から8世紀であった時に使用尺は30cmを単位として考えると前出の規模値が得られる。桁行1間の410cmは、およそ13尺6～7寸、梁側南1間195cmは6尺5寸、2間目の180cmは6尺と考えられる。建物構造は、長辺中央に棟持がなく短辺側に設けられていること、奇数間側は開放性があること、開放性の1間は、410cmと長大であるこ

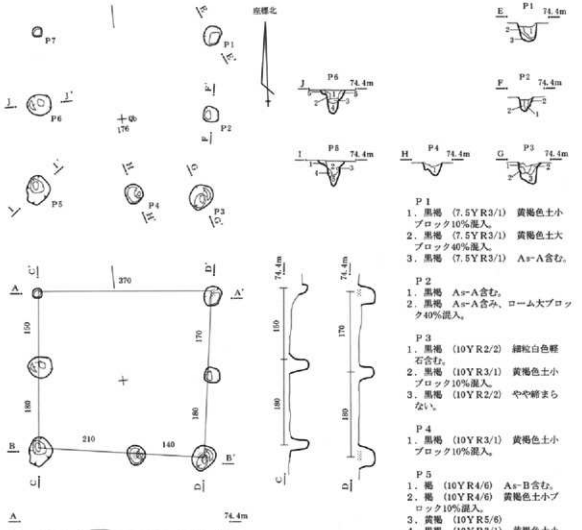


第174図　掘立柱建物跡５遺構図

とからすると門跡が考えられ、その場合は四脚門である。四脚門の信疑を問うべく北接市道下ｅ176・177を調査したがその延長は存在しなかった。おそらく73頁で触れた広場的空白が南接すること８世紀代掘立柱建物群の延長上に存在することなどからすれば、それら建物群施設の北門に相当していたと推考しておきたい。

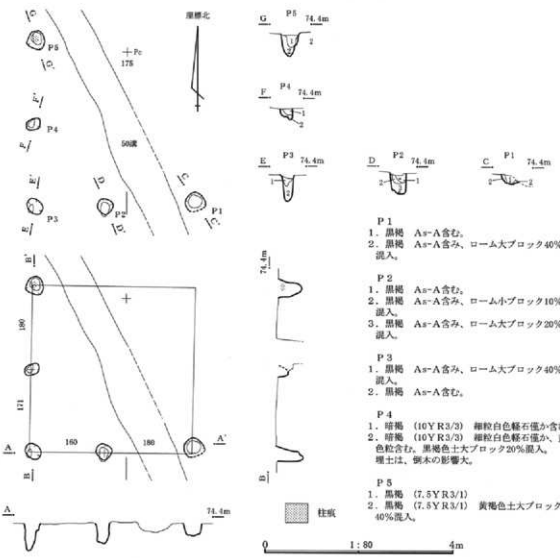
掘立柱建物跡２　(第171図、図版32)

位置はＱ大区ｃｄ17･178にあり、調査面は標高74.3m。重複は、上面をＡ$_s$－Ｂ混りの中世様粗質土が直上までおよんでいた外、小規模な柱穴が多く存在していたが、柱穴埋土類形５類中での新古は不明瞭であった。遺構の発見は、自然発生的に明らかとなったのではなく、まとめるべく考慮の結果である。規模は、柱筋の



第175図　掘立柱建物跡6遺構図

通りの極めて悪い、南北棟と考えられる桁行2＋2間、梁行2＋2間に西庇付設建物である。柱穴名称ピ1～11に関して、調査時は、ピ1は旧ピ19、ピ2は旧ピ81、ピ3は旧ピ90、ピ4はNoなし、ピ5は旧ピ28、ピ6は旧ピ47、ピ7は旧ピ31、岩8は旧ピ50、ピ9は旧ピ34、ピ10はNoをなし、ピ11は旧ピ30であった。規模は、桁側南北で南から165＋135cm＋であり、梁側東より195＋210＋庇75cmを、方向は南北中軸で$N9^{\circ}W$を測る。柱穴形態は、径30cm弱の不整円形を呈する。埋土は、A_s－B混りの5類のため、天明三年前代に遡ぼる、そのため当地域の民家建築の礎石建が一般化した18世紀前代から掘立柱建物が見られなくなる11～14世紀間以降の間と云うことになるが、中世と考えられる溝跡45の方向性とほぼ一致することなども加えると、おそらくは15・16世紀頃の建物跡ではないかと思われる。



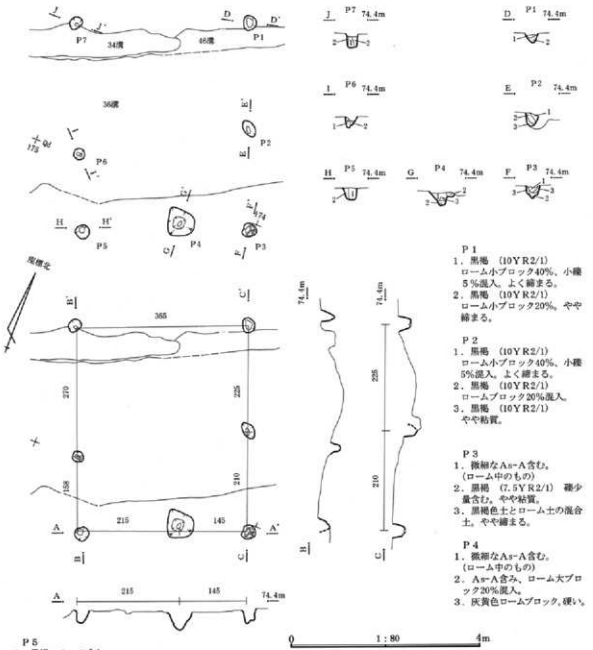
第176図　掘立柱建物跡７遺構図

掘立柱建物跡３　（第172図、図版32）

位置はＱ大区ａ176・177にあり、調査面標高74.4m。重複は坑48と重なるが新古不明であった。形は棟筋東西で桁行２間、梁行１間で桁行２間は閉鎖感のある建物である。南側桁行は東より210＋210cm、北側桁行は230＋190cm、梁行215cm前後である。方向はN6°W。柱穴は35cm前後で、平面近円形、深さ40cm前後である。埋土は５類でA$_5$－B混りであるため、18世紀以前から14世紀頃の間の存在であることは、掘立柱建物跡２と共通するが、微弱な遺物中、その間の時期性を示唆する土器の出土はない。

掘立柱建物跡４　（第173図、図版32）

位置はＰ・Ｑ大区ｔ・ａ174にあり、東側は調査区外。調査面は標高74.3m。重複は溝跡52と重さなるが新古不明。形は東に広がる様相を見せるがＬ字形柵が掘立柱建物となるかは不明。規模は西側で北より150＋160cm、北側で160cm、方向はN7°Wを測る。柱穴の平面近円形で径40cm前後、深さ25cm前後である。埋土は１類でA$_5$－Ｃと見られる軽石粒入る。遺物の出土はない。



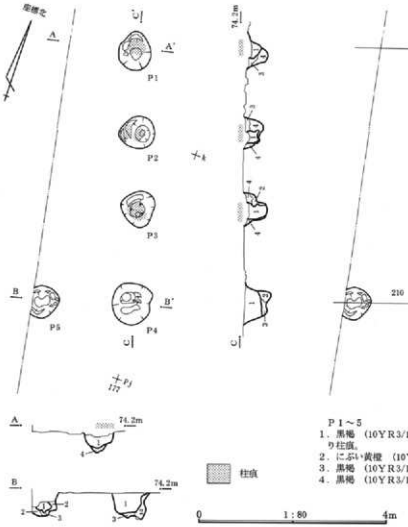
第177図　掘立柱建物跡８遺構図

掘立柱建物跡５　(第174図、図版32)

位置はＰ大区ａ174、調査面は74.3mである。重複は、溝跡50・51・52と重なるが、両者とも、埋土５類で、新旧判別不明。形態規模は南北棟で、東側柱間は南より180＋150cm、西側は南より144＋150cm、梁側は南側で240cm、北側で255cm、方向は西側柱でN8°W、東側柱でN3°45′を測る。遺物は微弱で、埋土から構築時期は、18世紀から14世紀の間にある。

掘立柱建物跡６　(第175図、図版32)

位置はＱ大区ａ・ｂ175・176にあり、調査面標高74.3m。重複は東北隅柱穴が溝跡52にかかり、溝が後出



第178図　掘立柱建物跡９遺構図

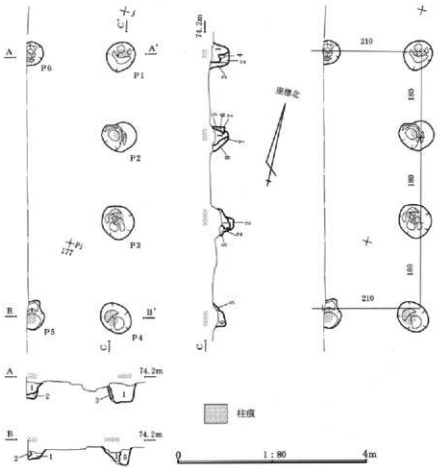
する。形態・規模は、桁・梁行の一辺の長い不整方形を呈す。東面側北より170＋180cm、南面側東より140＋210cm、西面北より150＋180cm、北面側で370cm、方向は南北中軸でN5°30′W、南辺の東西で南側に8′偏る。遺物は薄弱で、埋土類形４類であり、それは、6・5類に先だつことが分かっているので12世紀以前の構築となる。

掘立柱建物跡７　(第176図、図版32)

位置はＰ大区ｂ・ｃ174・175に、発見面は74.3m。重複は住居跡42・井戸跡７と北東隅柱穴・東辺中央の柱位置が平面上で重なるが、住居跡・井戸跡調査を先行したため、柱穴想定位置柱穴を失なった。そのため重複不明である。形態は、南北軸を棟筋とした長方形で、東辺は、掘立柱建物跡５と柱筋を揃える。規模は桁行西側北から180＋171cm、梁行南側東より180＋160cm、方向性は中軸でN1°31′Wを測る。遺物は薄弱であるが埋土類形は、A_5－Bを混える５類のため、天明三年前代から14世紀の間の構築となる。

掘立柱建物跡８　(第177図、図版33)

位置はＱ大区ａ・ｂ174に、発見面は74.3m。重複は住居跡42、溝跡34・36・46と重さなり、各遺構が重さ



第179図　掘立柱建物跡10遺構図

なる。形態は、南北に棟筋をとる。形態は、ほぼ長方形で、桁行２間、梁行２間である。規模は、東側で北より225＋210cm、南側東より145＋215cm、西側先より270＋158cm、北側で365cmを、中軸でN20°Wを計る。遺物は薄弱であるが、埋土類形６類でA_s－Aを含むため、18世紀末以降の構築となる。

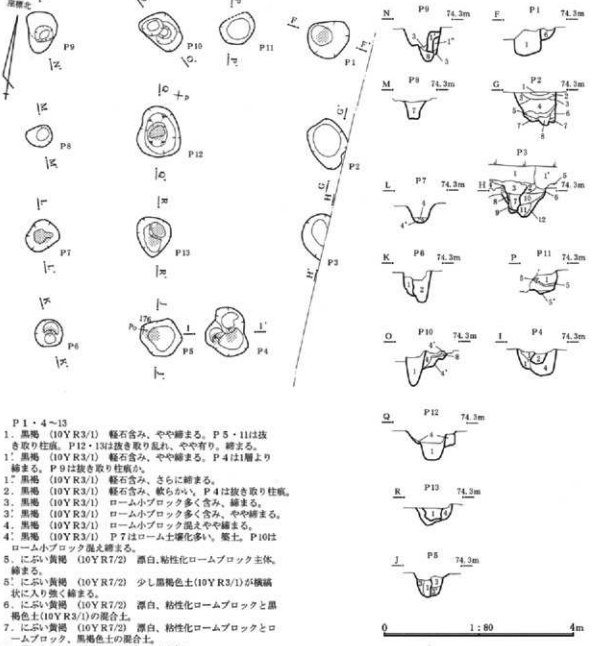
掘立柱建物跡９　(第178・186図、図版33・160)

位置は、P大区ｊ・ｋ177に、調査面標高74.15m。形態は、南北棟、桁行３間、梁行２間と考えられ、径70cm前後の大形柱穴を持つ。柱穴内と平面上には抜取柱痕があり、断面通りの良いピ３で径31cm。規模は、梁側で210cm、桁側で180cm等間、N18°15'Wを測り、柱筋は良い。ピ４の旧ピ165から第186図２の８世紀後半の坏があり、直結の遺物である。埋土は３類で薄い水平の築土でなく、層厚10cmを超える場合が多い。

掘立柱建物跡10　(第179図、図版33)

位置はP大区ｈ・ｉ176・177、調査面標高74.1m。形態は、南北棟、桁行３間、梁間２間と考えられ、径60cm前後の大形柱穴を持つ。柱穴内と平面上に抜取柱痕があり、総体で28～31cmの径があるが柱筋は前出９より良くなく、掘込みも浅い。規模は桁側180cm等間で梁側210cm、方向N13°Wを測る。埋土は３類で築土層厚は10cmを超える場合が多い。遺物は微弱であった。

掘立柱建物跡11　(第180・186図、図版33・160)

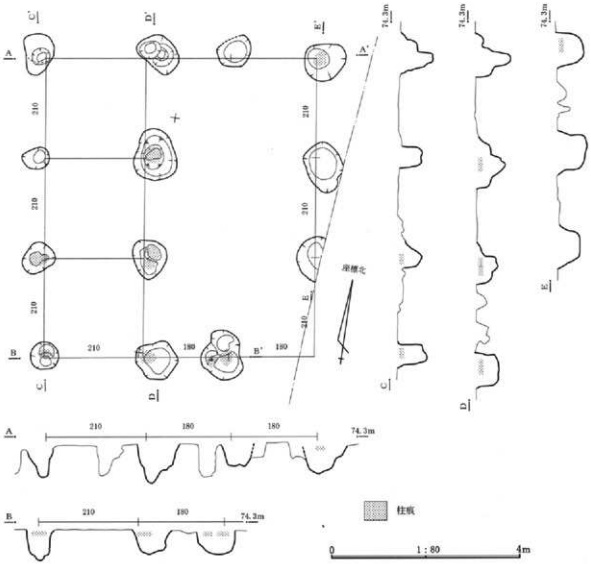


Ｐ１・４～13
1．黒褐（10Ｙ R3/1）　軽石含み、やや締まる。Ｐ５・11は抜き取り柱痕。Ｐ12・13は抜き取り乱れ、やや有り。締まる。
1′黒褐（10Ｙ R3/1）　軽石含み、やや締まる。Ｐ４は1層より締まる。Ｐ９は抜き取り柱痕か。
1″黒褐（10Ｙ R3/1）　軽石含み、さらに締まる。
2．黒褐（10Ｙ R3/1）　軽石含み、軟らかい。Ｐ４は抜き取り柱痕。
3．黒褐（10Ｙ R3/1）　ローム小ブロック多く含み、締まる。
3′黒褐（10Ｙ R3/1）　ローム小ブロック多く含み、やや締まる。
4．黒褐（10Ｙ R3/1）　ローム小ブロック混えやや締まる。
4′黒褐（10Ｙ R3/1）　Ｐ７はローム土壁化多い。堅土。Ｐ10はローム小ブロック混え締まる。
5．にぶい黄褐　（10Ｙ R7/2）　漂白、粘性化ロームブロック主体。締まる。
5′にぶい黄褐　（10Ｙ R7/2）　少し黒褐色土(10Ｙ R3/1)が横縞状に入り強く締まる。
6．にぶい黄褐　（10Ｙ R7/2）　漂白、粘性化ロームブロックと黒褐色土(10Ｙ R3/1)の混合土。
7．にぶい黄褐　（10Ｙ R7/2）　漂白、粘性化ロームブロックとロームブロック、黒褐色土の混合土。
8．褐　（10Ｙ R4/4）　ロームブロック主体。

Ｐ２
1．黒褐　（10Ｙ R2/3）　黄褐色土小ブロック(1～2cm)10％混入。白色軽石粒少量含む。
2．黒褐　（10Ｙ R2/3）　黄褐色土粒、白色軽石粒含む。
3．黒褐　（10Ｙ R3/2）　黄褐色土粒および小ブロック(径0.5～1cm)５％混入。
4．暗褐　（10Ｙ R3/3）　黄褐色土ブロック(径3～5cm)、黄褐色土粒、炭化物粒、白色軽石粒15％混入。
5．黒褐　（10Ｙ R2/3）　黄褐色土小ブロック(径1cm)、白色軽石粒５％混入。
6．暗褐　（10Ｙ R3/3）　黄褐色土ブロック(径3～5cm)10％混入。
7．灰黄褐色土(10Ｙ R 4/2)と黄褐色土ブロック(1～2cm)の混合土。
8．黒褐色土(10Ｙ R3/3)と黄褐色土との互層。

Ｐ３
1．黒褐　（10Ｙ R3/1）　耕作土、As-A含む。
1′褐鉄
2．黒褐　（10Ｙ R3/1）　As-A含む。粗質。
3．黒褐　（10Ｙ R3/1）　As-B含む。粗質。
4．黒褐　（10Ｙ R3/1）　As-B含む。粗質。
5．にぶい黄褐　（10Ｙ R4/3）　ローム崩移様。軟らかい。
6．黒褐　（10Ｙ R3/1）　軽石粒含み、やや締まる。
7．黒褐　（10Ｙ R3/1）　抜き取り柱痕様。軟らかい。
8．黒褐　（10Ｙ R3/1）　やや締まる。
9．黒褐　（10Ｙ R3/1）　締まる。
10．にぶい黄褐　（10Ｙ R4/3）　ロームブロック含み、締まる。堅土。
11．にぶい黄褐　（10Ｙ R4/3）　ロームブロック含み、締まる。堅土。
12．にぶい黄褐　（10Ｙ R4/3）　ロームブロック含み、締まる。堅土。

第180図　掘立柱建物跡11遺構図



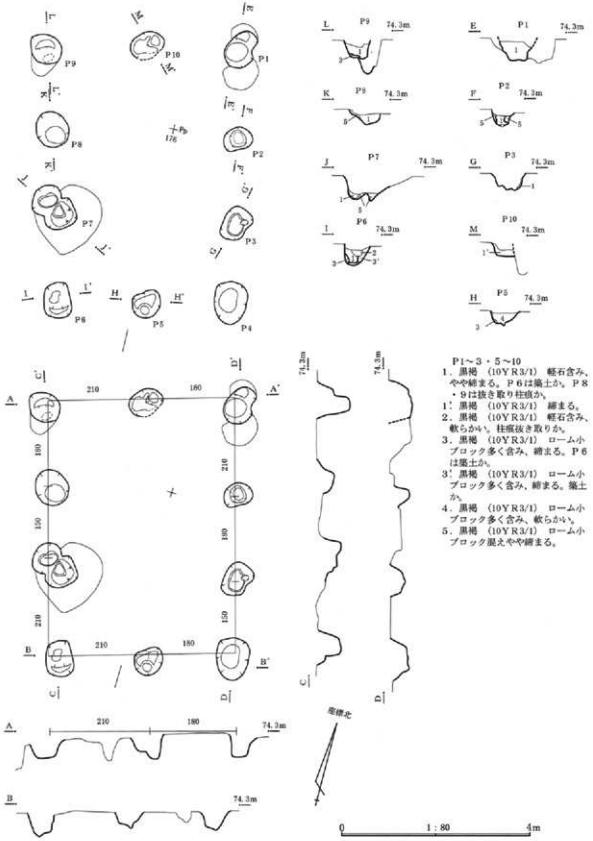
第181図　掘立柱建物跡11遺構図

位置はＰ大区ｎ・ｏ175・176、調査面標高74.15m。重複の後出の掘立柱建物跡12がある。形態は円形気味の径40cm前後、近円形の柱穴で、南北棟、桁行３間、梁行２間、西に庇を付設。柱痕は抜取りで、ピ10で径31cm。庇のピ６で22cmを測るが柱筋は悪い。規模は第181図のとおり、庇部は210cmの等間、身舎梁側で180cm等間、方向はN8°15′を測る。埋土は３類、薄い水平層でなく層厚10cm以上が主である。掘方と平面上前代の柱穴がからみ、建替がなされる。遺物はピ５、旧ピ386から第186図３の８世紀代土師器坏の出土がある。

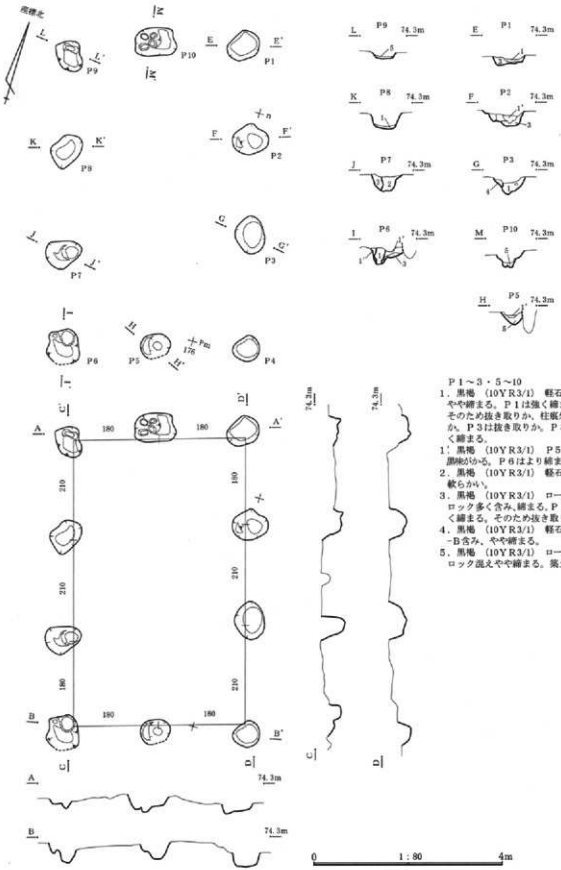
掘立柱建物跡12　（第182・186図、図版33・160）

位置はＰ大区ｏ・Ｐ175・176、調査面標高74.3m。重複は前出11が新しい。形態は円形気味径30～40前の柱穴を持つ南北棟桁行３間、梁行２間の建物で、柱は抜取りと考えられるが良好な柱痕確認はできなかった。規模は桁側で210・150・180cmの取り合せで東西側柱列を、梁側で210＋180cmを、方向はN16°Wを測る。埋土は、３類で、築土層厚単位は厚い。遺物は第186図４の８世紀代蓋もピ10、旧ピ299から出土している。

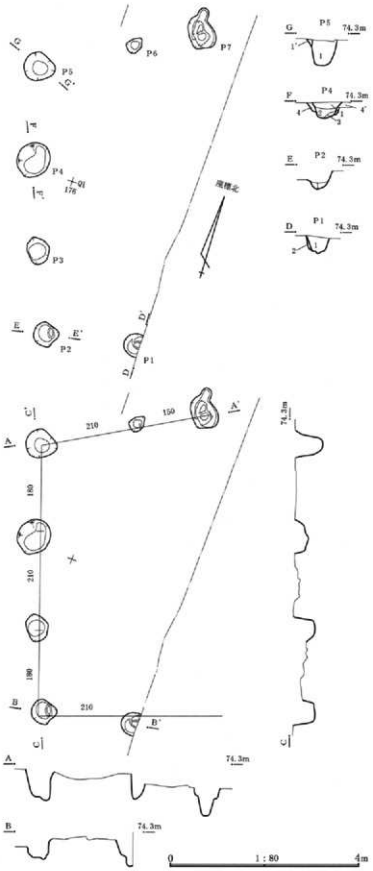
掘立柱建物跡13　（第183、図版33）



第182図　掘立柱建物跡12遺構図



第183図　掘立柱建物跡13遺構図



第184図　掘立柱建物跡14遺構図

Ｐ１・２・５
1．黒褐　(10Ｙ R3/1)　軽石含み、やや締まる。
1'．黒褐　(10Ｙ R3/1)　やや強く締まる。大柱穴なのに柱痕見えず。
2．黒褐　(10Ｙ R3/1)　ローム小ブロック混えやや締まる。

Ｐ４
1．黒褐　(10Ｙ R3/1)　細粒白色軽石入る。軟らかい。
2．黒褐　(10Ｙ R3/1)　細粒白色軽石入る。やや締まる。
3．にぶい黄褐　(10Ｙ R5/4)　細粒白色軽石含み、ローム粒個か含む。６ｃ以降の遺物（土師器）入る。締まる。
4．にぶい黄褐　(10Ｙ R5/4)　ローム斑様状。人為埋土。
4'．にぶい黄褐　(10Ｙ R5/4)　人為埋土。

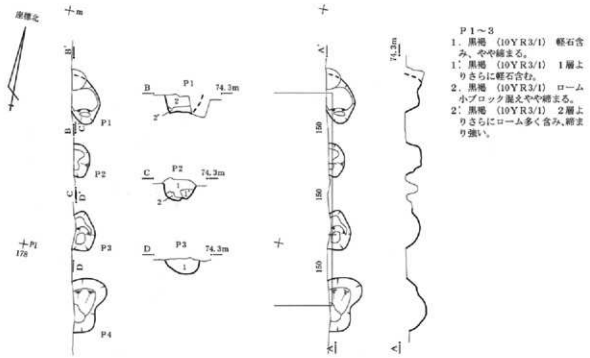
位置はＰ大区１・ｍ・ｎ175・176、調査面標高74.2m。重複は、住居跡46が先行。形態は棟筋を南北に桁行３間、梁間２間。規模は桁行180＋210＋210cmで東西列との関係は取合せ数値であり、梁間は180cm等間、方向はＮ16°Ｗを測る。建物認定が遅れたため柱痕確認できず。築土は、薄く細くなく、埋土３類である。遺物薄弱であるが、棟筋の通り目や周辺建物跡の関連から、８世紀代に構築されたと考えられる。

掘立柱建物跡14（第184･186図、図版33・160）

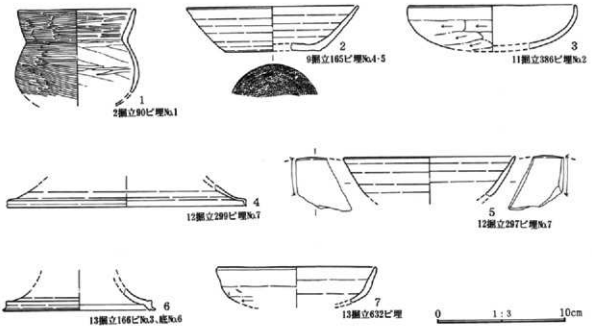
位置はＰ大区ｋ１175、調査面標高74.2m。重複は、住居跡46が先行。形態は、南北棟筋の桁行３間･梁行２間、不整な長方形と推測されるが東側は調査地外のため不明瞭。規模は西側柱列で180＋210＋180cm、北側で210＋150cmを、方向は西列でＮ18°45'Ｗ、北列でＮ65°15'Ｗを測る。柱痕は未確認、埋土３類。遺物はピ２旧ピ632から第186図７の８世紀代土師器坏が出土し、構築もその頃と考えられる。

掘立柱建物跡15　（第184図、図版33）

位置はＰ大区ｋ１177、調査面標高



第185図　掘立柱建物跡15遺構図

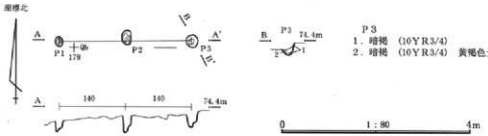


第186図　掘立柱建物跡２・９・11・12・13遺物図

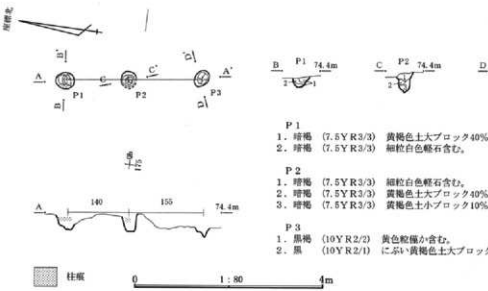
74.2m。重複は周辺ピット・土坑が後出。形態は南接連続の掘立柱建物9・10の位置規模から南北棟筋で桁行３間、梁行２間と推測される。規模は東列で150＋150＋150cm、方向はN11°W。埋土は３類。遺物薄弱。構築時期は、南接建物列との関連から８世紀代と考えられる。

３、柵列跡　(第187～193図、図版34)

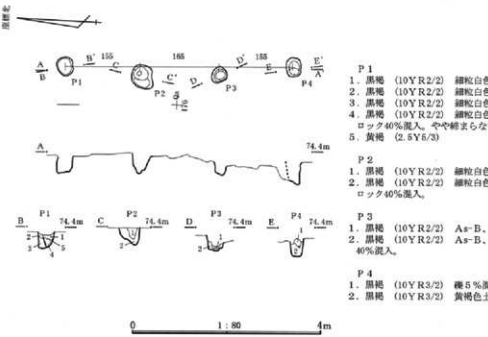
P東区において７条の柵列跡をまとめることができた。埋土類別は掘立柱建物跡、ピット共通である。



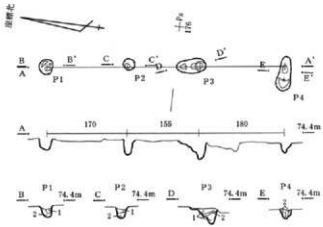
第187図　柵列１遺構図



第188図　柵列２遺構図



第189図　柵列４遺構図



P 1
1．白色細粒軽石微弱～ほとんど見えず。色調やや黒ずむ。
2．ローム小ブロック10%混入。白色細粒軽石微弱～ほとんど見えず。色調やや黒ずむ。

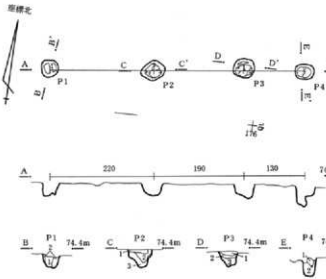
P 2
1．黒褐　As-A含む。
2．黒褐　As-A含み、ローム大ブロック40%混入。

P 3
1．黒褐　As-A含む。
2．黒褐　As-A含み、ローム大ブロック20%混入。

P 4
1．黒褐　As-A含む。
2．黒褐　As-A含み、ローム小ブロック10%混入。

第190図　柵列5遺構図

0　1：80　4m



P 1
1．白色細粒軽石含む。
2．白色細粒軽石含み、ローム大ブロック20%混入。

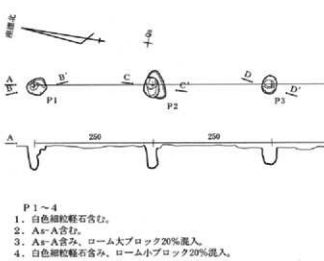
P 2
1．黒褐　(10YR2/2)　細粒白色軽石含む。
2．黒褐　(10YR2/2)　黄褐色土小ブロック10%混入。やや締まらない。
3．黒褐　(10YR2/2)　黄褐色土小ブロック40%混入。やや締まらない。

P 3
1．オリーブ褐　(2.5Y3/3)　白色粗粒軽石含む。(As-C？)
2．オリーブ褐　(2.5Y3/3)　黄褐色土大ブロック5%混入。
3．黒褐　(10YR3/1)　細粒白色軽石微か含む。

P 4
1．黒褐　(10YR3/2)　礫5%混入。
2．黒褐　(10YR3/2)　黄褐色土小ブロック40%混入。

第191図　柵列6遺構図

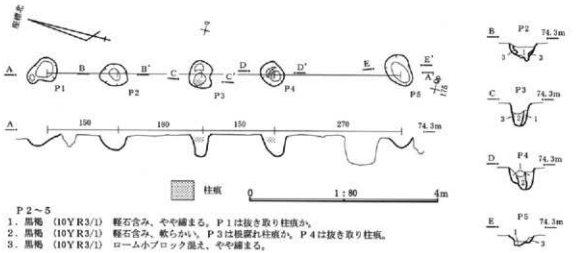
0　1：80　4m



P 1～4
1．白色細粒軽石含む。
2．As-A含む。
3．As-A含み、ローム大ブロック20%混入。
4．白色細粒軽石含み、ローム小ブロック20%混入。

0　1：80　4m

第192図　柵列7遺構図



Ｐ２～５
１．馬鬣　(10ＹＲ3/1)　軽石含み、やや締まる。Ｐ１は抜き取り柱痕か。
２．馬鬣　(10ＹＲ3/1)　軽石含み、軟らかい。Ｐ３は根腐れ柱痕か。Ｐ４は抜き取り柱痕。
３．馬鬣　(10ＹＲ3/1)　ローム小ブロック混え、やや締まる。

第193図　柵列９遺構図

柵列１は、Ｑ大区ｂ177・178にある。調査面標高74.35m。重複はピ２が掘立柱建物跡７ピ５と重なるが新古不明。規模は、東西軸Ｎ89°30′Ｗの傾きで２間、140＋140cmを測る。埋没類別不明。遺物は薄弱である。時期はA_s－Ｂを含を至近の溝跡51・52と共通するため、天明３年前代～12世紀末の間と考えられる。

柵列２は、Ｑ大区ａ・ｂ174にある。調査面標高74.35m。重複はピ１が溝跡57、ピ３が溝跡50と重なるが新古不明。規模は、２間で140＋155cm、方向Ｎ7°30′Ｗを測る。埋土類別は、軽石起源の不明瞭な４類。遺物は薄弱である。時期は、A_s－Ｂ前代、つまり12世紀末以前である。

柵列４は、ＰＱ大区ｔａ174にある。調査面標高74.35m。重複は、ピ４は柵列跡ピ４と同一柱穴を共用し、Ｌ字型柵列を成すと考えられるので重複には当らない。規模は、３間分で北から155＋165＋155cm、方向はＮ0°45′Ｗを測る。埋土は５類で、構築時期は、およそ天明三年前代から12世紀末に限定される。遺物は薄弱である。

柵列５はＰ大区ｒｓ175にある。調査面標高74.3m。重複はない。規模は南北に３間分で北より170＋155＋180cm、方向Ｎ8°45′Ｗを測る。埋土は、１類で、A_s－Ａを含む。遺物は薄弱である。構築時期は、埋土から天明３年以降と考えられる。

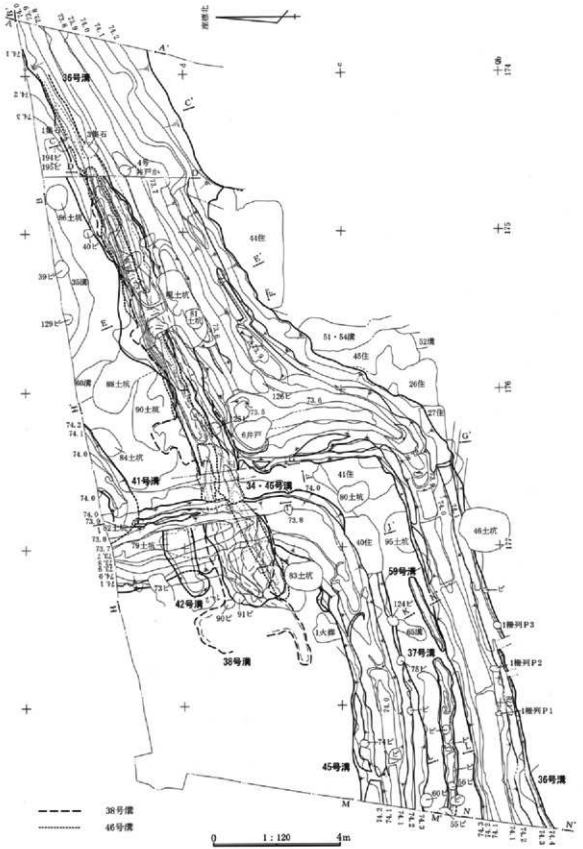
柵列６はＰ大区ｔ175・176にある。調査面標高74.3m。重複はピ１が住居跡８より後出する。東端のピ４はＬ字状柵の折れ曲り点柱穴として共用か。埋土は４類で、起源不明瞭な白色細軽石を含む。遺物は薄弱である。構築時期は、埋土から12世紀末以前が考えられる。

柵列７はＰＱ大区ｓａ177にある。調査面標高74.35m。重複関係は不明瞭である。規模は３間分でおよそ220＋190＋130cmを測り、東西方向より西に4°30′偏じる。埋土は４類で、白色の細軽石を含む。遺物は薄弱である。構築時期は埋土から12世紀末以前が考えられ、８世紀の建物群に方向性は近い。

柵列８はＰ大区ｒｑ175にある。調査面標高74.25m。重複はない。規模は柱穴径50cm弱と柵列中最も大きい。規模は南北に４間分で北から150＋180＋150＋270cm、方向Ｎ14°Ｗを測る。埋土は３類で、柱痕は抜取りで20cm前後。築土状況、埋土から８世紀代建物群に関連する重要柵と考えられる。

４、溝　跡

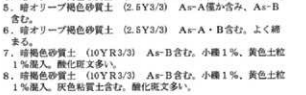
Ｐ東区では32条の溝跡を調査した。同区ではＰ東の北半が旧小林、曲師の集落境になっていたらしく、中世末の溝跡が嵩むこと、図版作成の都合もあり、以下５群に分けて説明したい。



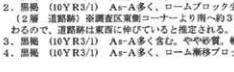
第194図　溝跡34・36～38・41・42・45・46・59遺構図

第195図　溝跡34・36～38・41・42・45・46・59遺物出土状態図

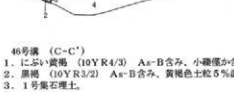
36号溝（A-A'）
1．暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）表土。As-A・B、ビニール含む。
2．暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）As-A５%、As-B、小礫含む。
3．暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）As-B含む。
4．暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）As-B含む。締まらない。
5．暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）As-A僅か含み、As-B含む。
6．暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）As-A・B含む。よく締まる。
7．暗褐色砂質土（10YR3/3）As-B含む。小礫１%、黄色土粒１%混入。酸化斑文多い。
8．暗褐色砂質土（10YR3/3）As-B含む。小礫１%、黄色土粒１%混入。灰色粘質土含む。酸化斑文多い。

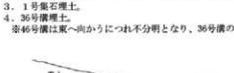


調査区北壁（B-B'）
1．黒褐（10YR3/1）表土。As-A多く含む。
2．黒褐（10YR3/1）As-A多く、ロームブロック少量含む。締まる。（２層　溝跡）※調査区東側コーナーより南へ約３mの所で２層は終わるので、道路跡は東西に伸びていると推定される。
3．黒褐（10YR3/1）As-A多く含む。やや砂質、軟らかく、粗質。
4．黒褐（10YR3/1）As-A多く、ローム漸移ブロック少量含む。
5．黒褐（10YR3/1）As-A多く含む。
6．黒褐（10YR3/1）As-A多く含む。粗質。
7．黒褐（10YR3/1）As-B含む。粗質。
8．黒褐（10YR3/1）As-B含む。締まる。
9．黒褐（10YR3/2）粘性あり、還元気味。水性の影響大。
10．灰黄褐（10YR4/2）やや締まり、ローム小ブロック含む。
11．黒褐（10YR6/6）ブロック状となるローム。
12．黒褐（10YR3/1）As-B含み、やや締まる。
13．暗褐（10YR3/3）As-B含む。やや砂質。ローム小ブロック５%混入。
14．暗褐（10YR3/3）As-B含む。やや砂質。ローム小ブロック10%混入。（13・14層　36号溝）



46号溝（C-C'）
1．にぶい黄褐（10YR4/3）As-B含み、小礫僅か含む。
2．黒褐（10YR3/2）As-B含み、黄褐色土粒５%混入。
3．１号集石埋土。
4．36号溝埋土。
※46号溝は東へ向かうにつれ不分明となり、36号溝のみになる。





9．暗褐色砂質土（10YR3/3）As-B含む。小礫１%、灰色粘質土20%混入。酸化斑文多い。
10．暗褐（10YR3/3）As-B含む。やや砂質。ローム小ブロック５%混入。
11．暗褐（10YR3/3）As-B含む。やや砂質。ローム小ブロック10%混入。
12．黒褐（2.5Y3/1）As-B含む。やや砂質。ローム大ブロック20%混入。やや水成堆積。46号溝か？
13．黒褐（2.5Y3/1）As-B含む。ややシルト質。均質。ノロ状。
14．黒褐（2.5Y3/1）As-B含む。ややシルト質。ローム小ブロック５%混入。
15．黒褐（2.5Y3/1）As-B含む。ローム小ブロック20%混入。
16．黒褐（2.5Y3/1）As-B含む。ローム小ブロック40%層状に堆積。人為堆土か。
17．黒褐（2.5Y3/1）As-B含む。ローム小ブロック10%混入。
18．黒褐（10YR3/1）As-A多く、ロームブロック少量含む。締まる。
19．黒褐（10YR3/1）As-A多く含む。

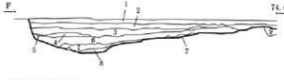
38．46号溝（D-D'）
1．黒褐（7.5YR2/2）黄褐色土粒５%、小礫５%混入。
2．暗褐（10YR3/3）As-B含む。黄褐色土大ブロック20%混入。やや締まる。堰土層。
3．暗褐（10YR3/3）As-B含み、黄色土粒僅か含む。小礫５%混入。黄色土粒僅か。
4．暗褐（10YR3/3）小中礫僅か含む。
5．暗褐（10YR3/3）黄色砂礫40%混入。（1～5層　46溝）
6．暗褐（10YR3/3）As-B含む。黄褐色土大ブロック20%混入。やや締まる。堰土層。
7．暗褐（10YR3/3）As-B含む。
8．暗褐（10YR3/3）As-B含み、黄色土粒僅か含む。小礫５%混入。黄色土粒僅か。
9．暗赤褐（5YR3/3）小礫５%混入。上面酸化層。
10．暗赤褐（5YR3/3）
11．暗赤褐（5YR3/3）黄褐色土小ブロック20%混入。
12．暗赤褐色砂質土（5YR3/3）
13．極暗褐色粘質土（7.5YR2/2）小礫５%混入。
14．極暗褐色粘質土（7.5YR2/3）砂・小礫20%混入。
15．極暗褐色粘質土（7.5YR2/3）砂・小礫20%混入。
16．黄褐（10YR6/6）暗褐色土をモザイクに含む。
17．黒褐（7.5YR2/2）黄褐色土粒５%、小礫５%混入。
18．明黄褐色ローム（2.5YR6/6）縦帆白色軽石（YPかAs-B）（径１cm大）40%混入。（17・18層　倒木痕埋土）

第196図　溝跡36・38・46、調査区北壁土層断面図

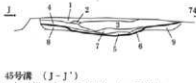
溝跡34・36・37・38・41・42・45・46・59（第194～198・207～214図、図版35～39・164～168）

Ｐ東区の北縁付近に東西を中心にした溝群が第194図のとおり存在している。その中で規模が大きく主体的な存在の大溝は、南側を東西に、中程で折れを持つ西半が溝跡36、東半が溝跡44（第194図ｂ174の36号溝文

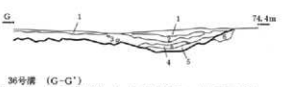
36・46号溝　(E－E')
1．黒褐　(7.5YR3/2)　As－B含む。
2．黒褐　(7.5YR3/2)　As－B含む。黄色土粒５％混入。やや砂質。
3．黒褐　(7.5YR3/2)　As－B含む。黄色土粒１％混入。均質。
（１～３層　34・38・46号溝）
4．黒　(7.5YR1.7/1)　細粒白色軽石含む。小礫１％混入。
5．現代土埋土。
6．黒褐　(7.5YR3/2)　As－B含む。黄色土粒１％混入。
7．黒褐　(7.5YR3/2)　As－B含む。黄色土小ブロック５％混入。酸化斑文目立つ。
8．黒褐　(7.5YR3/2)　As－B含む。黄色土粒１％混入。酸化斑文目立つ。
9．黒褐　(7.5YR3/2)　As－B含む。黄色土粒10％、小礫５％混入。
10．黒褐　(7.5YR3/2)　As－B含む。やや砂質。
11．黒褐　(7.5YR2/2)　As－B含む。黄褐色土小ブロック10％混入。
12．黒褐　(7.5YR3/2)　黄褐色土大ブロック10％混入。ややシルト質。
13．黒褐　(7.5YR2/2)　黄褐色土大ブロック10％混入。
14．にぶい黄褐　(10YR4/3)　黄褐色土粒10％混入。
15．黒褐　(7.5YR3/2)　シルト質。ノロ状。
（６～15層　36号溝）
16．44号住居解埋土。



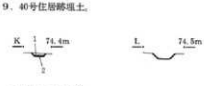
36号溝　(F－F')
1．灰褐　(7.5YR4/2)　As－Aが１％混入。小円礫傾か含む。
2．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック５％混入。１層との層境にサビ層が見られる。
3．灰褐　(7.5YR4/2)　暗褐色土小ブロック10％混入。小円礫含む。
4．灰褐　(7.5YR4/2)　暗褐色土大ブロック40％混入。
5．黒　(10YR2/1)　炭化物を主体とする。
6．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック20％混入。
7．灰褐　(7.5YR4/2)　暗褐色土小ブロック40％混入。砂を含む。
8．にぶい黄褐色砂質土　(10YR4/3)　暗褐色土大ブロック40％混入。
9．44号住居解埋土。



45号溝　(J－J')
1．極暗褐　(7.5YR2/3)　As－B含む。
2．暗褐　(10YR3/3)　As－B含む。黄褐色土小ブロック５％混入。
3．暗褐　(10YR3/3)　As－B含む。黄褐色土小ブロック５％混入。酸化斑文顕著。
4．黒褐　(10YR3/2)　As－B含む。黄褐色土小ブロック５％混入。
5．黒褐　(10YR3/2)　シルト質。ノロ状。
6．黒褐　(10YR3/2)　黄褐色土大ブロック40％混入。
7．黒褐　(10YR3/2)　シルト質ややや多く含む。
8．黒褐　(10YR3/1)　黄褐色土大ブロック40％混入。古代遺構埋土。
9．40号住居跡埋土。



36号溝　(G－G')
1．灰褐　(7.5YR4/2)　As－Aが１％混入。小円礫傾か含む。
2．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック５％混入。１層との層境にサビ層が見られる。
3．灰褐　(7.5YR4/2)　暗褐色土小ブロック10％混入。小円礫含む。
4．灰褐　(7.5YR4/2)　小円礫５％混入。
5．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック20％混入。
6．他遺構埋土。



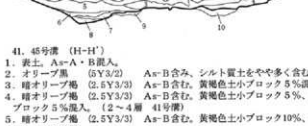
59号溝　(K－K')
1．にぶい黄褐　(10YR4/3)　小礫５％混入。
2．にぶい黄褐色土(10YR4/3)と黄褐色土(10YR5/6)との混合土。
染潤水痕跡は認められず。

0　1：80　4m

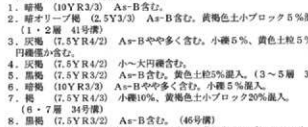
第197図　溝跡36・45・46・59土層断面図

字貼直下にある)で、溝跡36の東側ｂ176付近から40cm以上の深さをもって急下りとなる。溝跡36は幅192cm、深さ40cm、方向は東西より12°西に偏じる。溝跡44は幅360cm、深さ51cm、東西より西に66°45′偏じる。下面は中世と考えられ、埋没土上方は近世である。溝跡36の北側に並び幅234cm、深32cm、東西より西に11°偏じる溝跡45がｃ177付近で北に曲り、Ｐ東区の溝跡110に続く。溝跡45に後出して幅150cm、深さ18、西に24°偏じる溝跡34がある。同溝は溝跡44が埋没してからの溝跡であるので近世がより近世に近く。埋没時には第195図のごとく20cm以下の円礫を主とする礫層面がある、その面に北沿いに道跡としての硬化面が調査地際まで続いていた。以上が大規模な溝で、性格付けは73頁で触れた。

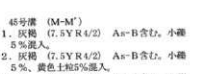
小規模溝について、溝跡37は溝跡36・45間の小溝で延長に溝跡59がある。溝跡38・46は、前出溝跡34の直下にあり、土層断面Ｄの左端土層注１が溝跡38、直下の注3.5が溝跡46、注9～15が溝跡44で、溝跡38・46は、溝跡44の埋没で、近世か近世に近い。溝跡41は、調査北壁にかかる小溝で土層断面Ｈの注5～8が溝跡45で埋没後の注2・3が溝跡41である。重複順は古い側から溝跡45→46→38→34・41の順で新しい。



41、45号溝　(H-H')
1．表土。As-A・B混入。
2．オリーブ黒　(5Y3/2)　As-B含み、シルト質土をやや多く含む。
3．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-B含む。黄褐色土小ブロック5％混入。
4．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-B含む。黄褐色土小ブロック5％、黒色土小ブロック5％混入。（2～4層　41号溝）
5．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-B含む。黄褐色土小ブロック10％、小礫5％混入。やや砂質。
6．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-B含む。ややシルト質。小礫微か含む。
7．黒褐　(2.5Y3/1)　黄褐色土小ブロック10％混入。やや砂質。
8．黒褐　(2.5Y3/1)　黄褐色土小ブロック5％混入。やや砂質。（5～8層　45号溝）
9．82号土坑埋土。
10．黒　(2.5Y2/1)　地山・倒木がらみか。



34、38、41、45、46号溝　(I-I')
1．暗褐　(10Y R3/3)　As-B含む。
2．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-B含む。黄褐色土小ブロック5％混入。（1・2層　41号溝）
3．灰褐　(7.5Y R4/2)　As-Bやや多く含む。小礫5％、黄色土粒5％混入。中円礫微か含む。
4．灰褐　(7.5Y R4/2)　小一大円礫含む。
5．黒褐　(7.5Y R3/2)　As-B含む。黄色土粒5％混入。（3～5層　38号溝）
6．暗褐　(10Y R3/3)　As-Bやや多く含む。小礫5％混入。
7．褐　(7.5Y R4/3)　小礫10％、黄褐色土小ブロック20％混入。（6・7層　34号溝）
8．黒褐　(7.5Y R3/2)　As-B含む。（46号溝）
9．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-B含む。黄褐色土小ブロック10％、小礫5％混入。やや砂質。
10．灰褐　(7.5Y R4/2)　As-B含む。やや砂質。黄褐色土小ブロック10％混入。
11．灰褐　(7.5Y R4/2)　As-Bやや多く含む。小礫5％、黄色土粒5％混入。中円礫微か含む。
12．灰褐　(7.5Y R4/2)　As-B含む。やや砂質。酸化斑文あり。
13．灰褐　(7.5Y R4/2)　As-B含む。やや砂質。酸化斑文あり。黄色砂10％混入。
14．黒褐　(7.5Y R3/2)　やや砂質。（9～14層　45号溝）
15．82号土坑。



45号溝　(M-M')
1．灰褐　(7.5Y R4/2)　As-B含む。小礫5％混入。
2．灰褐　(7.5Y R4/2)　As-B含む。小礫5％、黄色土粒5％混入。
3．褐　(7.5Y R4/4)　As-B含む。小礫5％、黄褐色土小ブロック10％混入。
溶蝕底面の荒れは認められず、流水・冠水状態ではない。

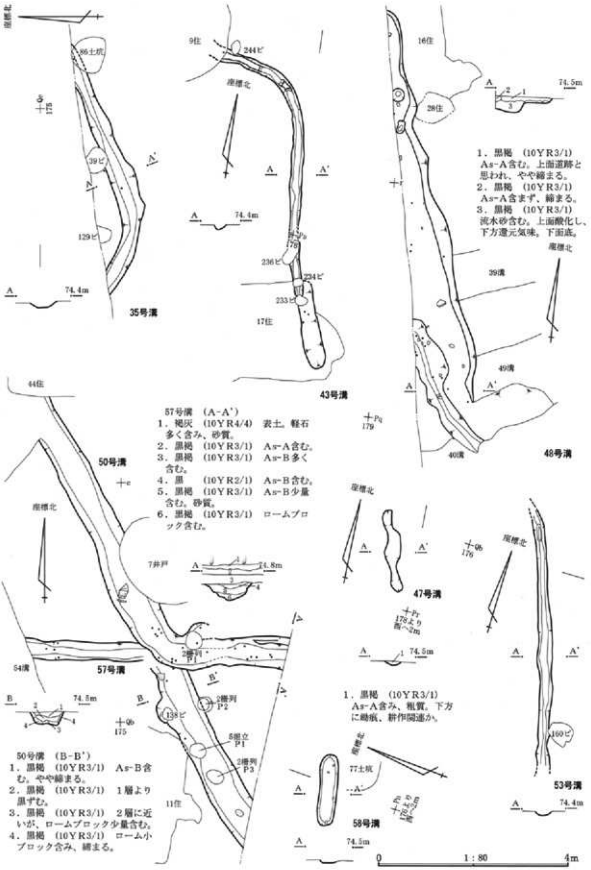
36号溝　(N-N')
1．オリーブ褐　(2.5Y4/3)　表土。As-A含む。
2．オリーブ褐　(2.5Y4/3)　盛土。As-A含む。黄色土小ブロック10％混入。
3．オリーブ褐　(2.5Y4/3)　As-A含む。
4．オリーブ褐　(2.5Y4/3)　As-A含む。小礫5％混入。
5．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-A含む。小礫5％、黄色土小ブロック5％混入。
6．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-A、大円礫含む。黄色土小ブロック5％混入。
7．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-A、小円礫含む。黄色土大ブロック10％混入。
8．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-A含む。黄色土大ブロック40％混入。
※8層底面は、ほぼ平坦で整った逆台形。
9．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-A含む。
10．ローム層移層　小円礫含む。黄色土小ブロック5％混入。
溶蝕底面は凸凹があるが、流水痕跡は認められない。

0　1：80　4m

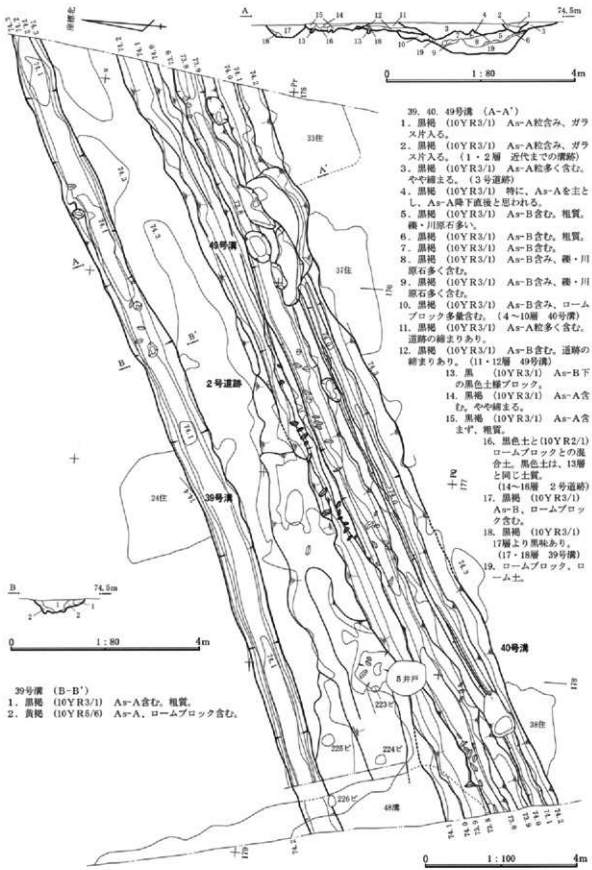
第198図　溝跡34・36・38・41・45・46土層断面図

溝跡35・43・47・48・50・53・57・58　（第199・207～214図、図版35～39・164～168）

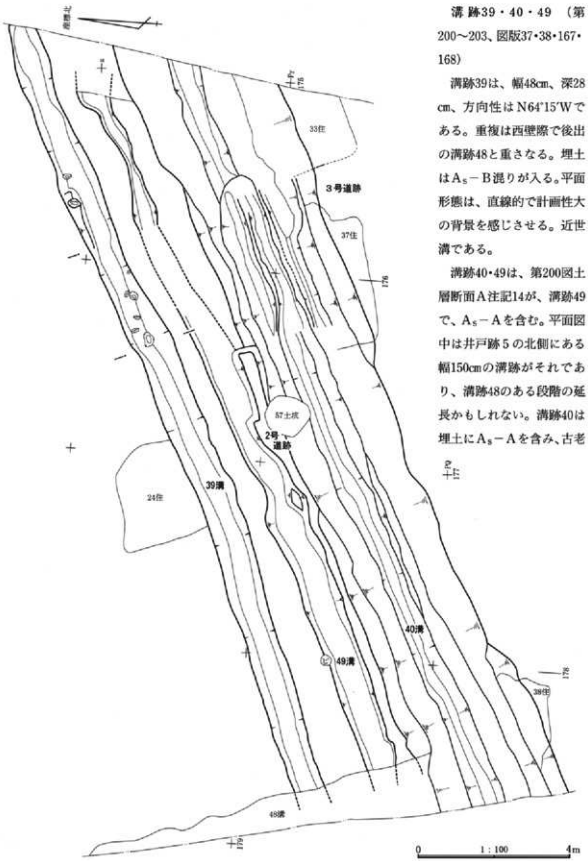
溝跡35は、P東区北壁にかかった小溝で、近世の可能性が高く、方向性は直線的な東半で西に21'30'偏じる。溝跡43は、埋土中にA_s-B混りで、中・近世天明3年以前の遺構。方向性は直線的な中程で西に6'偏じる。溝跡47は、埋土中にA_s-A混りで、近世の耕作関連か。溝跡48は、幅104＋αcmでN21'15'Wを測る。溝跡39・49を切り、溝跡40に至るが、溝跡40の最終埋没の方が後出する。しかしある時期は共存したであろう。埋土中にA_s-A含むが、第199図土層注2や古い段階に相当する注3にはA_s-A混層は見えずその前代と考えられた、つまり18世紀頃である。溝跡50・57は、共通機能を持ちながら、最終的には両溝をL字形に結んで使用された溝である。最終は両溝とも第199断面AのとおりA_s-B混りで、前代も断面Bのとおりである。底面には砂質が部分的に見られ流水痕跡がある。おそらくは近世の農業関連であろう。方向はN26'30'Wを測る。溝跡53はA_s-Aを含む溝51・52に西隣して、N6'45'Wの方向性で並走し、共通の機能であろう。溝跡58は、溝痕跡であるが、A_s-A混る。



第199図　溝跡35・43・47・48・50・53・57・58遺構図



第200図　溝跡39・40・49As−A降下前遺構図



第201図　溝跡39・40・49As－Ａ降下後遺構図

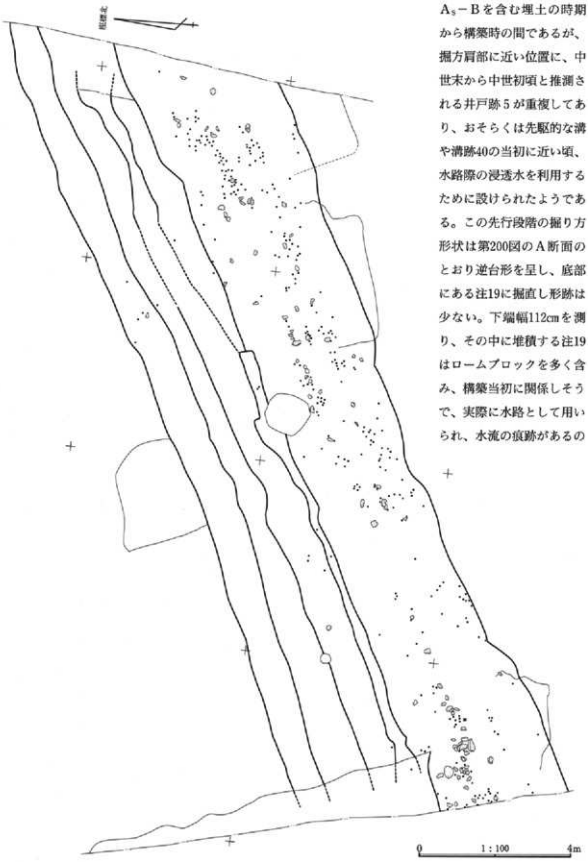
溝跡39・40・49（第200～203、図版37・38・167・168）

溝跡39は、幅48cm、深28cm、方向性はN64°15′Wである。重複は西壁際で後出の溝跡48と重さなる。埋土はAs－Ｂ混りが入る。平面形態は、直線的で計画性大の背景を感じさせる。近世溝である。

溝跡40・49は、第200図土層断面Ａ注記14が、溝跡49で、As－Ａを含む。平面図中は井戸跡５の北側にある幅150cmの溝跡がそれであり、溝跡48のある段階の延長かもしれない。溝跡40は埋土にAs－Ａを含み、古老

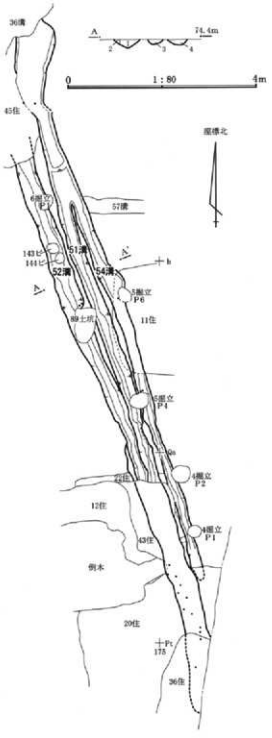
が承知していた近時までの後出段階とＡs－Ｂ混りを埋土とする先行段階を第200図と201図に分けて図化した。後出段階は、古老によれば同溝はかつて水路として用いられ北側(道跡２）と南側（道跡３）に道が付設されていたという。その道跡と水路に思える区界線は昭和16年の耕地図上でも確認できる。Ａs－Ａを含む後出段階の当初の頃は、第203図のように礫の集まりが多くの箇所に存在し、第212図13のような19世紀後半前後を思わせる陶器湯呑など時期性を反映する個体が少量ある。先行段階は、

第202図　溝跡39・40・49As－Ａ降下前遺物出土状態図



A_s－Ｂを含む埋土の時期から構築時の間であるが、掘方肩部に近い位置に、中世末から中世初頃と推測される井戸跡５が重複してあり、おそらくは先駆的な溝や溝跡40の当初に近い頃、水路際の浸透水を利用するために設けられたようである。この先行段階の掘り方形状は第200図のＡ断面のとおり逆台形を呈し、底部にある注19に掘直し形跡は少ない。下端幅112cmを測り、その中に堆積する注19はロームブロックを多く含み、構築当初に関係しそうで、実際に水路として用いられ、水流の痕跡があるの

第203図　溝跡39・40・49As－Ａ降下後遺物出土状態図



51・52・54号溝
1．暗褐　(10YR3/3)　As-Aが混じる箇所は硬い。下部に行くにつれAs-Aが少なく、軟らかくなる。ロームブロック含む。
2．黒褐　(10YR3/2)　地山。
3．暗褐　(10YR3/3)　As-A全体に含み、硬い。
4．暗褐　(10YR3/3)　As-A全体に含み、硬い。

第204図　溝跡51・52・54遺構図

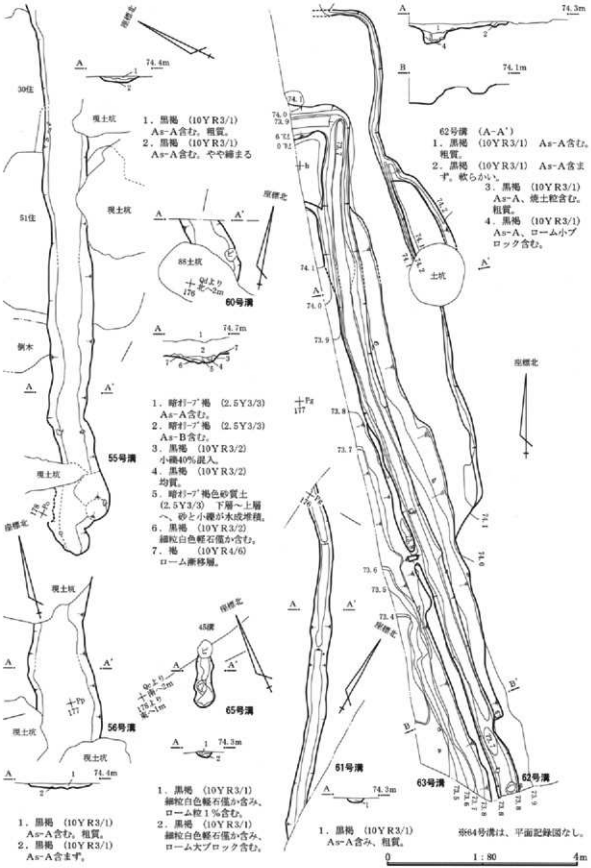
は注8より上方の堆積層で、本格的な機能や掘直しは、そこから始まるようであった。道跡2・3は埋没土の一部まで部分的に及んでいた。溝跡40出土遺物は、埋土として第212図14の18世紀磁器鉢や、17世紀頃に見える同図16の軟質陶器鉢があるが構築当初を知るには不足の感がある。規模は幅280cm、深さ63cm、方向はN62°Wを測る。

溝跡51・52・54　(第204・214図、図版168)

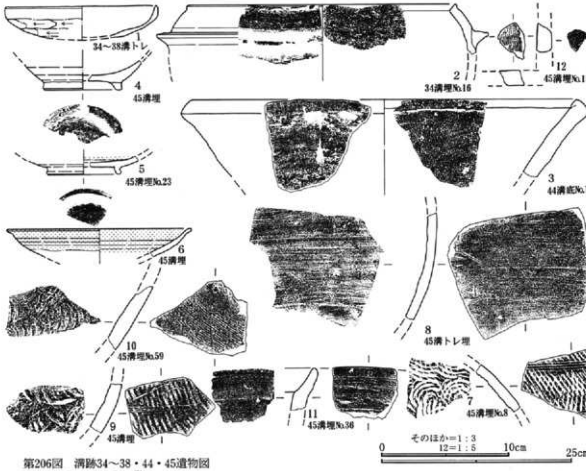
この一群はP東区の北東部に位置する。調査面は標高74.3m。溝跡51は北側で溝跡54と、南側で溝跡52と重さなり、ともに平面上、新古の輪郭を得るには至らなかった。各埋土は類似していたためである。さらに西側に並走する溝53も類似し、4条の溝跡は方向性も加え、おそらく共通の機能と性格をもって近時期に構築されたのであろう。方向性は溝跡51は、幅32cm、深さ9cm、方向N21°Wを測る。溝跡52は、幅49cm、深さ18cm、方向N20°31′を測る。溝跡54は、幅42cm、深さ12cm方向N19°Wを測る。各々埋土にAs－Aを混えるため天明3年以降であり、遺物は微弱であった。

溝跡55・56・60・61・62・63・65　(第205・214図、図版39・168)

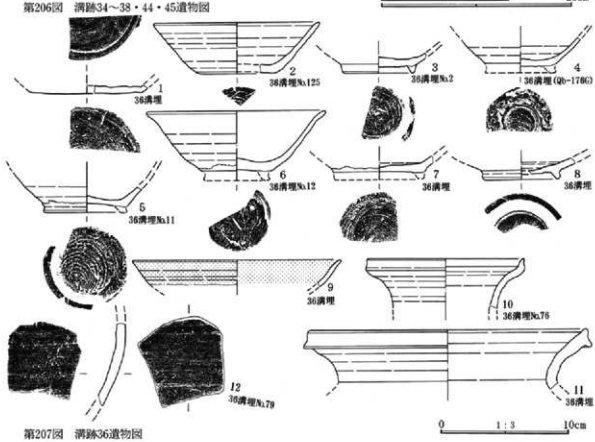
溝跡55は調査区の中程を東西に走り、中世と推測される土坑62を切る。規模は幅80cm、深さ18cm、N29°30′Wを測り、As－A以降である。溝跡56は、埋土の主体にAs－Aを含む。規模は幅132cm、深さ9cm、N9°30′Eを測る。溝跡60は、As－B前代で古代溝らしい。北側のQ区でその延長は不明瞭である。流水痕があり、規模は幅80cm、深さ16cm、方向はN39°Wを測る。溝跡61は、埋土にAs－Aを含み、規模は幅45cm、深さ12cm、方向N24°Wを測る。溝跡62・63は、P西区のある時期の神社界を成していたと考えられる溝跡75の延長に溝跡63の北側が屈曲し東西走するか所が位置関係、溝断面形、埋土とも近似するため同一溝であろう。規模は168＋αcm、深さ40cm、方向N14°30′Wを測る。溝跡62は、東方の小溝である。両溝ともAs－Aを前後する。溝跡は幅30cm、深さ15cm、方向N66°Nを測り、近世である。



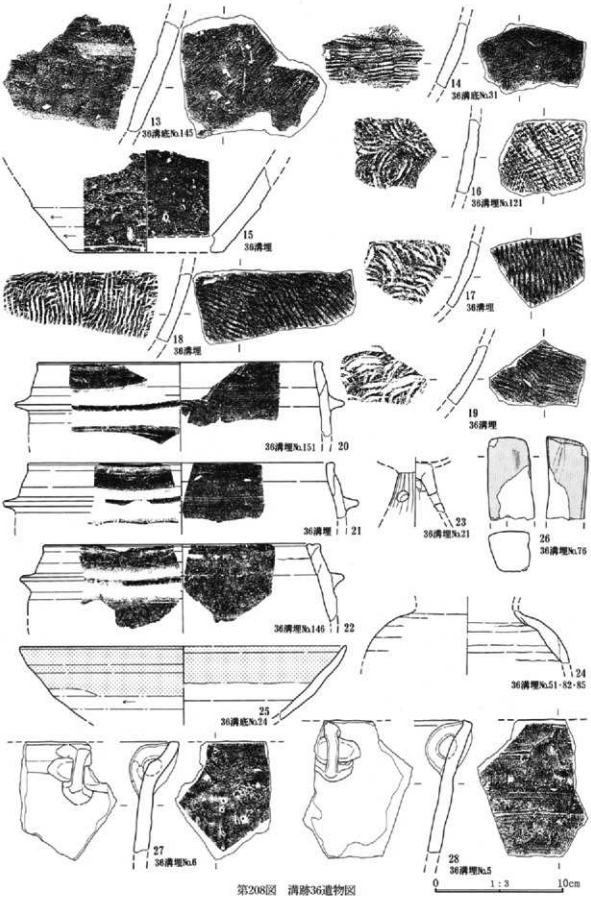
第205図　溝跡55・56・60・61・62・63・65遺構図



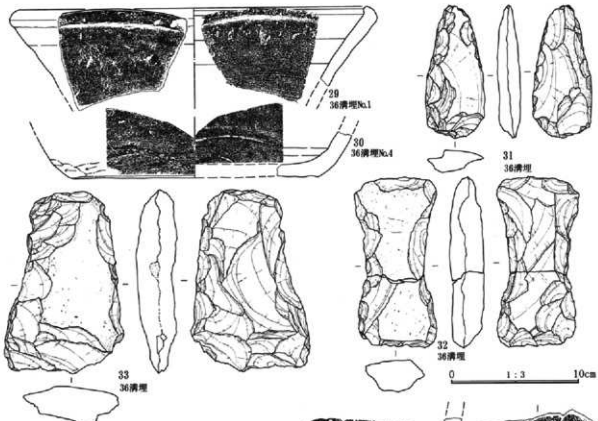
第206図　溝跡34～38・44・45遺物図



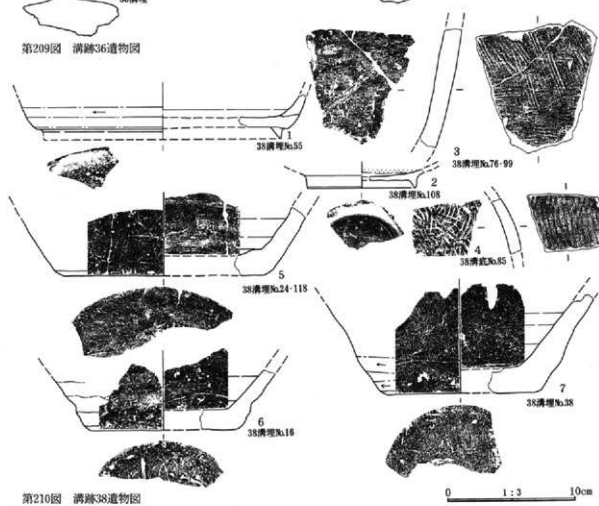
第207図　溝跡36遺物図



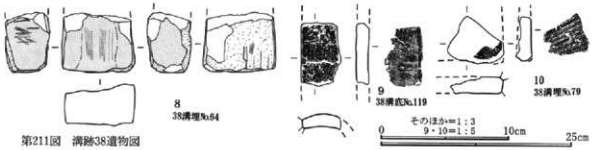
第208図　溝跡36遺物図



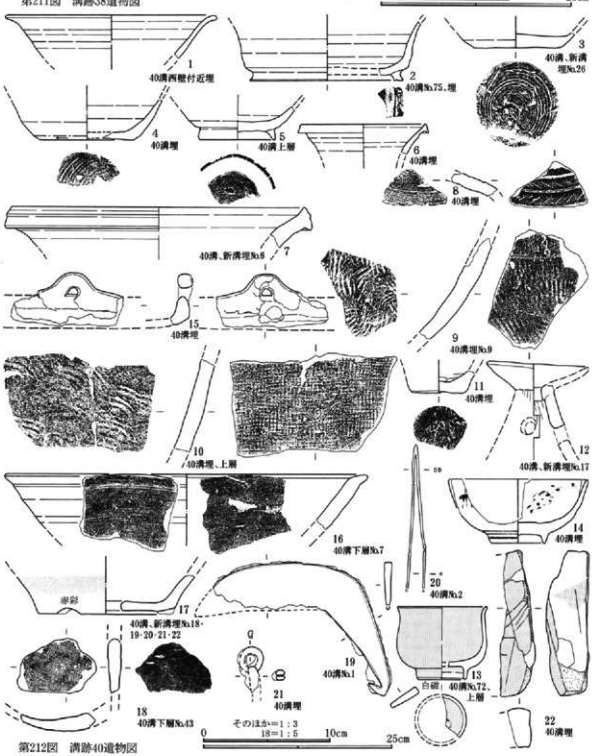
第209図　溝跡36遺物図



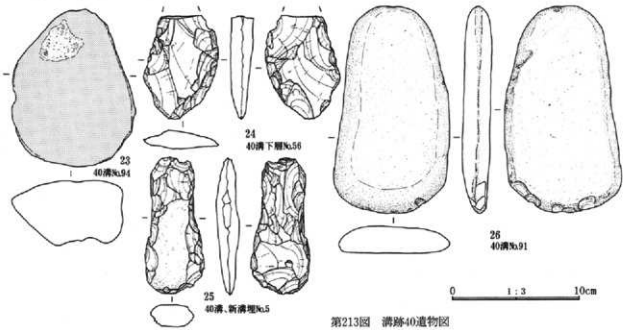
第210図　溝跡38遺物図



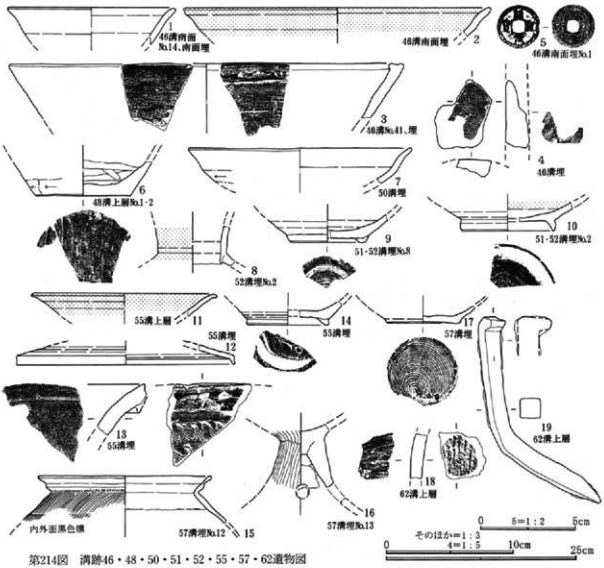
第211図　溝跡38遺物図



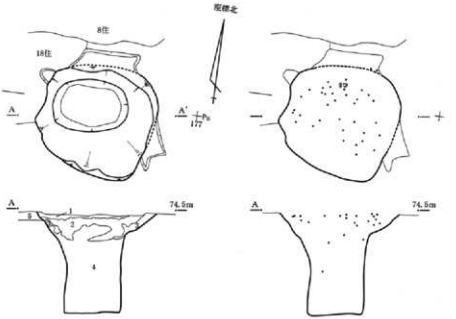
第212図　溝跡40遺物図



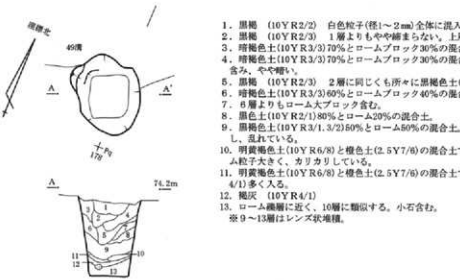
第213図　溝跡40遺物図



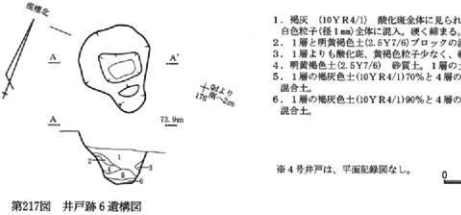
第214図　溝跡46・48・50・51・52・55・57・62遺物図



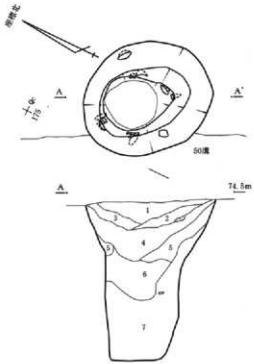
第215図　井戸跡３遺構図



第216図　井戸跡５遺構図



第217図　井戸跡６遺構図



第218図　井戸跡７遺構図

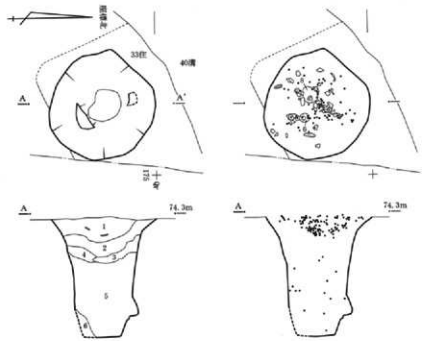
５、井戸跡　（第215～224図、図版40・41～160・161）

井戸跡３は、先行の住居跡18を切る。埋土中にA_s－Ｂ混り、中世の構築か。径192cm、深さ162cm。形は上部ロート状。出土遺物に時期性のある個体はない。

井戸跡４はＱ大区ｄ174、溝跡44の埋土が切る。未記録。円形、直井筒形。中世の構築。

井戸跡５は溝跡40の肩部に位置し、中世から近世初期か。径128cm、深さ123cm。平面方形。

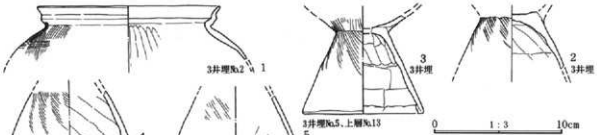
1．暗オリーブ褐色砂質土　(2.5Y3/3)　As-Ｂ多く含み、黄褐色土小ブロック20%、炭化物微か混入。やや締まらない。
2．暗褐色砂質土　(10YR3/3)　As-Ｂ多く含む。やや締まらない。
3．黒褐色砂質土　(10YR3/1)　As-Ｂ多く含み、黄褐色土大ブロック20%混入。やや締まらない。
4．黒褐色砂質土　(10YR3/1)　黄褐色土ブロック20%、小～巨礫多く含む、礫抜痕層。締まらない。
5．黒色砂質土　(10YR2/1)　As-Ｂ多く含む。締まらない。
6．黒色砂質土　(10YR2/1)　黄褐色土大ブロック、小中礫20%混入。締まらない。
7．黒色砂質土　(10YR2/1)　黄褐色土大ブロック混入。締まらない。



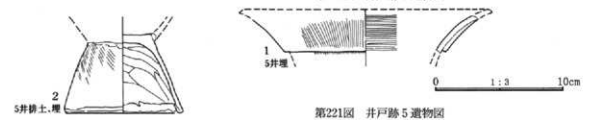
1．黒褐　(10YR3/1)　Hr-ＦＰ粒ヲ含み、さらに９cの遺物(土師器)入る。ローム粒入らず、陥没堀土か。
2．黒褐　(10YR3/1)　Hr-ＦＰ粒ヲ含み、ロームブロック少量含む。人為埋没か。５c束の遺物入る。
3．黒褐色土(10YR3/1)と、明黄褐色土(10YR6/6)ロームブロック多く含む。人為埋没。
4．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック少量含む。
5．黒褐　(10YR3/1)　ロームブロック部分的に縞をなす。
6．にぶい黄橙　(10YR7/2)　漂白した粘性ローム土層。

0　1：60　2m

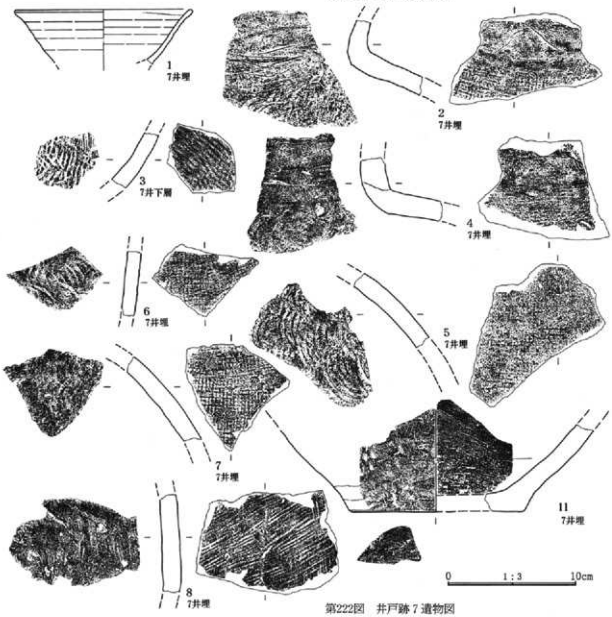
第219図　井戸跡８遺構図



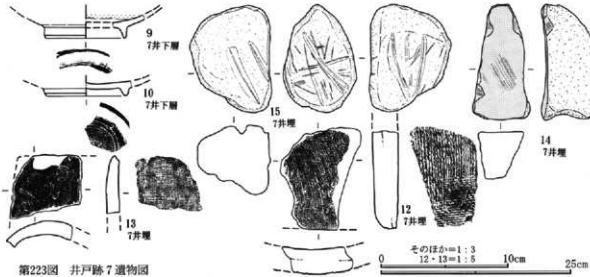
第220図　井戸跡３遺物図



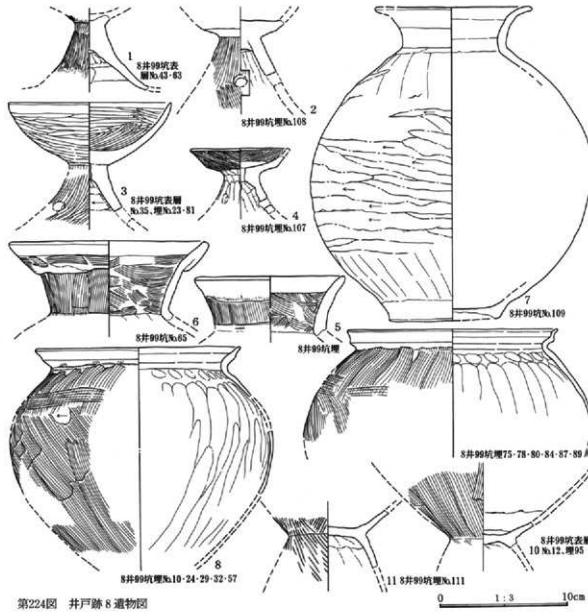
第221図　井戸跡５遺物図



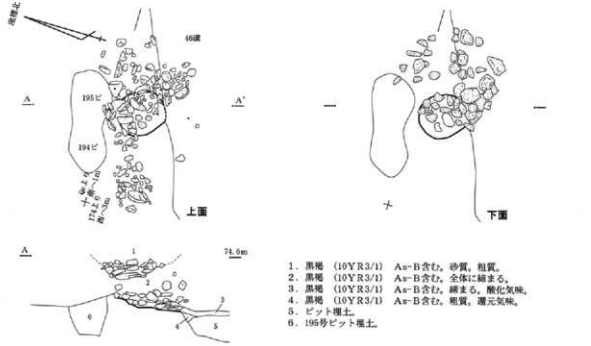
第222図　井戸跡７遺物図



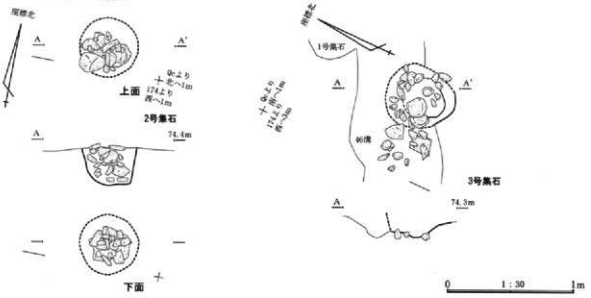
第223図　井戸跡7遺物図



第224図　井戸跡8遺物図



第225図　集石１遺構図



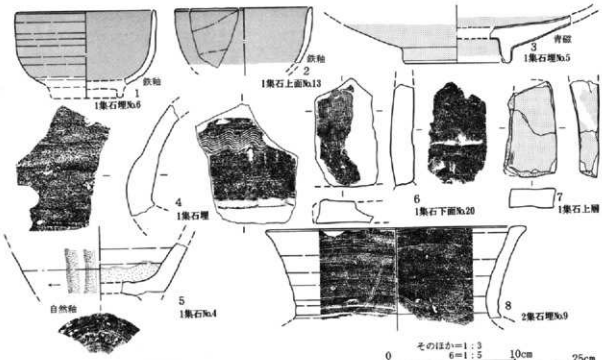
第226図　集石２遺構図　　第227図　集石３遺構図

井戸跡６は溝跡44の最底面にあり同溝埋土に切られていたが、溝44の当初と関連づき断面Ａ注１に地下水渇水期の酸化斑がある。長径138cm、深さ83cm、長軸方向N39°Wは、この場所の地勢走行。中世の構築。

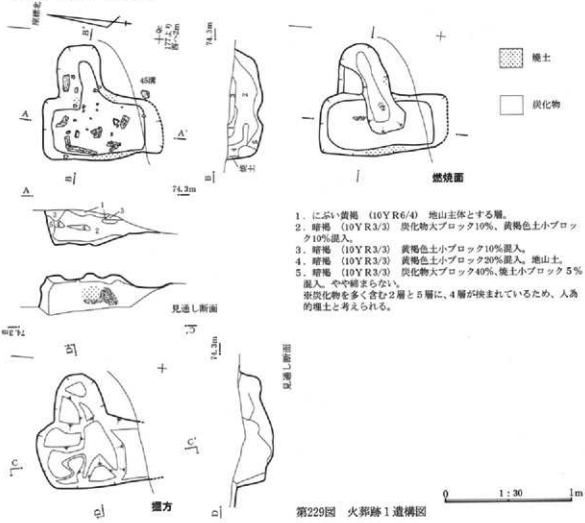
井戸跡７は、埋土にA_s－Ｂ混り、第223図10の皿から中世末期の構築。長径197cm、深さ250cm、長軸方向N38°30′Wを測り、同方向は地勢走行であり、地下水の流下方向に係わると推測される。

井戸跡８は住居跡33に切られる。構築時期は第224図７が完器状態で底付近から出土している。図中坑99は旧遺構番号である。形は上方がロート状、円形である。

６、集石遺構・火葬跡（第226～231図、図版45・163）

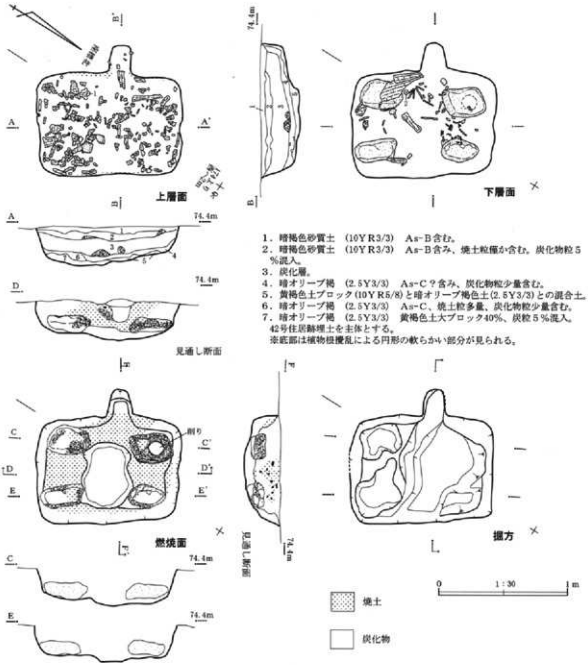


第228図　集石1・2遺物図



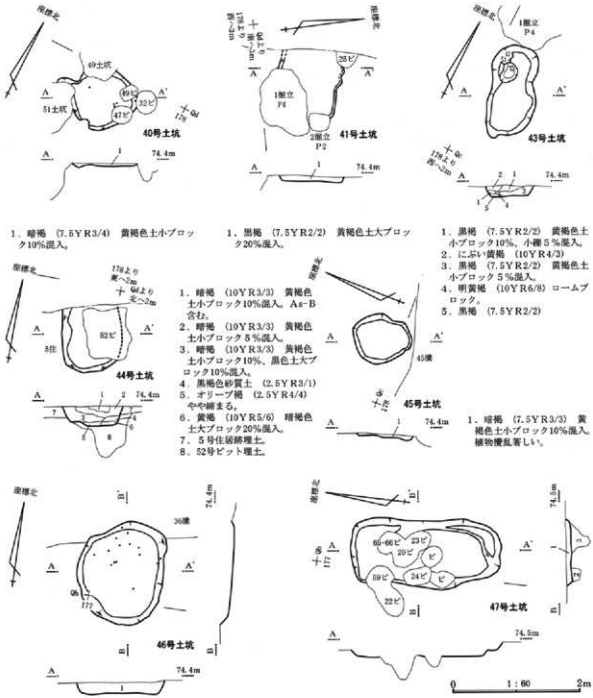
1．にぶい黄褐　(10YR6/4)　地山主体とする層。
2．暗褐　(10YR3/3)　炭化物大ブロック10%、黄褐色土小ブロック10%混入。
3．暗褐　(10YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%混入。
4．暗褐　(10YR3/3)　黄褐色土小ブロック20%混入。地山土。
5．暗褐　(10YR3/3)　炭化物大ブロック40%、焼土小ブロック5%混入。やや締まらない。
※炭化物を多く含む2層と5層に、4層が挟まれているため、人為的埋土と考えられる。

第229図　火葬跡1遺構図



第230図　火葬跡２遺構図

第231図　火葬跡２遺物図



1．暗褐　(7.5YR3/4)　黄褐色土小ブロック10%混入。

1．黒褐　(7.5YR2/2)　黄褐色土大ブロック20%混入。

1．黒褐　(7.5YR2/2)　黄褐色土小ブロック10%、小礫5%混入。
2．にぶい黄褐　(10YR4/3)
3．黒褐　(7.5YR2/2)　黄褐色土小ブロック5%混入。
4．明黄褐　(10YR6/8)　ロームブロック。
5．黒褐　(7.5YR2/2)

1．暗褐　(10YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%混入。As-B含む。
2．暗褐　(10YR3/3)　黄褐色土小ブロック5%混入。
3．暗褐　(10YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%、黒色土大ブロック10%混入。
4．黒褐色砂質土　(2.5YR3/1)
5．オリーブ褐　(2.5YR4/4)　やや締まる。
6．黄褐　(10YR5/6)　暗褐色土大ブロック20%混入。
7．5号住居跡埋土。
8．52号ピット埋土。

1．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%混入。植物攪乱著しい。

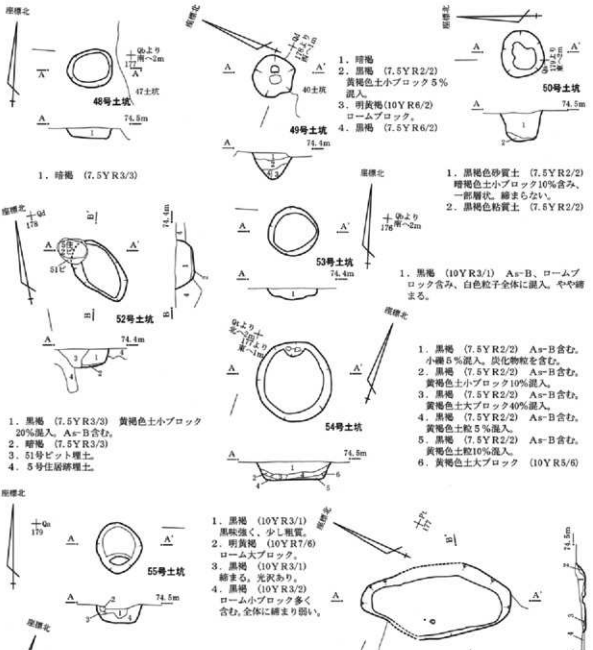
1．暗褐　(7.5YR3/3)　黄褐色土小ブロック10%混入。植物攪乱著しい。

1．黒褐色砂質土　(7.5YR3/1)　As-B混入かゃ締まらない。
2．24号ピット埋土。
3．23号ピット埋土。

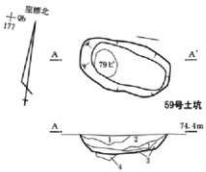
第232図　土坑40・41・43・44・45・46・47遺構図

集石1は、浅い凹地状内の集石で、溝跡44の北側を東西走する近世道跡と土層注3が関連。集石2は穴中集石で周囲に井戸跡・火葬跡2と近接し、中世か。集石3は集石1に関連で近世。火葬跡1・2はともに中世と考えられ、同2は棺台を思わせる台石4個。焼骨の量的出土。焼土化大、炭化物が多く見られた。

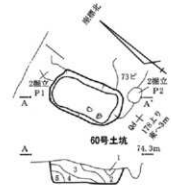
7、土坑・ピット　(第232～242図、図版41～44・162・163・169)



第233図　土坑48・49・50・52・53・54・55・56・57遺構図

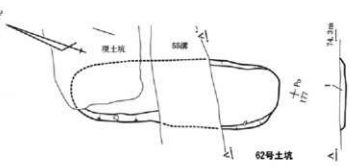


1．黒褐　(2.5YR3/2)　As-B含む。黄色土粒5％混入。
2．黒褐　(2.5YR3/2)　As-B含む。黄褐色土小ブロック10％混入。
3．底面に薄く堆積するが、締まる。
4．79号ピット埋土。



1．黒褐　(10YR3/1)　黄褐色土大ブロック20％混入。
2．黒褐　(10YR3/1)　黄褐色土大ブロック5％混入。
3．にぶい黄褐色粘質土　(10YR5/4)　黒褐色土大ブロック10％混入。
4．にぶい黄褐色粘質土　(10YR5/4)　黒褐色土大ブロック10％混入。
5．にぶい黄褐色粘質土　(10YR5/4)　黒褐色土大ブロック10％混入。締まらない。

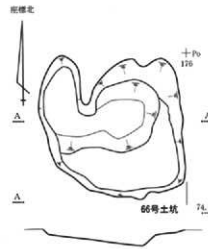
1．黒褐　(10YR3/1)　上面にAs-B含む、下部には炭化物粒含む。黒味がかる。
2．褐灰　(10YR4/1)　ローム層移的。軟らかい。
3．褐　(10YR4/4)　ローム層移的。軟らかい。

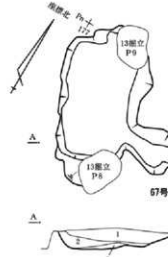


1．暗褐　(10YR3/3)　As-B？、黄褐色土粒含み、炭化物粒少量含む。

平断面記録図なし。

1．黒褐　(10YR3/1)　軽石含み、軟らかい。

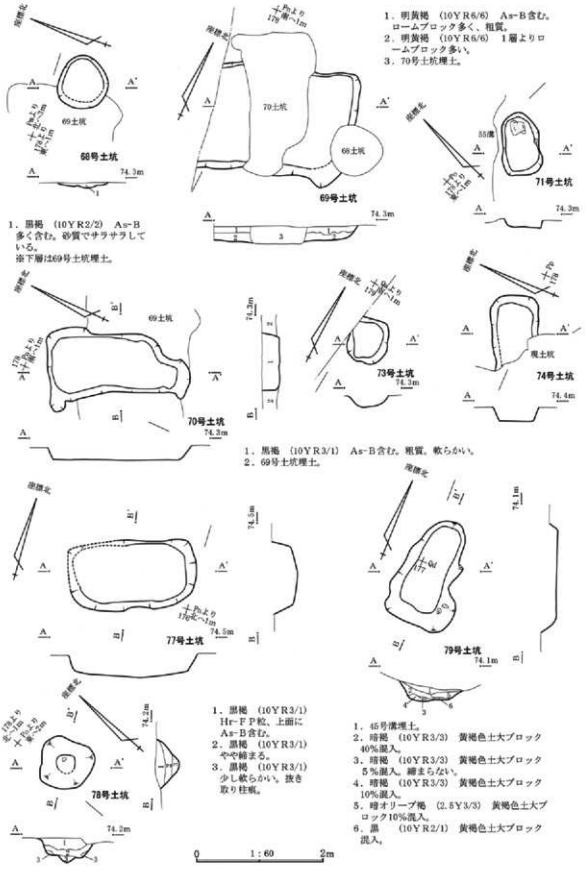




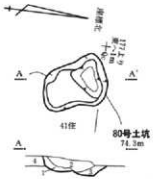
1．暗褐　(10YR3/3)　白色軽石、黄褐色土粒金砂に多く含む。
2．暗褐　(10YR3/3)　白色軽石、黄褐色土小ブロック(径2～3cm)含む。
3．黒褐　(10YR3/1)　黄褐色土ブロック(径2～3cm)含む。やや粘質。

0　1:60　2m

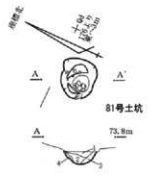
第234図　土坑59・60・61・62・63・64・66・67遺構図



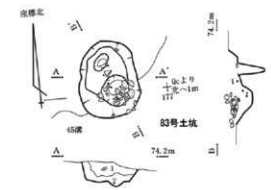
第235図　土坑68・69・70・71・73・74・77・78・79遺構図



1．暗褐　(10YR3/3)
As-C含む。
2．黒褐　(10YR2/3)
黄色土粒５％混入。
3．にぶい黄褐　(10YR4/3)
黒色土大ブロック10％混入。
4．41号住覆土埋土。

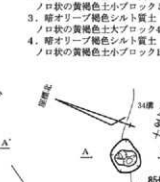


1．暗灰黄砂質土　(2.5Y4/2)
黄褐色土小ブロック5％混入。
2．暗オリーブ褐色シルト質土　(2.5Y3/3)
ノロ状の黄褐色土小ブロック５％混入。
3．暗オリーブ褐色シルト質土　(2.5Y3/3)
ノロ状の黄褐色土大ブロック40％混入。
4．暗オリーブ褐色シルト質土　(2.5Y3/3)
ノロ状の黄褐色土小ブロック10％混入。

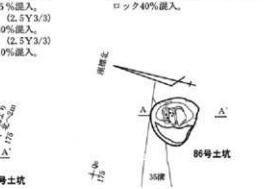


1．暗褐　(10YR3/3)　As-C、大礫含む。均質。
2．暗褐　(10YR3/3)　灰褐色土大ブロック40％混入。

1．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)
黄色土粒塊が含む。
2．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)
黄褐色土小ブロック20％混入。
3．41号溝埋土。

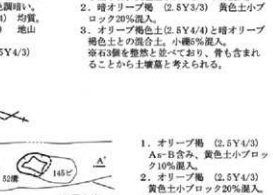


1．オリーブ褐　(2.5Y4/3)
暗褐色土含み、黄褐色土小ブロック５％混入。色調暗い。
2．暗褐　(10YR3/4)　均質。
3．黄褐　(2.5Y5/6)　地山ブロック。
4．オリーブ褐　(2.5Y4/3)



1．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　As-B含み、小礫５％、黄色土小ブロック５％混入。
2．暗オリーブ褐　(2.5Y3/3)　黄色土小ブロック20％混入。
3．オリーブ褐色土(2.5Y4/4)と暗オリーブ褐色土との混合土。小礫5％混入。
※石3個を整然と並べており、骨も含まれることから土壙墓と考えられる。

1．黒褐　(10YR3/2)　細粒白色軽石、黄色土粒含み、小礫５％混入。
2．黒褐　(10YR3/2)　細粒白色軽石、黄色土粒、オリーブ粘質ブロック含む。
3．36号溝埋土。



1．オリーブ褐　(2.5Y4/3)
As-B含み、黄色土小ブロック10％混入。
2．オリーブ褐　(2.5Y4/3)
黄色土小ブロック20％混入。
3．オリーブ褐　(2.5Y4/3)
黄色土大ブロック40％混入。
4．145号ピット埋土。

0　1：60　2m

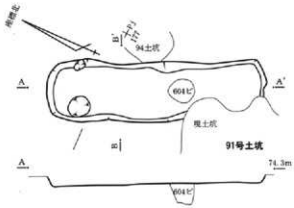
第236図　土坑80・81・83・84・85・86・88・89遺構図

第237図　土坑90・95・98・100遺構図

Ｐ東区の土坑群については、第６図下段、ピット群は第240・241図に名称を付し、第６図上段に掘立柱建物との関連性を図示した。

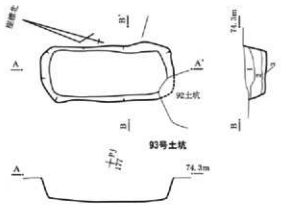
土坑は隅丸長方形、円形、やや不整形の類がある。隅丸長方形の類は芋穴を推測させるが、南から坑91～94・96・47があり、底面は住居跡床面以上の硬化面を持ち、近代までの民家納屋内など家屋内の芋穴に施す硬化面を思わせる状況があり、埋土にＡs－Ｂを含む。硬化面を除けば同類に坑47・62・70・74・77がある。坑70から中世焼締陶器片の出土がある。円形土坑は、坑53・54・61があり、埋土の質感は、前出長方形土坑とほぼ同じであるので中世の可能性がある。

ピット群は、Ｐ東区では掘立柱建物・柵跡に関連すると考えられる柱穴の場合が多かった。ピット群を区視的に捉えると、掘立柱建物跡9～14の周辺では深さのあるやや大形のピットをまじえながら小ピットが存在していた。その広がりはＰ大区ｉライン以南、q以北の間に範囲があり、西方調査区Ｐ西、南30東区に延長は認められなかった。そのため８世紀掘立柱建物群域の不明瞭域は東調査地外にあると一方付けられる。また、門跡である掘立柱建物跡１の延長を同11・12とし、それが中軸筋目であった場合、東方延長に例えば倉庫群などの重西施設なども考える必要があり、おそらくＲ区で調査された８世紀頃の溝跡113の南延長との間の90m（掘立柱建物跡12以東で測った場合）の間が掘立柱建物群域であったのであろう。後出の９世紀にＤ



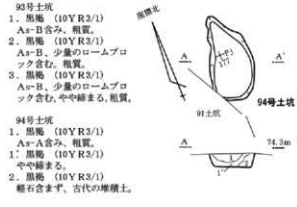
1．黒褐　(10YR3/1)　As-B含み、粗質。
2．黒褐　(10YR3/1)　やや締まる。
3．ロームブロック。

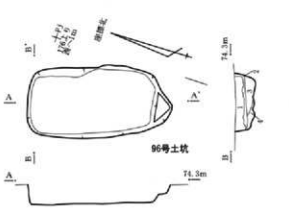
1．黒褐　(10YR3/1)　やや締まる。



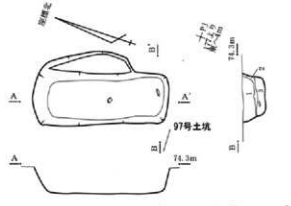
93号土坑
1．黒褐　(10YR3/1)
As-B含み、粗質。
2．黒褐　(10YR3/1)
As-B、少量のロームブロック含む、粗質。
3．黒褐　(10YR3/1)
As-B、少量のロームブロック含む、やや締まる、粗質。

94号土坑
1．黒褐　(10YR3/1)
As-A含み、粗質。
1'．黒褐　(10YR3/1)
やや締まる。
2．黒褐　(10YR3/1)
軽石含まず、古代の堆積土。





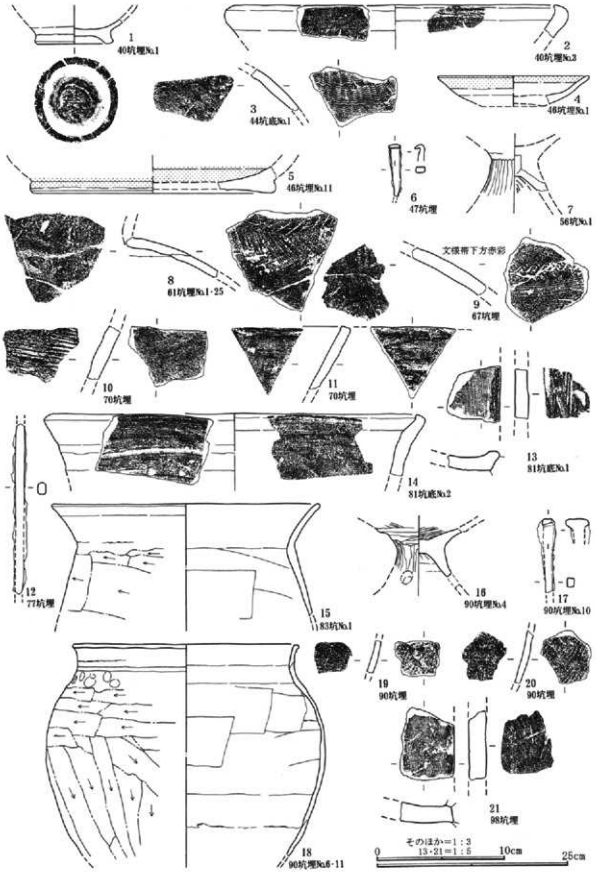
1．黒褐　(10YR3/1)　As-B含み、粗質。
2．黒褐　(10YR3/1)　As-B含み、締まる。
3．黒褐　(10YR3/1)　As-B、ローム小ブロック含む、締まる。
4．黒褐　(10YR3/1)　As-B、ローム小ブロック含む、3層よりさらに締まる。



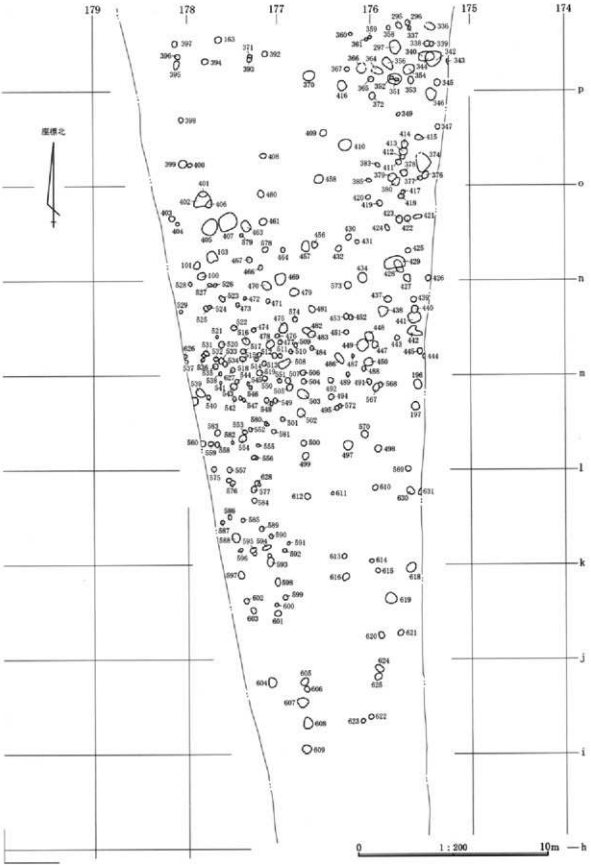
1．黒褐　(10YR3/1)　As-B含み、粗質。
2．黒褐　(10YR3/1)　As-B含み、締まる。
3．黒褐　(10YR3/1)　As-B、ローム小ブロック含む、3層よりさらに締まる。

第238図　土坑91・92・93・94・96・97遺構図

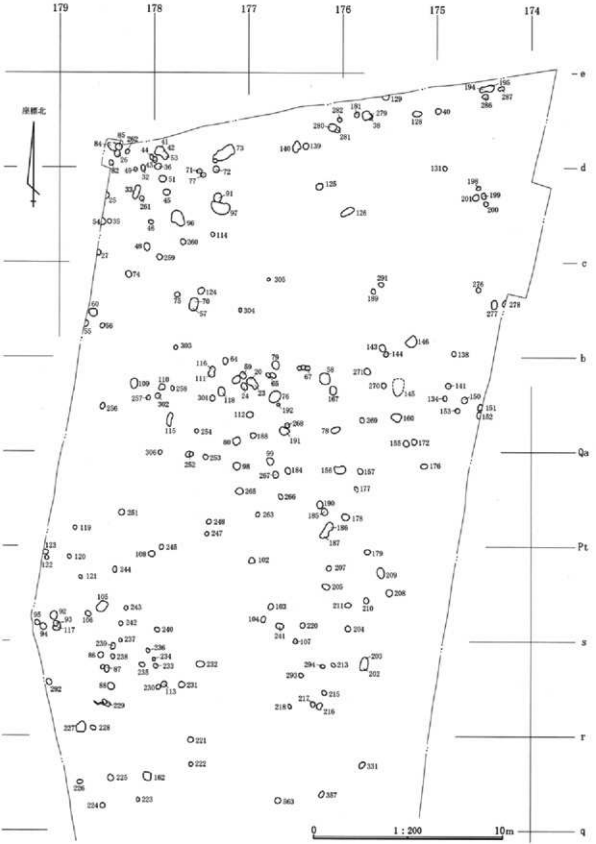
東区溝跡１が区界をなしたのであろう。Ｐ大区ｒライン以北で小形ピットが多く、その一群は北接のＱ区に入ると、特にＡs－Ｂ混りを埋土とするピットが少なくなり、現市道が分布境となっていると考えられた。その間ゆるやかな落差ではあるが40～20cmの差がある。


1
40坑埋No.1
2
40坑埋No.3
3
44坑底No.1
4
48坑埋No.1
5
46坑埋No.11
6
47坑埋
7
56坑No.1
8
61坑埋No.1・25
文様帯下方赤彩
9
67坑埋
10
70坑埋
11
70坑埋
13
81坑底No.1
14
81坑底No.2
12
77坑埋
15
83坑No.1
16
90坑埋No.4
17
90坑埋No.10
19
90坑埋
20
90坑埋
21
98坑埋
18
90坑埋No.6・11
そのほかの＝1：3
13・21＝1：5
0
10cm
25cm

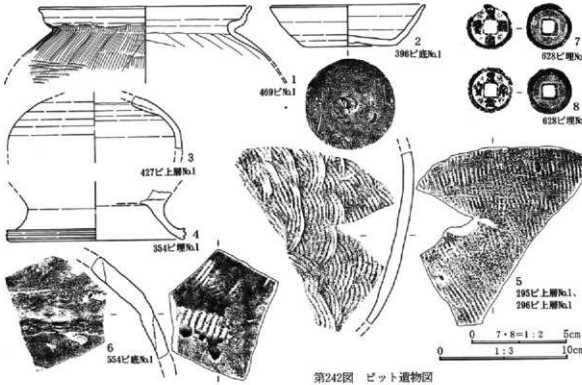
第239図　土坑遺物図



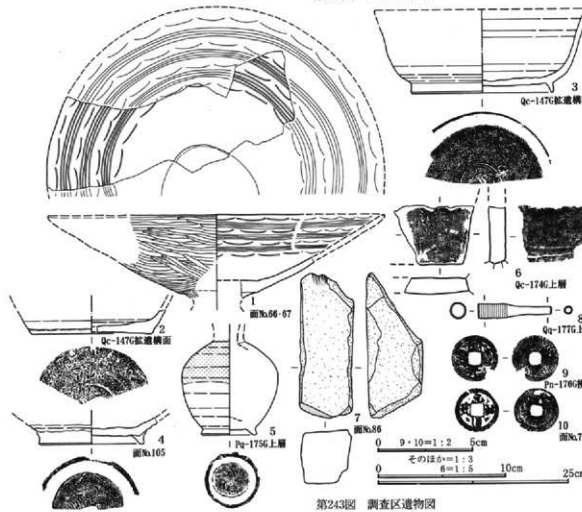
第240図　P東区南半ピット図



第241図　Ｐ東区北半ピット図



第242図　ピット遺物図

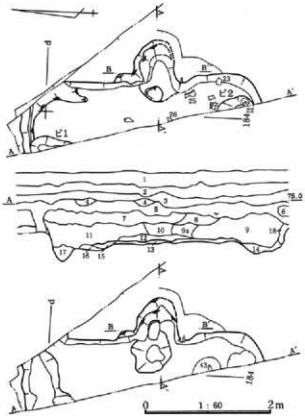


第243図　調査区遺物図

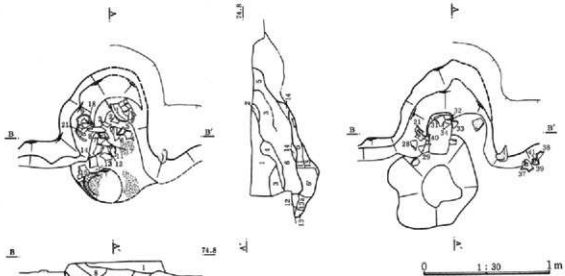
第６章　Ｑ区調査の遺構と遺物

Ｑ区とした調査区は、建設に伴なう変更・追加等で調査時期の異なるＰ区北側市道調査区、Ｑ区西側市道調査区を加えた2780㎡の範囲の遺構について触れる。遺構総数は、住居跡127、竪穴遺構２、井戸跡14、溝跡34、土坑209、ピット584、道跡３を数える。同区は分岐路を含む全幅員区のため各区のうち最大面積にあり、広域に広がろうとする遺構傾向を、ある程度知り得た。地勢は標高74.7～74.3m差の南東下りの勾配がある。調査は当初の段階で20mを単位に１m幅の方眼トレンチを用いた試掘を行ない、Ｑ区全体に密な状態で住居跡を中心に遺構の存在と遺構面までの深さを知った。耕作土上面から調査面までの間は重機により除去した。層順は、20cm前後の耕作土があり、耕作土の下層に浅間山Ａ軽石（A_s－Ａ）混りの土層があり、その下に浅間山Ｂ軽石（A_s－Ｂ）混土層が15～20cmの層厚であり、その直下に、0～10cm前後の層厚で白色微軽石を木炭粒・焼土粒をわずか含む黒色土があり、さらに10cm前後のローム漸移層に至る。この層位で特記されるのは、A_s－Ａ混りの旧耕作土の堆積は、中央部から西側に厚くなり、西壁では30cm余りの層厚となる。西壁至近の場所でA_s－Ａ混りの畑さく跡が深部に達しているので、A_s－Ａ降下以降に客土されたと類推される。また、旧黒色土である古代の土層についても第９図中の南北走する溝跡79を溝跡105を結ぶ以東と、ｓ・ｔライン以南の側木痕内や住居跡埋土などに30～40cm以上の層厚を認めながら、実際には旧黒色土はほとんど認められず、A_s－Ａ降下に先行する時代に削平化を受けたと考えられた。調査面はA_s－Ｂ混り下面からローム層漸移の間で、178ライン以北は黒色土中位付近、溝跡79・105以東はA_s－Ｂ混じ下面である。

遺構の分布について、古墳時代に先行の時代の住居跡は存在せず、古墳時代前期の住居跡から始まる。同期の住居跡はｊライン以南までは散在的な分布にあるが、ｊライン以北から密度を増し、増加傾向にある。この一群は、Ｒ区南端の住居跡176付近の住居跡を含み、西は、Ｑ区県道西調査で１棟のみの調査であったので濃い地域は東西で約90＋αmである。住居跡規模は８172にある住居跡104の１辺767cmが最大で、Ｒ区南端にあり同居跡から20m東方にある大形の住居跡176などと伴に東側に占地上の優位さがあったかもしれない。次期は古墳時代後期の６世紀後半から７世紀前半の住居跡が複数であり、粗な分布ながら、規模やや大のため、占地上の優位権を有する人々の居住とも考えられ、粗の意味も、広い占優権を含む必要があろう。二たびの密な分布は、８世紀から10世紀まで続いている。８世紀代は、Ｑ区より東方70mに17m弱×14m強の規模推定のなされた中央基壇を有する綿貫遺跡寺院跡が調査されている。同基壇跡から軒先瓦として９世紀前半の鐙・字瓦の出土がある。しかし今回の調査で、造瓦技法の変革期である上野国分寺創建期に先行の８世紀前半の瓦類が相当量存在しており、瓦葺の段階が遡ぼる可能性を有している。同寺院地は、Ｒ区の南側に８世紀代の構築と考えられる溝跡113があり、西限と考えられた。そのため溝跡113を界してＲ区の大半が寺院地内の集落、以西が隣接集落と性格の異なる２集落が考えられた。Ｑ区の特徴として、Ｐ東区で見られた竈跡・貯蔵穴を伴なわない竪穴状の遺構は小数しか認められず、Ｒ区に多い東西棟も多くない。竈底が床面より相当高い位置にある例もやや少ない。掘立柱建物跡２棟は、明確な遺物はないが８世紀を想定している同寺院跡中央基壇東西中軸位置に極めて近い。中世遺構は竪穴遺構が２基あるが、Ｑ区での同期の柱穴ピットは多くないので掘立柱群中の存在ではない。同期の生活跡は井戸跡がこの区に一番多いので中世の生活域の一部であったであろう。遺構は、溝跡82の北と南縁に近世と考えられる硬化面が溝に沿い存在していた。近世は、井戸跡を含んで生活に直接係わる遺構はなく、180ライン以西でA_s－Ａを含む畑さく跡や、第７図ｈ176付近のローム層上面に残された鋤先痕のある小溝なども農耕地の可能性を示唆していた。

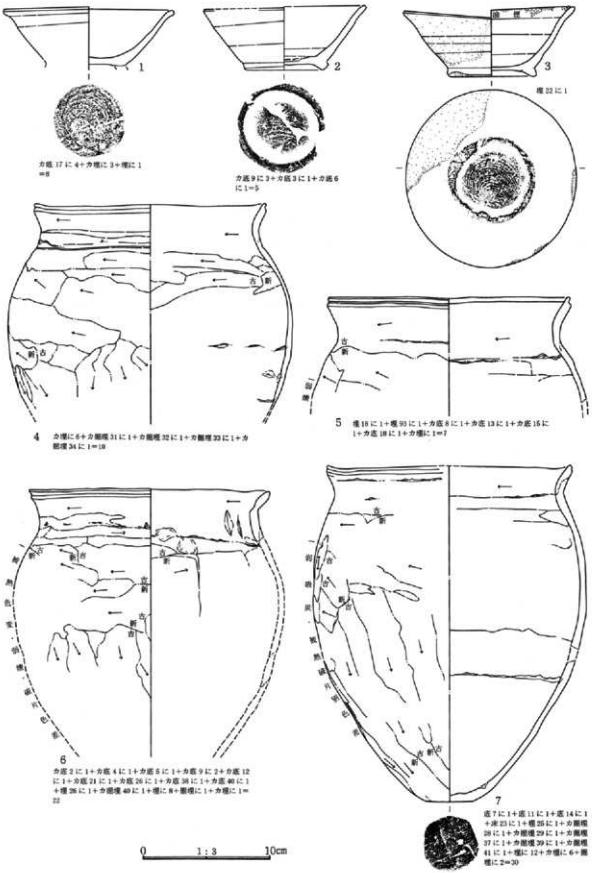


1、現代耕作土（畑）Ａｓ－Ａ混。
2、オリーブ黒（2Y3/2）Ａｓ－Ａ混土。やや固く、土壌は密。
3、黒褐（2.5Y3/1）Ａｓ－Ｂ混土。Ａｓ－Ａも混入。粗くくずれやすい。
4、黒褐（2.5Y3/1）色は３層よりも気持ち明るく、土壌は締っている。
5、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ混土。３層よりもＢ軽石の純度高い。白色粒φ１～２㎜混入。粗。
6、黒褐（2.5Y3/1）土壌固く、ローム粒φ１～10㎜混入。
7、暗褐（10YR3/4）白色粒・焼土粒・ローム粒φ１～５㎜が全体に混入。土壌は密でやや固い。
8、黒褐（10YR3/1）７層よりも混入物少ない。土壌も粗。やや明るめ。
9、黒褐（10YR2/3）焼土粒・ローム粒φ１～２㎜が全体に散在。土壌は密でやや固い。
9a、黒褐（10YR2/3）９層と同じも土壌はやや砂質感あり。
10、暗褐（10YR3/4）土壌は砂質感強まり、粉状のロームが中層に帯状。
11、暗褐（10YR3/3）ローム粒φ１～２㎜全体に散在。炭化物が低部に３点φ10㎜。土壌はやや粗。固きふつう。
12、黒褐（10YR3/1）混入物少なく、固い。（上からの圧力強い印象）
13、明黄褐（10YR6/8）床面。表層特に固い。
14、黒褐（10YR2/2）地山ロームブロックφ３㎝散在。ローム粒全体に混入。適度に締る。ピ1埋土。
15、褐灰（10YR4/1）とロームブロックのブレンド。貼床。固い。
16、地山ロームが乱された黒色土（10YR2/1）とのブレンド。固くなく軟らかい。
17、暗褐（10YR3/3）地山ロームブロック・ローム粒全体に混入。土壌は粗。ピ2埋土。
18、９層に崩落ロームブロック混入。

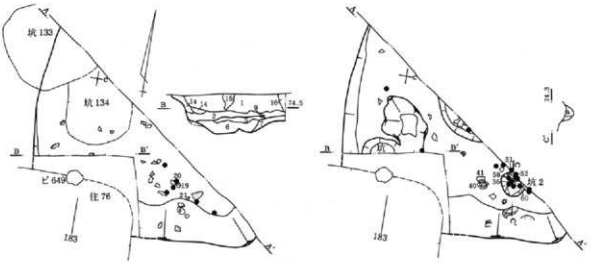


1、黒褐（10YR3/4）固く密。白色パミスφ１㎜・焼土粒・ローム粒含む。
2、１層とロームブロックのブレンド。固い。天井土の崩れ。
3、黒褐（10YR3/4）ローム粒含む。やや固い。
4、３層とロームブロックのブレンド。軟らかく、ロームブロックが帯状にまだらに混入。
5、黒褐（10YR2/3）焼土粒含む。質も適度に軟らかい。
6、３層よりもやや暗い色。焼土粒・ローム粒含むが、目立たず。混っている。6′は軟らかく。
8、黒褐（10YR3/1）焼土粒・白色パミス含む。軟らかい。
11、黒褐（10YR3/4）焼土・炭化物混入。
12、黒褐（10YR3/4）貼床。固く締る。
13、黒褐（10YR3/4）ロームブロックのブレンド。掘方埋土。
13a、黒褐（10YR2/3）ロームブロック。特にブロック大きい。
14、天井崩落の焼土。

第244図　住居跡73遺構図



第245図　住居跡73遺物図

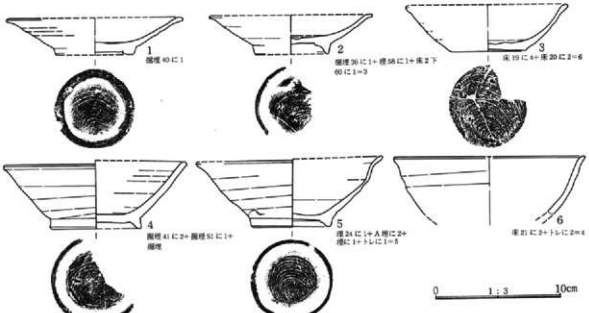


1、黒褐（10YR2/2）ローム粒・炭化粒・焼土粒全体に含む。濃度に固い。
1a.1層よりも粗くボソッとしている。
2、黒褐（10YR2/2）1層よりもローム粒・炭化粒・焼土粒が一回り大きい。土は粗いも。
3、黒褐（10YR2/2）ローム粒全体に混入。粗いも。
3a.3層よりもローム粒少ない。
5、黒褐（10YR2/2）貼床。ロームブロックとのブレンド。固く締る。
6、黒褐（10YR2/2）ローム粒（大）とのブレンド。それ程固くない。粗。床下土坑の埋土。
7、黒褐（10YR2/2）貼床。ロームブロック（大）とのブレンド。ブロック固く締る。焼土粒・炭化粒含む。
8、黒褐（10YR2/2）ロームブロックでなく、ローム粒散在。固く締り、帯状に炭が入る。
9、黒褐（10YR2/2）ロームブロックでなく、ローム粒散在。固く締り、焼土粒含む。
10、黒褐（10YR2/2）焼土粒・炭化物含む。カマドの掻き出しか？
11、黒褐（10YR2/2）小さめのロームブロック・焼土粒・炭化粒のブレンド。固いも。床下土坑の埋土（床を切る）。
11a、ロームブロック少ない。
12、黒褐（10YR2/2）炭化粒・焼土粒わずかに含む。床下土坑の埋土。粗。
13、黒褐（10YR2/2）やや青みがかる。
14、ロームブロック。
15、Ａｓ－Ｂ混土層。
16、未注記。

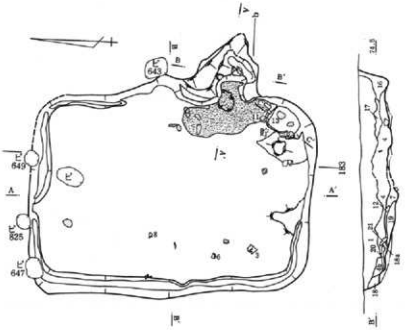
74.5　1、黒（10YR2/1）粗。ロームブロック・炭化粒含む。

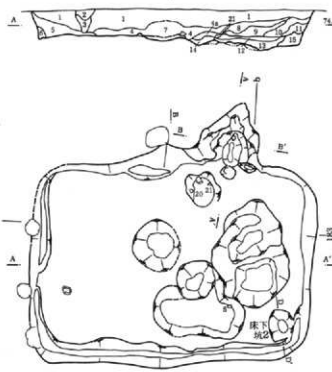
0　1：60　2m

第246図　住居跡75遺構図



第247図　住居跡75遺物図





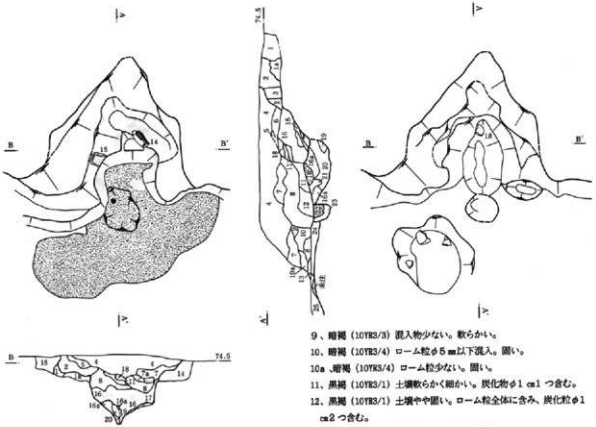
１、黒褐（10YR2/3）焼土・ローム粒φ１～２㎜・白色粒全体に混入。
　　濃度に開く密。
２、黒　（10YR2/1）Ａｓ－Ｂ混土。白色粒φ１～２㎜混入。
３、１と２層のブレンド。粗。

第248図　住居跡76遺構図

４、黒褐（10YR2/3）やや砂質土。焼土粒わずかに散在。ローム粒と思われるものが全体に見える。１層よりやや暗い。
４a.４層と同じもロームブロック混入。粗。
４b.４層に同じも混入物少ない。
５、黒褐（10YR2/3）ローム粒・ブロックφ１～８㎜全体に混入。粗。
６、黒褐（10YR2/3）壁のロームが粉状に崩れて混ざる。粗。
７、黒褐（2.5Y3/1）固いローム粒ブロックが所々に入る。床を切る土坑の埋土。13層程乱れなし。
８、黒褐（10YR2/3）焼土粒わずかに見える。ロームはブロック単位で混入。やや砂質か。
９、黒褐（10YR2/3）４層と同色。４層に入るローム粒と思われるものが見えるが、数は少ない。粗。
10、黒褐（10YR3/2）焼土粒・白色粒φ１㎜以下混入。ローム粒が全体にブレンドされている。粗。
11、黒褐（10YR2/3）９層に酷似。９層よりも粗。
12、明黄褐（10YR6/8）貼床。カリカリ固い。ロームブロックが主体。
13、明黄褐（10YR6/8）地山ローム粒・ブロックがブレンド（５：５）。それ程固くない。粗。床下坑の埋土。
14、黒褐（10YR3/1）地山ローム粒混入。土はやや黒味が入る。粗。
15、にぶい黄褐（10YR5/4）不純物がやや見える。やや粘性あり。
16、４層に同じも気持ち明るい色。
17、黒褐（10YR3/1）混入物少なく密。
18、黒褐（10YR3/1）やや砂質。粗。
18a、ローム粒混入。
19、地山ロームだが、埋土がやや混ざる。
20、地山ロームと18a層ブレンド（６：４）。
21、ロームブロック。

１．住居跡

住居跡73　（第224・245図、図版50・170）



1、褐(10YR4/4)・黒褐(10YR3/2)・黒(10YR2/1)のブレンド。乱されている。ロームブロック・白色粒混入。軟らかい。
1 a、黄褐(10YR5/6)に黒褐(10YR3/2)がやや混ざる。１層程乱されていない。軟らかい。
2、にぶい黄褐(10YR4/3)に黒褐(10YR3/2)がうすく全体に混ざる。白色粒混入。軟らかい。
3、１層と同じブレンドだが、混ざり方が細かい。木の根か?
4、暗褐（10YR3/4）焼土粒・炭化粒・ローム粒・白色粒φ３㎜以下全体に混入。土壌は密で固い。
5、明黄褐（10YR6/6）ローム粘土ブロック。
6、黒褐（10YR3/2）焼土粒・炭化物φ５㎜以下全体に含む。土壌は密も軟らかい。
7、暗褐（10YR3/4）８層の粘土ブロックがうっすらと全体に入る。
7 a、粘土ブロック入らない。
8、暗褐(10YR3/4)と 明黄褐(10YR6/6) ローム粘土のブレンド。天井土の崩落による。やや固い。部分的に焼土・炭化ブロック見られる。
9、暗褐（10YR3/3）混入物少ない。軟らかい。
10、暗褐（10YR3/4）ローム粒φ５㎜以下混入。固い。
10a、暗褐（10YR3/4）ローム粒少ない。固い。
11、黒褐（10YR3/1）土壌軟らかく細かい。炭化物φ１㎝１つ含む。
12、黒褐（10YR3/1）土壌やや固い。ローム粒全体に含み、炭化粒φ１㎝２つ含む。
13、暗褐（10YR3/4）床面。ロームブロック含む。
14、黒褐（10YR3/1）白色粒散在。適度に固い。密。
15、黒褐（10YR3/2）白色粒混入。粗。
16、黒褐(10YR3/1)と黒褐(10YR3/2)のブレンド。 ローム粒φ１㎝全体に混入。焼土塊、粒・炭化粒散在。土は密。
16a、17層より乱れている。
17、黒褐（10YR3/1）と地山ロームのブレンド
18、灰　（N5/0）灰層。焼土粒含む。
19、黒褐（2.5Y3/1）ローム粒φ５㎜混入。
20、黒褐（2.5Y3/1）と地山ロームのブレンド　乱れ強い。土は密。
21、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。灰混ざるか? 粗
22、黒褐（10YR3/1）炭化粒入る。粗。
23、地山ロームをベースに黒褐(10YR3/1)がブレンド。
24、黄　（2.5Y7/8）地山ローム。酸化度見える。表層固く床面形成。
25、黄灰（2.5Y4/1）ローム粒全体に混入。土は密。

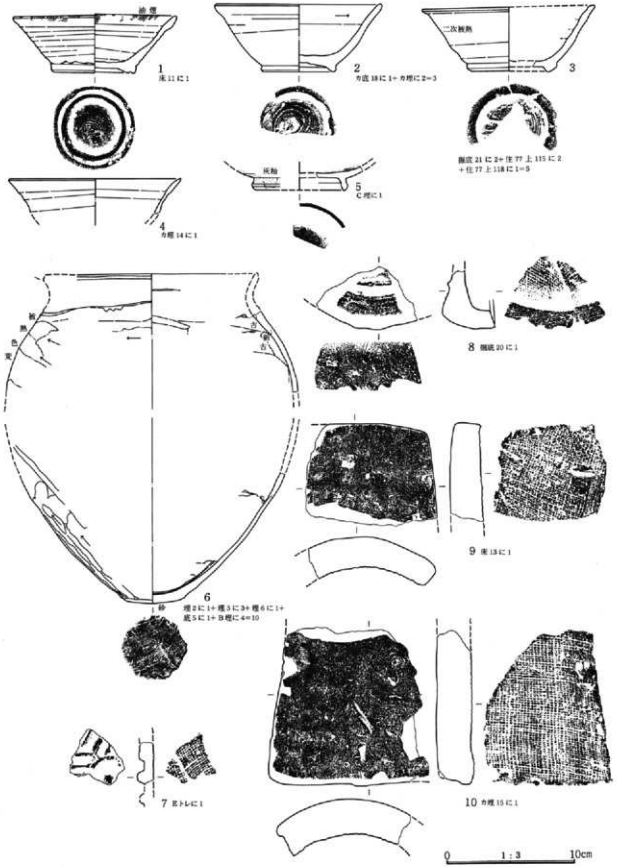
0　1：30　1m

第249図　住居跡76遺構図

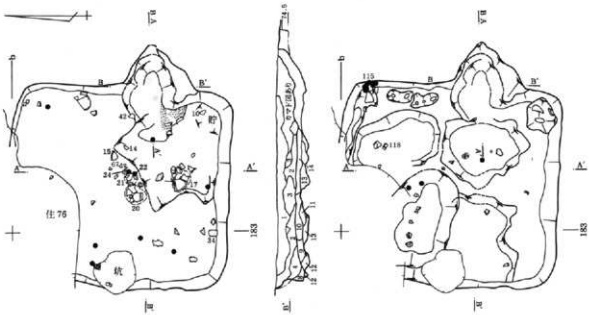
位置はＲ大区ｃ・ｄ183・184にあり、調査面は黒色土層で標高74.85m。重複は、調査区隅のため厳密ではないが、重んでいないようである。規模は南北387㎝、東西113＋αcm、方向は東壁でＮ4°30′Ｗを測る。施設として竈、貯蔵穴、北壁下で周溝、床面の硬化は硬い、遺物は第245図、９世紀後半の遺物がある。

住居跡75　（第246・247図、図版50・170）

位置はＲ大区ｂ・ｃ182・183にあり、調査面は黒色土層で標高74.85m。重複は住居跡76・坑133・134に切られる。規模は南北で335＋αcm、東西367㎝、方向は西壁が弧を成すため南壁からＮ4°30′Ｗ。施設に掘方に坑



第250図　住居跡76遺物図



1、黒褐（10YR2/3）白色粒・焼土粒・ローム粒全体に混入。土壙密で固い。
2、黒褐（10YR3/1）白色粒・焼土粒・ローム粒・炭化粒混入。１層よりは軟らかい。密。
2ｂ.2層と同じも色はやや暗い。
3、黒褐（10YR2/3）ロームブロック・粒状に混入。密で固め。
4、黒褐（10YR3/1）混入物少ない。密で軟らかい。
6、2ｂ層と壁崩落ロームブロックのブレンド。
7、黒褐（10YR2/1）土壙自体は混入物少ない。ローム粒・焼土粒含む。固い。
8、住居内土坑1 埋土
9、黒褐（10YR3/1・3/2）ローム粒全体に混入。ロームブロックφ3 cm含む。固い。
10、黒褐（10YR3/1・3/2）にぶい黄褐(2.5Y6/4)ブロックが下半分に入る。上半分は全体に粒・ブロックでブレンド。固い。
11、黒褐（10YR3/1・2/3）ローム粒全体に混入。粗。
12、にぶい黄褐（2.5Y6/4）黄灰(2.5Y5/1)ブロック少数含む。
13、11層に似ているが、土は密でつまっている。地山ロームブロック含む。
14、黒褐（2.5Y3/1）ロームブロックφ5～10 ㎝全体に含む。固く踏まれた印象。
15、暗褐（10YR3/3）ロームブロック・ローム粒全体に混入。固く密。
16、黒　（2.5Y2/1）混入物少なく軟らかい。
17、地山ロームと16層のブレンド。粗。
18、地山ロームと7層のブレンド。表層固い。
19、米注記。

0　1：60　2m

第251図　住居跡77遺構図

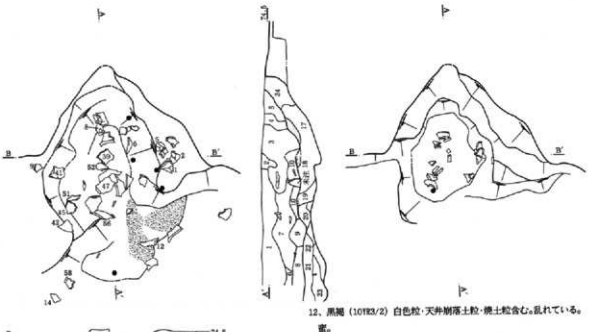
２が多い、貯蔵穴の可能性あり、床下坑あり。遺物は第247図、９世紀後半を主とする。住居も同期。

住居跡76　（第248・249・250図、図版50・51・170・171）

位置はＲ大区ａ・ｂ182・183にあり、調査面は黒色土層で標高74.85m。重複は住居跡75・同77を切るほか小ピットに切られる。規模は南北軸455cm、東西355cm、方向は南北軸でＮ3°45′Ｗを測る。施設として竈、貯蔵穴、床下坑、周溝、掘方の周溝、南壁下高まりがある。遺物は10世紀前半、住居も同期。

住居跡77　（第251・252・253・254図、図版51・171）

位置はＲ大区ａ・ｂ182・183にあり、調査面は黒色土層で標高74.85m。重複は住居跡76に先行。規模は南北355cm、東西327cm、方向は中軸でＮ2°15′Ｗを測る。施設として竈、貯蔵穴、掘方周溝、床下坑がある。遺物は第253図のように10世紀前半であり、住居も同期。同図８は石像物片で顔料付着、寺院関連か。



1、黒褐（10YR3/1）白色粒・焼土粒・ローム粒全体に混入。土壙密で固い。
2、黒褐（10YR3/1）白色粒含む。木の根か？
3、黒褐（10YR2/3）天井崩落土(2.5Y7/6)全体に混入。焼土粒・炭化粒わずか含む。
4、暗褐（10YR2/3）焼土粒含む。天井崩落土混じる。土壙細かい。密。
5、暗褐（10YR3/3）焼土粒・ブロック φ10 ㎜含む。土壙細かい。密。全体に赤みさす。
6、黒褐（10YR3/1）焼土粒混入。１層よりは軟らかい。密。
7、黒褐（10YR2/3）ロームブロック（φ30～10 ㎜）・ローム粒全体に混入。炭化粒・焼土粒わずかに入る。密で固い。
8、黒褐（10YR3/1）白色粒・ローム粒全体に混入。炭化粒わずか。密。
9、黒褐（10YR2/3）７層よりも色はややうすいか。ロームブロック φ50 ㎜含み、見largeている印象。
10、にぶい黄褐（10YR4/3）天井崩落土のブレンドで黒褐（10YR3/2）まじえる。焼土粒・炭化粒含み、軟らかい。粗。
11、黒褐（10YR3/1）白色粒含む。軟らかい。
12、黒褐（10YR3/2）白色粒・天井崩落土粒・焼土粒含む。乱れている。密。
13、明黄褐（2.5Y7/6）と褐灰(10YR4/1)のブレンド。７：３。　粗。
14、暗褐（10YR3/3）白色粒・ローム粒わずかに含む。密。軟らかい。
15、10層と14層のブレンド。乱れている。粗。
16、暗褐（10YR3/4）やや赤い。白色粒含み、細かく軟らかい。
17、暗オリーブ褐（2.5Y3/3）焼土粒全体に混入。周辺土壙とのブレンド。乱れ強い。軟らかい。
18、暗灰黄（2.5Y4/2）ロームと混ざり乱れ強い。焼土粒表層に含む。軟らかい。
19、黒褐（2.5Y3/1）焼土片 φ10 ㎜１つ、ローム粒わずか混入。密。
20、黒褐（2.5Y3/1）に地山ロームブレンド。　乱れている。粗。
21、黒褐（2.5Y3/1）ロームブロック φ10～15 ㎜全体に含む。固く踏まれた印象。密。
22、にぶい黄褐(2.5Y6/4)・黄灰(2.5Y5/1)粒ブレンド。粗。
23、黒褐（2.5Y3/1）不整形ロームブロック全体にブレンド。乱れている。粗。
24、明黄褐(2.5Y6/8)・黄灰(2.5Y5/1)・黒(2.5Y2/1)のブレンド。粗。軟らかい。
25、黄褐(10YR5/6)・褐灰(10YR4/1)・黒褐(10YR3/2)の細かいブレンド。粗。軟らかい。
26、木炭粒多い。

0　1：30　1m

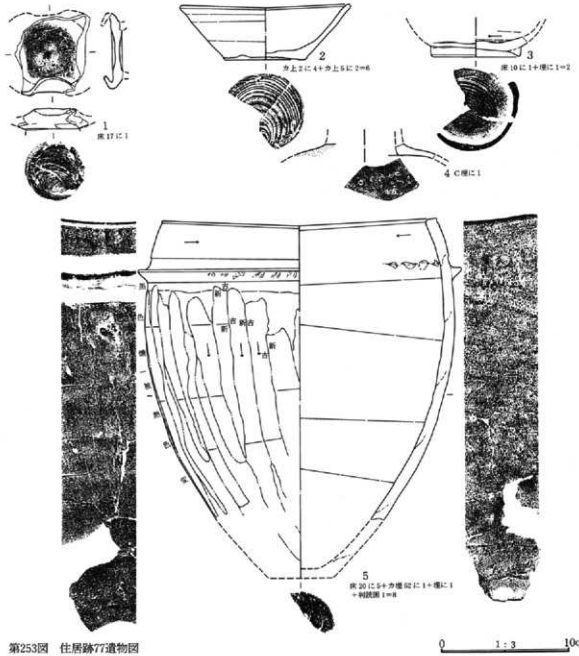
第252図　住居跡77遺構図

住居跡78　（第255・256・257図、図版51・171）

位置は、Ｑ大区ｓ・ｔ181・182にあり、調査面は黒色土下層～ローム漸移層上部で標高74.7m。重複は住居跡85と南東隅で無番坑が切る。規模は南北で475㎝、東西495㎝、方向N25°30′W。施設として貯蔵穴らしき南東隅の土坑、柱穴のピ1・7・9がある。遺物として第257図があり、古墳時代前期、住居も同期。

住居跡79　（第258・259・260図、図版52・172）

位置は、Ｑ大区ｒ・ｓ181調査面は黒色土層で標高74.7m。重複は土坑３基に切られ、住居跡219を切るらしいが不明確。規模は南北で383㎝、東西で275㎝、方向は中軸でN11°15′W。施設に竈、貯蔵穴。遺物は第260



第253図　住居跡77遺物図

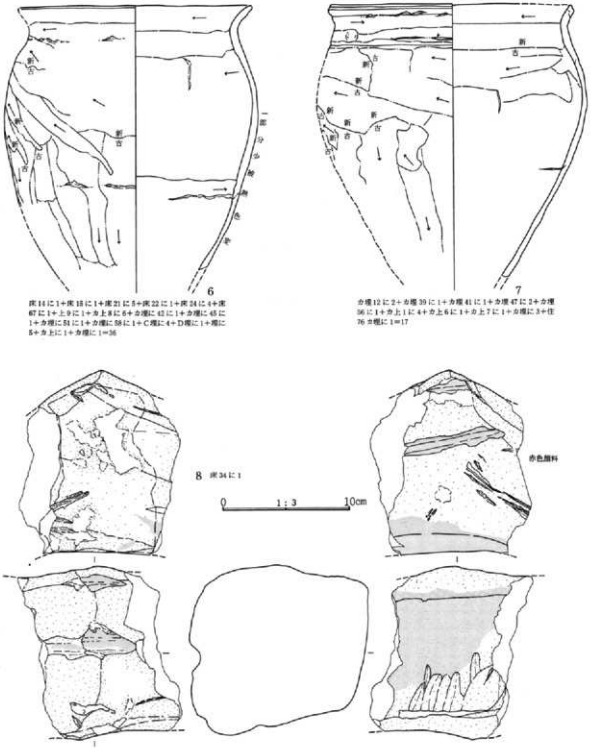
図の４は床面出土で、10世紀前半。同図１は９世紀後半で時期差があり、重複、複雑の結果か。

住居跡80　（第261・262図、図版52・80）

位置は、Ｑ大区ｔ180・181、調査面は黒色土下層～ローム漸移層上部で標高74.7m。重複は土坑172、倒木とがあり、住居跡80が先行のようである。規模は東西435cm、南北365cm、方向N0°45′W。上方は削平され、竈、貯蔵穴など不明確。遺物は９世紀後半で、住居も同期。

住居跡81　（第263図）

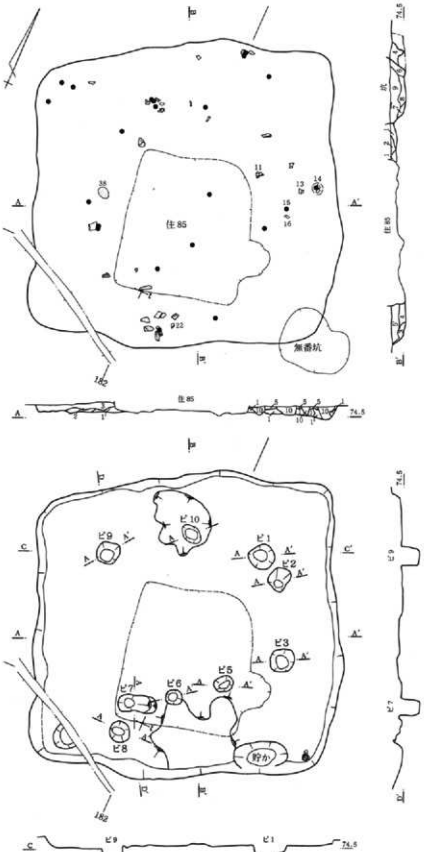
位置は、Ｑ・Ｒ大区ｔａ180・181にある。調査時に痕跡のみであり、住居跡としての施設を見い出すことは、できず、住居跡でないかもしれない。



第254図　住居跡77遺物図

住居跡82　（第264・265、図版52・172）

位置は、R大区ａ181・182にあり、調査面は黒色土中、標高74.6mである。重複は土坑137・138が切り、井戸跡が後出するが、床面は大半を失なっていた。規模は、東西325cm、南北350cm、方位N57°Wを測る。施設として北壁に片寄って炉跡が、柱穴は発見できず、貯蔵穴も不明瞭であった。掘方は中央を高め壁下を溝状に掘り下げる。遺物は第265図のように古墳時代の土器類があり、住居の機能時も同期である。



第255図　住居跡78遺構図

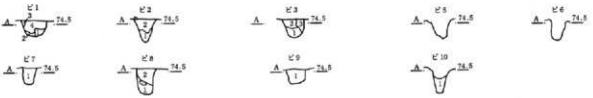
1、暗褐色土(10YR3/3)とロームブロックの混土。固く締る。1′はロームブロック主体。
2、黒褐（10YR2/2）ローム粒少量含む。
3、褐　（10YR4/4）混入物少ない。
4、褐　（10YR4/4）ローム粒少量含む。
5、暗褐（10YR3/4）ローム粒含む。ごく固く締る。住78の床面構成層と思われる。5′は締り強いが5より弱い。焼土粒含む。
6、暗褐（10YR3/3）ローム斑・白色軽石粒含む。
7、暗褐（10YR3/4）白色軽石粒少量含む。
8、暗褐（10YR3/3）ローム斑多く含む。
9、暗褐（10YR3/4）ローム斑少量含む。白色軽石粒含む。
10、褐炭。

住居跡83　（第266・267図、図版52・172）

位置はQ大区t179・180にあり、調査面は、黒色土中～ローム漸移層上層である。重複は住居跡84と土坑188、溝跡80が切る。施設として炉跡・柱穴・貯蔵穴など発見できず、掘方で周壁に沿い中央を高めた溝状の掘り込みを認めた。規模は、南北378cm、東西313＋αcm、方向N1°Wを測る。遺物は少なく、第267図１が掘方埋土出土のため、住居の構築時を古墳時代前期と認めてよいであろう。

住居跡84　（第268～272図、図版52・53・172・173）

位置は、QR大区ta179・180にあり、調査面は黒色土



ピット1
1、暗褐（10YR3/3）クリーム色ロームの大きい斑含む。締っている。
2、黒褐（10YR2/3）混入物少ない。締り弱い。
3、暗褐（10YR3/3）ローム小斑含む。締り弱い。
4、暗褐（10YR3/4）ローム粒斑に含む。やや締っている。白色軽石少量含む。

ピット2
1、黒　（10YR1.7/1）ローム粒少量含む。やや締っている。
2、暗褐（10YR3/4）ローム粒斑に含む。やや締っている。白色軽石少量含む。

ピット3
1、暗褐（10YR3/3）ローム小ブロックを多く含む。締っている。
2、暗褐（10YR3/4）ローム粒斑に含む。やや締っている。白色軽石少量含む。
3、1・2層の中間的様相でやや撹乱受ける。

ピット7
1、暗褐（10YR3/4）ローム粒斑に含む。やや締っている。白色軽石少量含む。

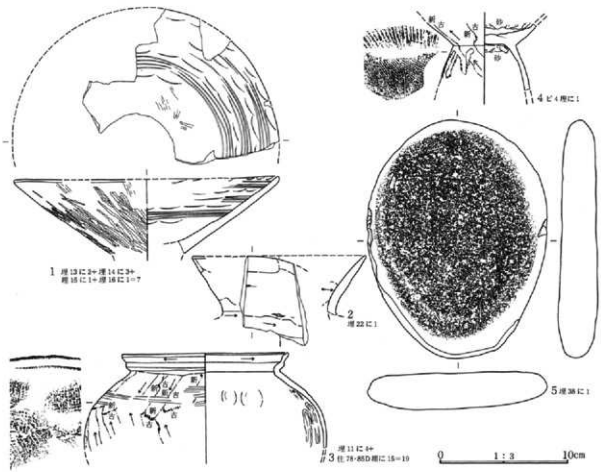
ピット8
1、黒　（10YR1.7/1）ローム粒少量含む。締り弱い。
2、暗褐（10YR3/4）ローム粒斑に含む。やや締っている。白色軽石少量含む。

ピット9
1、暗褐（10YR3/4）ローム粒斑に含む。やや締っている。白色軽石少量含む。

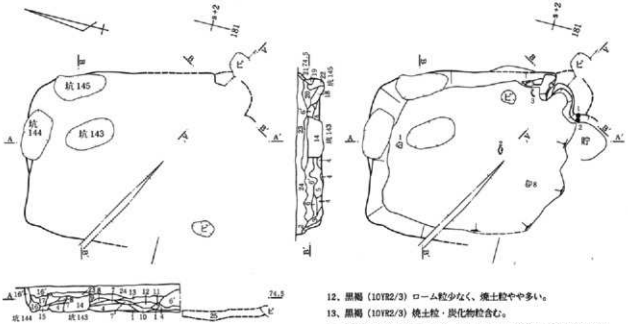
ピット10
1、暗褐（10YR3/4）ローム粒斑に含む。やや締っている。白色軽石少量含む。

0　1：60　2m

第256図　住居跡78遺構図



第257図　住居跡78遺物図



1、極暗褐（7.5YR2/3）固く締る。79号住居床。
2、黒褐（10YR2/3）ローム斑含む(10%)。焼土斑がある。
3、暗褐（10YR3/3）ローム小ブロック少量含む。締り弱い。
4、黒褐（10YR2/3）ローム粒・ローム斑少混。締り弱い。
5、黒褐（10YR2/3）ローム粒含む。
6、黒褐（10YR2/3）ローム粒・焼土粒・炭化物粒含む。締り弱い。
　6′は黒褐（10YR2/3）焼土粒・炭化物粒含む。ローム粒ごく少量含む。6層より締る。
7、黒褐（10YR2/3）ロームとの混土。7′はローム少ない。ごく固く締る。
8、黒褐（10YR2/3）ローム粒少量混、焼土粒・炭化物粒ごく少量含む。締り弱い。
9、暗褐（10YR3/3）白色軽石粒・ローム粒少量混、やや締る。
10、黒褐（10YR2/3）ローム粒・焼土粒少量混、締り弱い
11、黒褐（10YR2/3）ローム粒10層よりやや多い。
12、黒褐（10YR2/3）ローム粒少なく、焼土粒やや多い。
13、黒褐（10YR2/3）焼土粒・炭化物粒含む。
14、暗褐（10YR2/3）ローム粒、小ブロック・小粒の焼土粒・炭化物粒を全体に含む。
15、黒褐（10YR2/3）ローム粒少量含む。
16、暗褐（10YR3/3）白色軽石粒・ローム粒少量含む。16′はローム斑多く、締る。
17、暗褐（10YR3/3）白色軽石・焼土粒少量含む。
18、暗褐（10YR3/3）ローム斑30%含む。
19、黒褐（10YR2/3）混入物ごく少ない。やや粘質。
20、黒褐（10YR2/3）白色軽石粒含む。ローム粒・焼土粒ごく少量含む。
21、暗褐（10YR3/3）ローム斑含む。やや締る。
22、黒褐（10YR2/3）20層類似だが、締りない。攪乱か柱痕?
23、暗褐（10YR3/3）ロームとの混土。固く締る。
24、暗褐（10YR3/3）白色軽石・焼土粒含む。
25、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌主体。

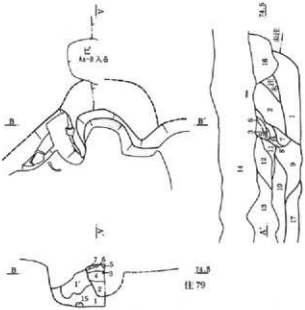
0　1：60　2m

第258図　住居跡79遺構図

下層ローム漸移上層、標高74.6mである。重複は溝跡188、土坑188に切られ、住居跡83を切る。規模は南北480＋αcm、東西340cm、方向N4°45′Wを測る。施設は掘方で、貯蔵穴・西壁下周溝・床下坑がある。貯蔵穴は、廃棄時点では埋没して使用されたらしく、発見面は掘方に至ってである。遺物は第270～272図のとおり、9世紀初期の土器類があり、坏類の内面磨耗痕が目立って存在する。蓋類は端部の鋭さに欠ける。住居の機能時も9世紀初期である。

住居跡85　（第273・274図、図版53・173）

位置はQ大区ｔ182にあり、調査面はローム漸移上層付近、標高74.65m。重複は住居跡78を切るが、床面の大半は失なわれていた。規模は南北で22cm、東西198cm、方向N16°W。施設として竈、貯蔵穴が確認された。第273図竈図は掘方で、貯蔵穴は調査面より深さ12cmである。遺物は少量であるが、第274図1・2があり、同1は床出土で10世紀中頃の個体である。住居跡機能時もその頃であろう。



１、黒褐　ローム粒・ローム斑含む。炭化物少量含む。焼土は含まない。締っている。カマド袖の延長。1′はローム粒少量、焼土粒含む。やや緩り弱い。

２、暗褐　ローム粒・炭化物・焼土粒ともにごくわずかに含む。緩り弱い。カマド袖の延長。

３、焼土ブロック。天井崩落土。

４、暗褐　焼土小ブロック・ローム粒多く含む。天井崩落土。下面がカマド底面と思われるが、焼土面はない。

５、ロームブロック。天井崩落土。

６、焼土の大ブロックと暗褐色土との混土。天井崩落土。

７、暗褐　焼土小ブロックを含む。３・４層の崩れたもの。撹乱かもしれない。

８、暗褐　焼土小ブロックを含む。３・４層の崩れたもの。撹乱かもしれない。

９、暗褐　ローム斑・灰・炭化物などを縞状に混入する。

10、暗褐　ローム粒・灰・炭化物少量混。

11、暗褐　ローム粒混、焼土や炭化物はほとんどない。

12、暗褐　11層よりローム粒さらに少ない。

13、暗褐　焼土・炭化物含む。

14、暗褐　焼土・炭化物含む。B少量含む。

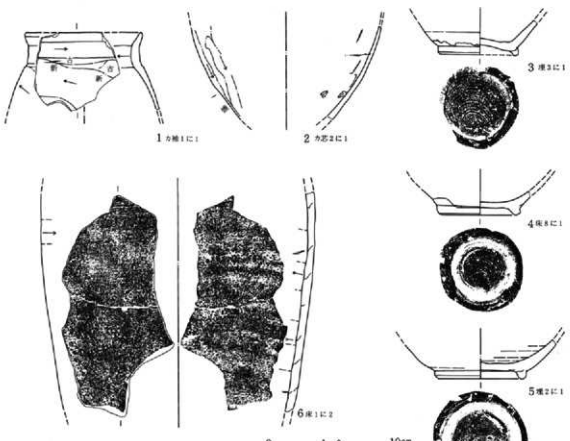
15、ロームブロック。

16、ピット埋土。

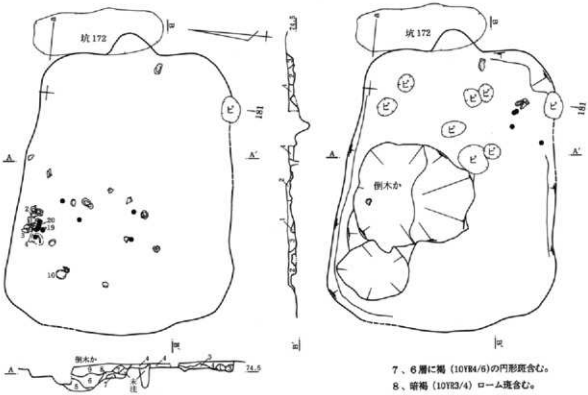
17、床。

0　1：30　1m

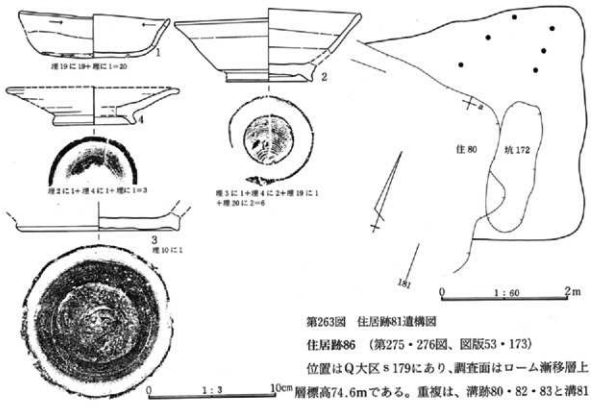
第259図　住居跡79遺構図



第260図　住居跡79遺物図



第261図　住居跡80遺構図

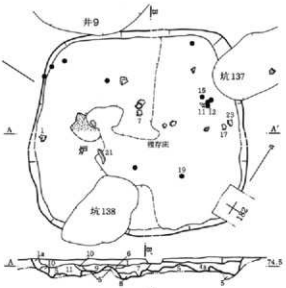


第262図　住居跡80遺物図

第263図　住居跡81遺構図

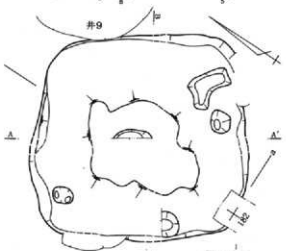
住居跡86　（第275・276図、図版53・173）

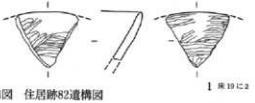
位置はQ大区ｓ179にあり、調査面はローム漸移層上層標高74.6mである。重複は、溝跡80・82・83と溝81に切られる。施設として竈は溝跡80に削られ、調査面



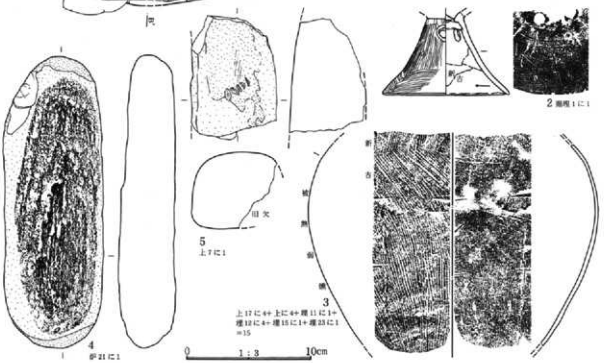
1、黒褐（10YR2/2）白色粒全体に混入。ローム極小粒・ブロック含む。土は密。
1 a.黒褐（10YR2/2）ローム粒含む。密度高い。密。
2、黒　（10YR2/1）ロームブロックの塊が入る。全体にロームとのブレンド。固さは床にしては弱い。
3、黒　（10YR2/1）白色粒混入。
4、黒褐(10YR2/3)・黒(10YR2/1)・ローム(10YR5/8)のブレンド。ひどく乱れている。白色粒混入。
4 a.黒褐(10YR2/3)・黒(10YR2/1)・ローム(10YR5/8)のブレンド。4層と同じも表層固く床面形成。あえて分層すれば2層相等。粗。
5、地山ローム黄橙(10YR6/8)に近いが、あまりきれいでなく乱れあり。
6、黒　（10YR2/1）土壌化ロームブロック入る。密。
7、黒　（10YR2/1）ロームブロック多量混入。白色粒含む。密。
8、明黄褐（10YR6/6)に黒(10YR2/1)混入ブレンド。
9、黄褐(10YR5/6・5/8)・黒(10YR2/1)のブレンド。
10、黒褐（10YR2/3）やや大きい白色粒含む。密。
11、黒（10YR2/1）にロームブロック入るもブレンドされ鮮明でない。密。

0　1：60　2m

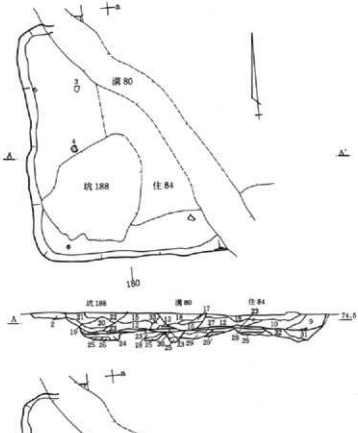


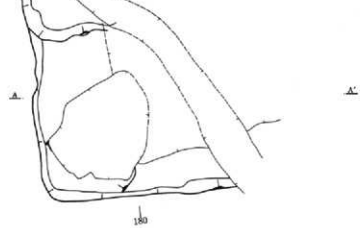


第264図　住居跡82遺構図



第265図　住居跡82遺物図



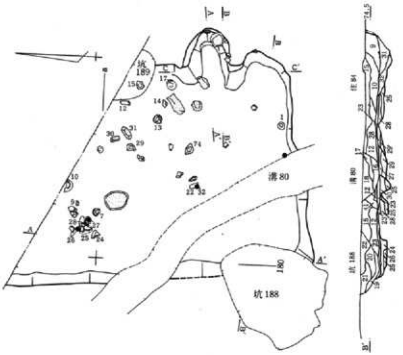


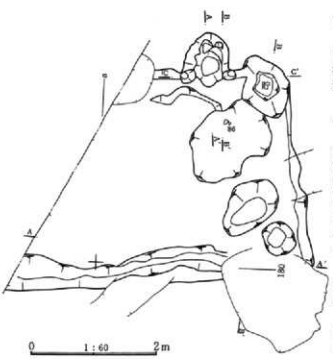
2、暗褐（10YR3/3）ローム粒少量含む。やや締る。
8、暗褐（10YR3/4）下部にロームブロック含む。締り弱い。
9、暗褐（10YR3/4）ローム粒・炭化物粒含む。
10、暗褐（10YR3/4）ローム粒含む（9層より多い）。炭化物粒・焼土粒含む。やや締る。
12、暗褐（10YR3/4）ローム粒・小斑を含む。炭化物含む。やや締る。
15、暗褐（10YR3/4）ローム粒少量含む。白色軽石粒含む。やや締る。
16、黒褐（10YR2/3）ローム小ブロック・白色軽石粒含む。やや締る。
17、暗褐（10YR3/3）焼土粒全体に混入。周辺土壌とのブレンド。乱れ強い。軟らかい。
18、暗褐（10YR3/3）ローム粒・小ブロック含む。白色軽石粒含む。締っている。
19、暗褐（10YR3/4）ローム粒・斑含む。締っている。
20、暗褐（10YR3/4）ローム粒・斑含む。締っている。白色軽石粒含む。
21、暗褐（10YR3/4）ローム粒・斑含む。締っている。白色軽石粒含む。（20層より多い）焼土粒含む。
22、暗褐（10YR3/3）ローム粒少量含む。締っている。白色軽石粒含む。（21層よりさらに多い）
23、暗褐（10YR3/4）と褐（10YR4/6）との層状の床層。23′はほぼ同じ。
24、暗褐（10YR3/4）
25、暗褐（10YR3/4）と明黄褐（10YR6/6）との混じり。
26、褐　（10YR4/6）
27、暗褐（10YR3/4）に褐（10YR4/6）少し入る。
28、暗褐（10YR3/4）と褐（10YR4/6）との混じり。
29、暗褐（10YR3/4）と明黄褐（10YR6/6）との混じり。固く締る。29′はほぼ同じ。
30、暗褐（10YR3/4）に褐（10YR4/6）少し入る。
31、暗褐（10YR3/4）と黒褐（10YR3/1）が灰色味をおびた粘性ブロック含む。やや締る。上層は焼土・炭多く、締り弱い。
32、暗褐（10YR3/1）炭化物・焼土粒混じり、締り弱い。
33、攪乱

0　1：60　2m

第266図　住居跡83遺構図

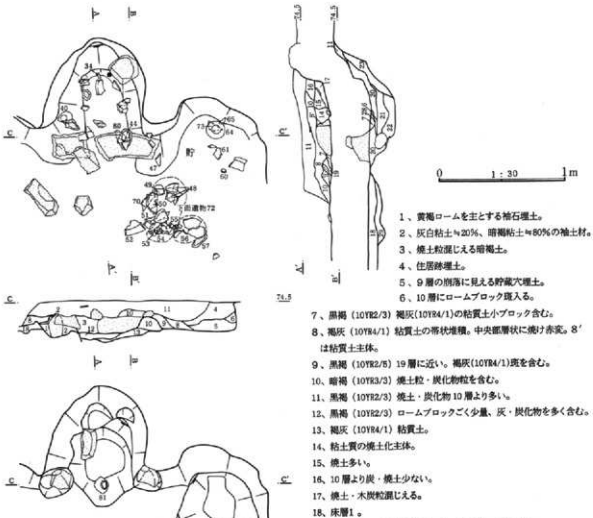
第267図　住居跡83遺物図





3、暗褐（10YR3/4）ローム粒・小ブロック含む。やや粘質。
4、暗褐（10YR3/3）混入物少ない。締り弱い。
5、暗褐（10YR3/4）ローム小ブロックを少量含む。
6、暗褐（10YR3/3）ローム粒少量含む。やや粘質。やや締る。
7、暗褐（10YR3/3）ローム粒含む。やや締る。
8、暗褐（10YR3/4）下部にロームブロック含む。締り弱い。
9、暗褐（10YR3/4）ローム粒・炭化物粒含む。
10、暗褐（10YR3/4）ローム粒含む(9層より多い)。炭化物粒・焼土粒含む。やや締る。
11、暗褐（10YR3/3）ローム小ブロック・斑を含む。炭化物含む。やや締る。
12、暗褐（10YR3/4）ローム粒・小斑を含む。炭化物含む。やや締る。
13、黒褐（10YR2/3）ローム斑を多く含む。締り強い。
14、暗褐（10YR3/4）ローム粒・小斑・白色軽石粒含む。やや締る。
15、暗褐（10YR3/4）ローム粒少量含む。白色軽石粒含む。やや締る。
16、黒褐（10YR2/3）ローム小ブロック・白色軽石粒含む。やや締る。
17、暗褐（10YR3/3）焼土粒全体に混入。周辺土壌とのブレンド。乱れ強い。軟らかい。
18、暗褐（10YR3/3）ローム粒・小ブロック含む。白色軽石粒含む。締っている。
19、暗褐（10YR3/4）ローム粒・斑含む。締っている。
20、暗褐（10YR3/4）ローム粒・斑含む。締っている。白色軽石粒含む。
21、暗褐（10YR3/4）ローム粒・斑含む。締っている。白色軽石粒含む。（20層より多い）焼土粒含む。
22、暗褐（10YR3/3）ローム粒少量含む。締っている。白色軽石粒含む。（21層よりさらに多い）
23、暗褐（10YR3/4）と褐（10YR4/6）との層状の味層。23′はほぼ同じ。
24、暗褐（10YR3/4）
25、暗褐（10YR3/4）と明黄褐（10YR6/6）との混じり。
26、褐（10YR4/6）
27、暗褐（10YR3/4）に褐（10YR4/6）少し入る。
28、暗褐（10YR3/4）と褐（10YR4/6）との混じり。
29、暗褐（10YR3/4）と明黄褐（10YR6/6）との混じり。固く締る。29′はほぼ同じ。
30、暗褐（10YR2/4）に褐（10YR4/6）少し入る。
31、暗褐（10YR3/4）と黒褐（10YR3/1）が灰色味をおびた粘性ブロック含む。やや締る。上層は焼土・炭多く、締り弱い。
32、暗褐（10YR3/1）炭化物・焼土粒混じり、締り弱い。
33、暗褐（10YR3/4）にローム斑を加え、締る。
34、暗褐（10YR3/4）にローム小ブロック 50%あり。やや締る。
35、暗褐（10YR3/4）に灰褐ロームの崩れ標入る。
36、黒褐（10YR2/3）ローム小ブロック少し混じる。
37、黒褐（10YR2/3）黄色ローム・灰色ローム の小ブロック少し入る。
38、暗褐（10YR3/3）に黄色ローム小斑とくずれたブロック多く入る。
39、灰褐ロームブロック主体。
40、暗褐（10YR3/3）に灰褐ローム 40%混じり、黄色ロームブロック少し含む。
41、撹乱。

第268図　住居跡84遺構図

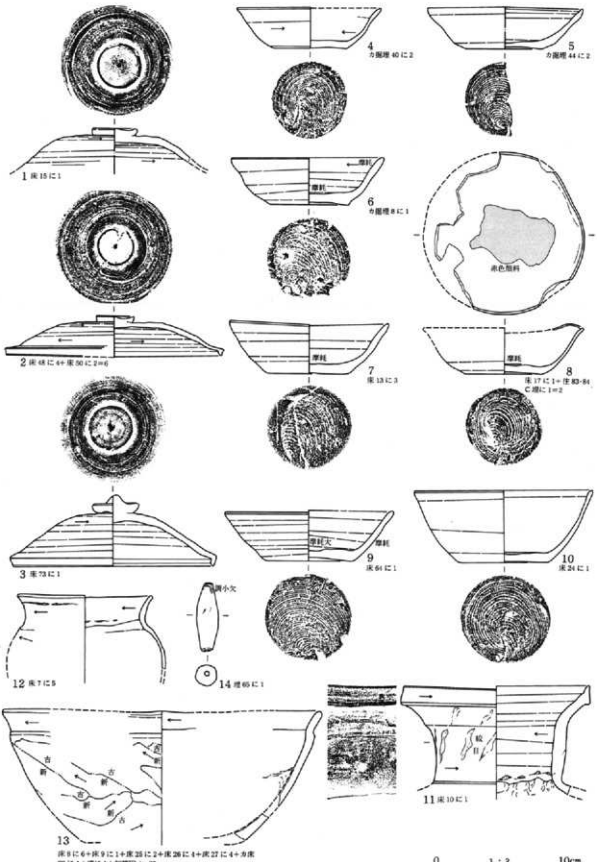


第269図　住居跡84遺構図

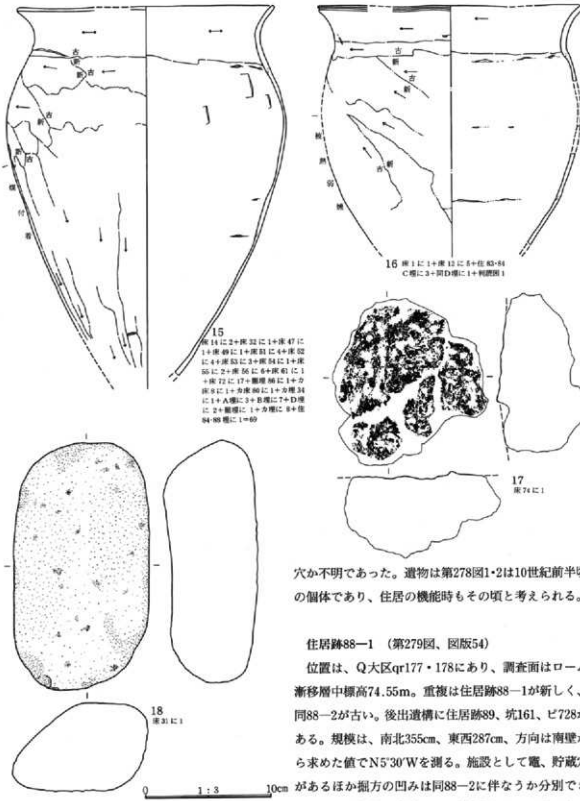
から深さ18cmの貯蔵穴が掘り方調査で、他に床下の土坑を見い出した。規模は南北255cm、東西で278＋αcm、方向は北壁から求めた場合N41°30′Wを測る。遺物は微弱であったが、第276図を拠どころとすれば10世紀前半頃が須恵器坏片の製作時期である。住居跡の平面形態が短辺に東竈を設ける形であれば、10世紀前半の構築時期を充分考えうる。

住居跡87　（第277・278図、図版53・173）

位置はQ大区r・s178にあり、調査面はローム漸移層上層で標高74.6mである。重複は溝跡82、ピット3穴が後出し、竈前に前代のピットがある。第277図床面図の中央にあるL字型空白は下水路である。規模は南北423cm、東西334cm、方向N8°Wを測る。施設として竈、掘方上面より深さ21cmの賦蔵穴がある。貯蔵穴は廃棄時床面の時点ではほとんど埋没していた。竈掘方図の袖左右位置下のピットは石材抜取りが築構時の掘方



第270図　住居跡84遺物図



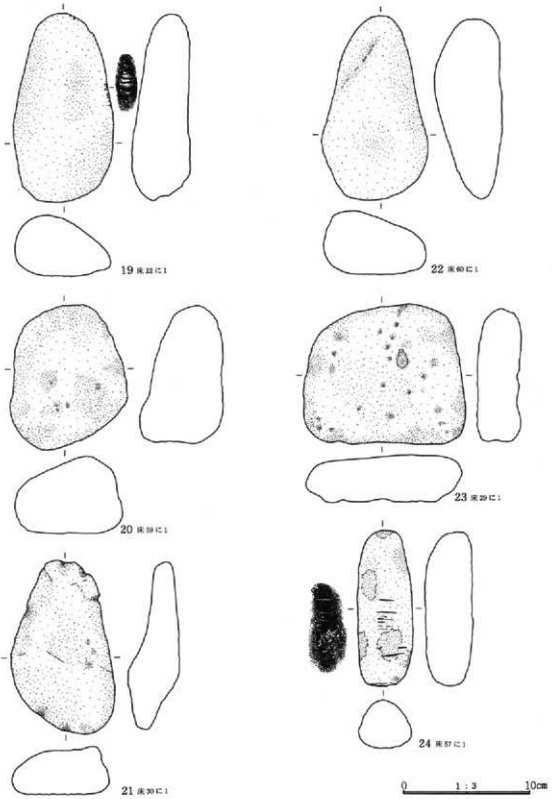
第271図　住居跡84遺物図

穴か不明であった。遺物は第278図1・2は10世紀前半頃の個体であり、住居の機能時もその頃と考えられる。

住居跡88―1　（第279図、図版54）

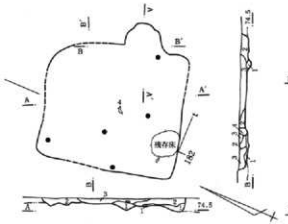
位置は、Q大区qr177・178にあり、調査面はローム漸移層中標高74.55m。重複は住居跡88―1が新しく、同88―2が古い。後出遺構に住居跡89、坑161、ピ728がある。規模は、南北355cm、東西287cm、方向は南壁から求めた値でN5°30′Wを測る。施設として竈、貯蔵穴があるほか掘方の凹みは同88―2に伴なうか分別できなかった。遺物は抽出ミスで掲載することができなかった。

住居跡88―2　（第279図、図版54）

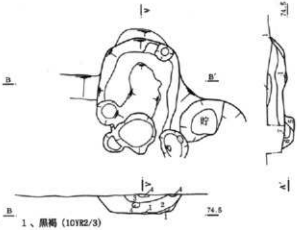


第272図　住居跡84遺物図

位置は、Q大区qr177・178にあり、調査面はローム漸移層中標高74.55mにある。重複は住居跡88―1が新しく、同88―2が古い。後出遺構に住居跡89、坑161、ピ728がある。規模は、南北300cm前後、東西210＋αcm、方向は同88―1に近似であろう。施設として住居跡88―1竈掘方に西接して同88―2の掘方が、さらに同88―1



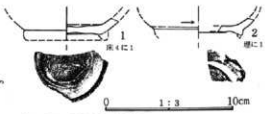
1、暗褐（10YR3/4）ローム粒・ロームブロックを多く含む。
2、暗褐（10YR3/4）ローム粒・ロームブロック・白色軽石を含む。締っている。
3、暗褐（10YR3/3）白色軽石を含む。締っている。
4、攪乱
1～3ともに黒り方一床間の貼床土、床面はこれより上位にある。



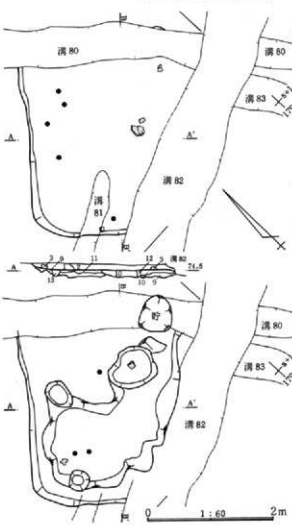
1、黒褐（10YR2/3）
2、黒褐（10YR2/3）ロームブロック少量含む。焼土粒・炭含む。
3、黒褐（10YR2/2）ローム粒含む。焼土粒・炭多く含む。
4、暗赤褐（2.5YR3/6）焼土。
5、暗褐（10YR3/3）ローム粒少量含む。
6、暗褐（10YR3/3）ローム小ブロック含む。
7、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック。

0　1：60　2m　　0　1：30　1m

第273図　住居跡85遺構図

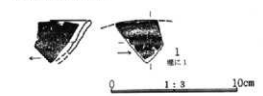


第274図　住居跡85遺物図

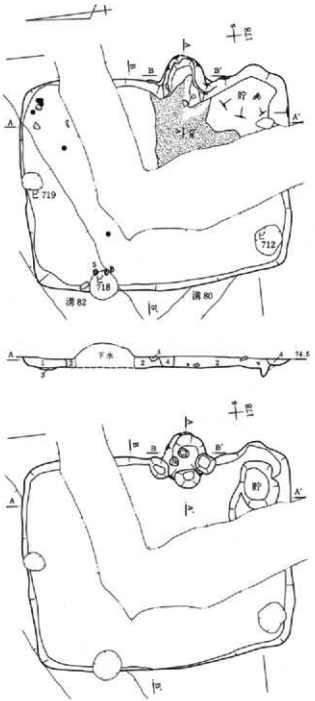


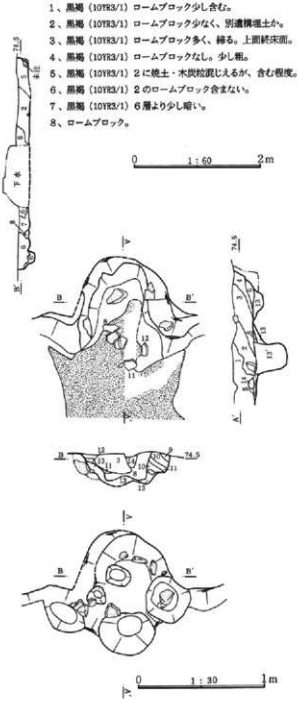
第275図　住居跡86遺構図

1、暗褐（10YR3/4）ローム斑を多く含む。締り強い。
2、暗褐（10YR3/4）ローム斑・粒含む。焼土粒・炭化物粒含む。締っている。2′は炭化物・焼土粒多い。
3、ロームブロック。
4、暗褐（10YR3/3）ロームブロック多く含む。
5、暗褐（10YR3/4）ローム粒・白色軽石含む。
6、暗褐（10YR3/3）ローム粒・ローム小斑が混入。やや締る。
7、暗褐（10YR3/3）ローム粒・ローム小斑少量混入。締弱。
8、黒褐（10YR2/3）ローム粒少量含む。
9、褐（10YR4/4）崩れた漸移層を主体とする。
10、暗褐（10YR3/4）ローム斑・ブロックを30%含む。層状に締る。床。
11、暗褐（10YR3/3）あまり混入物の見えない層。11′はYP粒混入。
12、攪乱。13、未注記。



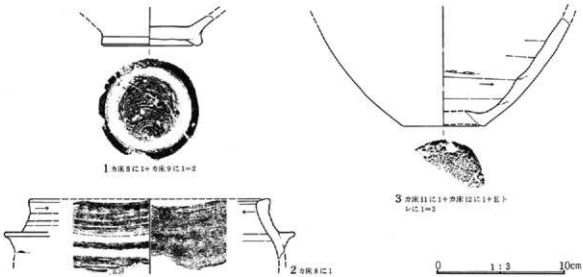
第276図　住居跡86遺物図





1、灰黄褐（10YR4/2）ローム粒含む。焼土粒わずか含む。
2、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック多く含み、下方にしたがい焼土粒多い。天井体崩落。
3、黒褐（10YR3/2）焼土粒含み、下方にしたがい木炭多い。
4、明赤褐（10YR5/8）～黒褐（10YR3/2）焼土粒が上方に多く、下方にしたがい木炭粒多い。ロームブロック少ない。
5、明赤褐（10YR5/8）焼土化した地山。
6、黒褐（10YR3/2）木炭粒多く含む。焼土粒少なく、ローム小ブロック入る。
8、灰黄褐（10YR4/2）木炭・焼土粒含む。掘方埋土。
9、灰黄褐（10YR4/2）焼土・木炭なし。ロームブロック多い。
10、にぶい黄褐（10YR7/4）ローム主体。客土。
11、灰黄褐（10YR4/2）大焼土粒含む。
12、灰黄褐（10YR4/2）客土。焼土・木炭なし。
13、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。掘方埋土。13′はほぼ同じ。
14、ロームブロック。

第277図　住居跡87遺構図



第278図　住居跡87遺物図

の貯蔵穴掘方に西近接して貯蔵穴を認めた。掘方上面より20cmの深さがある。遺物は抽出ミスで掲示できなかった。

住居跡89　（第280・281図、図版54・55・174）

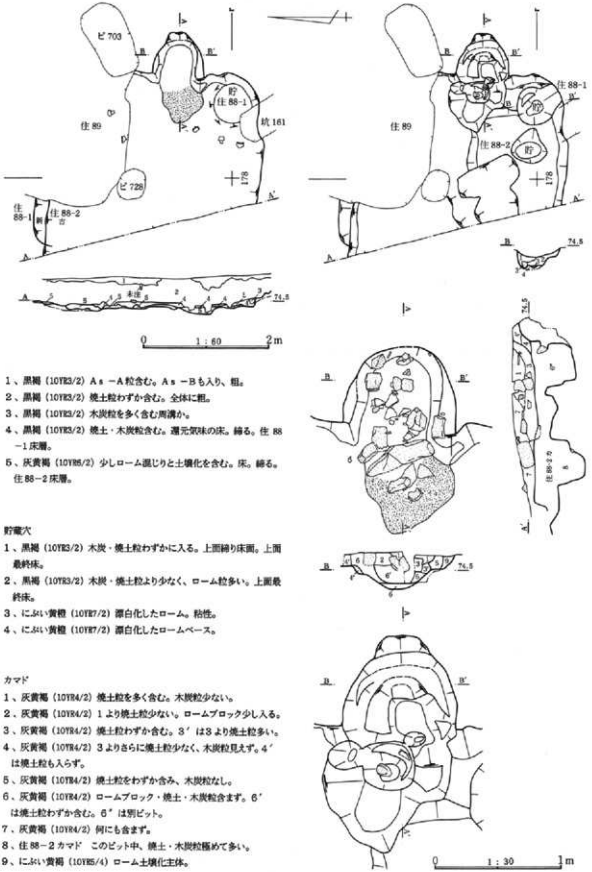
位置は、Ｑ大区rs177・178にあり、調査面はローム漸移層中標高74.45mである。重複は溝跡79・84、南東隅を無番土坑、ピ697・698・703・705他は２ピットが切るが、住居跡89はピ704、竈直下の土坑を切っていた。規模は南北445cm、東西323cm、方向は中軸でN6°Wを測る。施設として竈、床下土坑がある。貯蔵穴は無番坑と重なるため明確でなかった。遺物は第281図３が床面、竈に関連しての存在であり、それを捉えると９世紀前半であり、住居の機能時もその頃と考えられる。

住居跡90　（第282・283・284図、図版55・173）

位置はＱ大区qr176・177にあり、調査面は黒色土層中で標高74.5m。重複は溝跡79・ピ708・736・921に切られる。調査時で既に南端床面を失なっていた。規模は、東西450cm、南北297cm、北壁から捉えた方位N7°Wを測る。施設として竈、貯蔵穴らしき掘方面からの深さ16cmの小穴を認め、掘方では坑170を床下坑と捉えた。竈は、第282図右上のように掘方は別土坑もからみ、形態も明確ではなく、竈前の灰層、左端のしっかりした焼土面が、竈中心から外れた位置にあり、住居跡90は２棟以上の重さなりの可能性もある。遺物は第283図１～３が10世紀中頃と考えられるほか、同図７は８世紀前半の女瓦である。第284図８は８世紀後半から９世紀前半の女瓦で二次利用である。

住居跡91　（第285・286図、図版55・174）

位置はＱ大区qr176・177にあり、調査面はローム漸移層～黒色土下層で標高74.5m。重複は溝跡79・坑174・225に切られ、先行して下方に住居跡92がある。規模は、東西142＋αcm、南北355cm、西壁から捉えた方向N9°45'Wを測る。施設として調査そのものが住居跡の痕跡であり、竈、貯蔵穴位置は坑174・225に削られ、さらに掘方は下方の住居跡92の黒色土の埋土のため不明確であった。遺物は第286図に示した同図１のみが床面として直結の遺物で、同図3・4のカ埋は住居跡92の竈遺物で版組の誤まりである。同図１は９世紀前半の個



１、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ａ粒含む。Ａｓ－Ｂも入り、粗。
２、黒褐（10YR3/2）焼土粒わずか含む。全体に粗。
３、黒褐（10YR3/2）木炭粒を多く含む周溝か。
４、黒褐（10YR3/2）焼土・木炭粒含む。還元気味の床。締る。住88－１床層。
５、灰黄褐（10YR6/2）少しローム混じりと土壌化を含む。床。締る。住88－２床層。

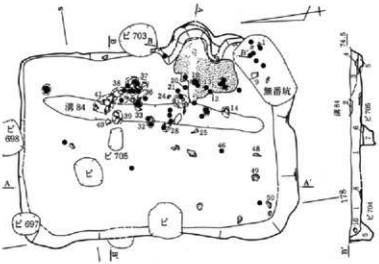
貯蔵穴

１、黒褐（10YR3/2）木炭・焼土粒わずかに入る。上面締り床面。上面最終床。
２、黒褐（10YR3/2）木炭・焼土粒より少なく、ローム粒多い。上面最終床。
３、にぶい黄橙（10YR7/2）漂白化したローム。粘性。
４、にぶい黄橙（10YR7/2）漂白化したロームベース。

カマド

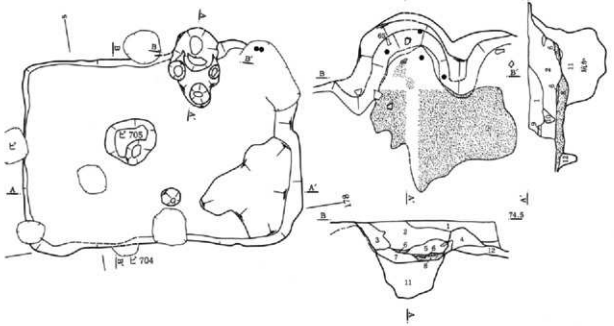
１、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒を多く含む。木炭粒少ない。
２、灰黄褐（10YR4/2）１より焼土粒少ない。ロームブロック少し入る。
３、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒わずか含む。３′は３より焼土粒多い。
４、灰黄褐（10YR4/2）３よりさらに焼土粒少なく、木炭粒見えず。４′は焼土粒も入らず。
５、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒をわずか含み、木炭粒なし。
６、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック・焼土・木炭粒含まず。６′は焼土粒わずか含む。６″は別ピット。
７、灰黄褐（10YR4/2）何にも含まず。
８、住88－２カマド　このピット中、焼土・木炭粒極めて多い。
９、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

第279図　住居跡88－１・２遺構図

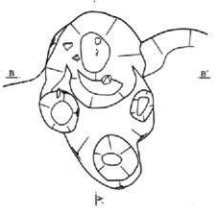


1、黒褐（10YR3/1）焼土粒・軽石混じえる。締り弱い。
2、黒褐（10YR3/1）Ａｓ－Ｂ混じり。
3、黒褐（10YR3/1）少しロームブロック・焼土粒入る。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く含む。
5、黒褐（10YR3/1）少しにじむ感じでロームブロック土壊化。
6、黒褐（10YR3/1）ロームブロックを多く含む床。
7、黒褐（10YR3/1）粘性。漂白化ローム小ブロック含み、軟。
8、黒褐（10YR3/1）少し還元気味床。
9、にぶい黄褐（10YR5/3）ローム土壊化還元気味。
10、ロームブロック。
11、未注記。

0　1：60　2m

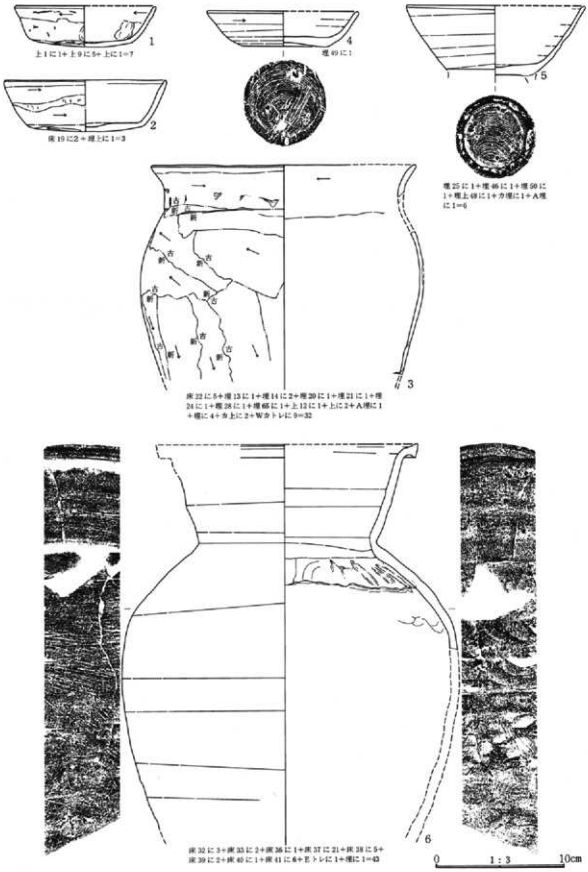


1、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒微。軽石粒含む。
2、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒あり。
3、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒・塊あり。ロームブロック含む袖。客土に至る。
4、にぶい黄褐（10YR5/4）焼土粒含み、ロームの土壊化か。
5、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒多い。下方灰・木炭灰含む。
6、黒褐（10YR3/1）木炭灰の黒色・灰層。
7、黒褐（10YR3/1）灰を多く含む。
8、褐灰（10YR3/1）ワラ灰状の色の灰を多く含む。
9、にぶい黄褐（10YR4/3）ロームブロックを多く含む。天井の崩落土か。
10、にぶい黄褐（10YR4/3）ロームブロック・焼土粒を含む。
11、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭・灰を多く含む。
12、貼床とカマド脇方埋土。

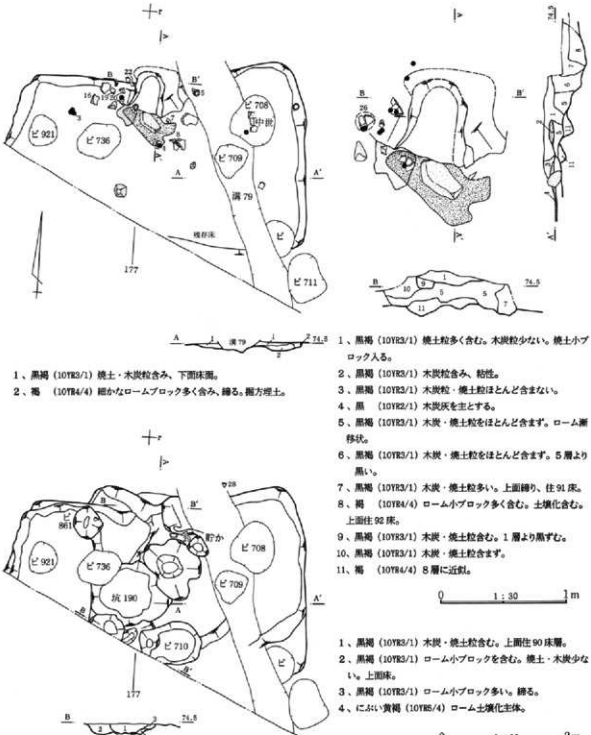


0　1：30　1m

第280図　住居跡89遺構図



第281図　住居跡89遺物図

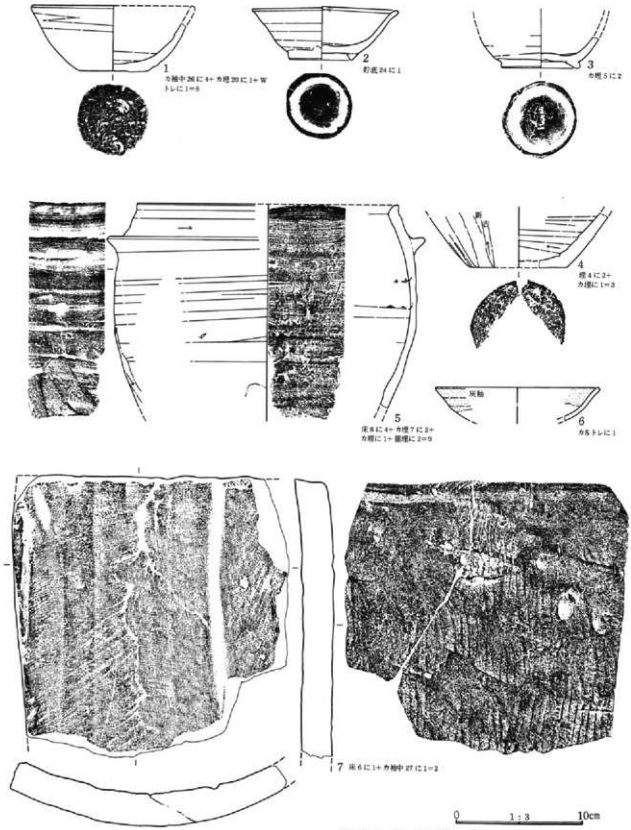


第282図　住居跡90遺構図

体であるが、住居跡重複が多く、住居跡時期認定は推奨できない。

住居跡92　（第287・288図、図版56・175）

位置は、Q大区qr176・177にある。調査面は黒色土下層～ローム漸移上層で標高74.5mである。重複は、上面に住居跡91が後出してあり、坑174・225に切られる。第287図に示した竈跡図は、竈前付近掘方状態で、

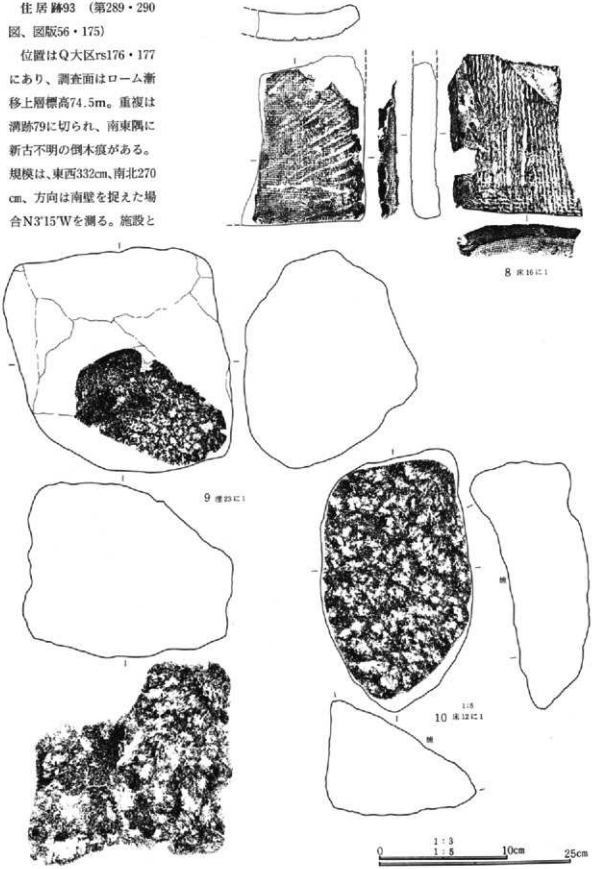


第283図　住居跡90遺物図

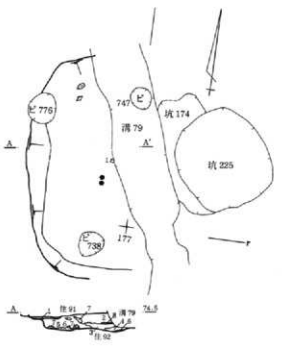
竈跡は後出の倒木のため明確ではなかった。施設として床より深さ28cmの貯蔵穴を確認し、掘方で床下坑がある。遺物は９世紀前半の第288図１のほか第286図４がある。重複多く時期認定に難がある。

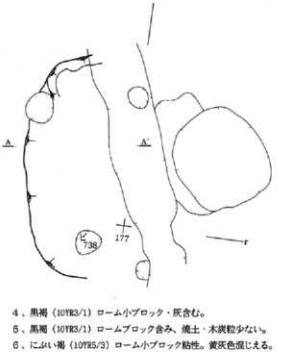
住居跡93（第289・290図、図版56・175）

位置はQ大区rs176・177にあり、調査面はローム漸移上層標高74.5m。重複は溝跡79に切られ、南東隅に新古不明の倒木痕がある。規模は、東西332cm、南北270cm、方向は南壁を捉えた場合N3°15′Wを測る。施設と



第284図　住居跡90遺物図

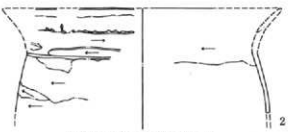


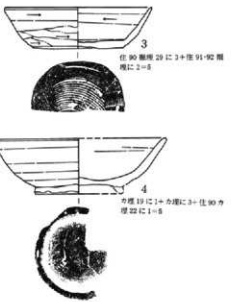


1、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック混じえ、締る。住91床。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒混じる。
3、褐灰（10YR5/1）焼土を少し混じえ、灰色灰を主とする。土層は木炭灰。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・灰含む。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、焼土・木炭粒少ない。
6、にぶい褐（10YR5/3）ローム小ブロック粘性。黄灰色混じえる。
7、ロームブロック。
8、木炭灰を主とする。

0　1：60　2m

第285図　住居跡91遺構図



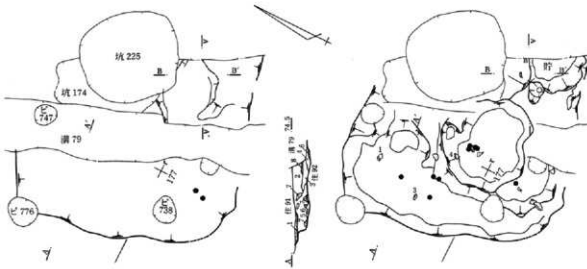


0　1：3　10cm

第286図　住居跡91遺物図

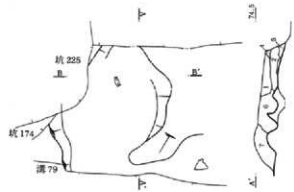
して竈、掘方中での深さ14cmの貯蔵穴、床下坑の坑164、坑170は西壁に片寄り床下坑かは疑問が残る。遺物は第290図3・4は古墳時代前期、同図1・2・5・6・7があり、そのうち5～7は床・竈トレンチのため住居廃棄時の根拠とすれば9世紀前半である。

住居跡94　（第292・293図、図版56・57・175・176）



1、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック混じえ、締る。住91床。
2、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒混じる。
3、褐灰（10YR5/1）焼土を少し混じえ、灰色灰を主とする。土層は木炭灰。
4、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・灰含む。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、焼土・木炭粒少ない。
6、にぶい褐（10YR5/3）ローム小ブロック粘性。黄灰色混じえる。
7、ロームブロック。
8、木炭灰を主とする。

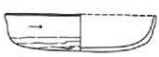
0　1：60　2m



1、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く、木炭含む。ローム小粒入る。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。焼土・木炭粒少ない。
3、黒褐（10YR3/1）ロームブロック・焼土粒少ない。
4、黒褐（10YR3/1）焼土粒多く含む。ローム粒入る。
5、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。
6、黒褐（10YR3/1）ロームブロック・焼土・木炭少ない。
7、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。焼土・木炭少ない。

0　1：30　1m

第287図　住居跡92遺構図



1 床3に1＋床4に1＋壁1に2=4

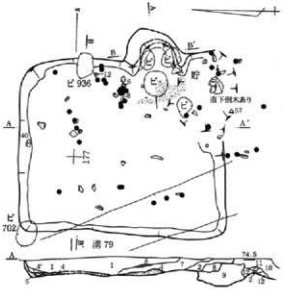
0　1：3　10cm

第288図　住居跡92遺物図

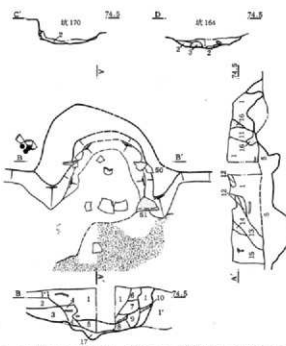
位置はQ大区qr175・176、調査面はローム漸移上層標高74.5m。重複は西壁に前代倒木、後出して住居跡93・95、坑174・224がある。規模は南北538cm、東西532cm、方向は中軸でN30°45′Wを測る。施設に新・旧炉跡、貯蔵穴、新古建替が考えられそうな柱穴ピ750・824、ピ752も建替か、ピ753、ピ754がある。床面図の柱穴内トーンは柱痕で抜取りの可能性あり。遺物は第293図のとおり古墳時代前期の一群で、住居機能時も同期である。

住居跡95　（第294・295図、図版57・176）

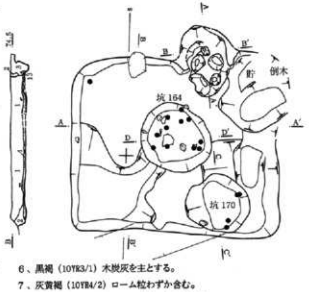
位置はQ大区qr175、調査面はローム漸移層中標高74.45m。重複は土坑165・166、ピ908～910や後世ピットが切る。前代にも住居跡があったらしく不明の焼土他が竈掘方右袖下にある。規模は南北427cm、東西350



1、灰黄褐（10YR4/2）ローム粒わずかに含む。
2、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロック含む。
3、灰黄褐（10YR4/2）１と同質。やや黒ずむ。
4、灰黄褐（10YR4/2）１に近似。締り、粘性。還元気味。床最終。４′は少し軟らか。
5、灰黄褐（10YR4/2）少し茶味あり。



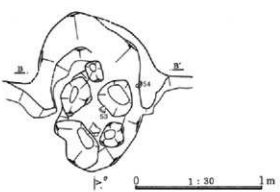
1、灰黄褐（10YR4/2）焼土・木炭を含む。1′は焼土・木炭粒含まない。
2、灰黄褐（10YR4/2）焼土・木炭粒含まず。ローム小粒入らず。
3、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム漸移的であるが、黒ずむ。
4、にぶい黄褐（10YR4/3）黄褐味は３層に共通し、さらに焼土・木炭粒入る。
5、灰黄褐（10YR4/2）木炭・焼土粒多い。カマド破壊土か。
6、にぶい黄褐（10YR4/3）焼土・木炭粒・ローム粒含む。
7、にぶい黄褐（10YR6/4）ローム大ブロック多く、焼土粒含む。



6、黒褐（10YR3/1）木炭灰を主とする。
7、灰黄褐（10YR4/2）ローム粒わずか含む。
8、灰黄褐（10YR4/2）ローム小粒・焼土粒含む。
9、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒・ローム小ブロック含む。風倒木埋土か。
10、灰黄褐（10YR4/2）焼土粒・ローム小ブロック含む。風倒木埋土か。
11、灰黄褐（10YR4/2）木炭粒やや多い。風倒木埋土か。
12、黄褐（10YR5/6）ロームブロック多く含む。風倒木埋土か。
13、ロームブロック。

1、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含み、やや締る。
2、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含み、やや締る。ローム小ブロック多い。
3、未注記。

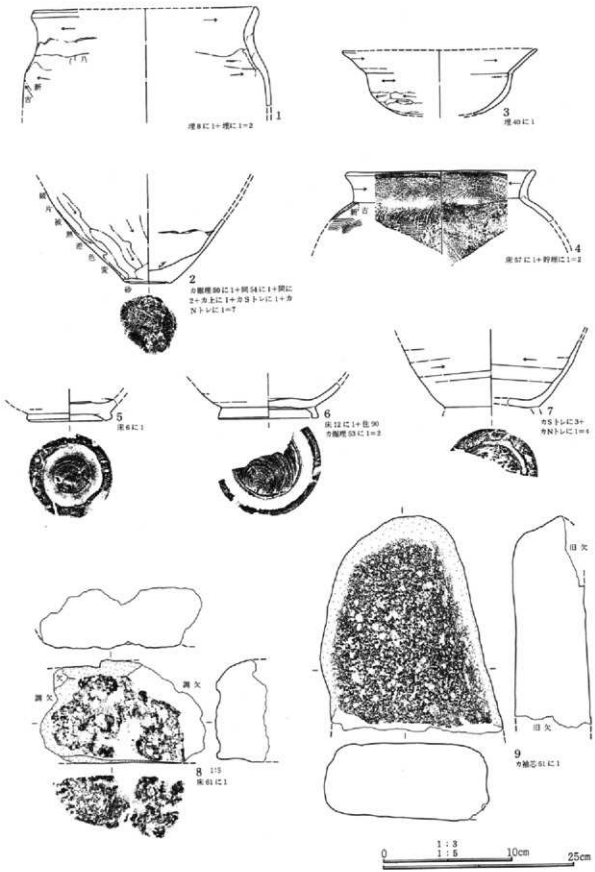
0　1：60　2m



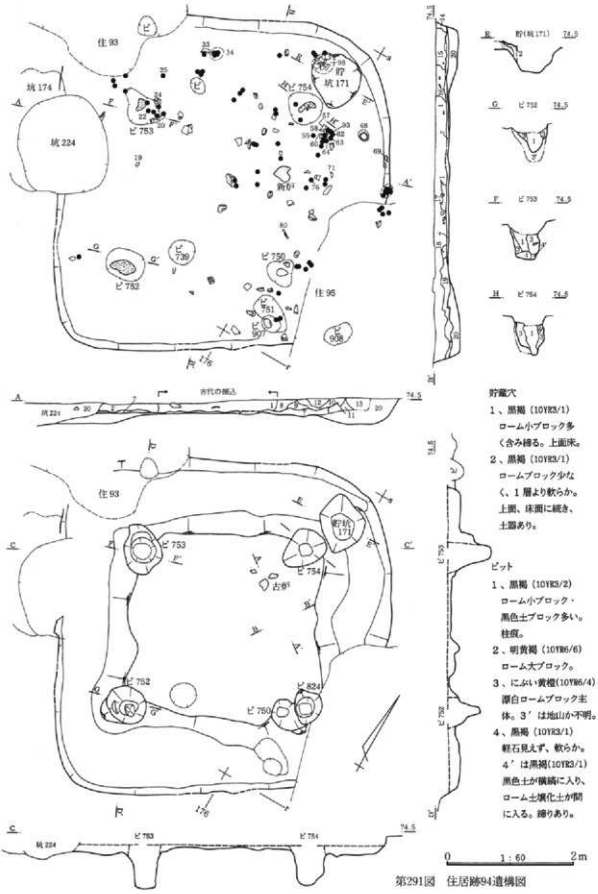
0　1：30　1m

8、灰黄褐（10YR4/2）木炭・焼土多い。
9、灰黄褐（10YR4/2）木炭・焼土粒ほとんど含まず。
10、灰黄褐（10YR4/2）木炭・焼土粒含み、少し締る。
11、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロックとその土壌化を主とする。
12、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック。
13、にぶい黄褐（10YR5/2）ロームブロック小粒多く含む。天井崩落土か。
14、灰黄褐（10YR4/2）ローム粒・焼土ブロックわずか含む。
15、灰黄褐（10YR4/2）ローム粒・焼土ブロックわずか含む。
16、焼土。
17、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

第289図　住居跡93遺構図



第290図　住居跡93遺物図



貯蔵穴

1、黒褐（10YR3/1）
ローム小ブロック多く含み締る。上面床。

2、黒褐（10YR3/1）
ロームブロック少なく、1層より軟らか。上面、床面に続き、土器あり。

ピット

1、黒褐（10YR3/2）
ローム小ブロック・黒色土ブロック多い。柱痕。

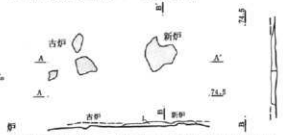
2、明黄褐（10YR6/6）
ローム大ブロック。

3、にぶい黄橙(10YR6/4)
漸白ロームブロック主体。3′は地山か不明。

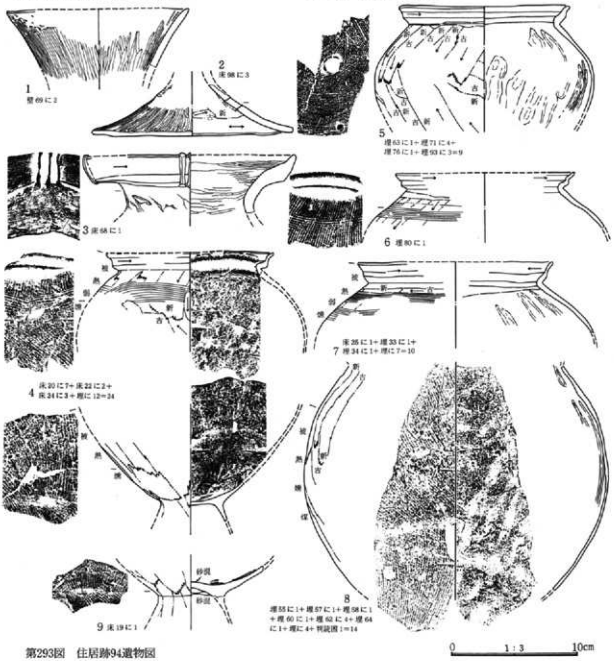
4、黒褐（10YR3/1）
軽石見えず、軟らか。4′は黒褐(10YR3/1)黒色土が横続に入り、ローム土壊化土が間に入る。締りあり。

第291図　住居跡94遺構図

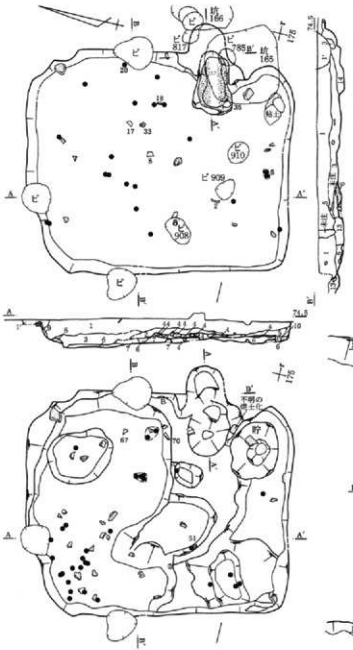
1、黒褐（10YR3/1）ロームブロックほとんど入らず、わずか酸化斑入り、粘性。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックわずか入る。
7、灰黄褐（10YR4/2）焼土・木炭粒含み、粘性。締り、少し還元気味。
8、にぶい黄褐（10YR4/3）ロームブロック入らず、少し酸化斑入る。
9、黒褐（10YR3/1）8層に近貫、酸化ぜず。
10、灰黄褐（10YR4/2）ロームブロック混じえる。
11、灰黄褐（10YR4/2）ローム小ブロックとロームの土壌化の土壌。漸移層状。
12、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック入らず。
13、黒褐（10YR3/1）焼土粒わずかに入る。ローム小粒ほとんど見えず。
14、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多い。
15、黒褐（10YR3/1）ロームブロック入らず。木炭粒も少ない。
16、黒褐（10YR3/1）土器片多く、ローム粒わずか入る。
17、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含み、礫含む。
18、灰黄褐（10YR4/2）粘性。少し還元気味。
19、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含まず。
20、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。



第292図　住居跡94遺構図

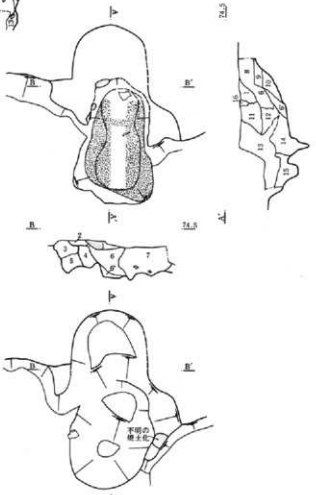


第293図　住居跡94遺物図



1、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。1′は焼土粒微。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。わずかローム小粒含む。
3、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。ローム粒少ない。別遺構の埋土か。
4、黒褐（10YR3/1）凝灰岩小ブロック（焼土化）を多く含み、締る。木炭粒少ない。上部床の一部。4′は締りやや弱い。
5、黒褐（10YR3/1）3層に近似。
6、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少なく、締る。床。
7、黒褐（10YR3/1）ロームブロック・灰白化多く、焼締る。
9、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含まず。撹移状。軟らかい。
10、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、締る。
13、明黄褐（10YR7/6）ロームブロック多く締る。風倒木か。
14、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多く、焼土粒わずか含む。

0　1：60　2m

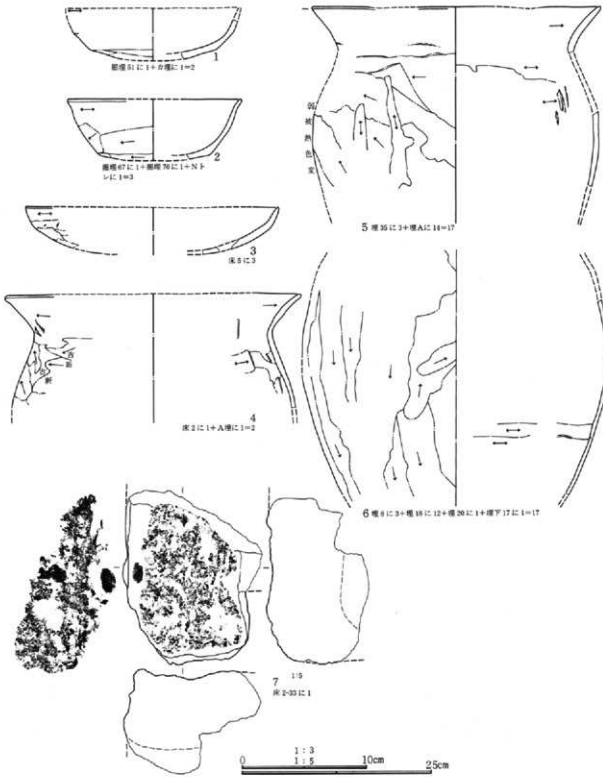


1、黒褐（10YR3/1）焼土多く含む。
2、黒褐（10YR3/1）焼土極めて少、ロームブロックなし。
3、明黄褐（10YR6/8）ローム主体。
4、黒褐（10YR3/1）ロームブロック混じえる。焼土粒少ない。
5、灰黄褐（10YR4/2）ローム撹移状。
6、黒褐（10YR3/1）ローム粒少し含み、焼土・木炭粒入る。6′は木灰多い。
7、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒少なく、別遺構埋土か。
8、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭少なく、ローム粒少。
9、黒褐（10YR3/1）8層よりローム粒多い。
10、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒ほとんどなく、黒味あり。
11、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム土撹化。天井材か。
12、未注記

13、黒褐（10YR3/1）ローム粒なし。焼土・木炭粒少。
14、黒褐（10YR3/1）ローム粒なし。焼土・木炭粒ないが、焼土大粒入る。支脚抜取りか。
15、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・焼土粒わずか入る。
16、板。

0　1：30　1m

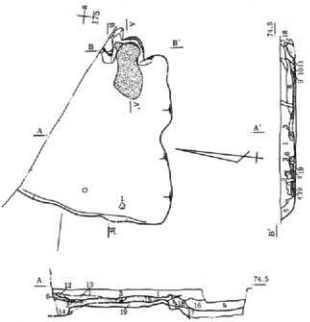
第294図　住居跡95遺構図

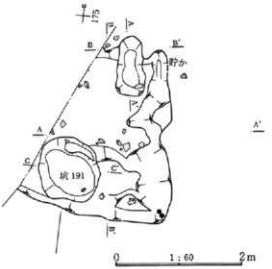


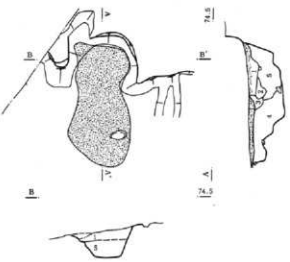
第295図　住居跡95遺物図

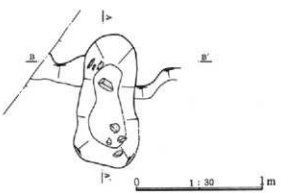
cm、方向は中軸でN13°Wを測る。施設として竈、掘方上面より深さ61cmの貯蔵穴、床下坑がある。時期は第295図があり、８世紀後半の土器類で住居機能も同期。

住居跡96　（第296・297図、図版57・176）







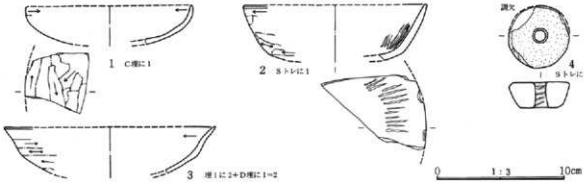


１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックわずかに含む。
２、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックを主とする。締りあり。床状。
３、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック少なく、粘性。
４、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックと土壌化を主とする。締る。床面。
５、明黄褐（10YR6/6）ローム土壌化を主とする。少し軟らか。
６、未注記。
７、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒混じえる。
８、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ない。軟。
９、黒褐（10YR2/1）木炭灰層。
10、黒褐（10YR2/1）ローム小ブロック含む。木炭灰・粒少し含む。上面締り床。
11、黒褐（10YR2/1）ローム小ブロック含む。少し締る。カマド抽材。
12、黒褐（10YR2/1）ロームブロック少ない。粗。
13、黒褐（10YR2/1）ロームブロックわずか含む。
14、明黄褐（10YR6/6）ローム小ブロック多く、土壌化を主とする。上面締りあり。
15、黒褐（10YR3/1）ロームブロック大をわずか含み、上面締る。
16、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、焼土粒含む。少し粗。
17、黒褐（10YR3/1）ロームブロック含み、焼土粒やや多く含む。上面締り床。
18、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く、焼土粒少ない。
19、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

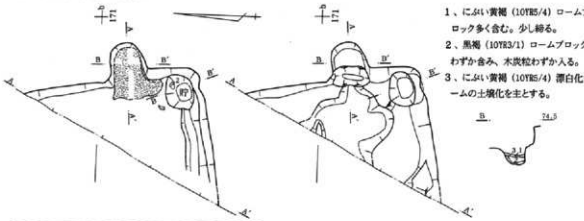
１、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含み、締りあり。
２、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ない。木炭含む。
３、にぶい黄橙（10YR6/4）ローム大ブロック多く含む。土壌化傾向もあり。
４、にぶい黄橙（10YR6/4）３よりロームブロックの土壌化傾向強い。
５、黄褐（10YR5/6）壁くずれ様にローム小ブロック含む。

１、褐灰（10YR6/1）灰を多く含み、木炭粒・焼土粒を混じえる。上面床面様に締る。
２、褐灰（10YR6/1）～ 褐灰（10YR4/1）灰を多く含む。焼土粒入る。
３、黒褐（10YR3/1）灰少なく、焼土・木炭粒含む。
４、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック・焼土粒・木炭粒入る。締りあり。貼床層か。
５、黄褐（10YR5/6）ローム大ブロックと黒褐色土との混じり。

第296図　住居跡96遺構図



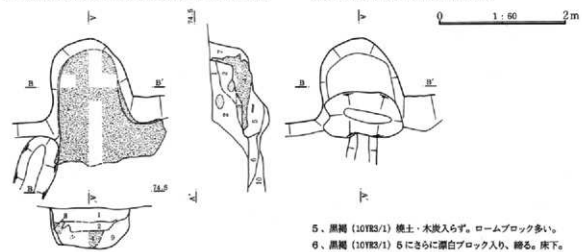
第297図　住居跡96遺物図



1、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック多く含む。少し締る。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含み、木炭粒わずか入る。
3、にぶい黄褐（10YR5/4）漂白化ロームの土壌化を主とする。

1、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ａ入る耕作土層。1′は下層。
2、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ｂ入り、少し締る。道跡かもしれない。
3、黒褐（10YR3/2）Ａｓ－Ｂ入り、粗。
4、黒褐（10YR3/2）ローム小粒・焼土・木炭粒入る。粗。
5、褐　（10YR4/4）ローム小ブロックとその土壌化を主とし、軟らか。
6、褐　（10YR4/4）ローム小ブロックとその土壌化を主とし、締る。
7、褐灰（10YR4/1）ローム粒少なく、軟。7′は少し締る。
※図左半は住居跡後の倒木のため土層乱れる。

0　1：60　2m

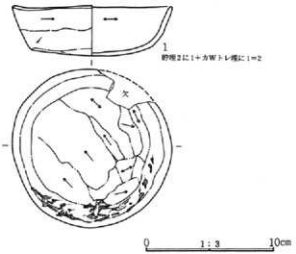


1、黒褐（10YR3/1）焼土をわずか含む。ローム小ブロック入る。
2、黒褐（10YR3/1）焼土粒を多く含み、ローム小ブロック入る。
3、黒褐（10YR3/1）きらに焼土粒を多く含み、ローム小ブロック入る。
4、緑灰（5 G5/1）灰（炭本料か）を主とし、焼土粒少しある。さらに灰に粗密あり。他土壌は黒褐(10YR3/1)。
5、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭入らず。ームブロック多い。
6、黒褐（10YR3/1）５にさらに漂白ブロック入り、締る。床下。
7、黒褐（10YR3/1）焼土粒含む。ームブロック少ない。
8、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム漸移的。焼土粒入らず。ームブロック入る。
9、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒多く含む。
10、にぶい黄褐（10YR5/1）ローム土壌化主体。

0　1：30　1m

第298図　住居跡97遺構図

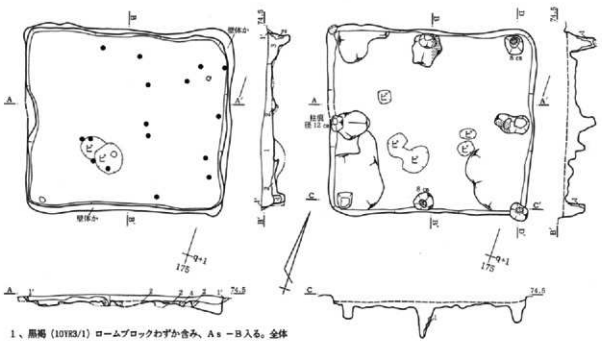
位置はQ大区rs175、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は南壁に後出の倒木がからみ、住居跡95と重複するが不明。規模は南北240＋αcm、東西260cm。施設に竈、掘方上面より深10cmの貯蔵穴凝似、床下坑191がある。遺物は第298図の8世紀中頃の土器群があり、住居機能時も同期。



第299図　住居跡97遺物図

住居跡97　(第298・299図、図版58・176)

位置はQ大区q175、調査面はローム層上面標高74.5m。重複は後代ピットが重なる。施設は柱穴7穴と壁体の存在を思わせる床面輪郭と掘方埋土との差の存在がある。柱痕はトーン部で、調査時の測定で8cm前後

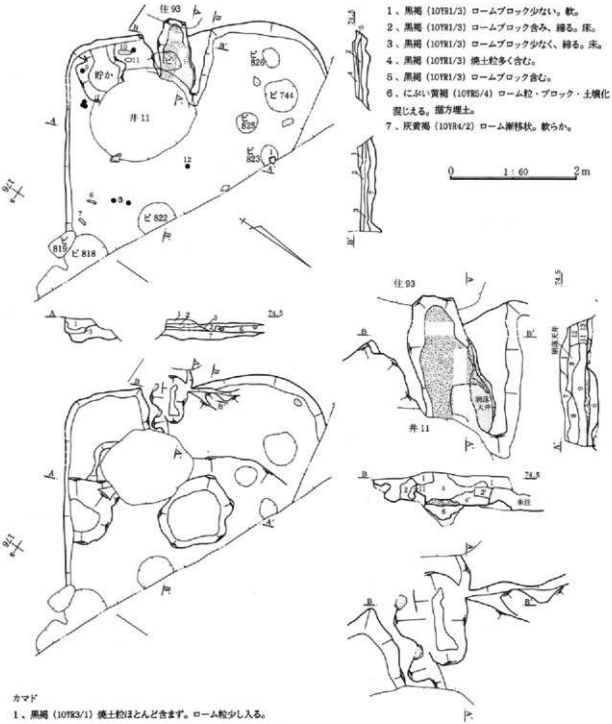


第300図　住居跡98遺構図

を測る。規模は東西326cm、南北287cm、方向はN17°Wを測る。時期はAs－B混りの埋土で中世後半と推定され、関連遺物は皆無であった。

住居跡99・113　(第301・302図、図版59・176)

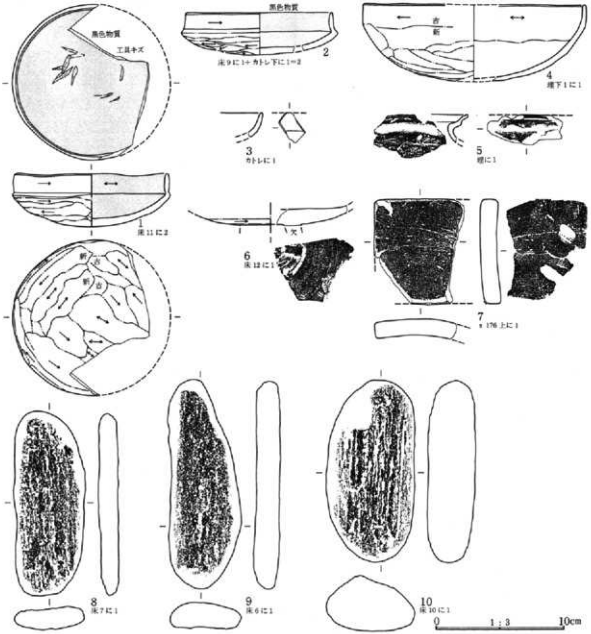
位置はQ大区s176にあり、調査面はローム層上面標高74.5m。重複は住居跡93、井戸跡32、ピ744・818・819・822・749・826が切る。規模は南北418cm、東西345＋αcm、方向N55°30'Wを測る。施設に竈、床面から11cmの深さの貯蔵穴凝似の凹部があり、東半の掘方に別住居の可能性もある床下坑がある。住居跡99・113は、



カマド

1、黒褐（10YR3/1）焼土粒ほとんど含まず。ローム粒少し入る。
2、明黄褐（10YR6/8）ローム大ブロック含み、黒褐ブロック含む。2′は黒褐ブロック少。
4、明黄褐（10YR6/6）焼土粒、同小ブロック多く含み、ローム土壌化を主とする。4′はロームブロック少。
5、褐灰（10YR5/1）木・禾本科灰の中間色を主とする灰色。
6、褐灰（10YR4/1）ローム大ブロック・浅いローム土壌化ブロック入る。上面焼土化のため機能時の底面。
7、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・焼土粒入る。
8、4層に近いが、焼土粒・ブロック量少ない。
9、明黄褐（10YR6/6）焼土粒・ブロック多く含み、縞状をなし、壁崩落を思わせる。4層に近い。
11、明黄褐（10YR6/8）巨大なロームブロックか地山。
12、黒褐（10YR3/1）ローム小粒入るが、焼土・木炭粒入らず。
13、明黄褐（10YR6/6）ロームブロックと土壌化を主とする。

第301図　住居跡99・113遺構図

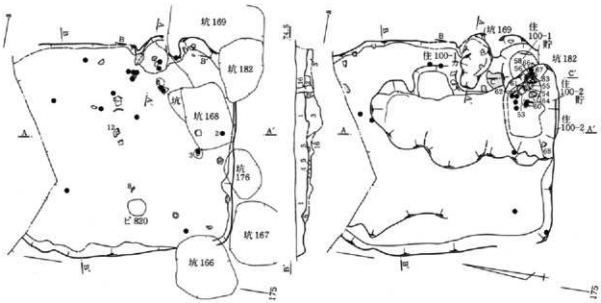


第302図　住居跡99・113遺物図

調査当初、西壁竈の例は当遺跡で未見のため各々別住居跡を考えていたが、床面掘上げの結果、床面と竈とは連続しているため1軒分と捉えた。竈は崩落天井土層注8が存在していた。遺物は第302図のとおり7世紀前半の一群を伴ない、住居機能もその頃である。同図7は滑石製で石鍋を思わせる曲率があり、方形に面取され、あたかも温石状であるが当初は石鍋か、出土位置は埋土上層であるが、A_s－B混りの土層中であったかは明確でない。

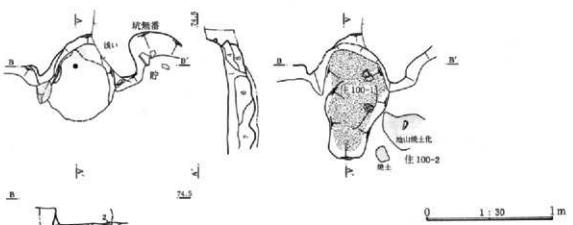
住居跡100—1　(第303・304図、図版59・177)

位置はQ大区Q174にあり、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡100—2が古く、南壁付近にある坑166・167・168・176・169・182が後出してある。規模は東西340cm、南北358＋αcm、方向は中軸でN6°45′Wを測る。施設として東壁に竈、調査面より深さ10cmの貯蔵穴がある。掘方の凹地は住居跡100—2の同100—1



1、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・焼土粒含む。
2、黒褐（10YR3/1）ロームブロック・焼土粒含まず。ピット埋土。
3、にぶい黄褐（10YR5/3）ローム小粒・小ブロック・土壌化を主とする。
4、明黄褐（10YR5/6）ローム漸移坑。焼土粒など含まず。4′は軟らか。
5、黒褐（10YR3/1）ローム小粒・焼土粒わずか含む。締る。床層。
6、黒褐（10YR3/1）ローム粒・焼土粒含まず。粗。
7、黒褐（10YR3/1）3に似るが、ロームの入り方少ない。
10、黒褐（10YR3/1）ローム粒入り、少し締る。
11、黒褐（10YR3/1）ローム小粒含む。軟らか。
12、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック含む。
13、黒褐（10YR3/1）ローム粒わずかに含む。
14、黄灰（2.5Y6/1）灰色粘土。
15、にぶい黄褐（10YR5/4）ロームブロック多く含む。
16、未注記。

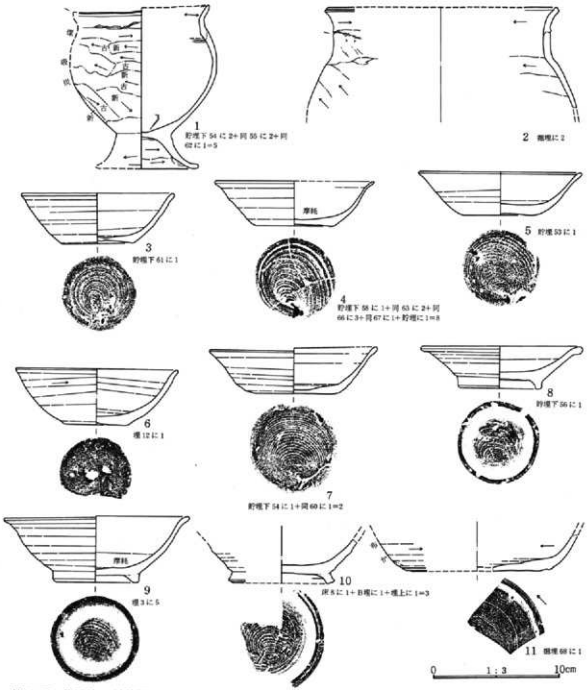
0　1:60　2m



1、黒褐（10YR3/1）焼土の大粒含み、小粒多く、わずか木炭粒入る。きらにローム小粒入る。
2、黒褐（10YR3/1）1層より木炭粒多い。
3、黒褐（10YR3/1）多量の焼土と一部焼土化あり。
4、黒褐（10YR3/1）木炭粒は1層より多く、焼土粒やや少ない。
5、黒褐（10YR3/1）木炭粒やや多く、焼土粒少ない。
6、黒褐（10YR3/1）木炭粒・焼土粒含み、灰を少し含む。
7、黒褐（10YR3/1）少し大粒の焼土粒と焼土粒を少し混じえ、木炭粒の大粒含む。

0　1:30　1m

第303図　住居跡100－1・2遺構図

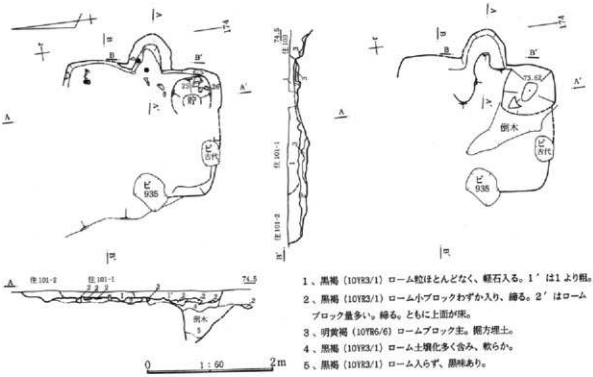


第304図　住居跡100遺物図

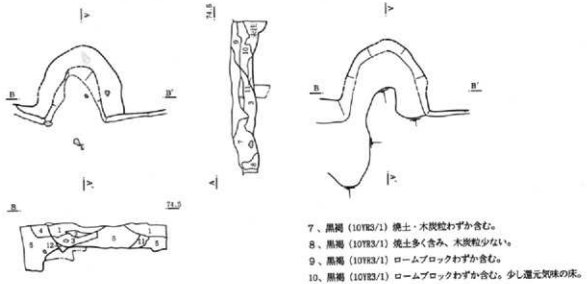
のどちらに伴なうか明確でない。遺物は第304図があり、住居跡100—1に関連しそうな個体は第304図6・9・10があり、埋土出土個体であることも併せると推測はできないながらも9世紀後半頃の住居機能時が考えられる。

住居跡100—2　(第303・304図、図版59・177)

重複は住居跡100—1に先行する。掘方に近い状態で上面を住居跡100—1に削られ、規模は明確でない。施設として地山焼土化の竈痕跡、掘方上面より深さ27cmの貯蔵穴がある。遺物は第304図中6・9・10を除く個体か住居跡100—2に関連し、9世紀中頃の個体を中心とし、住居機能もその頃。



1、黒褐（10YR3/1）ローム粒ほとんどなく、軽石入る。1′は1より粗。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックわずか入り、締る。2′はローム ブロック量多い。締る。ともに上面が床。
3、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主。褐方埋土。
4、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化多く含み、軟らか。
5、黒褐（10YR3/1）ローム入らず、黒味あり。



1、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。
2、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒含む。1層より多い。
3、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒わずか含む。さらにローム小ブロック含む。
4、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒ほとんど含まず。
5、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒ほとんど含まず。少し軟。

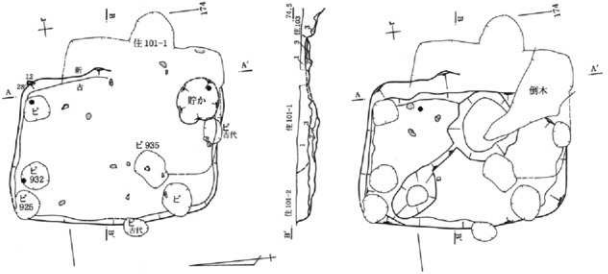
7、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒わずか含む。
8、黒褐（10YR3/1）焼土多く含み、木炭粒少ない。
9、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。
10、黒褐（10YR3/1）ロームブロックわずか含む。少し還元気味の床。古墳時代前期住居か。
11、にぶい黄褐（10YR4/3）ローム小ブロック多く混じえ、ローム土壌化。貼床～掘方埋土。
12、にぶい黄褐（10YR5/4）ローム土壌化主体。

0　1：30　1m

第305図　住居跡101－１遺構図

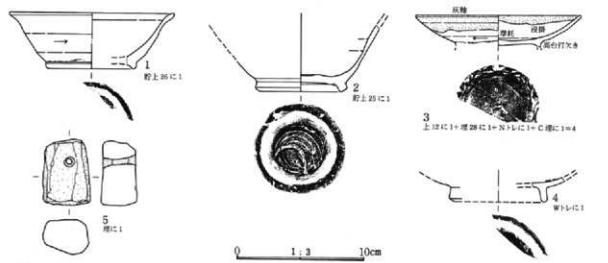
住居跡101－1（第305・307図、図版60・177）

位置はQ大区q174にあり、調査面はローム層上面標高74.4m。重複は住居跡100－2・倒木が古く、南接の住居跡103に先行する。規模は南北252cm、東西200cm、方向は中軸でN12°15′Wを測る。施設に竈、貯蔵穴があり、床下坑は住居跡－1・2のどちらか不明。遺物は第307図1・2か同100－1に伴ない、製作時期は10世紀前



1、黒褐（10YR3/1）ローム粒はとんどなく、軽石入る。1′は1より粗。
2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックわずか入り、締る。2′はロームブロック量多い。締る。ともに上面が味。
3、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主。掘方埋土。
4、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化多く含み、軟らか。
5、黒褐（10YR3/1）ローム入らず、黒味あり。

第306図　住居跡101－2遺構図

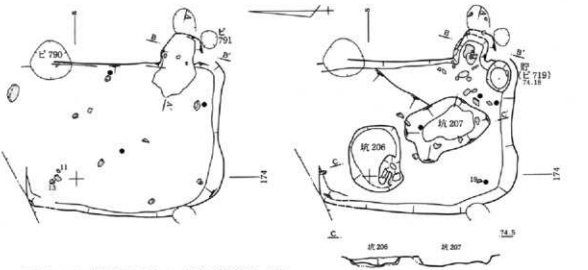


第307図　住居跡101遺物図

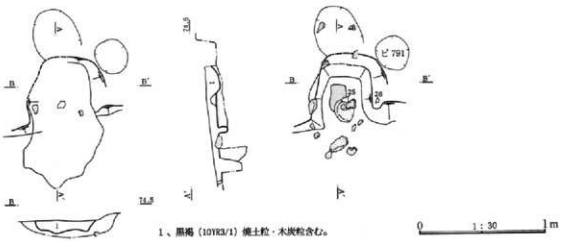
半の個体で住居機能も同期。

住居跡101—2　（第306・307図、図版59・177）

位置は住居跡101—1の西方に重複して存在。同100—2に先行。規模は南北で323cm、東西245、方向は中軸でN4°45′を測る。施設に竈は同100—1に削られ、掘方上面から深さ12cmの貯蔵穴がある。掘方には、どちらの住居跡に伴なう不明確な床下坑が竈位置前にある。遺物は第307図3がNトレンチ、C埋土出土のため関連しそうに思えるが、同図3の皿は、釉掛が口縁部周辺のみ浸掛であるため9世紀代まで遡りそうにもない。



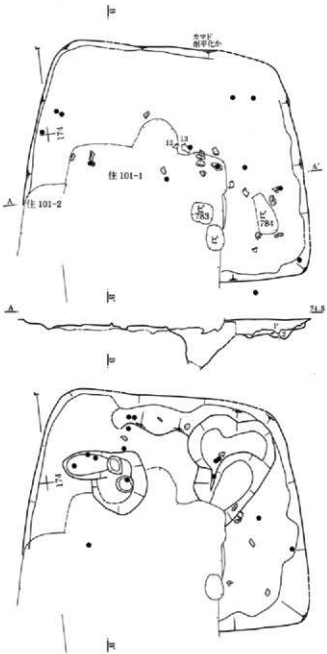
1、黒褐（10YR3/1）ともに床下土坑で、ロームブロック大形とローム粒を含み、少し締る。



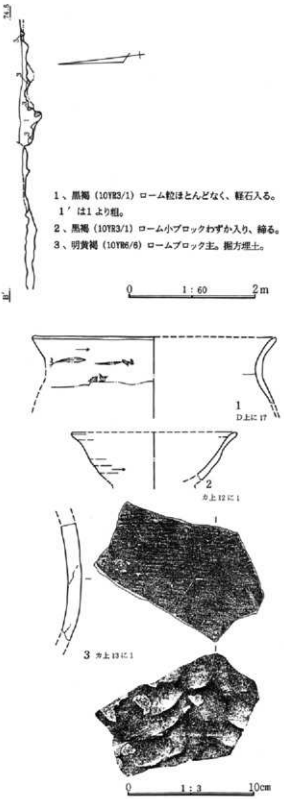
1、黒褐（10YR3/1）焼土粒・木炭粒含む。

第308図　住居跡102遺構図

第309図　住居跡102遺物図



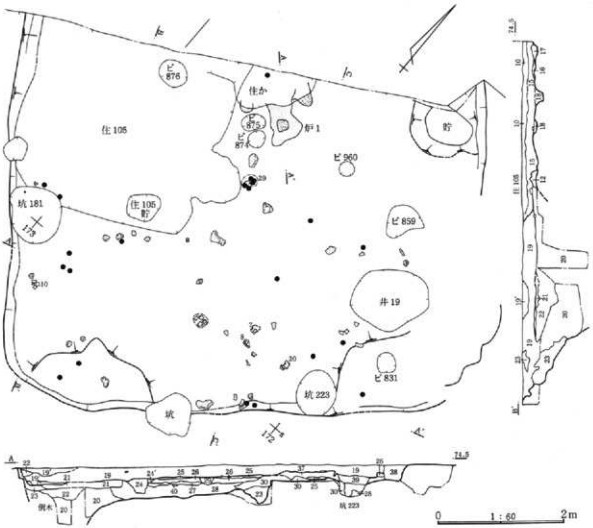
第310図　住居跡103遺構図



第311図　住居跡103遺物図

住居跡102　（第308・309図、図版60・177）

位置は、Q大区rs173・174に、調査面はローム層上面標高74.35mである。重複は住居跡110・107に先行する。北壁は別遺構が重複しているようでもあったが明確にすることはできなかった。ピ790とも明確ではない。規模は、南北315cm、東西235cm、方向は西壁を基にN2°Wを測る。施設として竈と南東隅に立上より深さ17cmの貯蔵穴がある。掘方には床下坑の坑206・207がある。遺物は第309図のとおり10世紀後半の同図3が掘方埋中から出土し、併せて同形の同図1・2も同期のため、住居機能もその頃と考えられる。



A－A′・B－B′・C－C′

10、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒入り、少し還元気味。ローム上面と併せ別住居床面。

12、明黄褐（10YR6/6）ローム粒と土壌化。

15、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含む。軟。

16、黒褐（10YR3/1）床面。還元気味。

17、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒見えず。ローム小粒入る。

18、黒褐（10YR3/1）ローム小粒多く含み、上面床面。

19、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒少し入り、ローム粒入る。19′はローム粒少。

20、黒褐（10YR3/1）黒味強く、軟。

21、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含み、少し締る。床層。

22、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含み、焼土粒入る。

23、にぶい黄褐（10YR5/6）ロームブロック入らず、漸移状。

24、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少し含む。24′はロームブロック少。

25、黒褐（10YR3/1）焼土・木炭粒入り、少し還元気味の床。

26、黒褐（10YR3/1）25層中にロームバンドの床層入る。

27、黒褐（10YR3/1）黒味の強い床層。

28、明黄褐（10YR7/6）ロームブロック多く含む。風倒木による浮き上りか。

29、黒褐（10YR3/1）床として少し甘いが、26層に近似。

30、黒褐（10YR3/1）木炭・焼土粒含み、ローム粒少し入る。床としては甘い。30′は床でない個所。

31、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む。軟。

32、黒褐（10YR3/1）黒味あり。ロームブロック少ない。

33、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多く含む床層。

34、黒褐（10YR3/1）ロームブロック少ない床層。

35、黒褐（10YR3/1）ロームブロック多い床層。

36、にぶい黄褐（10YR5/6）ローム大ブロック含む。

37、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロック多い。

38、黒褐（10YR3/1）As－B含むピット埋。軟。

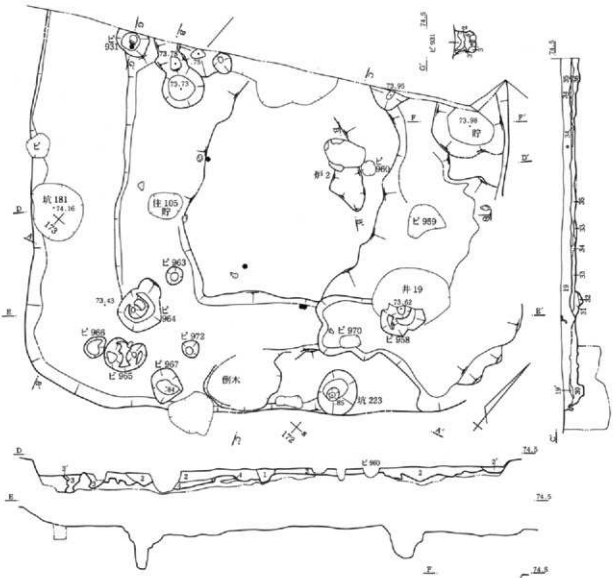
39、黒褐（10YR3/1）ローム小粒含み、焼土粒わずか入る。

40、黒ブロック。

第312図　住居跡104遺構図

住居跡103　（第310・311図、図版60・177）

位置はQ大区qr173・174にある。調査面はローム層上面標高74.4mである。重複は、住居跡111を切り、住



D－D′

1、黒褐（10YR3/1）ローム粒はとんどなく、軽石入る。

2、黒褐（10YR3/1）ローム小ブロックわずか入り、締る。2′はロームブロック量多い。ともに上面が床。

3、明黄褐（10YR6/6）ロームブロック主。掘方埋土。3′は少し黒い。

4、黒褐（10YR3/1）ローム土壌化多く含み、軟らか。

ピ931

1、黒褐（10YR3/1）ローム粒φ5～10㎜含む。やや固め。

2、黒　（10YR2/1）ローム粒以外の不純物混入。やや固め。粘性あり。

3、黒褐（10YR3/1）ローム粒80%含む。3′はロームブロックと黒褐（10YR3/1)のブレンド。

4、黒褐（10YR3/1）ローム粒φ5㎜・ロームブロックφ10㎜全体に散在。密。粘性あり。

0　1：60　2m

第313図　住居跡104遺構図

居跡101―1・2、ピ784に切られる。規模は西壁側の南北467cm、東西368cm、方向は中軸でN10°45′を測る。施設として竈もしくは痕跡は無く、貯蔵穴についても不明瞭であった。しかし床下坑が存在するのと床面にはある程度、締まる所見があり、住居としての機能はあったらしい。遺物中注記に竈の力とあるのは、住居跡100―1の竈のことのようで取り上げ注記誤まりの可能性があり、同住居の遺物と時期上共通性がある。そのため第311図中では1のみ関連性が持たれる。同図1は9世紀前半の土師器甕である。同図3は甕片で素文の当目あり。